
友人と一緒に憑依？転生する

明治のちろる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

友人と一緒に憑依？転生する

【Nコード】

N7973U

【作者名】

明治のちろる

【あらすじ】

この小説はカオスです。耐性のない方、嫌いな方はお戻りください

基本原作ブレイクしたISです
インフィニット・ストラトス

パクリ技、機体、キャラなど多数出ます
キャラ崩壊？っていうか、中身違う当もありません
更新不定期

誤字脱字の嵐？小雨くらいの感じ！

友人と一緒に憑依？転生する（前書き）

前作との関連無いかもしれない！！

友人と一緒に憑依？転生する

とある日の新聞の内容

交通事故により学生3人が死亡・・・

ち「まだ、若いのに可哀想じゃねえ・・・・・・・・・・」

キ「ホント、これからは車には気を付けよ・・・・・・・・・・」

狂「まあ、でも死んだの・・・・・・・・・・」

ち・キ・狂「俺たちだけどね・・・・・・・・・・」

天使「その方達、神様がお話があるそうなのでついて来て下さい。

」

ち・キ・狂「はぁ〜い」

なぜ、この3人がこんな状況なのか、それは現在からさかのぼる事、
二日

某所 散歩中

ち「いやぁ〜暑いね」

キ「夏じゃけえね」

狂「なんか楽しい事ないかなあ」

ち「あつUFO……」

キ「何いつとるん」

チラッ

フワフワフワ

宇宙人A「ニホンノココロ！！スシ、ラーメン、オイシイネ！！」

宇宙人B「ツギハキヨウトイクヨ！！シンセンゲミ、サイコーネ！！」

宇宙人C「アキバノメイドカフェイクネ！！ゴシユジンサマ！！イッテモラウヨ！！！！」

一同「……………」

プーーーーー！！！！

一同「えっ！？」

グチャ！！

宇宙人A・B・C「アレガウワサニキクニホンノカミカゼ！！」

一同「違うわ！！……………グハア！！」

当時3人を轢いた運転手の証言

運転手「う、宇宙人が………神風が………」

そして現在 神の仕事部屋前

天使「では、どうぞ」

キ「はい、有難う御座います」

ガチャ

神「お前ら？宇宙人見てて轢かれた奴？マヌケ」

バタン

数時間後

元神「すみません………許して下さい………」

現神ち「黙れ………」

現神キ「これどうする？」

現神狂「うん………パシリとか？」

現神ち「生ゴミで捨てる？」

現神キ「ちろる君・・・・・・・・怒ってる？」

現神ち「まあ・・・・・・・・ゆる・・・・・・・・さな
ね」

元神「転生でもなんでもするんで許して下さい!」

現神ち「いや、それは義務だからノーカン」

狂・キ「お、鬼だ・・・・・・・・」

元神「・・・・・・・・」
ガタガタ

キ「じゃ、じゃあ転生させて貰って許そうよ!」

狂「そうしよう!」

ち「わかった・・・・・・・・でも、パシリな」

一同「ひでえ・・・・・・・・」

元神「あ、ありがとつごびいます!」

ち「で、どこに転生させるん？」

狂「てか、どこに転生できる？」

元神「大体の場所には・・・・・・・・」

キ「けいおん!!」

ち「行つてもいいけど、桜高は女子高じゃけえ、ほぼ接点でぎずに一生が終わるよ?」

キ「いや、でも女に転生すれば!!」

元神「無理です。」

キ「えっ?」

元神「だって貴方達の魂は男専用ですから」

キ「どういふこと?」

元神「魂には男と女の二種類があつて、無理に男の魂を女に転生させると障害を持ったり、消えます」

ち「まあ、次があるさ」

狂「さっきの話だと、次もダメなんだけど……」

元神「一から世界を創つてその世界の人物に憑依させることなら女でも行けます」

キ「じゃあ!創つて!!」

元神「すいません……けいおんって何ですか?」

キ「はっ?」

元神「世界を創るなら事細かい情報と時間が居るんです」

キ「どれくらい？」

元神「世界を創ってから人間が生まれるまでです」

キ「諦めます!!」

元神「すいません……………ISか、ひぐらしなら今から行けますが」

狂「何故にひぐらし？」

元神「聞かないで下さい……………」

狂「あっなんかゴメン……………」

ち「ISでいいじゃん」

キ「いいけど、一夏は俺だ!!」

ち・狂「ガンバ……………」

元神「それでは、あの扉を通れば憑依できますので」

ガチャ

キ「行くぜ!!」

狂「狂学者！行きまゝす！！」

ち「お邪魔しました・・・・・・・・なんかあったら呼ぶから・・・・・・・・」

元神「・・・・・・・・」

ガタガタ

次回I Sの世界！！

友人と一緒に憑依？転生する（後書き）

元神「自由だああああ」

プルルルルルルルル

ガチャ！

元神「誰だ？」

ち「ブツコロス……」

元神「……………」
ガタガタ

出逢い(前書き)

前回から6年の月日が流れた

出逢い

ISの世界の転生もとい憑依して6年たった、他のメンバーには今だ逢えていないが今日から織斑一夏は小学校に入学した。自分としては、また小学生をやるのが面倒だったが、ピカピカの小学生一年生になったこの日”篠ノ乃箒”に会えることを他のメンバーとの再会より楽しみだった……ハズが

一「織斑一夏です！よろしく」

箒「篠ノ乃箒だ、久しぶりだなキラ」

一「はい？」

箒「ふん……俺が誰だか分からない様だな……
・面白い、当てて見る」

一「ま、待て！！ということ……なんてつこつた！？ちくしょー！……」

箒「一夏、私たちの教室をしてみる」

一「なんか変なのもいるのか？……あれ？なんか見たことある奴らがいる……しかも小っちゃい」

箒「ああ、確実にセシリア、シャルロットにラウラ、鈴音だったよ」

一「調べが早いな……」

箒「ああ、それなら出席名簿で調べただけだ」

—「なんかわかったぞ！お前は狂学者だろ！！」

箒「はずれ……………さて、俺が箒ならあいつ等の誰かが他の奴か……………」

—「つて！待てよく考えたら俺と狂学者が潰れたら後はちろる君しかおらんじゃん！！」

箒「やつとか……………はあ……………あのしゃべり方疲れるんだから早よ気付や……………」

—「災厄だあああああ！！」

箒「それはこつちだ！！俺は大事なアナログスティックを失ったんだぞ！！」

—「知るか！！」

鈴「うるさい！黙れや！！」

箒「狂学者よしよし」

鈴「やめろよ」

—「ああ、転生前の光景だ……………」

箒「状況整理だ……………まずは、キラ一夏、ちろる箒、鈴音（狂学者）つて

ことか……他に原作と違つとある。」

鈴音「ラウラとセシリアとシャルロットがおる」

箒「あの中の誰かがシズルだつて」

一「待て！何故奴が居る！！」

箒「なんか神が……」

2年前回想

ブルルルルルル

箒「もしもし？」

神「あつ私です」

箒「なんか用か？」

神「はい、それがシズルという方がそちらへ転生させると言つてお
りまして……」

箒「ブツ！……させる、今すぐ転生させる」

神「分かりました」

回想終了

箒「つてことがあつたんだ」

キ「この野郎!」

ガシッ!

箒「痛いッ!.....覚悟しな!」
ニョ
ニョ
ニョ

キ「なっ!」

ガクッ!

箒「どうだ?まだ続けるか?」

キ「卑怯だぞ!その声でそんなこと言っんじゃない!」

箒「ピー音取っちゃうぞ?」

鈴「結局何て言ったん?」

箒「ああ、それはムグッ!」

—「言わせねよ!」

箒「ペロペロ」

—「!いきなり手を舐めるな!」

箒「そういえばキラは日笠さんが好きなの?それとも篠ノ乃箒が好きなの?どっち?」

—「うん……どっちも？」

篤「お願いだから襲ってくるなよ」

—「保証はできない……」

鈴「変態だな……」

—「そういえば、二人とも家庭はどう？なんか複雑だった気がしたけど？」

鈴「待遇が良くなった……」

篤「姉が妹になった……」

—「鈴」は？

篤^{あつむ}3歳頃の回想

母「篤、束を呼んでもらえる？」

篤「いいよ」

束の部屋前

箒「姉さんご飯だよー出てきなー」

束「いらない……………」

箒「とりあえず、入るぞー……………鍵だと!!ならば!!」
バタバタ

束「……………行ったね……………ふう〜」

箒「溜息つくな、それは俺の専門だ」

束「……………何処から入ったの」

箒「初めまして、姉さん……………一応、妹の篠ノ乃箒だ」

束「名前なんてどうでもいい……………出てって!!」

箒「家からですか!?!」

束「それでもいいよ」

箒「まあ、最低でも後、12年は居るよ……………転生者でも体は子供だしな」

束「そんなことどうだっていい!!早く出て行って!!」

箒「箒さんなら出てくだろつが!ちろるさんは来るまでいます!!」

束「知らない!箒とかちろるとか知らない!!」

プルルルルルル
箒「もしもし？」

神「私です、頼まれていた例の物ができましたので今から送ります」

箒「おう、どんと来い！！俺の部屋じゃないし」

束「よそでやってよ！！」

箒「まだか？」

神「送れてますよ」

箒「ああ、これが……おいっ！姉！妹のために手伝え！！」
ガシッ！

束「離してっ！！」

箒「よし！起動！！」

束「！！！！！！」

ピカーン

箒「おお！いい具合にVF-25Sだな」

束「……………凄……………」

箒「解除……………さて、姉さんご飯だ」

束「……………後でさっきの奴の話の話を聞かせてくれるなら行ってあげる」

箒「なら来なくていいよ」

束「ちょっと、ちょっと!? 待ってよ! 行く! 行くから話を聞かせてください」

回想終了

箒「こんな感じで妹的存在だ……………」

—「た、大変だったね……………」

鈴「さっきのお話に君のISあったよね? 俺達のは?」

箒「これだ、一夏はウイングガンダムがベースの奴、鈴音は紅蓮だった気がする?」

鈴「ラガン?」

箒「輻射波動機構だっけ? コードギアスの奴って聞いた」

鈴「ランスロットが良かったなあ」

箒「返せ!」

鈴「紅蓮、最高!！」

篝「いつか発展機ができるらしいから」

—「じゃあ明日戦ってみようぞ!！」

鈴・篝「消し炭にしてやる……………」

—「選択間違えたかな……………」

出逢い（後書き）

束「へくしゅん!?!」

千「大丈夫か？」

束「大丈夫!多分、篝ちゃんが私のことを話してるんだと思うよ」

千「……………そうか」

束「ホント篝ちゃん最近胸が急に成長してきたんだよね」

千「いくら姉妹でも怒られるぞ?」

束「えっ?でも、攻めは篝ちゃんだよ?」

千「お前ら姉妹揃ってよくわからん……………」

そして更なる出逢い（前書き）

前回の話から1日が経った

そして更なる出逢い

春、それは出逢いと別れの季節の他に変質者などが表れ始める季節・
・ ・ ・ ・ ・ 私、篠ノ乃^{ちのぶ}_乃も出遭ってしまった。私としては出遭い
たくはなかったが、出遭ってしまった。 ・ ・ ・ ・ ・ 運命かもしれない
いし、運が悪かったただけかもしれないが ・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・

朝 篠ノ乃家

箒「行つてきまゝす」

母「行つてらっしゃい」

束「箒ちゃん待つてよ」

箒「ハンカチ持ったか？ポケットティッシュは？」

束「箒ちゃん、お母さんみたい」

箒「うるさい」

こうして篠ノ乃家を出発してみんなとの集合場所へ向かっていると・
・ ・ ・ ・

？「こつちに来るな！！」

？「こ、怖いよ」

？「大丈夫ですわよ」

変質者「お嬢ちゃん達いくつ？かわいいn
ドカツ！！」

篝「通行の邪魔だ、退け」

束「ロリコン……………」

？「あ、あなたは……………篠ノ乃さん！？」

篝「おお、セシリアにラウラ、シャルロットまで……………何
してんの？」

シャ「みんなと話してたらこのおじさんが……………」

篝「姉さん、三人に目隠しして」

束「うん……………わかった」

セ「何故目隠ししますの？」

篝「此処からはR指定だ……………」

束「はーい！みんな向こうむいてよっか」

篤「待たせたな．．．．．お仕置きだ」

変「お嬢ちゃん強いね〜
バツ！」

篤「．．．．．俺は見るなら女性の裸がいいよ
カシヤツ！！」

変「なっ！？」

篤「ほいつ送信つと」

変「何したのかな？」

篤「社会的抹殺だが？」

変「．．．．．
ガタガタ

篤「終わったね、公に成る前に警察行けば？」

変「こ、この！！こうなりや自棄だ！！」

篤「そうか、なら仕方ないな．．．．．キヤアア
アアアアアアアアア！！助けて！！」

変「今更なにを．．．」

「な、何だ！？」

「さっきの声、篝ちゃんじゃないか!？」

「みんな!!助けに行くぞ!!」

変「な、なんで……」

ガタガタ

篝「私は知り合いが多いんだ……中には警察とか」

こうして変態さんは警察に捕まり……その後はというと

シャ・セ・ラ「助けくれてありがとう!!」

篝「よかですよ」

束「篝ちゃん照れてる〜!!」

篝「べ、別に照れてなんか無いんだからね〜(棒読み)」

東「……………篝ちゃんはそういう性格だったよね」

セ「ツンデレという奴ですか？」

シャ「僕もそういうの詳しくないけど絶対違うと思うよ……………」

ラ「か、かつこいい……………」

シャ「……………ラウラ？」

ラ「私も、あんな大人になりたい！！」

シャ「篠ノ乃さんは、まだ子供だよ……………」

篝「そうだぞ、体は子供だ！」

東「篝ちゃん、そろそろ時間的に不味いかも？」

篝「そうか、みんな今暇？」

ラ「暇だな」

シャ「僕も暇かな」

セ「私は多忙ですが篝さんがそこまでいうのでしたら……………」

篝「セシリアは、暇じゃなくても連れてくよ、そしてそのまま性別を超えて楽園のアダムとイヴ的な」

東「でも、篝ちゃん達は女の子だからイヴとイヴだよ？」

篤「・・・・・・・・・・・・・・・・その、そこは気合とかで」

セ「なんだか着いて行っではいけない気がしますわ・・・・・・・・」

シャ「アハハハハハハ・・・・・・・・」

ラ「セシリア・・・・・・・・羨ましい!!」

セ「なら変わって下さい!!」

篤「よしじゃあ行くぞ?」

こうして別れ(変質者)を体験し、また出逢いを繰り返すんだと私は想ってしまう。

そんなこんなで一夏達との集会所へ、向かって行った

一夏side

一「これはもうあれだな・・・・・・・・」

鈴「あれだね・・・・・・・・」

千「束め、遅刻しおって」

—「ああ、せっかく俺たちがオブラートに包んで言ったのに!!」

千「いや、事実だろう?」

鈴「でも、あえて言わない優しさが!!」

千「私は、あえて言う優しさだ」

箒「お母さんの優しさですか?」

千「そう言う事だ………いつからいた?」

箒「30分前から話しかけても無視されて拗ねてました!!」

千「本当にすまなかった!!」

箒「というのは冗談で」

束「ホントは1時間だもんね」

千「…鈴「すみませんでした!!」

箒「それはそうと、始めるか一夏?」

—「掛かってこいや!!」

ピカーン

—「ウイングってゼロカスタムじゃないんだ……」

箒「ゼロは発展機だから」

—「……………まさか、それ真・ゲッター？」

箒「そうだ！！VF-25Sは姉さんが分解して逝ってしまったからだ！！」

束「箒ちゃんごめんね」

—「……………それはそうと何故にシャルロット達が居るの？」

箒「居たから呼んだ」

—「なるほど！！」

鈴「なるほどじゃねえよ！！」

シャ「箒ちゃん、頑張つて！！」

ラ「千冬さん、お久しぶりです」

千「ああ、クラリツサの妹のラウラか」

—夏達「な、なんですとー！！」

鈴「えっ？妹さんなの？」

ラ「そうだが？」

東「ああ、クーちゃんの！」

篤「クーちゃん!？」

一「は、話の展開のついていけない……」

千「ん？お前ら何かするんじゃないのか？」

篤「それどころじゃないわ!！」

シャ「大変だね、鈴音さん」

鈴「ホントだよ……」

シャ「そうだ！鈴音さん知ってた？僕の家、鈴音さんの隣なんだよ」

鈴「はい？」

シャ「うん、その反応……知らなかったんだね……僕、存在感無いから……」

鈴「ごめんなさい!！」

篤「鈴音、何やってんだよ……」

セ「ちなみに私の家は篤さんの隣ですわ」

篤「ほう、良いこと聞いたな……」

セ「言っただ後悔しましたわ……」

—「き、気を取り直して始めようか」

第「先手必勝！！ゲッター・トマホーク！！ブーメラン！！！！！！」

—「なんの！！バスターライフル！！」

第「ズルいぞ！！」

—「お前が言うな！！」

第「うるさい！！ゲッタービジョン！！」

—「消えた…………後ろか！バルカン！！」

第「前だったんだけど…………ゲッタービiiiiiiiiiiiiム
！！！！」

—「うわあああああ！！」

ドカーン！

千「帰ったら訓練だな…………」

セ「何と云うか…………」

シャ「うん、言い難いけど…………」

ラ「弱いな…………」

鈴「私の紅蓮飛べない奴だから勝ち難いわ」

束「篝ちゃんかつこいいよ!」

篝「一夏のこと心配しないんだな……」

一「俺の心配は篝さんがして下さい……」

篝「よし、日も暮れてきたし、帰るか!」

束「篝ちゃんまだ三時だよ……」

篝「だって!一夏がやらかしそうで怖いんですもの!」

一「しないって!」

篝「誓えるか?」

一「それは……まあ、アレだよ……」

篝「そうか、じゃあ仕方ないな……アデュー!」
ダッ!」

一「ま、待て!」
ダッ!」

束「ちーちゃん、止めなくていいの?」

千「お前こそ……姉としていいのか?」

東「いいよ、いつくん欲しいもん」

千「……………一夏!!早まるな!!」
ダッ!!

こうして入学式の次の日の休日は幕、一夏、千冬の壮絶な鬼ごっこで終わった

そして更なる出逢い（後書き）

第「ハアハア……………」ここまで来れば……………」

—「ミーツケタ……………」

第「キヤアアアアアアアアアア」

千「一夏！早まるな！！」
ドカツ！

—「ぐはあ！！」
ガクッ

千「大丈夫か？」

第「……………」ほ、掘られるかと思った……………」
ガタガタ

19時27分 鬼ごっこ終了

キラの受難（前書き）

前回の翌日、キラ一行は入学式以来の初登校するのだが……

キラの受難

キラこと織斑一夏は現在某小説バリの鬼ごっこをしている。理由としてはしょうもないが、状況としては大分不味い、凄さとしてはカレー先生やロリコン医者、フリーのカメラマンの出てくる番組くらい不味い、最初は小学生と侮っていたが奴らの連携はもはや軍隊のそれだった……

朝 織斑家

ピピピピピピピ！

一「うーん……昨日の記憶があやふやだ……」

コンコン

千「一夏、起きてるか？起きているならさつさと学校へ行く準備をしろ」

一「はい……」

今日は入学式を除けば小学校への初登校日なのだ、自分としてはメンドくさいが義務教育というシステムが存在しているため小学校は通らなければならない道なのだ……

一「面倒だ……」

と言いつつも学校へ行く準備をする辺り自分の性格が真面目だと思っっているわけで……

千「さつさと朝ごはんを食べて行け」

—「でも、姉さん……………朝ごはんがダークマターなのは
厳しいです……………」

千「目玉焼きだ」

—「姉さん、認めて……………これさっきから時々光ってるよ……………」

千「あ、味は問題ない……………」

—「いや、確かに姉さんの料理は見た目と反比例して味はおいしい
けど……………僕は今まで姉さんの料理する時をずっと観察し
た事が在ったけど、ダークマターに成る瞬間は何かの絶叫が聞こえ
ただけ……………」

千「で、結局食べないのか？」

—「食べるよ」

これが大体の朝の姉さんとのやり取りだ……………そうこうしている
内に……………」

第「一夏々幼馴染プレイしに来たぞ」

セ「朝の第一声がそれです……………」

千「すまん、少し待ってる」

—「行つてきまゝ」

千「……………いつ着替えた……………」

こうして学校へ向かって登校中なわけだが……

箒「一夏、私の半径1m以内に入ってくるなよ……」

—「なんでだよ!」

?「おっ!一夏……!」

—「ん?おゝ弾!」

弾「おはよう、ん?一夏の彼女さんか?」

箒「初めまして、一夏に色々と奪われた篠ノ乃箒だ」

—「誤解を招くようなこと言つな!」

箒「昨日はあんなことしておいて……………」

セ「ほ、箒さん!?ど、どんな事が在りましたの!?」

—「別に何もなかっただろ?」

箒「いや、冗談抜きで犯られそうになつたぞ」

—「うゝん、昨日の記憶があやふやだから否定しきれない……………」

弾「ほ、篝さんウチの一夏がすいませんでした!!」

セ「というより、あなたは誰ですか?」

弾「おお、キレイに忘れてたな、俺は五反田 弾、一夏とは結構長い付き合いだ」

篝「(BLか?)」

—「(断じて違う!!)」

セ「どうしたんですの?二人でこそこそして……私を除け者にしないで下さい!!」

篝「セシリア……うおおおおおお!!セシリア

アアア!!」

ダッ!

セ「ちよっ!?」、怖いのです!!」

ダッ!

弾「ハハハ、朝から元気だな、一夏?」

—「うおおおおおお!!篝、うおおおおおお

おおお!!」

ダッ!

篝「いやああああ!!来るな!!」

弾「……………置いて行くなよ!!」
ダッ!

そうこうしている内に学校……

―「ふう〜、朝から疲れたな……」

箒「お前のせいだろうが!」

セ「……………ですの〜」

鈴「なんで、セシリアは燃え尽きてるの?」

箒「一夏に追い回されたから」

セ「……………」

―「追い回してないだろ!!」

箒「中身、俺じゃなかつたらトラウマものだったぞ……………」

シャ「みんな、おはよう」

―「いや、でもそこまじじゃ……………」

箒「貞操の危機だったと思ってる」

シャ「おはよう……………」

鈴「一夏・・・・・・・・変態・・・・・・・・」

シャ「どうせ・・・・・・・・どうせ僕なんて・・・・・・・・」

ラ「シャル、おはよう」

シャ「・・・・・・・・ラウラアアア!!」

ラ「うおっ!!」

篤「おお、二人ともおはよう」

シャ「うん、うん、おはよう!!」

鈴「・・・・・・・・まさか、割と前からいた？」

シャ「ううん!さっき来たんだよ」

一「なんで、泣きそうなの？」

シャ「目にゴミが入っただけだよ!」

セ「・・・・・・・・そなのですの」

シャ「うん!そっだよ!」

ラ「(健気だな・・・・・・・・)」

篤「そう言えば、なんで二人は抱き合ってるんだ?・・・・・・・・まさか

「!百合なのか!?!」

ラ「?」

シャ「ユリ?」

鈴「いつまでも変わらないピュアな君でいて!」

ラ・シャ「?」

こんな感じでグダグダつと授業なんかも終わって……

放課後!!

男子クラスメイト

「一夏、着いて来い……」

「何だよ?」

「お前は我々のアイドルこと健気さのシャルロットさん、不思議さんのラウラさん、天然気味のセシリアさん、年上な風格漂う篤さん、意外と毒舌な鈴音さんの5人と仲がいいようだな」

「あいつ等そんな風に思われてたのか……」

「あ、あいつ等だと!!貴様!!我らが希望に対して無礼な!!」

—「ただの幼馴染だよ」

「私でさえ、声を掛けた事無いのに・・・」

「俺もだ・・・」

「諸君！こうなれば此処に居る不屈き者に聖なる裁きを！！」

—「はい？」

「掛かれー！！」

—「ヤバい！！」

ダッ！

「己！、逃がすと思うてか！！」

—「お前何歳だよ！！」

「アイツは時代劇が大好きなんだよ！！」

—「知るか！！」

篤「困っているようだな」

—「篤！？」

篤「みんな！一夏は確かに私の貞操を奪おうとしたり、言えない事
もしたが許してやってくれないか！！」

「織斑一夏・・・・・・・・天誅!!!」

篤「私では役不足なようだ・・・」

一「状況を悪化させやがって!!」

篤「まあ、逃げ切ったら良い事してやるらしいから・・・」

「良い事・・・・・・・・逃がすな!!!ぶっ殺せ!!!」

「オオオオオオオオオオ!!!」

一「我、愛（良い事）に目覚めたり!!」

こうして一行は初めての経験をたくさんした

キラの受難（後書き）

—「ハア、ハア……生き残ったぞ!!」

第「おめでとう、ご褒美は千冬さん直々に早朝鍛錬だつて」

—「……………」

第「何故、こつちに近づく?」

—「……………」

ダッ!

第「こつちに来るなあああ!!」

ダッ!

鬼ごっこ二日目開始

帰るまでが・・・ 前半（前書き）

波乱の初登校から1週間かたった

帰るまでが・・・・・・・・ 前半

「夏が火あぶられそうになってから1週間、私、元狂学者こと”鳳鈴音”は退屈な午後の授業を終わらせ、先生が明後日の予定を話し始めた、これが始まりだった・・・・・・・・」

先生「はい、みなさんに言おう言おう思ってたんですが、今まで二日酔いとか、深夜放送の録画見ててすっかり忘れてました・・・・・・・・明後日、泊りがけで遠足です。」

「と、泊りがけですか・・・・・・・・」

先生「部屋割りとか決めて無いので、各自話し合っように」

篤「セシリア！！一緒に部屋に成ろう！！」

セ「怖いので、みなさんがご一緒にしたら、よろしいですよ。」

「じゃあ！篤！一緒に部屋に！！」

「一夏！！調子に乗るな！！」

「篠ノ乃さん達は、俺たちの様な下種な者が近づいては穢れてしまっただろうが！！」

篤「なんか、怖いなこいつ等・・・・・・・・」

「じゃあ、シャルは？」

シヤ「僕はラウラが篝ちゃんと同じ部屋が良いらしいから篝ちゃんの部屋にするよ」

—「じゃ、じゃあまさか……鈴まで……」

鈴「篝の部屋だ」

ラ「—夏も同じ部屋に成ればいいじゃないか？」

—「いいんですか!? ラウラさん!」

ラ「みんながいいなら」

篝一行「いいよ」

—「じゃあああああああ!」

「皆の衆!! この咎人に死を!!」

「「「「「「「咎人に死を!!!!!!!!」」」」」」

—「死ぬるか!! 明後日の遠足が終わるまで、俺は死なない!! 死ねない!!」

「「「「「「「ぶち殺せえええええ!!!!!!!!」」」」」」

先生「やるなら外でやれ!!」

鈴「じゃあ、帰るか？」

セ「そうですね、準備もありますし」

シャ「うわあ、楽しみだな」

ラ「先生、何処へ行くんですか？」

先生「ん、京都」

箒「京都か、芸者遊びするかな？」

先生「お前ホントに小学生か？」

箒「失礼な！！体は子供、中身はオジサンの私の何処が小学生に見えるませんか！！」

先生「発言とか？」

鈴「箒、帰るぞ？」

箒「了解」

一方、一夏は……

「「どうして！どうして君が！？」」

弾「お前こそ、戦いが嫌いなお前が何故此処に居る！！」

「「たとえ友だろうと俺には譲れない思いがある！！」」

弾「ならば、俺を超えてみる!!」

—「うおおおおおおお!!」

ドカッ!

弾「そんなもんか!!」

ドン!

—「まだ、だ!」

ドン!

弾「ガハア! つ、強くなったな……一夏……」

—「弾!! 大丈夫か!？」

弾「これでお前は一人前だ……」

—「ダメだよ、俺じゃあ、まだ工口本を一人で買えないよ!!」

弾「我が弟子、一夏よ……強くなれ……」

「見つけたぞ! みんな!! いたぞ!!」

—「!!」

弾「行け! 一夏!!」

—「弾その怪我じゃ無理だ! 一緒に逃げよう!!」

弾「バカッ！お前には待つてる人がいるだろ！！行ってやれよ・・・」

—「だ、弾・・・すまない！！」

弾「そう思ってるなら、今度逢えたらジュースでも奢ってくれ」

—「ああ、絶対にまた会おう！！」

弾「ハハハ・・・うおおおおおおお！！」
ダッ！

—「くっ！」
ダッ！

こうして大事な友を犠牲にして一夏は走った、待っている人のために・・・

第「鈴先生！おやつは500円までだ！！」

鈴「そ、そんなそれじゃあ少しリッチなお菓子は二つくらいしか買えないじゃないか！」

シャ「少しリッチなお菓子って？」

鈴「ハーゲン・ダッツとか？」

シャ「それは二日持たないんじゃないかな？」

ラ「バナナはおやつですか？」

箒「バナナは・・・・・・・・・・・・・・・・オカズだ!!」

ラ「な、なんだと!？」

セ「無難に飴などでよろしいのでは？」

箒「セシリア、嫌いな味とかある？」

セ「ハツカですわ」

箒「じゃあ、ハツカ味でいいか・・・」

セ「私の話を聞いてませんでしたの!!」

シャ「僕もうまい棒のめんたい味が苦手だな・・・」

箒「ああ、私もめんたい味は苦手だ」

シャ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

箒「どうした？」

シャ「うん、初めて箒さんに一回目で反応されたから・・・」

箒「何か、今まですみませんでした!!」

鈴「ん？なんか聞こえない？」

セ「そうですか？」

—「箒！うおおおおおおお！—！」

—同「！—！」

箒「ど、どうした、一夏！？」

—「箒！結婚してくれ！！！」

箒「断る！」

ダッ！

—「……………弾、お前の思い無駄にはしないぜ！！！」

ダッ！

箒「来るなああああああ！！！」

セ「……………帰りましょうか」

シャ「そうだね……………」

鈴「あゝ疲れた……………」

ラ「シャル、新しいパジャマを買うから選ぶの付き合ってくれ」

シャ「いいよ」

こうして各々遠足への準備に明け暮れた

ちなみに鬼ごっこの結末はというと……

箒「も、もうダメだ……走れない……」

一「遂に……遂に俺は……」

千「お前ら、私の学校の前で何をしている？」

箒「ハア……ハア……ハア……ハア……」

千「……夏、家に帰ったらゆっくり話さないか？」

一「お、俺はまだ何もしてない……」

箒「初めてだったのに……」

千「……夏ああああああああ……」

一「ええ……」

チラッ

箒「（僕の勝ちです、キラ）」

一「は、図つたな……」

千「さっさと来い!!」

—「いやああああああああ!!」

箒「さて帰るか・・・」

束「あれ？箒ちゃん？迎えに来てくれたの!!」

箒「おお、一緒に帰るか？」

束「うん!!」

箒「姉なんだから、少しはしっかりしろよ」

束「いいの、箒ちゃんがしっかりしててくれるから」

帰るまでが……… 前半（後書き）

鈴「やっぱり、此処はメンマだろ！」

セ「鈴さんにとってメンマはおやつでしたの？」

鈴「いや、冗談だから……」

セ「では、もう飴でいいのでは？」

鈴「そうするか、おばちゃん！ハツカ味で！」

セ「だから、ハツカ味は苦手ですの〜!!」

帰るまでが・・・中盤（前書き）

一行は様々な思惑を胸に遠足へ行った・・・

帰るまでが・・・中盤

おじいちゃんが言っていた、遠足は帰るまでが遠足だと・・・
だがしかし、遠足の帰りって切ないよね。などと思ってしまう、何
だかんだで遠足に行くわけだが・・・いや、ハッキリ言っ
ておこつ。サーブエリアは危険に満ちているのだと、今、私たちは
・・・

鈴「バスジャックの人質になっている」

—「鈴が壊れた!!」

犯人A「うるせーぞ!!ガキ共!!」

シャ「こ、怖いよ」

セ「大丈夫ですわよ」

ラ「くっ!姉さんが居れば・・・」

—「しかし、どうすれば・・・」

篤「zzzz・・・」

鈴「こんな騒いでも寝てるって凄いな・・・」

セ「何でも、遠足が楽しみで眠れなかったそうですわ」

—「起きてこの状況なら箒、暴れるな」

鈴「尋常じゃないくらい、ブチ切れるな・・・」

先生「子供たちだけでも解放してください!!」

犯人B「ダメだね、こいつ等は大事な人質だからな」

シャ「箒、まだ起きないの？」

ラ「ああ、箒なら何とかできそうだな・・・いろいろな意味で」

鈴「つてかさ、IS使えばよくね？」

—「こんな狭いところで使えない」

犯人A「おいつ見ろよ、この状況で寝てる馬鹿が居るぜ!!」

犯人B「ハハハ・・・起こしてやれよ」

—同「（犯人死んだな・・・）」

犯人A「おいつ！起きろ!!」

箒「さかしい!!ガキ共、黙れ!!日本海に沈めるぞ!!」

犯人A「!!!」

犯人B「何だ、寝言かよ・・・」

犯人A「でも、迫力あつたな……」

犯人B「コイツは寝かせとけ、起こしたらいけない気がする……」

—「(なに！奴はニュータイプか！)」

鈴「どうする？奴ら、箒を起こさないつもりだぞ」

—「こうなれば、俺が行くしか……」

箒「……ん？着いたのか？」

一同「起きたあああああああああ！！」

箒「誰？」

犯人A「おはよう、お嬢ちゃんオジサンたちは怖い、人達なんだよ」

箒「先生！」

犯人A「ハハハ……怖がらせたみたいだな」

箒「遠足は？」

先生「遠足はなしよ」

ブチッ！

箒「ほう、そうか……そうか、こいつらのせいで無くなったと・

.....楽しみで眠れない夜を過ごしたというのに無くなったと
.....」

犯人B「そういうこと、運が無かったでちゅ」
パリン！

箒「わた、わたし、僕の遠足返さんかい！！このクソ虫がああああ
ああああ！！！」

犯人A・B「えっ！」

箒「運転手、車を止める」

運転手「は、はい」
キュツ！

箒「降りろ.....」

犯人A・B「は、はい！！！」

箒「一夏！！」

—「はいっ！！」

箒「お仕置きしといて」

—「はい！！」

犯人達「.....」
ガタガタ

ピカーン

ー「・・・・・・・・・・・・・・・・バスターライフル！」

犯人達「ぎゃあああああああああ！！！」

こうして一夏の活躍によりバスジャック犯は無事逮捕され、一行は学校から許可が下りたので遠足は続行となった・・・・・・・・・・のだが

夜 旅館前

先生「みなさん！途中大変なこともありましたが、無事に京都に着きました。ですがもう日が落ちていたので、京都観光は明日の一日だけと成りましたが、しっかり楽しみましょう！」

篤「うとうと・・・・・・・・京都観光が・・・・・・・・（泣）」

セ「ほら、明日いっぱい回ればいいじゃないですよ」

シャ「そうだよ、明日は一杯観光しようよ！！！」

ー「泣いてる篤・・・・・・・・なんかいい！！！」

ラ「私も一緒に回るから機嫌を直せ」

篤「部屋行くか・・・・・・・・」

ー同「立ち直りの早っ！！！」

箒達の部屋

箒「でだ、いきなり人生ゲームをしている訳だが……」
人生ゲームだと一夏はハーレムだな」

一「先は安泰だよ」

セ「実は箒も入りたいんじゃない？」

箒「べ、別にアンタなんか好きでも何でもないんだからね、でもどうしてもって言うなら入ってあげてもいいわよ（棒読み）」

シャ「……」

ラ「実の所は照れ隠しじゃないのか？」

箒「銅40g、塩25g、水15ml、砂糖少々、照れ隠し9k、
セシリア1人、エロス6ユカリン、で、私の照れ隠しはできている」

セ「何故、私が入っているんですの……」

一「箒、愛い奴め……」

箒「風呂入ってきます……」

ラ「じゃあ、私たちも入ってくるか」

シャ「そうだね」

セ「篝さんと一緒に入るのは不安ですが私も入りますわ」

鈴「ん？風呂じゃあ私も入る」

ー「……ってらっしやい………さてと、覗くか」

女湯

篝「良い湯だ……」

鈴「風呂はいい、リリンが生み出した宝だよ」

セ「気持ちいいですわ」

シャ「あつたかいな」

ラ「鈴には勝った」

鈴「何がだ!!」

男湯

「さて、ミッション・スタート」

女湯

箒「セシリア」

セ「な、何ですの箒さん？」

箒「イギリスのお風呂ってどんなの？」

セ「へっ？」

箒「だから、お風呂」

セ「日本と変わりませんわ」

箒「そうか、セシリア」

セ「何ですの？」

箒「最近、胸がヤベ」

ラ・鈴「贅沢者！！」

シャ「ど、どうしたの？」

箒「胸の話してたら……」

男湯

篤「最近、胸がヤベ〜」

ー「ブーーーーー!!!」

「良い情報貰いました!!!」

ー「（の、覗くしかねええええええ!!!）」

「みんな！今ここにいるのは全員同士だ!!!さあ、行こう!!!我らが失われしエデンへ!!!」

篤「一夏、何してるんだ？」

一同「!!!どうしてここに!?!」

篤「いや、ここは十歳以下なら男でも女湯に来れるんだ、だから一夏、他の女子がお前を呼んで来いと」

「いつも、そうだ!!!.....皆の衆!!!今の我らが聖母の言葉^{マリア}を聞いたか!!!いつでも我々は虐げられ、良い思いはイケメンがして来た!!!だが、我らは立ち上がった!!!この混沌とした世界の理を.....憎むべきイケメンを消し去らんとするために!!!我らは立ち上がったのだ!!!さあ、今こそ革命の時だ!!!この世界の理を破壊し我らが約束の地に行くために!!!この土地（風呂場）を忌まわしき獣（一夏）の血で満たすのだ!!!」

「おおおおおおおお!!!」

一「ああ、俺此処で死ぬんだ……」

篤「今日は気分がいい、助けてやる」

一「また、悪化させるのか……」

篤「諸君！！此処で、もし一夏を消せば諸君の言う、イケメンは消えるだろう……だが、考えてみる！！一夏の次に女子に人気があるのは……その次は……結局残るのはこの場で唯一立って居た者それは、女子に一番不人気の奴だ、というレツテルを張られる訳だ……それに、一夏は、一応大事な友人だ、危害を加えるなら……死んでもらう……」

「……………すみませんでした！！」「……………」

篤「さて、行くぞ」

一「お、おう……」

女湯

篤「戻ったぞ」

一「お邪魔します」

鈴「ホントに連れてきた……」

セ「こつちまで聞こえてましたわよ」

篤「まあ、子供に言い聞かせただけ」

ラ「どうした、一夏？いつもみたいに元気がないぞ？」

シャ「ラウラ・・・女の子なんだから隠そうよ・・・」

鈴「ラウラの将来が不安なんだが・・・」

箒「みんなで守ってあげよう・・・」

セ「そういう箒さんも前を隠したらどうですか？殿方の前ですわよ」

箒「一夏は、中身は大人だし大丈夫だろ」

一「小学生はそんなに胸は大きくありません」

シャ「一夏のエッチ・・・」

ラ「だ、そうだと、一夏」

一「箒的には、この環境どうさ？」

箒「うーん・・・片っ端から襲い掛かりそうかな？」

セ「一夏さんより危険な人が居ましたわ・・・」

鈴「まあ、冗談はさておき・・・明日何処回る？」

シャ「僕は清水寺に行ってみたいかな」

ラ「私は特に無いな」

セ「私もよくわからないので皆さんに着いて行きますわ」

鈴「ゲーセン」

ー「本能寺!」

篝「ちよつと、詠春に会いに・・・」

鈴「それネギま、だから!」

シャ「ねぎま・・・焼き鳥でも食べるの?」

ー「シャル、気にしちゃダメだ」

シャ「えっ?・・・う、うん」

ラ「そういえば、姉さんがよく言っているアニメイトという店に行ってみたい」

ー・篝・鈴「ブツツツ!!!」

セ「ど、どどしましたの?」

篝「いつか、いつかね」

ー「そう、ラウラがもう少し大きくなったら行こつ」

鈴「ラウラ、アニメイトっていつのは」

箒「ふんっ！」

鈴「あうっ！」

ガクッ！

箒「わー大変だ鈴がのぼせて気絶した、じゃあ僕はこいつ連れてあげようわー」

ー「大変だー早く連れて行ってあげてー」

セ・シャ「（今、完璧に絞め落とした……）」

ラ「そうか、それは大変だな、先生を呼んでこよう」

箒「気にするな、のぼせただけだから」

ラ「………わかった」

ー「（箒、鈴を早く撤去して）」

箒「任せろ！！！」

シャ「そ、それにしてもー夏って箒さんや、鈴と仲がいいよね」

セ「そうですね、幼馴染でしたかしら？」

ー「いや、会ったのは入学式の時が初めてだけど？」

シャ・セ「えっ？」

ー「子供には難しい話だよ」

シャ「子供には難しい（か、隠し子とか・・・）」

セ「子供には難しい（昼ドラの様な・・・）」

シャ・セ「大変だね（ですね）」

ー「大変なんだよ（前世の友達友達なんて言ったら、頭を心配される・・・）」

ラ「前世で知り合いだったとかか？」

ー「!！」

シャ「まさか」

セ「ちなみにどうしてそう思ったんですの？」

ラ「姉さんが最近しているゲームの内容がそんな話だったからな」

ー「流石に箒が神を脅して転生したなんて、そんなことないよ」

セ「ホントそうですわね」

シャ「うん、箒ならできそつだもん」

ラ「流石に無理だろう」

—「そう無理、箒が神をパシってるなんて、夢だよ!」

箒「ふんっ!!」

—「がはあ!」

セ「ほ、箒さん!？」

箒「おや、大変だ、一夏までのぼせてしまった……よし、みんなお風呂から上がろうか!」

一同「は、はい」

箒達の部屋

—「う、うん……ん？」

箒「は、離せ……ド」触ってる!」

—「何が、一体俺は何をしている……」

箒「おっやつと起きたか!いい加減離せ、苦しい」

—「おお、すまん……状況を教えて」

箒「お前が寝ぼけてこっちに来た、以上」

—「すみませんでした」

第「分かったからお互い何もなかった、というか忘れる!!」

—「了解!!」

こうして夜は更けていった……

帰るまでが……中盤(後書き)

一夏がした事

第「うん……寝苦しいわ!」

一「zzz……」

第「コイツが原因か……よし、セシリアの布団の中へいざ
!」

ガシッ!

第「!」

一「ぐぐぐぐぐぐぐぐ……第……」

第「……ヤバイヤバイヤバイ」

一「ぐぐぐぐぐぐ……」

第「って何か撫でまわしてきた!! 離さんかい!」

一「うん……ん?」

これが一夏がしでかした事

帰るまでが・・・・・・・・後半（前書き）

前回、バスジャックされたり、風呂場での聖戦^{ジハード}を鎮圧したり、一夏の寝相により箒の貞操が危機に陥ったり

帰るまでが・・・・・・・・後半

遠足二日目、昨日はバスジャックのせいで一日無駄に過ごしてしま
ったが、二日目である・・・・・・・・わたくし事、篠ノ乃箒^{ちまき}、実は織田信
長をBASARAで見得から好きである。私個人としても「鳴かぬ
なら、殺してしまえ、ホトトギス」と言って飼育係の人に睨まれる
ほど好きである。そう、今日は本能寺を生で見れる・・・・・・・・

朝 箒達の部屋

セ「はあく・・・・・・・・朝ですの
もぞもぞ

セ「はあく、箒さん人の布団の中に勝手に入らないで下さい」

箒「それは、すまなかった」

セ「・・・・・・・・箒さんがそこにいらっしやるのならこの中に
はどなたが？」

箒「一夏じゃない？」

セ「絶対違いますわ、一夏さんは箒さんに抱き着いて居るじゃあり
ませんか」

箒「ああ、やっぱりそうか・・・・・・・・これがどれほど幻覚だっ
と信じようとしたか・・・・・・・・」

セ「何かありましたの？」

篤「いや、これのせいで凄いアブノーマルなSMプレイされるとい
う、悍ましい夢を見てな……。怖かった……。とても
怖かった……」

セ「よしよしですわ
なでなで」

篤「怖かったよ」

セ「大丈夫、私も普段篤さんが怖いですわ……」

篤「うううううううう（泣）」

ラ「これが日本の百合という光景らしいぞ」

シャ「ハハハハ……ラウラ多分これも違うんじゃないかな」

篤「みんなおはよう」

シャ「おはよう、朝から騒いでどうしたの？」

セ「私の布団の中に誰かがいらっしやりますの」

シャ「誰だろう？」

篤「一夏じゃない？」

シャ「ううん、違うよ、一夏は篤に抱き着いてるし」

第「いい加減、離せ」

一「んん、おはよう」

第「起きたなら離せ」

セ「もう、こうなったらめくって見ますわ!!」
バサッ!

セ「何ですのコレ?」

第「ああ、コレ私の抱き枕じゃないか」

シャ「何んで、僕の絵が描いてあるの?」

第「仕様だ……」

セ「コ、コレを普段どう使いますの?」

第「普通に抱いたり、変わり身に使ったり」

シャ「こんな形だけど役に立てて良かったよ……」

そうこうしている内に自由時間が訪れた

一「とりあえず、どこ行く?」

篤「本能寺!!」

セ「では、参りましょう」

一行本能寺に向かって移動中

篤「遂に、遂に本能寺が見れる……ほぐんの〜うぐ〜」

修築中

篤「……………」

セ「おいでなさい」

篤「う、うううううううううう（泣）」

一「ふ、不憫な……………」

ラ「だ、大丈夫だ!まだ、金閣寺や清水寺がある!!」

篤「そうか!!じゃあ、清水寺に行くか」

一行清水寺へ移動中

—「おお、良い眺めだな!!」

箒「一夏！私のことを離すな!!」

—「ほ、箒さん!!」

箒「いいか、絶対に離すな!! っていうか離したら殺す……」

—「箒さん？」

鈴「ほら、ちろる君、高所恐怖症だから……」

セ「い、意外ですわ……」

シャ「うん、意外だよ……」

ラ「ああ、清水の舞台から飛び降りそうなイメージがあつたのに……」

シャ「それはいくらなんでも死んじゃうんじゃないかな……
案外無事そうだなあ」

セ「無傷で帰ってきてそうですわ……」

箒「いやあああ!! やっぱ高いのやあああ」

先生「誰だ？あいつは……」

シャ「先生、箒です……」

先生「いや、あいつはそんなやわじゃない……」

セ「現実を受け止めてこそ大人ですわよ……」

ラ「相談くらいは乗りますから……」

先生「ホントお前ら小学生か？」

ラ「金閣寺に行かないか？」

セ「そうですね、参りますか」

箒「……」

ガタガタ

一「ほら、次は金閣寺だつて、行くよ」

セ・ラ・シャ「何だ、あの可愛い生き物は？」

先生「そうだよな、篠ノ乃だつて苦手なものが……
想像できないな……」

一行金閣寺に移動中

篤「只の寺だな……」

一「確かにそう見えるけど行って良い事と悪い事が在るよ」

セ「でも、なんだか想像と違いますわ……」

ラ「見る、魚だ!!」

シヤ「鯉って言つらしいよ」

鈴「帰るか……」

一同「賛成」

遠足 終了

旅館 前

先生「みんな、忘れ物がないか確認したらバスに乗り込んでけ」

生徒諸君「はい!!」

篤「後ろは貰った!!」

一「じゃあ、みんな席は篤が確保してくれるからゆっくり行こうか」

バスに乗つての帰り道

一「これだ……私が求めていたのはこれなんだ!!」

箒「zzz……」

セ「箒さんが一夏さんを枕にしているだけではありませんの?」

一「イエー……イ……イ……!!ラウラまで来た……!!」

ラ「zzz……」

セ「この一夏さんの絶叫の中寝ているラウラさんが羨ましいですわ……」

箒「フフフ……」

一「一体、箒はどんな夢を見てるんだろうな?」

鈴「まあ、まともな夢じゃないだろうな」

シャ「アハハハ……さて私も寝ようかな」

こうして遠足は終わり、みんな楽しかった……楽しかったんだ……と、目から心の汗を流しながら言っていた……

翌日 学校にて

箒「昨日の帰りのバスに乗ってるときの夢で、白馬の王子様が来てキスされる夢を見たんだけど……」

セ「まあ！素晴らしい夢ではありませんの!？」

シャ「へえ、箒がそんな夢を見るなんて以外だよ」

箒「ん？何言ってるんだ？いきなりキスされたから、マウント取ってひたすら殴り続ける夢だった……」

セ・シャ「……」

ラ「拳より掌の方が与えるダメージが大きいぞ？」

箒「ああ！関節も決めてやったさ!!」

帰るまでが・・・・・・・・後半（後書き）

—「ただいま」

千「おかえり、一夏・・・・・・・・この写真はなんだ？」

—「ん？・・・・・・・・し、知りません!!」

千「そうか、私にはお前が幕にセクハラしているようにしか見えな
いんだが・・・」

—「・・・・・・・・拙者、忍者でござる!!ニンニン!
ダッ!

千「・・・・・・・・逃がさん!!」
ダッ!

姉たちの日常（前書き）

扱いたくはない

姉たちの日常

春眠、暁を覚えず・・・だったかそれすら覚えてないが、今日のお話は、姉たちが主役だったりする、だが、それが問題ではない・・・そう、それでは・・・

一・篤・鈴「俺たちの出番が減る!!」

織斑家 早朝

千「・・・・・・・・・・朝か・・・・・・・・」

私こと織斑千冬は、基本的に朝に弱い、休日などは昼まで寝ていることもある、いつもは学校などが在るため、早く起きることができない私は、午前3時に起きている、それでは寝不足だったり、実は早起きが得意なのでは？と思うものもいるだろうが、寝るのは午後9時なので問題はない・・・・・・・・

千「・・・・・・・・・・!!危うく二度寝するところだった・・・・・・・・」

最近、料理をして学校に行くまでの時間を潰している・・・理由としては、早くに学校へ行ってしまう、警備員を不審者と勘違いして取り押さえてしまったことなど、後は、まあ、気にするな・・・そうこうしている内に・・・

現在 午前4時

「姉さん、おはよう」

千「起きたか一夏、まず、顔を洗ってこい」

「了解」

最近になって、一夏と一緒に早朝鍛錬をするようになった、一夏の目標は打倒、箒だそうだがアレはもはや人間とは言えない身体能力があるため、生身ではまず勝てないだろう・・・何故かウチの一夏も箒を追いかける時だけ人外的な身体能力を発揮する・・・私の予想だがあいつ等は本来人間が無意識にセーブしている力を箒の場合は生命の危機的状況・・・まあ、火事場の馬鹿力だ・・・一夏は・・・ある種の、子孫を残そうとする本能だろう・・・

現在 学校

千「束、くつつくな歩きづらい」

束「い〜じゃん、私とちーちゃんの仲じゃないか!」

千「クラリツサ、助けてくれ・・・」

ク「千冬、すまない・・・私は最近出た小説の新刊を読み終えるという、ミッションを実行中だ」

千「そうやって間違った、日本の知識を覚えるな・・・」

ク「間違っただけだ」

千「そういつて、侍を探していたのは何処のどいつだ・・・」

ク「侍は存在する!!」

千「正確には存在した、だ」

束「いやいや、ちーちゃん、侍にだって流行が在っていつまでも着物に帯刀じゃないかもしれないし、案外その辺に居るかもしれないよ?」

千「いるものなら見てみたいわ!」

電気屋のTV

「侍ジャパン!! W杯優勝成るか!!!」

束「いたね、侍・・・」

ク「今の侍はサッカーをするのか・・・」

千「さっさと行くぞ・・・」

ラウラの姉ことクラリッサは、日本の魂である侍の登校中にある電気屋のTVで見てしまった・・・最近ではこの電気屋のTVに私の夢を破壊され続けている、この前だってアメリカ版忍者が出ていたときにその忍者が出した”デスパンチ”を千冬に・・・

千「さっきのは、中国の拳法か鳩尾を強打しただけじゃないか・・・」

「

と言われる始末だ・・・どこかに無いものが、私のこの熱い日本の心を満たしてくれるものは!!と叫んだら、束の妹に・・・

第「アニメイト行け」

と言われ、アニメイトに行って見たわけだが・・・凄かった、私の心にグツとくるモノがたくさんあった・・・まあ、おかげで手持ちが大分無くなったが・・・また行こうと思う!!・・・

そうこうしている内に放課後

束「明日は休みだし!!ちーちゃん家のお泊りに行っちゃおうかな?」

千「私は構わんぞ」

ク「なら、私も行こうかな」

束「うん、じゃあ今から行っちゃおうよ!!」

千「着替えとかどうするんだ?」

束「篝ちゃんに頼むよ」

ク「それは無理だと思っぞ」

束「なんで?」

千「あれを見てみる」

箒「いい加減諦める!!」

—「この気持ち、まさしく愛!!」

箒「それはエゴだ!!」

—「今日の俺は阿修羅すら凌駕する!!」

箒「なっ!?!スピードが上がった!?!」

束「無理そうだね・・・」

ク「私はよく人に変わっていると言われるが、あれを見ると私はその言葉を無視しても平気な気がする」

千「おいつ!—夏!—!!」

—「ね、姉さん!?!」

千「—夏、箒を解放してやれ、今日泊りに来るそうだ」

箒「ああ、明日からはもう色々無いんですね・・・」

千「安心しろ、お前は私と同じ部屋だ」

箒「心強い・・・」

—「チツ！」

ク「じゃあ、ラウラも連れて行くかな？」

束「そうと決まれば、篝ちゃん！！早く帰ってちーちゃん家に行くよー！！」

篝「大丈夫、千冬さんが居るなら大丈夫……………」

千「……………一夏、お前少しは抑えないと篝に嫌われるぞ……………」

—「いや、大丈夫だよ」

篝「お前が大人しくしてればな！！」

ク「まさか、篝は一夏の許嫁という奴か！！」

篝「もう、もう、諦めようかな……………」

千「帰ってこい！！」

束「じゃあ、行くよ！篝ちゃん！！」

ク「私も行くか……………」

次回 織斑家にお泊り

姉たちの日常（後書き）

—「今夜が楽しみだぜ！」

「箒」これからが悪夢の始まりだ・・・」

千「姉の前で淫行を期待するなよ、一夏」

—「障害でかいな」

お泊り会（前書き）

前回、束の提案が千冬に承諾されたわけで・・・

お泊り会

入学式から、様々な出来事が在って、楽しいかった事、怖かった事、悲しかったことは……まあ、無かったけど……ホントにたくさんの事が在った……でも、なんだろう……今は、悲しい……何故って？……私、お泊り会呼ばれてない……
……鈴音

ラウラ家

ク「ラウラ、そろそろ千冬の家に行くぞ」

ラ「姉さん、1泊するのにその荷物をなんですか？」

ク「何を言っている、着替えに小説、父さんからの誕生日プレゼントの銃器一式だ」

ラ「姉さん、銃の携帯はこの国では犯罪です」

ク「何を言うか、いっどこに危険があるかわからんに武器の一つや二つ装備しないと危険だろうが」

ラ「まあ、私も常にハンドガンとナイフは携帯してますが、姉さんのカバンからミニガンが見えています……戦争でもする気ですか？」

ク「分かった……半分ほど置いて行こう」

ラ「では、シャルも行くぞ」

シャ「呼んでくれてうれしいけど、空気だったね、私」

篠ノ乃家

箒「母さん、姉さん見てない？」

母「東なら、千冬ちゃんに会いに行くんだって、さっき出たわよ」

箒「じゃあ、私も出るか」

箒「って言う訳で、セシリアも行くよ」

セ「まあ、明日からゴールデンウィークですが、宿題はどっしますの？」

箒「終わったが？」

セ「はい？」

箒「小学生の宿題何て量だけですぐ終わったぞ、学校で」

セ「行くので宿題を手伝ってくださいな」

箒「お前、頭いいじゃん？」

セ「漢字は苦手ですの……」

箒「一緒に頑張ろう……」

織斑家

千「一夏、私は買い物に行ってくるから、留守番してる」

一「了解」

TV

「奥さん、あなたの旦那さんの浮気相手はあなたの妹さんです!!」

「そ、そんな!よりもよって貴方なんて!!」

「そうよ、私が姉さんの旦那さんを寝取ってやったのよ!!」

「この泥棒猫!!」

一「これ子供向け番組なのに内容、絶対におかしいよな……」

ピンポン

一「はい」

篤「来たぞ〜」

セ「来ましたわ」

一「上がった〜」

篤「なんだ、この番組は？」

一「ん？ちびっこと一緒」

篤「ああ、内容、昼ドラの」

セ「そんな、番組が在りますの……」

TV

「なあ、いいだろ？」

「ダメですよ、先輩」

「我慢できないんだ……」

「先輩……」

篤「やっぱり、内容おかしいな……」

セ「は、ハレンチですわ／＼」

—「なあ、いいだろ箒？」

箒「いいぞ」

—「えっ？」

箒「さあ、来い」

—「箒ちゃん！
ルパンダイブ！！」

ピンポーン

箒「はい！」

—「！！！！！！！！！！」
ベチン！！

ラ「来たぞ」

ク「ん？東の妹の？」

箒「篠ノ乃箒だ」

ク「そうか、私はラウラの姉のクラリツサだ」

シャ「私も来たよ」

箒「いらっしやい」

シャ「それはそうと、一夏はどうして気絶してるの?」

箒「……………触れないであげて」

セ「箒さんのせいでしょう……………」

TV

「先輩……………もう、こんな関係はやめましょう……………」

「何故だ!まさか、他に男が!」

「はい、俺、数学の豪先生と” r^2 乗”してしまっただんです!!」

「そんな、そんなのウソだ……………嘘だと言ってくれえええええええええええ!!」

ク「なんだ、これは……………」

箒「わかりません、わかりたくもありません」

シャ「でも、視聴率35%っておかしいよね……………」

セ「思うに、理解できなくて動けなくなっただけで、チャンネルを変えられないからですわ」

ラ「というより、モザイクすら掛かって無かったぞ……………」

篤「というか何故にBLなんだ？」

シャ「某執事とかの人気にあやかっただけじゃないかな？」

ラ「内容はアレだがな」

セ「これ今、気づきましたけど、2時間番組ですわ……」

ク「何故、一夏はこれを見ていたんだ？」

一「セシリアが言ってたとうり、俺も姉さんも固まってしまったからだ」

篤「復活したか」

TV

「先生、結婚しましょう！同性愛の認められたオランダで！！」

「ああ、もう離さないぞ……」

「先生……」

シャ「ヨーロッパに帰りたくないよ……」

ラ「ああ、もう日本に永住するか……」

セ「私もそうしますわ……」

千「帰ったぞ」

—「お帰り〜」

—同「お邪魔してま〜す」

束「篝ちゃん、ただいま!〜!」

篝「おかえり、姉さん」

千「まだ、見ていたのか……………」

束「何コレ?」

—「分からん!〜!」

篝「まあ、腐女子に人気があるんじゃないか?」

千「教育に悪い、今度からはすぐ変える」

—「っっていうか、もう見ない……………」

篝「ホントだ、女性なら見るが……………」

千・束「篝^{ちゃん}……………」

そんなこんなで千冬がトランプで惨敗して拗ね、人生ゲームで拗ね、UNOでも拗ね、とやっていたら

千「そろそろ、風呂に入れ……………グスッ」

一「ね、姉さん……………」

東「ハア―ハア―……………ちーちゃん、かあいいよ」

ク「一夏達に言っておく、私と千冬はノーマルだ」

一「それはわかってます。」

シャ「じゃあ、みんなお風呂入ろうか」

織斑家 風呂場

セ「篝さん、目が怖いですわ……………」

篝「ああ、すまない……………（神、覗くな！！殺すぞ！！！！）」

ビクッ！！

元神「……………何故わかる……………」

ラ「篝、何かあるのか？」

箒「いや、少し頭冷やさないといけない奴が居るだけだ・・・」

シャ「箒、なんだか怖いよ・・・」

織斑家 リビング

—「姉さんこの鎖は何？」

千「お前が暴走した時の保険だ」

—「暴走なんてしないって・・・」

箒「上がったぞ」

—「箒！！うおおおおお！！ウグッ！」

千「なっ？言っただろ、保険だと」

箒「一夏、前（前世）と変わったな・・・」

セ「どうしましたの？・・・何故、一夏さんは鎖で縛られてますの？」

箒・千「保険だ」

シャ「さっぱりしたね」

ラ「ああ、良い湯だった」

箒「セ・千」……………何だこの可愛い生き物は……………」

シャ「えへへ！可愛いでしょ、ラウラとパジャマを買いに行ったとき、お揃いにしたんだ」

ラ「と言っても着るのは今日が初めてだな」

—「ラウラ、シャル……………うおおおおお！！！」

シャ「えっ？う、うわあ！！！」

千「いかん！！この！！！」

ブン！！

箒「何故、私を投げるううううう！！！」

—「ん？箒！！！」

箒「いてて……………ん？」

ガシツ！

—「捕まえた……………」

箒「……………優しくして……………とでもいじり思っ
たかあああああああ！！！」

ドカツ！

—「かはあ！！！」

ガクツ！

箒「ハアーハアーハアー……………どうだ？」

千「さて、私も入るかな」

束「ん？ちーちゃんお風呂入るの？なら私も入る！」

ク「では、私も一緒に入ろうかな……………ラウラ、その格好はどうした？」

ラ「新しいパジャマです」

ク「今度からそれを着て一緒に寝てくれ」

ラ「？良いですよ」

ク「よし、千冬！風呂に入るぞ！！」

箒「クラリツサ目覚めたな……………」

シャ「箒は、なんで僕を撫でてるの？」

箒「いつか分かる日が来るさ……………」

シャ「うん……………」

織斑家 夜

千「じゃあ、寝るぞ」

ラ「千冬さん、箒が居ません!!」

千「一夏め……」

ボタン!

千「一夏!箒を解放しろ……」

箒「一夏……今夜は寝かさんぞ」

一「何故こうなった……」

千「一夏、箒に何をした?」

一「いや、箒が束さんが持ってきたジュースを飲んだらこうなって……」

束「おや?それは私がちーちゃんに飲ませようとした奴じゃないか!!」

千「束……お願いだからそういう薬品はやめてくれ……」

箒「一夏」

千「どうやったら戻る?」

東「この解毒剤飲ませたら戻るよ」

千「じゃあ、飲ませるか」

東「それじゃあ、篝ちゃんお薬ですよ
ガクッ！」

千「一」！！！！」

篝「さて、何故私が一夏に馬乗りしている？」

東「篝ちゃんが、東さんのお薬飲んじやったからです」

千「東、解毒剤を使わないと戻らないんじゃないのか？」

東「篝ちゃん、薬品に強い体質なんじゃないかな？」

千「まあ、いいもう寝るぞ」

東「うん、私も篝ちゃんの一撃が効いてきて意識が遠くなってきたよ」

千「篝、さっさと寝るぞ……」

ボタン

一「それじゃあ、寝るか、篝」

篝「邪魔者は居なくなつた……」

「なんてこった……」

こうして夜は更けていった、一夏の本気の抵抗により二人の純潔は守られたが翌日、薬の抜け切った箒に三途の川に逝されかけた・
・
・

お泊り会（後書き）

鈴「私、呼ばれてない……」

アルバイト（前書き）

夏休み突入

アルバイト

篠ノ乃箒だ、入学式、遠足、ゴールデンウィークと言った出来事を終えた、私たちは今現在夏休みまった中である、終業式の時は暑苦しい校庭で直射日光を浴びながら、校長の無駄に長いありがたいお話を聞いていて……

校長「皆さん、この暑い中、長い話は辛いので手短にお話します。」

などと、言いながら一時間以上話していたときは、はっ倒してやるうか、などと考えた次第です。そんなこんなで夏休みである……
・・まあ、夏休みと言っても、始まった途端、神から……

神「実はそちらに私の後輩が間違っで地獄行きの魂を転生させてしまったので、退治してくれませんか？」

箒「報酬が出るならやる……」

神「はいっ！できる限りのことはします」

と、こんな感じで請け負った。

箒「で、相手は何人？」

神「3人です」

箒「退治ってどうするん？」

神「殺っちゃって下さい」

箒「人相は？」

神「それは……………」

で、現在一夏と鈴に協力を要請して捜索中な訳だが……………」

公園 ベンチ

箒「一目見ればわかるって、どういうことだよ」

？「君！篠ノ乃箒さんだよな？」

箒「ん？確かに私は篠ノ乃箒のひなだが？私は君を知らないんだが？」

ヴァ「俺の名前はヴァンっていうんだ！」

箒「……………いや、だから私はヴァンっていう人物は知らないんだが？」

ヴァ「そう照れるなって！マイハニー！！」

箒「……………（コイツだな、っていうかヴァンよ、絶対お前、前世でヒッキーだろ……………俺もか）」

ヴァ「おいおい、見とれるのも無理はないが、俺に惚れたら火傷するぜ……………」

箒「……………（うぜえ、今殺すか？）」

ヴァ「あっそうだ！！俺の友達も呼んでいいかな？二人いるんだけど？」

箒「えっ？いいんじゃないですか？（バカだろ！！絶対コイツバカだ！！）」

ヴァ「ねえ、箒！俺の特技見せてあげるよ」

箒「いや、別に・・・（あつまれ〜あつまれ）・・・・・・一気に殺す）」

ヴァ「華麗なる技を見せてやるぜ！！」

ピカーン！！

箒「・・・・・・（ほう〜、手の内も見せてくれるか）」

ヴァ「どう？凄いだろ！！これゲッターロボって言うんだぜ！！」

箒「す、すごい（俺は真・ゲッターなんだけど・・・・）」

ヴァ「とりあえず・・・・・・あの砂場に居る奴らに向かって・・・・ゲッタービィィィィム！」

箒「ガキが・・・・」

ピカーン

ヴァ「！！」

ドカッ！

箒「ガキが調子に乗るなよ？」

ヴァ「なんだ！！その腕は!？」

箒「部分展開・・・そんなこともできんのか？」

ヴァ「くっ！そんなことできんのかよ！！チツ！アニメ一話から後見とけばよかつた!!！」

箒「は？」

ヴァ「ああ、箒は知らないんだよね！実は君たちアニメの登場人物なわけ・・・リアルの人間に逆らってんじゃね!!！」

箒「ほう、ならリアルの人間ならいと・・・あっ言い忘れてたな、俺、元お前と同じ世界に居たから」

ヴァ「はあ!？」

箒「まあ、取り合えず・・・死ね
バーン!!！」

箒「チツ！増援か!!！」

ヴァ「おいっ！遅いんだよノロマ!!！」

?「しょうがないだろ！お前がいきなり来いとしか言わないから、場所が分かんなかったんだよ!!！」

箒「一夏、鈴・・・公園だ」

鈴「了解！今向かってるよ」

—「こっちは、無理だ！！今戦闘中なんでね」

？「おいっ！何やってるんだ！！」

箒「連絡だが？」

ヴァ「ノワール！！てめえのせいで仲間呼ばれただろ！！」

ノ「知るか！」

箒「ゲッターサイト……………」

シュツ！！

ヴァ「ノ！！！」

箒「フンッ！」

ザンッ！

ヴァ「おわっ！」

ガキン！

箒「ゲッタートマホーク・ブーメラン！」

ノ「あぶねっ！」

ヴァ「アブねーだろうが！！！」

箒「お前ら……………弱いな」

ヴァ「調子こついてんじゃねーぞ！」
ブンツ！」

ノ「この！！」
ピカーン！」

箒「おお、お前は……なんだそれ？」

ノ「ウインダムだよ！！ゲームで使ったらミサイル、スゲー強かったんだよ！！！」

箒「ああ、あの出来損ないの……」

ノ「！！馬鹿にすんじゃねー！！」
バシユン！」

箒「トマホーク・ブーメラン！！！」

ノ「は？」
チュドーン！」

ヴァ「ああ、あいつ何やってんだ・」

箒「あのミサイル、強いけど撃ち落とされると自分に喰らうし、発射モーション遅いし、ま、ネタだよ、アレは」

ヴァ「クソツ！役たたずが！！！」

鈴「お前も似たようなもんだよ、雑魚」

「ヴァー！！！」

鈴「輻射波動！！！」

ヴァー「ぎゃああああああああ！！！」

ドーン！

箒「はい、おしまい」

鈴「ごめん、コンビニで涼んでたら遅くなった」

箒「お、お、お前！！！」

— 夏side

— 「チツ！面倒だ！！！」

ジエ「ハハハ！！！！どうだこの力！！ジエミニ様のデストロイは最強なんだよ！！！」

— 「自分に様を付けるようなバカが最強な訳無いだろうが！！！」

ジエ「て、てめえ！！！！ミンチにしてやる！！！！！」

— 「掛かってこいや！！！！（でも、どうする？陽電子リフレクターで射撃は効かないし）」

ジエ「とつとつ、くたばりやがね!!」

一「まあ、攻撃は凄いやけど……」

箒「一夏!!」

一「箒!!」

箒「コイツを殺るのは俺だああああ!!」

ジエ「そんな、貧弱な機体で何ができる!!」

箒「真・シャインスパーク!!」

ドンッ!!

ジエ「はっ!効くかよ!!」

箒「それはどうかな?」

ジエ「なに?……なっ!!俺のデストロイが溶けていく!?!」

箒「この機体の次はお前だ……」

ジエ「なっ!や、やめろ!!助けてくれ!!」

箒「助けてやりたいが……っていうか私の機体もヤバいな……
・一夏!!トドメは任せた!!」

一「了解……ツイン・バスターライフル!!」

第「みんなも呼ぶぞー」

鈴「おーー!!」

次回 沖縄旅行編

アルバイト（後書き）

閻魔「いいですか！！大体君たちは中学生にもなって……
……」

ジエ「あ、足が痺れた……」

ノ「（お、俺もだ）」

ヴァ「話がなげーんだよ！」

閻魔「ふんっ！」

ガッツ！

ヴァ「ぐはあ！」

ガクッ！

閻魔「他に文句のある方はいらっしやいますか？」

ノ・ジエ「め、滅相もございません！！」

閻魔「よろしい、では、続きを……」

ノ・ジエ「（助けてくださいー！！！！）」

沖縄旅行（前書き）

沖縄行きメンバー

クラリツサ

篤

セシリア

シャルロット

ラウラ

一夏

鈴音

沖縄旅行

俺こと織斑一夏は現在沖縄に居る、理由は説明するのがメンドいで、前回を読んでほしい・・・・・・・・・・とにかく沖縄だ、青い空、白い砂浜、以下略、そして・・・・・・・・・・箒がない・・・・・・・・・・
いない？・・・・・・・・・・

回想

空港

ク「一夏、箒はどうした？」

一「さあ、セシリアは知らない？」

セ「いえ、私も知りませんわ」

シャ「どうしたのかな？」

ラ「楽しみで、昨日寝られず、今寝てるんじゃないか？」

一「いや、まさか・・・・・・・・」

「まもなく、沖縄行きの飛行機が出発いたします、ご利用の方はご搭乗下さい」

ク「しょうがない、みんな乗るぞ」

篤「乗り遅れた……………」

回想終了

一「見たかった……………水着姿の篤が見たかった……………」

セ「一夏さん大丈夫ですか？」

一「大丈夫じゃないかも……………」

鈴「ダメだ、コイツ早く何とかしないと……………」

篤「ホントだな、元気出せ一夏」

一「……………」

セ「……………」

鈴「……………」

篤「そんなに見つめるな、興奮する」

セ「い、一体どうやってきましたの？」

箒「・・・・・・・・黙秘する」

一・鈴「何故に黙秘？」

箒「とりあえず、寝るか」

一「えっ？海で遊ばないの？」

箒「海って楽しい？」

一「た、多分？」

鈴「言われてみれば・・・・・・・・」

セ「でも、ビーチバレーをしたり、海で泳いだりできますわよ？」

箒「いや、海って言ったなら密漁したり、密漁するしかないから・・・・・・・・私はまだ海保に目を付けられたくはない」

セ「・・・・・・・・箒さんにとって海とはなんですか？」

箒「狩場？」

一「・・・・・・・・まあ、狩場だね」

鈴「えっ？私、都会派だからわかんない？」

箒「一」「二」のやるじー！」

ク「おお、箒、来ていたのか」

篤「おお、来たぞ」

セ「ク、クラリツサさんその生き物はどうしましたの？」

ク「ああ、こいつはさつき狩ったばかりのサメだ」

篤「おお、初めて触った！！」

ー「スゲエ」

セ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

シャ「セシリア、人は環境に慣れることでその土地に住み着くことができたんだよ・・・・・・・・」

セ「本当に大きなサメですわね！！」

シャ「セシリア・・・・・・・・」

ラ「シャル、セシリアが何か吹っ切れた顔をしているが何かあったんだ？」

シャ「適応したんだよ」

ラ「？まあ、よくわからんが、良かったなセシリア」

シャ「うん、良かったよ」

篤「でも、良く狩れましたね？」

ク「ああ、強敵だった……」

鈴「でも、これどうするの？」

ク「もちろん……」

一「考えてないんかい!!」

篤「っていうかさあ、海以外で楽しい事無い？」

ラ「それなら、さつき乗馬レースというのがあったぞ？」

篤「見に行くか……」

ラ「優勝賞金は10万円だそうだ」

篤「参加しに行くぞ!!」

セ「乗馬でしたら私も出ますわ」

鈴「私たちは応援してるわ」

シャ「大丈夫かな？」

乗馬レース会場

箒「すみません」

「はい、なんでしょうか？」

箒「私たち参加したいんですが」

「では、あちらで乗る馬を選んでください」

馬小屋

セ「箒さん、乗馬経験は？」

箒「ない！」

セ「……………よくそれで出ようと思われましたわね……………」

箒「10万掛かってるからな」

セ「……………私はあの馬にしますわ」

箒「私は……………!!お、お前は」

会場

俺の名はサブ、地元では馬乗りサブと言われるほどの乗り手だ、今日のレースは素人の集まりばかりで退屈するのは目に見えてるが、優勝賞金10万は欲しい、まあ、小遣い稼ぎでもしようと思う

サブ「と、思っていた時期もあったさ・・・」

箒「踏み砕け！！黒王！！」

セ「な、何ですの！？その馬は！！」

箒「黒王、さっき名前付けた！！」

サブ「（何なんだ！あの化け物は！！！馬じゃねえよ！！なんだよあのデカさは！！！）」

馬主「頑張れ！花子！」

黒王「ヒヒーン！！」

箒・セ「花子！？」

サブ「（は、花子ってどう見ても名前付け間違えただろ！！）」

「では、レースを始めます！！」

観客席

—「箒が拳王に見えてきた……可愛いけど」

シャ「大きなお馬さんだね……」

ラ「馬なのかアレは？」

ク「欲しい……」

ラ「姉さん……ウチはウサギのフランクを飼っているの
で無理です」

ク「では、せめて写真でも」

鈴「この姉妹は天然なんだな」

—「ああ、でも……」

鈴・—「微笑ましいな……」

ドン！

ク「銃声か!？」

シャ「レースが始まったんですよ」

鈴「セシリアと箒早いなあ」

—「そういえば、箒はらこって馬乗れたっけ？」

鈴「いや、知らん、ちろる君って生態がまだわかってないから」

—「でも、ちろる君なら乗れそうよね？」

鈴「うん、前（前世）に、おなかの中に原子炉が在るって中学の時言われたって言ってたし」

—「そういえば、そんなこと言ってたね」

鈴「他にもおなかに1の力を加えると700になって返ってくるって言ってた」

—「ホントちろる君って人間なのかなあ？」

鈴「生物学的には人間なんじゃない………自信ないわあ」

シャ「（二人の言う、ちろるっていったい!?!）」

レースside

箒「駆け抜ける！黒王（花子）」

セ「させませんわ!!」

サブ「あ、あの二人速い!!」

「おおつと、飛び入り参加の子供達が速いぞ！！登録名はセシリアちゃんが二位、ちろるちゃんが一位だ！！」

観客席

シャ「ええ〜！？ち、ちろるって箒なの！？」

鈴「そうだが？」

シャ「えっ？じゃ、じゃあおなかの中に原子炉あるの？」

鈴「どうだろ？中学時代の友達に言われたらしいよ」

ク「箒は何歳なんだ……………」

シャ「……………でも、箒なら在りそつで納得できるよ……………」

「

レースside

箒「セシリア、いい加減諦めたらどうだ？」

セ「いいえ、諦めませんわ！！」

箒「ふっ……………なら行け」

セ「！！どうしたんですの？」

箒「私の黒王はどうやら、疲れたようだ」

セ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ゴオオオオオオオオオオオオール！！！！一位セシリア、二位ちろる、三位出島さん、でした！！」

箒「結局、二位は5万貰えたのか・・・」

一「惜しかったな、箒」

鈴「馬乗れたんだね？」

箒「いや、今日が初めてだけど？」

一「鈴「えっ?」

シャ「おめでとう、セシリア・・・・・・・・・・どうしたの?」

セ「私、箒さんに勝ったんですわよね?」

シャ「えっ?うん、そうだよ」

セ「・・・・・・・・・・・・これで私も人外の仲間入りですわ・・・・・・・・」

シャ「えっ!?!?そ、そんなことないよ!セ、セシリアはまだ人だよ!!!そ、それに箒の場合あのお馬さんが凄かったただだから」

セ「ほ、本当ですか?」

シャ「うん、そうだよ!だから元気出して」

セ「な、なんだか自信が付きましたわ」

ラ「セシリア、馬に乗れたんだな?」

セ「レディの嗜みですわ」

箒「そうか、では、今度からは”今日の俺は紳士的だ”を私はどう
言えればいいんだ?」

—「言わないで!!その声で言わないで下さい!!イメージ崩さな
いで!」

鈴「”今日の私はマダム的ですわ”くらいにしとけ」

箒「シツクリ来ないな・・・」

シャ「マ、マダムって・・・」

ク「では、”今日のあたいはさいきょーだ”はどつだるつ?」

箒「??」

ラ「姉さんそろそろ宿に帰りませんか?」

ク「そうだな、暗くなる前に帰るか」

箒「楽しみだなあ」

一「本当に楽しみだ……」

箒「し、しまった！千冬さんがいない！！」

一「箒、今晚が楽しみだね」

シャ「一夏、箒が怯えてるよ」

鈴「縛るか？」

ラ「一夏と箒は仲がいいな」

箒「大人の階段昇る、私はまだ、シンデレラさ」

セ「箒さん、帰って来てください」

こうして一行は様々な不安を抱えて、宿へと向かった……

沖縄旅行（後書き）

クラリツサと鮫の戦い

一夏達がいる浜から沖合

ク「澄んでいるな」

ラ「そうですね、そろそろ一夏達の所へ戻りませんか？」

ク「それもそうだな・・・なんだアレは？」

ラ「鮫ですね、あの大きさは確実に人を襲いかねないサイズですね」

ク「5mくらいか？」

注意 此処からは作者の勝手なアテレコを鮫に行います

鮫「見つけたぞ！！ゼータ（餌）」

ク「こちらを襲うようだな」

ラ「そうですね」

鮫「（ん？女子供が戦場に出てくるんじゃないやねえ！！）」

ク「まあ、こんなことは想定内だ」

ラ「想定していたのなら、こんな状況になるのを回避してください・

「・・・」

鮫「墜ちろおおおおお！・・・！」

パン！パン！

鮫「！！！」

ク「防水仕様のハンドガンだ、ラウラ、アイツを退治するぞ」

ラ「わかりました」

鮫「て、てめえらいつたい何処から武器を出した！？」

パン！パン！パン！パン！パン！

鮫「くっ！お、俺のハンブラビが・・・・・・・・・・・・・・・・」

ラ「姉さん、この鮫どうしますか？」

ク「・・・・・・・・・・・・・・・・とりあえず、持って帰ろう」

沖縄旅行？（前書き）

一行は日も落ちてきたので旅館に行くことにした

沖縄旅行？

前回までのあらすじ

勇者 一夏は仲間とともにとある島に行った、だがそれは魔王によって仕組まれた罠だった・・・

一「違うよね、これ前回と違うよね」

鈴「面白そうだし、見てようよ」

一人ずつ倒れる仲間たち・・・

箒「死ぬんじゃない！！鈴！！」

鈴「死んでねえよ！！」

立ち塞がる、敵たち・・・

ク「防衛戦か・・・弾薬の準備は十分だ！！」

ラ「姉さん・・・」

すれ違う思い・・・

箒「セシリアアアアアアアアアアアアア！！」

セ「こ、怖いのですのおおおおおお！！」

一「箒！！結婚してくれええええええええええ！！」

箒「来るなああああああああああ！！」

鈴「すれ違っつてより一方通行だな」

だが、勇者たちは諦めなかった！！

—「シャアアアアア！！魔王何処じゃあああああああ！！」

箒「捻り潰してくれるわあああああああ！！」

鈴「ヒヤッハー！！」

シャ「う、うう……ぼ、僕が魔王だよ……」

—・箒・鈴「攻撃できねえええええええええええ！！」

セ「凄い勢いで諦めてますわよ？」

ラ「魔王がシャルでは攻撃できない……」

ク「シャル、怯えきつっているな」

シャ「ぼ、僕が倒されれば世界も平和なんだよね？できれば痛くしないで」

箒「ヤベえ！！倒したらコッチが悪役だあああああ！！」

鈴「……そうだ！！—夏を魔王にしよう！！」

「えっ!?!」

一同「魔王覚悟!?!」

「えー!?!」

シャ「みんなダメだよ!?!一夏が可哀想だよ!?!」

「なんて、なんていい子なんだ………テメエ等!
!俺が魔王だああああああ!?!」

ク「くっ!?!一夏、お前は漢だ!?!」

ラ「あれが、武士なんですな!?!」

「ぎゃああああああ!?!」

こうして魔王は倒されたためたしめでたし………

沖縄 旅館

箒「よし、お話してつやたぞ、いい加減寝ろ」

ラ「いやです!?!」

箒です。何故現在こうなっているか簡単に説明すると、一夏一行は
旅館”漢道”に着いた、そして

ク「3人部屋が二部屋空いてるそうだが、一夏は千冬から監視しろとの頼みごとが在るため、私と同じ部屋だ」

セ「では、私は箒さんが怖いので、クラリッサさんと同じ部屋にいたしますわ」

箒「一夏は怖くないのか？」

セ「箒さんの方がずっと怖いですわ」

シャ「じゃあ、私とラウラと箒に鈴が同じ部屋だね」

箒「セシリア、今夜忍び込んでやるからな！」

セ「構いませんが、一夏さんがいますわよ」

一「ハアーハアーハアー……箒、遊びに来いよ」

箒「……わ、私は夜はすぐ寝ることにしてるんだ……」

セ「じゃあ、私が一夏さんと一緒に遊びに行きます」

箒「来たらセシリアも巻き込む……」

セ「や、やはり夜更かしは体に悪いのでやめておきますわ」

店長「お客さん、お部屋へご案内いたしやす」

ク「ん、頼む」

鈴「凄い古傷だなあ」

店長「野郎ども!!お客さんをお部屋にお連れしろ!!」

「合点でさあ、兄貴」

店長「兄貴じゃねえ、店長だ!!」

「すいやせん!店長!!」

ラ「なんだか不安なのだが・・・」

箒「安心しろ、私が同じ部屋だ、攻撃力と火力は半端じゃないぞ?」

ラ「そこは防衛力ではないのだな・・・」

「お客さん!!お部屋にご案内いたしやす、ついて来てください!!」

シャ「お泊り楽しみだなあ」

ラ「箒よ、アレは現実逃避か?それとも天然という奴か?」

箒「半々じゃね?」

と、「こつこつ感じで部屋までたどり着いたんだか・・・」

ク「ラウラ、私は風呂へ行ってくる、あまり騒いで迷惑をかけるなよ?」

ラ「大丈夫です。私は姉さんが心配ですが・・・」

ク「どこが心配なのだ?ちゃんとハンドガンと弾薬のストック、近接戦も踏まえナイフも装備している、相手が誰であろうと10人位までなら怪我すらせんぞ?」

ラ「姉さん、日本は銃の携帯は警察に捕まります。」

ク「何を言っている、そんなわけが在るか」

箒「銃刀法違反で逮捕されますよ?」

ク「・・・本当なのか?」

箒「本当です」

ク「では、どうやって身を守ればよいのだ・・・・・・・・・・体術か!?!」

箒「うん・・・・・・・・セーフ!!」

ク「よし、ならば安全だ」

ラ「私は姉さんの格闘スキルは暗殺系ばかりなのでもっと不安です」

シャ「みんな!!夏の心霊スペシャル始まったよ」

箒「今いく〜」

そう、これがいけなかった……

夏の心霊スペシャル放送後

シャ「怖かったね〜」

ラ「あ、ああ……日本には幽霊が出るのだな……」

セ「どうしてくれますの!!!これでは夜中にトイレに行けなくなっ
てしまいますわ!!!」

箒「あ〜、そうだね〜、眠いし寝ようかな?」

一夏「じゃあ、セシリア、俺たちも部屋に戻ろうぜ?」

セ「私、こっちで寝ますわ!!!」

箒「うるさくしないなら、いいぞ」

シャ「アレ?箒が大人しい?」

一夏「ああ、箒はいい具合に疲れてると夜は大人しいんだ、逆に疲
れてないとテンションが異常になる……」

シャ「確かに今日はたくさん遊んだから僕も疲れちゃったよ」

ラ「箒、怖いから一緒に寝てくれ」

篤「おいで〜」

セ「では、私も怖いですが幽霊の方が断然怖いですわ」

シャ「楽しそうだし僕も一緒に寝る」

一「アレ？そういえば鈴は？」

ラ「鈴なら、そこで先に寝てるぞ」

一「そういえば、鈴（狂学者）は怖いのだメだっけ」

セ「そうでしたの？」

一「うん、アレ？でも篤もダメじゃなかったっけ？」

シャ「えっ？そうなの？」

篤「うん・・・怖くて泣きそうだよ・・・だから、お休み・・・」

シャ「全然怖くないみたい」

セ「そうですね、一夏さんもこちらでお休みになられてはいいかですか？」

シャ「そうだよ、折角の旅行なんだから一緒に寝ようよ？」

ラ「確かに人数が多い方が安心が出来る」

ガラガラガラ

ク「戻ったぞ、どうした？」

ラ「ああ、姉さん実は……」

ラウラ説明中

ク「くっ！ラウラ、私が幽霊が苦手だというのにそんな怖い話を……」

ラ「初耳です」

ク「ああ、聞かれなかったから言わなかった……」

ラ「姉さん……」

シャ「それはそうと3人部屋に7人は狭いね……」

セ「ですが、なんだか安心できますわ」

ク「では、そろそろ寝るぞ」

現在の並び

シャ・セ・篝・ラ・ク・一・鈴

篤「そんなこんなで、現在に至るわけで・・・」

ラ「篤、私が寝るまで起きていてくれ」

篤「断る・・・」

ラ「う、うう・・・」(泣)

篤「わかったから、起きてるから早よ寝ろ」

ラ「寝ようとはしているのだが・・・寝付けん」

篤「はあ・・・エイツ
トン」

ラ「あぐっ!!」
ガクッ!

篤「ラウラが寝付いた・・・お休みなs」

霊「憎い・・・憎い・・・憎い・・・」

篤「・・・」

霊「憎い・・・憎い・・・憎い・・・」

篤「・・・」(怒)

霊「憎い……憎い……憎い!!」

篤「次、喋ったら存在消すぞ?」

霊「……」

ガタガタガタ

チュン!チュン!

篤「午前5時……寝てない……」

—「ん?篤、おはよう」

篤「……」

ガスツ!

—「ぐはっ!」

ガクツ!

篤「……話掛けんじゃねえよ……クソツ!」

一同「(お、起き辛い……)」

沖縄 二日目突入

第さん絶賛不機嫌モード中

沖縄旅行？（後書き）

—「あ、あの〜篤さん？」

篤「ああ？」

—「何でもありません!!」

篤「そうか・・・」

イライラ

セ「きよ、今日の篤さん怖いですわね・・・」

ラ「私が夜中まで寝付かなかったから・・・」
ガタガタ

シャ「だ、大丈夫だよ、いくら篤でもそこまで・・・」

篤「寝てよ・・・人殺しかねないし・・・」

シャ「・・・こ、骨折くらいで済むよ!!」

ラ「私は今日で死ぬのだな・・・」

ク「ラウラすまん、装備が万全でも勝てる気がせん」

セ「さっきの篤さん、人がしてはいけない眼をしていましたわ・・・」

「

— 「どんなの？」

セ「瞳が赤かったですわ……」

— 「……人を辞めたんだろうね……」

鈴「お前等なんかしたん？前（前世）でもあんなん見た事無いよ」

— 「鈴、箒は人を辞めたんだよ……」

鈴「箒……無理しやがって……」

帰宅（前書き）

前回、等ことちろるはアクシデントで睡眠不足だった・・・

帰宅

箒「と、言う訳で私は少し寝るから時間に成ったら起こして、それまでは静かにしてるか、遊びに行つてきなさい……」

一「お勤めご苦労様です」

鈴「今日の夕方には帰るんだし、また海行こう!」

シャ「うん、行く」

ラ「じゃあ、姉さん私たちも行きましょう」

ク「そうだな、折角の沖縄だ思う存分楽しまないと」

セ「では、みなさん行きましょうか」

箒が寝たので一夏達は沖縄の海へ遊びに行った

箒 夢の中

箒「……何だこの夢……」

箒の目の前には、バカ丸出しの光景が広がっていた……

箒「うわあ〜・・・豚が豚を調理してる・・・」

豚1「そこのお嬢ちゃん！ウチの兄貴食って行くかい？」

箒「え、遠慮しときます・・・」

豚1「そうかい・・・お願いだ兄貴を食べてあげてくれな
いか！これじゃあ兄貴が浮かばれねえ！兄貴の夢はみんなにうまい
カツ丼を食ってもらおう事なんだ！」

箒「それでなぜ、兄さんがカツ丼に？」

豚1「兄貴の夢を叶えるために一生懸命、料理人に成る修行をした
んだ・・・そしたら俺のこの腕が食材（兄貴）を見た瞬間調理
していたんだ！！」

箒「この豚でなし！！」

豚1「だからお願いだ！兄貴を食ってやってくれ！この通りだ！！」

箒「何を当たれ、私にはお前の後ろに見える豚が怖くて食う気にも
なれん」

豚1「えっ！？ま、まさか兄貴の幽霊が！！」

豚2「お、俺はカツ丼より牛丼に成りたかつたんだよ・・・」

箒「無理だ、お前は紛れもない豚だろうが？」

豚2「あんまり豚、豚言うな！……興奮するだろ」

箒「……………」
ダツ！

豚2「もつと罵って欲しいです！！女王様！！」

豚1「なんだか俺も興奮してきた…………縛って欲しいです！！」

箒「来るな！豚共！！」

豚共「ぶうううう！！」

箒「いやあああああああ！！」
ピカーン

豚共「ぶううううう！？」

箒「消えろおおおおお！！ゲッタービiiiiiiii
iiiiiiiiムツ！！」

豚共「ご馳走様です！！」
ジュツ！

箒「ハアーハアー…………逃げよう、この現実(夢)から逃げ出してやる！！」

？「そう簡単にいくかな？」

先に行つてきます

一夏より

箒「・・・・・・・・・・ブチッ！」

その頃 一夏一行 飛行機にて

一「うん？」

シャ「どうしたの一夏？」

一「何か忘れてる気がする・・・・・・・・何だっけ？」

シャ「えっ？・・・・・・・・あれ箒は？」

ラ「ん？一夏が起こしに行つたのではないのか？」

一「・・・・・・・・ああ！忘れてた！！！」

セ「どうしましたの？」

鈴「うるさいなあ」

シャ「一夏が箒を起こし忘れて置いてきちゃって・・・・・・・・」

鈴・セ「何やってるんだよ（ですの）！」

ク「一夏・・・・・・・・箒に嫌われたな・・・・・・・・」

—「何ってこった……」

ドン！

一同「！！」

鈴「なんだ！？……なん……だと……」

セ「どうしたんですの！？……シャルロットさん紙はありますか？遺書を書きたいので」

シャ「どうしたのさ？……見たくなかった……」

—「何かあったのか！？」

窓の外

箒「い〜ち〜か〜……皆殺しだ！！」

飛行機内

一同「きゃあああああああ！！！！！！」

ク「ど、ど、ど、ど、どうするんだ！アレはもう人外だぞ！？」

セ「目が完全に危なかったですわよ！？」

シャ「ま、不味いよ！？飛行機、墜されちゃうよ！」

鈴「こっぴごうなったら！！—夏！お前が相手して来い！！」

—「俺に特攻しろと!?!」

ラ「一応、一夏を指名してるぞ?」

シャ「ほら、一夏! 箒が呼んでるよ? 早くいかないよ」

—「こ、こいつ等俺を見捨てやがった……」

セ「一夏さん……私たちは日本で帰って来るのを待っていますわ……ですからさっさと……お行きなさいっ!」
ドン!

—「グハア! ……痛いなあ……ハッ!」
チラッ!

箒「一夏、一夏……ああ、会いたかったぞ?」

—「まさか、怒ってない?」

箒「それはもう……殺したいほどに……」

—「厳しい現実だあああああああ!」

箒「さあ、一夏……いつもみたいに私と追いかけてこをしよう……もちろん、捕まったら死んでもらうかな? ……楽しみだろっ? ……さあ、行くぞ!」

—「ああ、もう!」
ピカーン

箒「一夏あああああああ！！」

ダッ！

一「やっぱり怖い！！！！！！！」

ダッ！

飛行機内

セ「あつ！一夏さん離れていきますわ」

鈴「うわゝ病んでるなあゝ」

シャ「箒……怖いよう」

ラ「あ、あれがヤンデレという奴か？」

ク「初めて生で見たがやはり怖いな……」

シャ「多分アレは違うと思うよ」

上空

一「くっ！めちゃくちやだな！！」

箒「アハハハハハハハハハ……どうした一夏？いつもみたい
に追いかけてこないのか？寂しいじゃないか？クッ！アハハハハハ
ハハハハハハハハッ！」

—「追いかけて欲しいならそんなにゲッタービーム乱射するな!!」

箒「なんだ？撃ち合いより斬り合いが良いのか？早く言ってくれ
ば良いのに……っ!!」
ダッ!

—「そう何度も何度も喰らうか!!」
ガキンッ!

箒「そうだ、そうじゃないとつまらない……ほら、もっとも
っともっともっともっと遊ぼう!!」
ザンッ!

—「くっ!此処は一端距離を……」
ダッ!

箒「させない!!」
ダッ!

—「それを待っていた!!バスターライフル!!」

箒「!!……!!」
ドン!

—「やったか？」

煙が晴れると……

—「!!……!!」

箒「今は効いたぞ?.....どうした?」

—「箒さん.....アザーツス!!」

箒「?.....なっ!?!」

そこにはIS以外は纏っていない箒さんが.....

箒「.....真.....」

—「えっ?」

箒「シャイン・スパーク!!」

—「!!ぎゃあああああ!!」

ダッ!

箒「逃がすか!!忘れろおおおおお!!」
ダッ!

こうして一夏と箒は家に帰った、

帰宅（後書き）

居残り組

千「良いのか、束？ 箒と沖縄に行かなくて？」

束「良いんだよ、冷房効いてる部屋でゆっくりしてる方が良いし、それよりちーちゃんはいいの？ いくんと行かなくて？」

千「不安ではあるが、クラリツサが行っている問題はないはずだ、それに剣道の大会が在るからな……」

束「ホントは行きたかったくせに」

千「束、死ぬか？」

束「え、遠慮しとくよ、ちーちゃん」

夏祭り（前書き）

沖繩旅行から数日、篠ノ乃夫妻から夏祭りが在ることを聞いた一行は・・・

夏祭り

おはよう、織斑一夏ことキラです。現在俺は夏祭りに来ています。幸せです！とにかく幸せです！！

取り合えず、朝の回想

織斑家

ピンポン

「はい！」

箒「一夏、遊びに来たぞ」

セ「おはようございます、一夏さん遊びに来ましたわ」

「おお、おはよう二人とも、所でなんで箒は浴衣なんだ？」

箒「今日は夏祭りが在るらしくてな、母に捕まって着せられた・・・

」。

「夏祭りかあ〜何時から？（篠ノ乃母、グジョップ！！）」

箒「18時からだ」

セ「では、皆さんも呼んで行きましょう」

ピンポン

鈴「一夏く遊びに来たよ」

篤「おお、丁度良い所に」

一「鈴も一緒に夏祭り行かないか？」

鈴「ああ？夏祭り？ゴメン今日は、となりのトトロやってるからいけないわ」

篤「録画しろよ……」

鈴「生だからこそその良さが在る！！」

一「そう言って何回学校遅刻しそうになったよ？」

鈴「4回くらいだ！！」

セ「アレ？鈴さんは遅刻した事無かったではありませんこと？」

篤「ああ、高校時代の話だから」

セ「あなた方は本当は何歳ですか？」

一「それより、夏祭り始まるまで暇つぶしてようぜ」

そんなこんなで、午後17時

一「そろそろ夏祭りに行くか？」

鈴「ああ、良い時間だしね？」

篤「今思い出したんだけどさあ」

一「何？」

篤「私たち折角運転免許取ったのにこんな状況になったから無駄になったね……………」

一・鈴「言うなよ……………」

セ「……………(う、運転免許って…………)」

ピンポーン

一「はい!」

ラ「一夏、夏祭りに行かないか？」

シャ「こんばんは」

一「おお、今から行くことと思ってたんだよ」

篤「おお、ラウラも浴衣か」

ラ「ああ、姉さんがな……」

箒「そうか……」

シャ「箒も浴衣なんだね」

箒「うん……とにかく気を取り直して、行くか」

一同会場へ移動中

夏祭り会場 近所のお寺

箒「少し早かったみたいだな」

鈴「じゃあ、あっちの方で時間つぶそうよ？」

シャ「そうだね……箒何してるの？」

箒「いや、浴衣でもセシリアを追いかけられるかと思って走ってみただけど走りにくくて無理だなんて」

セ「……よかったですわ」

一「走れない……」

箒「はっ！」

ダッ!

「うおおおおおおおお！！簞iiiiiiiiiiii！！」
「ダッ！」

シャ「ああ、アレじゃあ追いつかれちゃっつー」

ラ「鈴、セシリア、シャル、簞を助けるぞ」

鈴「簞頑張れ」

セ「もう手遅れですわ……」

「行くぜ簞！！」
ルパンダイブ

簞「うわっ！！」
ゴツッ！

シャ「だ、大丈夫！簞！」

鈴「うわっ痛そう……」

セ「ほ、簞さん！？」

簞「うっ！！」

「すまん、簞やり過ぎた」

簞「ん？貴方は何方ですか？」

一同「えっ!？」

鈴「あーあ、一夏、箒に完全に嫌われたな」

箒「？」

セ「安心しましたわ、凄い音がしたものですから」

箒「私は箒って言うんですか？」

一同「えっ!？」

箒「えーっと……………初めまして？」

シャ「ま、まさか……………」

ラ「記憶喪失か？」

一「……………箒、俺は箒の夫の織斑一夏だ」

鈴「おいっ!どさくさに紛れて有らぬ情報を教え込むな!」

箒「夫……………じゃあ、私は織斑箒って言う名前なんですか?」

シャ「違うよ、あなたの名前は篠ノ乃箒だよ」

箒「しなののの箒?」

セ「」の”が一個多いですわよ」

箒「篠ノ乃箒……でも、私の名前って確かちろるだったよな？」

鈴「そつちかよ……」

一「良い？君の名前は篠ノ乃箒だから、そして俺は君の旦那だから」
ラ「また嘘を教えるな」

箒「わ、私は結婚していたのか……」

セ「もう、一夏さんのせいで箒さん信じてしまわれましたわ！」

千「ん？アレは」

束「ん？箒ちゃん！！」

シャ「あつ不味いよ！」

箒「？」

束「もつっ箒ちゃん酷いよ！束さんを置いて行っちゃうなんて！！」

箒「……どちら様ですか？」

束「……ハハハハ、箒ちゃん冗談キツイよ」

箒「とにかく、初めまして」

東「……………ちーちゃん!! 篝ちゃんが!! 篝ちゃんが!!」

千「よしよし、東、篝を怒らせることを何かしたんじゃないか？」

東「知らないよ!! 今日、ちーちゃんとクーちゃんと一緒に居たもん!!」

千「となると……………一夏、篝に何をした？」

ラ「いつもみたいに追いかけてることをしていたら、篝がこけました」

—「って訳です」

東「なるほど、記憶喪失って訳だね」

千「ああ、すまん東、家の馬鹿が」

東「そうだよ、いつくん! これは私でもいけない事ってわかるよ?」

—「すみません」

篝「えーつと……………ウチの夫がすみません!!」

千「……………何？」

—「ええつとこれには事情が……………」

鈴「一夏が無い事無い事吹き込んでました」

—「り、鈴さん!？」

千「そうか……一夏!」

一「申し訳ございません!」

千「東、本当にどう責任を取ればいいのか……」

東「良い? 篝ちゃん、私は篝ちゃんのお姉さんの篠ノ乃東さんだよ」

篝「ね、姉さん!」

東「それでね、篝ちゃんは東さんのことが大好きなんだよ」

篝「すみません、それは何となく違う気がします」

東「ガーーーーーン! い、いつくんの時はうまくいったのに……」

千「よし一夏、篝の記憶が戻るように努力しろ」

シャ「あっ無視した」

一「うん、頑張ってみる」

鈴「大丈夫だ、篝あいつとは高校からの付き合いだろ?」

千「お前らは私より年上なのか……」

一「よし、篝!」

篤「は、はい！」

一「行こうか」

篤「はい／＼」

セ「なんだか、行かせてはいけない気がしますわ・・・」

千「まあ、大丈夫だろう・・・多分な」

束「フッフ、これでちーちゃんは私と親戚だね？」

千「不安になってきた・・・」

二人きりになった、一夏と篤は・・・

篤「何処へ行くんですか？」

一「いや、人気のない所へ」

篤「・・・元気な子を産みますね／＼」

一「いや、違うから、昔の話とかしたら戻るかなって思ったただけだから」

篤「じゃあ、そう言う事にします」

一「・・・（絶対勘違いしてるよこの子）」

クラスメイト

「ん？奴は……皆の者出遭え出遭え!!」

「どうした!!や、奴は!？此処であつたが百年目!!」

—「あ、不味い」

箒「？」

「お前！篠ノ乃さんと夏祭り何てきやがって……羨ましいわ!!」

「覚悟——ぐはあ！」

ドカツ!

—「お、お前は!？」

弾「よう、一夏久しいな」

—「弾、弾なのか？」

弾「ああ、俺意外に何に見えるんだよ？」

—「よかった、無事だったんだな」

箒「一夏さん、この方は？」

—「ああ、こいつは五反田弾、親友だ」

弾「おつ一夏、上手くやったようだな」

一「ああ、お前のおかげだ」

「くっ！またか・・・またお前か・・・弾！！」

弾「すまないが、また相手してもらっぜ？」

一「今度は俺も」

弾「ダメだ、お前には守らないといけない人がいるだろ？」

一「だ、弾だが俺はお前をまた見捨てるわけには！！」

弾「安心しろ、これでも俺って強いんだぜ？」

一「だけど！！」

「織斑一夏！！覚悟！！」

一「！！」

弾「しまった！？」

第「危ない！！」

ダッ！

ゴツッ！

一「なっ！！」

弾「おいっウソだろ？」

一夏を襲った一撃はその場の誰もが決まったと思ったが、何とそこには一夏を庇って篤が立っていた

「そ、そんな……し、篠ノ乃さん……何故……」

一「大丈夫か！？篤！？」

篤「痛つてな……」

一同「えっ？」

篤「テメエ、今頭殴ったよな？頭つてのは当たり所によっては死ぬこともある、って事は殺す気だったって事だよな？」

「えっ？ちg」

篤「なら、お前等……殺されても文句は無いよなあ！！！」

一・弾「……」

ガタガタ

そこからは完全に一方的な殲滅戦だった

篤「ふう〜スッキリした、所で一夏、鈴達は？」

一「えっ！記憶が戻ったのか！？」

箒「何言ってるんだ？」

「いや、何でも無い……よし、みんなと合流しようか」

こうして夜は更けていった

後日、夏祭りの時の喧嘩（虐殺）により何故か、箒の人氣が女子にも出るようになった

夏祭り（後書き）

第「ところで一夏、セシリアから聞いたが何でも私が記憶喪失になつていたそうじゃないか？」

一「えっ？そうだけど？」
ガシッ！

第「吐け、私が記憶喪失の時何かしたなら言え」

一「何にもしてないです！！」

自由研究（前書き）

- ・ 一夏さんたちは忘れていた、夏休みには自由研究が在ることを・・・

自由研究

8月後半 夏休み

篠ノ乃家 朝

篤「皆さんに集まってもらったのは他でもない……自由研究について話し合うためだ」

一「た、確かに在ったなそんな宿題……」

鈴「私、やらないからいいや」

鈴音が帰宅した

篤「二人になってしまった訳だが……どうしようっ？」

一「朝顔は？」

篤「それは無理だ……」

一「何故だ!？」

篤「だって学校は明後日からだし」

一「えっ?もうそんなに経った?」

篤「ああ、経ってしまったんだよ……一応セシリアから自由研究について聞いたら……」

セ「イギリスの歴史について書きましたわ」

篤「と言われ……シャルには……」

シャ「僕は朝顔で書いたよ」

篤「ラウラにも……」

ラ「軍隊式訓練について書いたが？」

篤「……ふざけんなああああ!!小学生なのに
なんてもん書いてんだ!!体育の先生興味持ちゃったじゃないか
!!!……と言っ訳で、常識人の千冬さんに聞いたら……」

千「ハァー……早めにやらないからそうなるんだ……星座なんてどうだ？」

篤「と、さっき電話で聞いたわけだが……」

TV

「こちら、お天気担当の田嶋です！！現在大型台風が大接近しているので外出はしないで下さい！！」

篤「と、今テレビを点けた瞬間言われたわけだが……」

「ああ、外は凄かったぞ、IS無かったら死んだ」

篤「どうするんだ……この状況は流石に厳しいぞ」

「東さんに聞けば良くない？」

篤「ダメだ、姉さんは常識がかなり足りない……」

「お前が言うか……」

扉の向こう側

束「篝ちゃん酷いよ」（泣）

―「う〜んじゃあ、こう言うのはどうだろうっ？」

篝「何だ？アイデアが在るのか？」

―「フッフ、有るんですよそれが！..！」

篝「ほう、頼もしいな？」

―「ちろる解体なんてどうだろうっ？」

篝「はい？」

―「いや、ほらちろる君って何かもつあれじゃん！！だから解体！
「！」

篝「具体的には何をするのかな？」

―「まずは、はだk
バキッ！

篝「キラ解体でもいいんだぞ？」

―「す、すみませんでした.....」

篝「にしても困ったな.....そういえば、絵でもいいって言うって
たような.....」

—「成らばすぐ終わるじゃないですか!?!」

箒「でも何描く?外はアレだぞ?」

現在台風ゆつつつつつつつつくり通過中

—「そういえば、箒の両親は?」

箒「町内会の温泉旅行、場所は別府だそうだ」

—「良いな、温泉」

ピンポーン

箒「ん?誰だ?」

千「ハア—ハア—・・・束、来たぞ・・・ハア—ハア—」

—「姉さん!?!」

千「ん、一夏此処に居たのか、心配したぞ」

箒「はい、タオルです・・・どうしたんですかいったい?」

千「すまない、束から電話で・・・」

回想

織斑家

束「ちーちゃん!! じっくりと篝ちゃんの赤ちゃん生まれちゃうから早く来て!!」

千「なっ! 今すぐ行く!!」

回想終了

—「IS無しで此処まで 段々、姉さんが人間離れしてきたな」

千「という具合だ、此処に着いてから騙されたと気づいたんだが あの天気はなんだ!! 死ぬぞ!!」

篝「千冬さんにそれだけ言わすとは やるな、チフユ」

千「ああ、迷惑な話だ、よりもよって何故私の名前の付いた台風なんだ」

篝「ええ、名前を発表して直ぐに大型台風に成りましたもんね」

—「姉さんが台風だところなるのか」

千「成ってたまるか!! それより束は何処だ文句の一つでも言わんと気がすまん!!」

束「ちーちゃん!! 来てくれたんだね! さあ、ハグハグしようそして篝ちゃんの言葉で傷ついた束さんを慰めぐえっ!!」

千「たぐはぐね〜・・・よくも騙してくれたな？」

東「だってだって！！箒ちゃんたら酷いんだよ！！東さんの事、常識がないって言うんだよ！！」

千「この天気の中私を呼んでおいて常識が在ると思うなら世界は非常識だ」

箒「まあ、とにかく風邪をひいたら大変なのでお風呂湧いてるんで入って下さい」

千「すまないな」

箒「かまわんよ」

千「・・・・・・・・・・・・・・・・」

東「えっ？ちーちゃんお風呂入るの？じゃあ、東さんも入る！！箒ちゃんも一緒に入ろうよ！！」

箒「いいんですか！？姉さん！？ハメはずしますよ？」

東「ハハハハ・・・みんなで入ろうよ？」

千「だそうだ、一夏」

一「いいんですか！？姉さん！！暴走しますよ？」

千「まあ、箒が良いなら良いんじゃないか？なあ、箒」

箒「一夏!?!一緒に風呂入ろう?」

千「箒!?どうしたしっかりしろ!?!」

箒「アハ、千冬さん可愛いです」

千「ほ、箒さん!?!」

束「うわ〜大変だ〜箒ちゃんがお酒飲んで酔っちゃった〜(棒読み)

「

千「た〜ば〜ね〜・・・っ!」

ガシツ!

箒「フフフ、千冬さん・・・みんなで良い事しましょうか?」
ズルズル

千「お前等・・・・お前等いい加減にしろ!?!!(怒)「

ガンツ!

箒「がつ!」

ゴツン!

束「ぐえっ!」

「あわわわわわわわわわ・・・・・・・・・・」
ガタガタ

千「ハァーハァーハァー!?!」

こつして織斑姉弟は篠ノ乃家に泊まった

残暑（前書き）

読者の方々へ、歌詞が何たらこつたら書いてあったので、内容変え
たぜ！！！！

第「ヤベーヤベー・・・・・・・・・・・・・・・・」

この会話の原因は数日前にさかのぼる……

とあるテロ集団アジト

「ジャミノフ総帥、報告書をお持ちしました!!」

ジャ「ふむ……この報告書に間違いはないのかね？」

「はい！実際に現地に向かわせた調査隊からの証言と映像から間違いは無いかと」

ジャ「素晴らしい!!この紅い機体は小規模だが太陽と同じ位、それ以上の熱量を出している!!何故これほどの熱を放出してこの少女は平気なのか、それにこちらの少年の機体の武器はB兵器ではないか!!素晴らしい!!何としてもこの機体を手に入れるんだ!!」

「はい、そうしようとは何度かアクションを起こそうとしましたが、少女の方は我々に気づいているらしく警戒されています、少年の方は姉が我々に気づいているらしくこれもまた、警戒されています……」

ジャ「ふむ……では、こうしようではないか？この子供たちが我々に協力せざる負えない状況を創ってやればいい」

「うまくいくでしょうか？……」

ジャ「何、所詮は子供だ、どうとでもなる……………」

数日後 テロ集団アジト

ガチャ！

「総帥！これで59人目です！！」

ジャ「何！？またか……………」

「総帥、此処は一端手を引きべきでは？」

ジャ「ならん！！此処まで犠牲者を出された以上何としても手に入るのだ！！」

現在 篠ノ乃家

箒「で、姉さんの方は何人？」

東「東さんは、今日は3人だったよ」

箒「そうか、私は今日は5人かな？」

東「あんまり無理しちゃダメだよ？」

篤「そうだね・・・そろそろウザったくなってきたし根元から叩く？」

東「そういっただろうと思ってもう調べはついてるよ」

テロ集団アジト

ジャ「まだか!!まだあの機体は手に入らんのか!!」

「すみません、ですが周りのガードが高すぎて我々では手に負えません」

ジャ「それを何とかするのが君たちの役目であろう!!」

ガチャ!

「た、大変です!!」

ジャ「何だ!!」

「敵襲です!!敵は我々が監視していたあの子供達です!!」

ジャ「なんだと!？」

箒「死にたくなければ投降しろ!!!」

—「お前らのせいで、姉さんが怖いんだよ!!!」

鈴「何、私のこと無視しとるんじゃああああああ!!!」

兵士達「投降します!!!」

こうしてテロ集団”ティターズ”は壊滅した。

—「箒、俺に何かご褒美を!!!」

箒「そうだな……これをやるっ」

—「マジっすか!? 箒さん!!!」

箒「ああ、遠慮するな」

鈴「箒!!! 流石に下着は不味いだろう!？」

箒「大丈夫だ、アレは買ってから未使用の圏だ」

鈴「なら安心だね……一夏の頭以外……」

箒「ああ、アレは性転換してしまった私達より荒れていないだろう
と思っっていたが……. 厳しいな……」

鈴「箒、何とかしてやれよ？なんか基本的に箒のせいでしょ？」

箒「いや、何とかしろって言うてもどこも修理してくれないだろうし……」

—「（アレ？俺の変態ネタに気づいてない？って言うか引かれてる？）」

箒「はあく……しょうがない、一夏！！」

—「何だ？」

箒「今からお前は私の彼氏だ、という設定で接してやるから、正気に戻れ」

—「俺はいつでも真面目だぜ？箒」

箒「鈴……ダメだ、一夏はあの状態が普通らしい……」

鈴「挫けるな！私も応援してやるから！！」

箒「はあく……鬱だ……」

残暑（後書き）

織斑家

プルプルプル！！

―「はい、織斑です。」

箒「もしもし、一夏か？」

―「ん？箒か、どうした？」

箒「最近、私たちの周りにストーカーがいるんだが……」

―「なんだと？」

箒「千冬さんにも同じストーカーが……」

―「なっ！だから最近！？」

箒「それに私の下着盗まれた……」

―「わかった、殺そう！！！」

転校？取り合えず肉まん所望！！（前書き）

えーっと……本来オリキャラの提案は受け付けて無いんですが、気持ちの問題ってあるよね？ 月光閃火さんオリ案提供有難う御座います。

ちなみにイメージ的にはKOFの椎 拳崇だそうです。
関西弁難し……何かこんな感じになりました。イメージと違ったら
スミマセン

転校？取り合えず肉まん所望！！

一夏です。何かお隣さんが出来たそうで、同い年の男の子のようで・
・・・・姉が口説かれたようで・・・・・一つだけ言っておく！
！箒は俺のだ！！

箒「私は私、個人の物だ！！」

・・・・・とにかく、学校！！

朝 小学校

一「つて言う事が在ってさ・・・・・」

セ「まあ、お隣さんですか？良かったではありませんか、弾さん以外に男友達が出来そうで」

一「弾以外にも居るよ！！男友達いるよ！！たとえば・・・・・」

箒「おはよう！！」

箒、前世”ちろる”男、現在 女

鈴「見る！人がゴミの様だ！！」

鈴音、前世”狂学者”男、現在 女

「……正確には居たよ!!今は違っけど居たよ!!」

セ「脳内フレンドと言う物ですか？」

「!!違っんだよ!!」

篤「所で一夏、駅前の肉まん美味しいよな？」

「は？肉まん？お、美味しいんじゃないかな？」

篤「いや、違っんだ、変な電波とかじゃなくて……とにかく新キャラのk」

「わーーーー!!言うな!!それ以上メタるな!!」

セ「そ、そ、そ、そっでしてよ!篤しゃん!!」

篤「いや、ホント違っんだ、PからGOサイン出たからいいやとかじゃないんだ」

鈴「篤、主役を降ろされるぞ？」

篤「今日は転校生が来るんだって!!」

「切り替え早っ!!」

シャ「あっ!みんなおはよう!!」

篤「男の子かな？」

鈴「篝、キャラ違つくね？」

シャ「おはようー!」

篝「女の子かな……グヘッグヘヘヘヘヘヘヘヘ」

ー「うわ〜いつもの篝だ……」

シャ「あ、アレ?よし今度こそ……みんなおはようー!」

セ「篝さんはいつもこうではありませんか」

ー「はあ〜篝、安心しろ!俺は篝を見捨てない!」

篝「見捨ててくれ……orz」

鈴「あつ落ち込んだ」

シャ「……いいんだ、みんなが元気ならいいんだよ……」

(泣)

ラ「ん?どづした?シャル」

シャ「……ラウラ!」

ラ「うわっ!」

篝「とつまあ、シャルネタはこれくらいにして」

シャ「ネタだったの!？」

ラ「案外酷いのだな……」

キーン コーン カーン コーン

ー「……毎回思うけど、チャイム古っ!」

ガラガラ

先「え〜みなさん、ぐっどもおにんぐ〜」

「先生、無理に英語で話そうとしないで下さい」
イメージ 白石稔

先「チツ……みなさんおはよう……先生、昨日から二日酔いでして気分悪いので文句ある生徒はドツきます」
イメージ 瀬戸豪三郎

扉の向こう

?「(今、舌打ちした!?)」

教室

先「と、話はこれ位にして授業始めるぞ〜」

扉の向こう

？「アレ？俺もしかして忘れらてるのかな？」

先「あっ忘れとった！」

？「よし！思い出した！」

先「今日のNH ドラマ録画し忘れた……」

？「(なんでやねん!!)」

先「はあ……先生急用思い出したから……己ら今から自習
じゃ!!」

委員長「わかりました」

先「絶対騒ぐなよ！(騒がれたら、録画しに行くのバテしてしまう)」

？「(ぜ、絶対録画しに行く気や!!)」

先「騒ぐなよ？絶対騒ぐな？」

ガラガラ

？「……………」

先「……………誰じゃお前？」

？「転校生や!!」

先「……………ああ、思い出した、おい！お前等コイツ転校生仲良くしろ」
ダッ！

？「えっ？……………（置いて行きよった！？、転校生紹介せえへんこう置いて行きよったで！！）」

箒「はいつみんな授業を始めるぞ？」

「はい、箒先生！！」

？「えっ！？」

箒「では、授業の前に皆さんに新しいクラスメイトを紹介します、えーっと……………磯野君、自己紹介しようか？」

雪「美堂や……………初めまして俺の名前は”美堂雪尚”って言います。中国出身やけどオトンとオカンが日本好きさかい、こおして日本へ越してきたちゅうわけや、まあ、日本は右も左も解らんののでよろしゅうしてな」

箒「はい、自称中国出身のユッキーでした、では授業をば……………」

雪「自称ちやうでお嬢さん」

箒「は？」

雪「そらあ俺の魅力に戸惑うのはわからんでもない……………でも、構って欲しいからって悪口はアカンで？」

第「関西弁を話す中国人の存在を認めると・・・美堂雪尚って滅茶苦茶日本人じゃん!!」

雪「何、言ってるねん!! 外人なんてこのクラス4人もいてはるやん!!」

第「4人? セシリア、シャル、ラウラ・・・あと一人は・・・お前か!」

「えっ!? ち、違いますよ!」

鈴「あー多分、私じゃない?」

第「ああ、そういえば鈴って中国出身だったな」

雪「おっ! そちらのレディも中々の美人やな」

鈴「中国出身だけど日本人だぞ、魂が（前世的な意味で）」

雪「そうか（心意気的なもんやろか?）」

第「ああ、鈴は日本人だ（前世的な意味で）」

「先生! 授業の続きをお願いします!」

第「ああ、すまん・・・じゃあ、ユッキー席に就け・・・ゴホンッ! では授業を始める! 前回の続きだ、そこのお前、この英文を日本語にしな」

「はい、ええつと……はい、私は息子の友達を性的な目で見ています。」

篤「よろしい!」

雪「待たんかい!」

篤「どうした?」

雪「どうしたやあらへん!!何やさっきの英文は!!絶対使う事無
いやないかい!!」

篤「いや、使うかもしれんぞ?例えば……そうだな……
ウチのクラスの一夏がセシリアとかの母さんとかに……」

一「先生!!俺で例えないで下さい!!」

セ「私のママはそんなこと言いませんわ!」

篤「ママ?」

セ「お母様の事ですわ!」

篤「と、こんな具合で……」

雪「使わへん!」

篤「じゃあ、これならどうだ?……今度はお前」

「はい、……ザクとは違うのだよ……ザクとは

箒「どうだ？」

雪「アカン……こいつ等早よ何とかせんと……」

箒「次……さっきの奴の隣の奴」

ラ「はい……今死ね！、直ぐ死ね！、骨まで砕ける！！」

箒「はい、此処テストに出ます」

雪「どないなテストやねん！！それはそうと、箒先生、今度駅前にできた店の肉まん食いにいかへん？モチ、先生の友達も呼んで」

箒「駅前の肉まん……ああ、アニメ トか！」

一「いやいや、アニメイトで肉まん売って無いだろ！！」

雪「そうや、そこや！！」

一「其処だったよおおおお！！！！」

鈴「ア メイトって肉まんも売ってるんだな……」

ラ「ああ、姉さんが言うには某可変戦闘機が戦うアニメのFの方に
出てくる店の肉まんを再現しているそうだ」

一「はっ！野郎、どさくさに紛れて箒に手を出しやがって！！！！」

箒「よしそうと決まれば……諸君！！今日はもう終わりだ帰

「ってもいいぞー!!」

生徒達「イエーイー……!!」

雪尚と知り合いになった

転校？取り合えず肉まん所望！！（後書き）

箒「では、行くぞユツキー！！」
ダッ！

雪「おうー！！」
ダッ！

ー「コロスコロスコロスコロス……」
ダッ！

箒達は無事、肉まんを入手できた

箒「よし、一夏の家に行くぞ！！」

ー「シャル達も来るそうだ（お前には誰一人として渡さん！！！！）」

雪「（コ、コイツ……フフフ、そうかそう言う訳かいな……
ライバルやな！！）」

箒「ああ……（何だろう、こいつ等は同種な気がする……）」

花より男子、だが私は肉まん派(幕)(前書き)

過酷なミッション(肉まんの入手)から無事生還した一夏一行は織
斑家へ向かっていた・・・

花より男子、だが私は肉まん派（幕）

昼 織斑家

—「ただいま〜」

千「ブツ！・・・一夏、学校はどうした!？」

—「なんか、よく解らない内に終わってた」

篤「ホントなんでだろう?」

雪「篤のせいやろが!！」

—「こ、この野郎!篤を呼び捨てに!！」

千「お前も大変だな?」

篤「まあ、そうですね・・・所で千冬さんは何で家に?」

千「ああ、それは学校の水道管が壊れたから修理のために休日になつてな」

篤「へえ〜大変ですね」

千「ああ、大変だった・・・」

—「やはりお前とは相容れぬ存在の様だ・・・」

ダッ！

雪「へえ〜・俺とやるんか？……上等……！」
ダッ！

—「格の違いを見せてやるぜ……！」

雪「サイキツカーの力みせたるわ……！」

—雪「うおおおおおおお……！！……！！」
ガシッ！

箒「喧嘩両成敗って言葉知ってる？」
メキメキメキ

—雪「ぎゃあああああああああ……！！……！！」

—夏と雪尚の一騎打ちの結果は箒のアイアンクローにより引き分け

千「全く、バカ共が……」

ピンポーン

束「ちーちゃん、遊びに来たよー……！！」

鈴「おーい！—夏、みんな連れてきたぞ」

箒「おお、みんな来たか」

ラ「ああ、よく解らんが？……来た」

セ「私もいきなりの休校なので暇を持て余してしまいましたので来ましたわ」

シャ「僕もセシリアと同じかな」

箒「そうか、ならみんなにもこの肉まんをあげよう・・・セシリアにはこの媚薬入り肉まんを・・・」

セ「遠慮しますわ!!」

箒「大丈夫冗談だから」

シャ「アハハハハ・・・」

一「なら俺から箒にこの媚薬入り肉まんを・・・」

箒「マジ勘弁」

雪「ちょっと、お二人さん」

箒「ん？私か？」

雪「そう、それから一夏君もや、ちょっとついてきて」

一・箒「？」

織斑家 庭

一「で、話はなんだ？」

雪「なあ、あのシャルロットって娘、今フリーなん？」

箒「は？」

雪「俺、あの子に一目惚れしてしもつたわ」

—「え？」

雪「世界中の女の子のアイドルである俺を虜にするなんて罪な子や
であの子」

箒「……………言い残したことはそれだけか？」

ピカーン

カチャ!

雪「え？」

箒「セシリア…………ラウラ…………シャルは…………私の嫁
だ!!!!!!」

雪「な、なんやそれは!？」

—「さあ、やるんだ箒」

箒「そう言えば一夏、お前最近私のシャルの抱き枕抱きしめてたな
あ？」

—「えっ？」

箒「そうかわかったぞ！お前も私の嫁を狙っているな！！」

—「いや違うから！！」

箒「問答無用！！お前らのアナログスティックは私が！！この手で！！切り落としてくれるわ！！！！」

—・雪「きゃああああああああ！！！！」

ダッ！

箒「逃がすか！！！！」

ダッ！

雪「やばいんちやうん！！—夏！此処は休戦や！！！！」

—「ああ、逃げ切るぞ！！！！」

箒「生身でゲッターから逃げられると思うな！！！！」

雪「くっ！早すぎや！！！！」

—「……………こうなったら、俺が箒を食い止める！！」

雪「なっ！？む、無茶や！！！！」

—「はっ！俺は不可能を可能にする男だ！！！！」
ピカーン

雪「……………しゃー無いな、お前はっかに良い恰好させへんで！！」

—「お前こそ無茶だ！ISに乗らずにISに勝つなんて箒位だぞ！」
雪「ほーか・・・ならIS、ちゅー奴に生身で勝つ女の子があるなら二人目は男の俺ちゅーことや!!」

箒「ゲッター・・・トマホーク・・・ブウウウメラン!!」
ブンッ!

雪「超球弾!!」
ドーン!

箒「何だそれは？」

雪「ハハハハ・・・サイコ・ソルジャー舐めたらアカンで!!!!」

—「ええくなにそれ怖い・・・」

雪「おいつ！何、引いとんねん!!お前等だつてそんな、よー解らんISとか言う奴乗りおつてからに!!」

箒「いや、超能力つてお前アレか”その幻想、俺がぶち壊す”つて奴か？」

雪「いや、流石にあんな不幸ではないな」

—「じゃあ、”さよなら・・・天さん!!”つて奴か？」

雪「うん・・・一回も自爆したことは無いなあ・・・と、言うより超能力やで？怖がらへんの？」

「いや、そんな超能力位で怖がりたりは……」

箒「ああ、逆に超能力って何さ？」

雪「……フツ、アンタ等気に入ったわ」

「・箒「はい？」

雪「ハハハハハハ！！そうかそうか！！超能力がそんなもんか！！やっぱり日本来て正解やったわ！！」

箒「そうか、それはよかった……だが、シャルは渡さん」

雪「えっ？そこは箒さん、お互い理解し合って友情を深め合った感じで帰るとこちゃうん！？」

箒「えっ？そっちの流れが良いならそうする？」

「はあ〜まあ、お前がそこまで言うならそうするか……」

雪「なんやねん、この俺が悪いみたいな空気は……」

シャ「あつ！居た！！箒……！！」

箒「あつシャル」

シャ「探したよ〜」

箒「ゴメン、ちょっと入り用でさ」

雪「決めた！一夏、俺はシャルロットさんに告白してくるわ！」

一「そうか・・・ならば俺も箒に！」

雪「シャルロットさん！」

シャ「ん？そうだ美堂君、シャルロットって長いでしょ？シャルで良いよ」

雪「（いきなり、愛称！？来た！！俺の時代来た！！）なら、そう呼ばして貰うわ・・・シャルさん俺、シャルさんに一目惚れしてもうたんです！」

シャ「？・・・箒」

箒「告白だと思っしやね？」

シャ「えっ？（ど、どどうしよう！！あっ！そうだクラリッサさんがらじつ言つ時にらじつやって断れば良いって言われてたような）」

雪「・・・・・・・・・・・・・・・・」

シャ「私、女の子が好きなんだ」

一・雪「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

シャ「えっ?」

一・雪「嘘だああああああああああああああああああ
!!!!!!」

ダツ!

一夏と雪尚が走り去った

シャ「ええ〜!?!」

篝「何で嘘ついたん?」

シャ「う〜ん・・・・・・・・まだ、僕にはよく解んないし、それに浮気し
そんな人は嫌いなんだ・・・・・・・・違っよ!!決して身近な人に居る訳
じゃ無くてね!!」

篝「わかってる・・・・・・・・（絶対シャルパパだな）」

鈴「おーい!!篝ー!!」

篝「あつ!鈴」

鈴「探したんだろうがあああああ！！」
ドゴツ！

箒「あべしっ！」
ガクツ！

シャ「ほ、箒iiiiiiiiiiiiiiiiii!!」

花より男子、だが私は肉まん派(幕)(後書き)

一方、一夏達は・・・

雪「諦めへん!!女の子が好き、ちゅーなら俺の魅力でノーマルに戻したる!!」

一「その前に箒をどうにかしないと・・・」

雪「アホか!!あんなどないせえちゅーうんじゃ!!」

一「よし!こうなればお互い協力し合っつてのはどうだ?」

雪「ええな!!よっしゃ!!なら、俺はお前と箒の仲を、お前は俺とシャルちゃんの仲取り持てよ?」

一「任せる!!」

一夏と雪尚が友人になった!!

?「その話俺も混ぜろよ!!」

雪「誰や!?!」

一「そ、その声は・・・」

弾「ああ、悪いがさっきの話聞かせて貰ったぜ、一夏、水臭いぜ俺の事も頼れよ」

—「悪かった、弾、これからも俺に力を貸してくれ」

弾「ああ、その転校生共々面倒見てやるぜ」

雪「すまん、恩に着るで」

弾「任せなっただから結婚式にはちゃんと呼べよな？」

—「だ、弾！！（俺たちまだ小1だよ・・・弾！！）」

雪「呼ぶで！！絶対呼んだるで！！弾さん！！」

弾「弾だ・・・もう俺達は親友だろ？」

雪「弾！！！！」

—「弾！！！！」

塀の向こう側

そこにはみんなと合流した篤達が居た

鈴「うわあゝ弾、カッケー」

篤「弾さん！！！！」

シャ「アハハハハハ・・・や、やっぱり一夏達は面白いね」

ラ「アレが日本でいう、兄貴か！！」

セ「そういえば弾さんの家は篝さんの家の向かいだそうですね？」

篝「えっ？……全く知らなかった……」

シャ・ラ・セ「……」

鈴「所でさあいつ等迎えに来たのにスゲー出づらいな……」

一夏側

弾「お前等、そろそろ行ってやれよ、待ってるかもしれないぞ？」

一「わかったよ、弾」

雪「そうや、俺にも待ってる人がおるんや……」

弾「ほら、それならこんな所で油売ってないで行ってやれよ」

一・雪「だ、弾さん！！俺達行きます！！」

ダッ！

弾「だから弾で良いって……聞こえないか？……おいつ！

篠ノ乃！！居るんだろ？一夏達が探してるぞ」

篝「やるなお前……」

弾「何、ちよっと背中を押してやっただけさ……」

何だかんだで……年越し!!!!(前書き)

箒「いや、違うんだよ。最近忙しくてさ、アレだよ……ま
あ、アレだよ」

—「うわ〜……久しぶりに見たよ、箒がおんじ話を誤魔化す所」

何だかんだで………年越し!!!

第「です。みんなは雪は好きかな？うん、そうかい、好きかい……
・私はね、雪って言うか……うん……嫌いではないよ……
でもね……」

年末 篠ノ乃家 居間

第「3mは積もり過ぎだな、って私は思うんだ」

鈴「まあ、異常気象だから」

一「そう？俺の住んでた所は普通だったけど？」

千「一夏、私達は今まで引っ越したことはないぞ？」

第「そうだぞ、一夏、決してお前は、某核の恐怖を忘れない為の建物？の近くにトラの、アニメイ が在る県の県境付近なんて住んでなかったぞ」

一「そういう君は、川の河口付近に住んでるじゃないか」

第「ちよっ！それはダメだよ！！それは！！ドン位駄目かと言うと、割箸を手の代わりにして1年過ごした人に”その挑戦って何か意味あるの？”って聞いてくる奴と同じ位駄目だよ！！」

一「居ないってそんな人」

千「普通に手を使えばいいのにな？」

鈴「居たよ!!………凄く近くにいたよ!!!!」

箒「まあ、こうしてみんなでコタツに入っただけで近いです………
・所で千冬さん、人の足を擦らないで下さい。目覚めたんですか
？」

千「いや、私じゃないぞ？」

箒「はい、今確実に舐められたんで此処に顔出してない奴です………
………ねえ？姉さん」

束「ハハハハ………箒ちゃん足スベスベ………」

千「誰だ？束に酒を飲ませたのは？」

箒「酒じゃなくて、そういう薬だそうですね？何か転んで被ってま
したし………フンッ!!」
ゴキッ!

束「んにゃらばっ!!」
ガクッ!

一・千・鈴「………」

箒「ふゝ、静かになった……」

千「一夏よ、本当に私の弟でありがとうー!!」

一「姉さんアレと比べないで下さい」

篤「……さてと、そろそろテレビで年越しホラースペシャルやるぞ」

鈴「何故に年越しにホラースペシャル？」

年越しホラースペシャル放送中

「その時、カメラに……」

ピンポーン

篤「はい」

一「……篤……ちょっとは怖がってよ……」

鈴「そういうな、ってか千冬さんが怯えてるぞ？」

千「お、おお、怯えてなんかないもん!!」

一「もん？」

千「……一夏、束の後を追わせてやるつか？」

一「マジすいません!!」

玄関

シャ「来たよ〜」

篤「おお、いらっしやい」

シャ「所で大晦日なのに来て良かったの？」

篤「ああ……うん、大丈夫……ウチの両親、今ハワイに旅行中だから」

シャ「そ、そうなんだ（仲悪いのかな？）」

篤「（そう言えば父さん”妹か弟を期待してるよ”って言ってたからな〜……）はあ〜」

シャ「（や、やっぱり両親の仲悪いんだ〜）」

居間

「私……小さい頃からそうというのが視えたので……」

篤「私も時々小さいおじさんが見えるんだよね」

千「そんなおじさん等おらん!」

篤「いや、でも其処に・・・」

千「居る訳な・・・い・・・」

小さいおじさん

「ん？・・・見せもんじゃねえぞ！！！！ゴラッ！！！！」

千「・・・」

—「姉さん？・・・き、気絶してる！？」

篤「まあ、こうして見つけては・・・」

ガシッ！

「おわっ！？は、離しやがれ！！！！」

篤「捕まえて・・・」

窓 オープン

外 絶賛猛吹雪中（現在積雪3.4m）

「お、お、おいつ！やめろ！！こんな猛吹雪の中放り出されたら死ぬから！！！！」

篤「振りがぶって・・・」

—「えっ？まさか・・・」

鈴「いや、いくら箒でもそこまでは……」

箒「………やっぱり」

—「流石に箒でもそこまではしないか……」

箒「水掛けてから投げよう!」

鈴「悪魔かよ!」

「えっ・ちよっ!?!マジで掛けるの!?!お願いします!?!水だけは!?!……!?!どうか水だけは!?!」

箒「じゃあ、お湯で
ジャー——」

「ギヤアアアアアアアア」

—「ひ、ひでえ……」

箒「そして、エイツ!」

「うわあああああああ!」

箒「よし!」

鈴「よし!じゃねえよ!」

—「こ、この外道め!」

箒「え〜、でもこつしろってシャルが・・・」

—「シャルが言う訳無いだろうが!」

シャ「えっ?小さいおじさんって日本ではこつしないの?」

鈴「マジですか!?シャルさん!」

シャ「えっ!?!だ、だって妖精とかは、こつするってお母さんが!」

—「妖精?」

箒「知らないのか一夏、ヨーロッパの一部の地域では妖精にまつわる話が在るんだぞ?」

—「ねえ、いつからオカルトになった?」

箒「転生うんぬんかんぬん言ってる時点でオカルトだ」

鈴・—「それもそうか・・・」

箒「さて、冗談は置いといて・・・」

鈴「冗談かよ・・・」

箒「あつ雪尚呼んでない・・・呼ぶか」

美堂家

雪「なんで年越しにホラースペシャルなんてやってんねん、普通夏やる……」

プルルルルルルル！

雪「ん？電話か？今ええ所やのに……もしもし、美堂です」

箒「もしもし、篠ノ乃だユツキー遊ぼう」

雪「はあ〜？何、言うてんねん？今、外ごつつ雪降ってんで？それに年越しやぞ、無理に決まってんやろ？」

箒「え〜！！一夏いるぞ？」

雪「一夏がおつても行かへんて！！」

箒「シャルも来てるぞ？」

雪「行く、てか、行かせて下さい！！！！」

箒「じゃあ、待ってるからガチャッ」

雪「……オカン！！ちょっと俺、嫁さん所行ってくる！！」

雪尚母「ちよつと！！何、言うてんの！？今テレビで見たら積雪4m行つてんで！！」

雪「そんなもん、俺の愛で溶かしたるわあああああああ!!!」
ダッ!

雪尚母「……………ホンマ誰に似たんやろあの性格……………まあ、私じゃないな」

篠ノ乃家

—「雪尚なんだって?」

箒「来るって」

シャ「だ、大丈夫かな? 凄い雪だったよ?」

雪「ホンマ凄い雪やったで」

シャ「!!!」

箒「これは初詣は無理だな」

鈴「晴れてても行かないだろ?」

箒「まあね」

シャ「アレ? なんでみんな驚かないの?」

—「えっ? ……慣れかな?」

鈴「慣れじゃない？」

シャ「そう・・・慣れるんだ・・・はあく・・・これ飲んで落ち着こう・・・所で雪尚さつき篤が電話から戻って来たのに何でもう、居るの？」

雪「そんなん、シャルさんへの愛が奇跡を起こしたんですわ！邪魔する奴はみーんなっ超球弾や！！」

シャ「へえ〜雪尚は凄いね！！」

雪「なら、その愛の答えて下さい！！」

シャ「う〜ん・・・ごめんね〜確かに雪尚も一夏も好きだけど僕は篤が好きなんだ〜」

篤「・・・雪」はい？

シャ「僕もね〜女の子同士だし〜おかしいのは分ってるんだけど・・・でも、この気持ちを抑えきれないんだよ！！」

鈴「ア、アレ？シャルさんお酒飲んで・・・」

「・・・ちよっ！？篤、どついう事だ！！」

篤「いつだ・・・いつ選択を間違えた・・・」

雪「シャ、シャルさん、ちなみにどう言ったご理由でしょうか・・・」

シャ「ん？変なおじさんに絡まれてる時に助けて貰ったからあの時の篝、凄くカッコ良かったんだよ」

篝「あの時かあああああああ！」

シャ「だからね篝、僕自分に素直になるよ！！」
ガバツ！

篝「は、ははは・・・シャルロットさん目がヤバいです・・・っ！
！な、何故に服を脱がそうと！？」

シャ「大丈夫、僕がリードするから・・・」

篝「た、助けて！！姉さん！千冬さん！！」

束・千「zzz・・・」

篝「一夏！！ユツキー！！！！鈴！！！！！！」

一・雪「ウソダ、コンナゲンジツハウソダ・・・」

鈴「ガンバ（＾）（〇）（＾）」

鈴、サムズアップ

篝「何てっこった・・・こうなったら何が何でも生き残ってやる！！」

シャ「ホウキー！！！！」

箒「うおおおおおおおおお！！！！！」

こうして年を跨いで壮絶な戦いを繰り広げた……

チュン！チュンチュン！！

朝 篠ノ乃家

箒「やった……やったんだ……生き残ったぞおおおおお
お！！！！」

後に一夏はこう語った

「驚きましたよ、箒がいい具合に見えない感じで乱れた服装で、
勝ち誇っていたんですから……」

何だかんだで………年越し!!!!(後書き)

某愛に目覚めた百合さんの証言

?「凄かった………同い年なのに………凄かった………胸が………」

某愛に目覚めた超能力者の証言

?「シャルさん!!絶対振り向かせたるで!!!」

某眠りから目覚めた姉たちの証言

?「頭がぐ!頭が割れるように痛いよ、ちーちゃん!!!」

?「自業自得だ」

男たちの戦い（前書き）

箒「これってタイトルほど真面目な話じゃないよね」

弾「そう言うなって、俺は好きだぜ？こう言うみんなが笑って幸せそうにしてる感じ」

箒「……でも、私拉致られてるんだけど」

男たちの戦い

「夏です。最近春の気配が著しい季節になって現在5月のゴールデ
ンウィーク、休みなので箒の所に遊びに行った矢先ことは起きた・
・・・・・

朝 織斑家前

「じゃあ、姉さん箒の家に行つてきます」

千「車に気を付けろよ」

「はい」

ダッ!

雪「おお〜い!!一夏!!遊ばへん?」

「おお、雪尚今から箒の家に行こうと思つてただけど一緒に
行くか?」

雪「よっしゃ!!それなら早よ行こか!!」

「雪尚、シャルとは最近どんな感じ?」

雪「そうやな〜・・・・まあまあって感じやな、結構いい感じに
成つて来た気はするんやけど、なんや・・・もう一押し足りへんね

ん……まあ、それよか一夏はどうやねん？ 箒と付き合い始めたんやろ、どう言って告白したんや？」

—「うん……たしか……お前が振り向いてくれないから、俺はラウラの家のウサギのフランクに人生相談してるんだ……って言ったら頭を押さえてOKしてくれたぞ？」

雪「箒……案外友達思いなんやなあ……」

所変わって篠ノ乃家

ピンポーン

ガチャ

—「箒、遊びに来たぞ……」

束「いつくん……いつくん……いつくん……！ 大変なんだよ……！ 箒ちゃんが……！ 箒ちゃんが変な奴に捕まっちゃったよ……！」

—「……な、なんだって……？」

雪「何やさっきの間は？」

—「いや、状況が掴めなくて」

束「とにかく……一端、私の部屋に来て……！」

—「了解……」

一同移動

束の部屋

束「取り合えず、簡単に経緯を説明するよ、まず篝ちゃんが誰かと電話しててそしたら、いきなり私にとある4人組を探して欲しいって言ったから探したら飛び出して行ったんだよ、でもなんだか嫌な予感がしてそいつ等のアジトみたいな奴のシステムをハッキングして映像つないだら……」

一「えっ？……バ、バカな！？篝が負けた！？」

雪「んなっ！？マジでか！！」

束「篝ちゃんが飛び出して行った意味が知りたくて調べてみたら此処のこの部屋に篝ちゃんの友達が捕まって……」

一「クソッ！！人質にされて訳か……」

束「……全然違うよ……これ見て……」

篝、戦闘映像再生中

篝「全員、土下座！！」

敵達「すいませんでした！！！！」

現在、篝に敵グループ中、4人中3人の敵を土下座での謝罪

「箒……圧倒的じゃないか……」

雪「いや、わからなくていつ等なんや卑怯な手使わんともかぎらんし……」

箒「すまないがトイレあるか？」

？「トイレ？そこを右に行つたところです」

箒「ありがとう……え〜つと……丸男君」

ト「トミミです。」

「ま、まさか！？フリーの……！」

ト「ちなみにカメラマンではありません」

「……ちくしょ……！」

箒「何故にカメラマン？」

ト「いや、この前、攫った鳳って子がいきなりそう言って来て……」

箒「鳳……誰？」

ト「え？知り合いじゃないんですか？」

箒「知らないぞ、誰だよ鳳？」

ト「アレ？おい！シロウ、確かに鳳って奴は篠ノ乃さんの知り合いなんだよな？」

シ「え？鳳だぜ？」

箒「だから、鳳って誰？」

シ「鳳 鈴音だぞ？」

箒「なんだ、鈴か……紛らわしいんじゃない！！！」
ズドツ！

シ「カハアツ！！……び、美少女に……殴られた……」

ガクツ！

箒「……何故、こいつは幸せそうなんだ？」

ト「……………個性（特殊性癖：ドM）だ」

箒「個性か……まあ、私もM気があるから人のことは言わないが（流石に此処まではちよつと……）」

ト「因みに僕はこの中では唯一真面だ」

？「因みにアタシは筋肉質の若い男の子が大好物よ」

箒「……………（ソツチの人だああああああ！！！！）」

ト「紹介するよ……………三っつ！！！！」

キヤ「あら、やだ！！トミーちゃんたら！！その名前は、昔棄てた物……………今の私はキヤメルよ！！！！」

箒「は、ははははは……………き、鍛えてますね（今！！三っつて！！三っつて！！言いかけたよね！！！！）」

キヤ「あら、一体何処を見てるのかしら？言つとくけど私は男の子、しかも美少年が好みよ？」

箒「そ、それは、それは……………（女って素晴らし！！！！）」

キヤ「でも……………貴女は割と好みかも……………どう？この後その部屋で？」

箒「……………身の危険を感知、速やかに目標を抹殺します……………フンッ！！！！」

ドスツ！

キヤ「グフツ！・・・ふ、ふふふ・・・いいわあ〜いい！〜乱暴にされるのも大好きなの！！！！」

箒「っ！！・・・目標、健在の確認・・・攻撃を繰り返します」

ドカツ！ドカツ！ドカツ！ドカツ！ドカツ！ドカツ！ドカツ！ドカツ！
ツ！ドカツ！ドカツ！ドカツ！ドカツ！ドカツ！ドカツ！ドカツ！
ドカツ！ドカツ！ドカツ！ドカツ！ドカツ！ドカツ！ドカツ！ドカツ！
ツ！ドカツ！

キヤ「ピクピク・・・」

箒「目標の生命行動を確認、攻撃を繰り返します」

ト「あ、あわわわわわわわわ・・・」

ドカツ！ドカツ！ドカツ！ドカツ！ドカツ！ドカツ！ドカツ！ドカ
ツ！ドカツ！ドカツ！ドカツ！ドカツ！ドカツ！ドカツ！ドカツ！
ドカツ！ドカツ！ドカツ！ドカツ！ドカツ！ドカツ！ドカツ！ドカ
ツ！ドカツ！ドカツ！ドカツ！ドカツ！ドカツ！ドカツ！ドカツ！
ドカツ！ドカツ！ドカツ！ドカツ！ドカツ！ドカツ！ドカツ！ドカ
ツ！ドカツ！ドカツ！ドカツ！ドカツ！ドカツ！ドカツ！ドカツ！
ドカツ！ドカツ！ドカツ！

キヤ「・・・・・・」

箒「目標の排除を確認・・・・・・アレ？私一体？・・・
お、オカマが死んでる・・・」

戦闘映像終了

束「この後トイレに行つて眠いとか言つて寝てたら捕まつてたんだよ！……！」

一「第………お願いだからさっきのモードの矛先を俺に向けな
いでくれ………！」

雪「俺ら行かんでも何とか成りそうやな………」

束「いや、でも心配だから、助けに行つて来て！！美堂君もIS用意して挙げるから！！」

一「えっ！？IS造れるように成つたの？」

束「うん、最初に第ちゃんが持つてた奴だよ、確かVF-25Sとか言つた」

一「確かその機体つて束さんが破壊したつて第が………」

束「破壊？解体はしたけど破壊してないよ？大体解体したら内部構造は理解できたから作り直せるし」

雪「所で俺のISつてどんな奴なんだ？」

束「コレだよ、名前はまだ無いけど機体としては第ちゃんの要望で近接格闘戦のスペックが高いつてのが特徴で武装は拳と脚だよ」

雪「これが……名前は俺が付けてええんか？」

束「いいんじゃない？」

雪「ほんなら、コイツの名前はサイ・ドラゴンや!!」

一「所で束さん、サイ・ドラゴンの頭のVは何ですか……まさか!?ガンダムタイプ!!!」

束「ん?わかんない、篝ちゃんが?は正義、は邪道なり!!って言うてたから」

一「篝……も俺は有りだと思っ!!」

雪「なあ、一夏そろそろ助けいかへん？」

一「束「わ、忘れてた!!」

雪「大丈夫やるか……」

男たちの戦い（後書き）

箒「一話完結じゃない!？」

ラ「一夏はホントにそう言って告白したのか？」

箒「ああ、何かダメだコイツ此処で断ると取り返しがつかなくなる
って思ってたな」

ラ「確かに一夏がウチのフランクに人生相談してる時の後ろ姿は見ていて悲しかった」

箒「ホ、ホントにしたのか!？人生相談」

ラ「ああ、してたぞ・・・半年前位から・・・」

箒「一夏・・・無茶しやがって・・・」

男たちの戦い？（前書き）

前回色々在って箒達を助ける為、一夏と雪尚は敵？のアジトへ向かった

男たちの戦い？

雪尚や、まさかあの筭や鈴が捕まるなんちゅー事が在るなんて思っ
てもみーひんかったけど、実際捕まってもうた訳や・・・まあ、
俺に掛ければ、なんちゅー事無いけど一夏も一緒やし、負ける気せ
えへん・・・ただな、一夏・・・俺は絶対あのオカマとは
戦わへんで！！！！

アマゾンの何処かしらの場所

ー「こちら、ワンサマー、目的地近辺に到着、東さん指示を」

東「こちら、東さん！其処から更に南へ10キロくらい行ったら凄
い分かり易い感じであるから」

ー「こちら、ワンサマー了解・・・所で東さん、ワンサマーとか
言い難いんだけど、どうにか出来ない？」

東「いやー、筭ちゃんがしてたゲームでコードネーム使ってたカッ
コ良かったから、ついね」

ー「いや、俺はワンサマーって何となく分かんなくも無いですけど、
雪尚は如何にかしませんか？」

東「ええ〜！だって分かり易くない？」

ー「それでも、中国は無いでしょう」

東『分かったよ……なら、コードネームはやめるよ……』

一「雪尚、良かったな、東さんコードネーム制辞めるって!」

雪「フフフ……燃えるやないか……そうか、この俺の拳に中国4000年の歴史が掛かってるんやな……オラー!掛かってこんかい!このド三ピンがあああああ!……!」

一「(き、気に入ってるだ?!?)」

東『二人とも、そろそろ見えて来るみたいだから通信切るけど、気を付けてね!』

一・雪「了解!」

一方その頃、篝達はと言うと……

敵アジトの一室

キャ「それでね、ダーリンたら酷いのよ!私と言う者が在りながら、浮気なんて……キーーー!」

シャ「うん!うん!そうだよね!浮気は良くないよ!」

キャ「でも、やっぱり許しちゃうのよね……」

シャ「そっか、キャメルは優しいから……でも、時にはガツン!と言わないと癖に成っちゃうよ!」

セ「そうですねよ？キヤメルさんは少し殿方を甘やかしすぎです！」

篝・鈴「（お前が言うか……）」

キヤ「そうよね……うん！決めたわ！私、自分の事、都合の良い漢女おんななんて思われたくないから、頑張るわ！」

シャ「その息だよ！」

セ「そうですねー！」

ラ「何だか、よく解らんが……頑張れ！」

キヤ「ありがとう……貴方達は最高の友達よ！」

シャ・セ「っ……キヤ、キヤメル……！」

キヤ「みんな、有難う……！」

篝・鈴「（一夏……早く助けてくれ……みんなが壊れた……）」

ラ「そろそろ、フランクに餌をあげる時間だから帰りたいのだが？」

キヤメルと仲良くなった……一方その頃、一夏達は

一「なあ、雪尚」

雪「なんや、一夏」

—「警備とかつて在るんだよな？」

雪「在ったやないか？メツチャデカい鳥とか取る罨」

—「あのザル、棒、ヒモ、罨が在れば完成する、前時代的罨の事か？」

雪「それや、凄い危険な罨やったやないか？—夏が居らんかったら危なかったで……」

—「あんな罨引つかかるだけでも人としてのプライドが傷つくぞ？」

雪「だって罨がシャルさんの生着替えの写真やで！捨つやる!？」

—「捨わねーよ!！」

雪「幕入浴中の写真……」

—「ひ、ひろ、拾います……」

ガシッ!

雪「捨つだろ!」

—「捨つちゃうな!」

?「モラル的にはいけないけどね?」

雪「お、お前!？」

「ジロウ!!」

ト「トミーです!!決してフリーのカメラマンでは無い!!それは将来の夢だ!!」

「お願いトミー、雛 沢には行かないで!!」

ト「なんで、僕が行こうとしてる旅行先が分かったんだい!?!」

「ヤベー!トミー救っちゃった!?!時報生存ルートだ!?!」

ト「と、とにかく侵入者を排除するようリーダーから言われてるんでね!覚悟してもらおうよ!?!」
「ダッ!」

こうして、トミーとの激しい戦いの火蓋が切って落とされた

ゴッッ!

トミーの転倒もとい自爆で幕を落とした・・・戦闘時間開始4秒の事であった・・・

雪「よし先へ進むで！」

一「ト、トミー！？大丈夫か！！」

ト「ぐっ！……ど、どうやら僕の負けみたいだね……君確か一夏君だね……お願いだ！僕のこのカメラを大事に持っていてくれないか？」

一「ああ、わかった！持っていてやるから！だから安静にしてるんだ！」

ト「ハハハハ……君は優しいな……君ならこのカメラを大事にしてくれそうだ……安心したよ……」
ガクッ！

一「トミー？トミー！！しっかりしろ！！トミー……！！！！」

雪「一夏、トミーはもう……」

一「ああ、わかってる……許さない！トミーを殺した奴を絶対に許さない！！」

雪「ああ、一夏！俺も手伝うで！」

一「ありがとう！雪尚！！さあ、先に進もう！！」

雪「ああ、トミーの仇まで一直線や！！（自爆やけど……）」

またまた箒達はと言つと

キャ「いい男たちを手玉に取るにはまず、良い漢女おんなである事よ！」

セ「いい女とはどう言つ感じなのですか？」

キャ「良い漢女おんなとは、まず！相手を包み込む心の広さ！要は肩幅よ！」

箒「（違う！絶対に違う！！）」

ラ「先生！私は肩幅が小さいですがどうすれば！」

キャ「そんな時は・・・上目使いよ！！これを使えば大抵の男は墜ちるわ！！・・・昔は私もやったものよ・・・」

鈴「（無理だろ！！お前身長絶対2mあるもん！！IS展開した時目の高さ同じだったもん！！！！）」

シャ「ほ、他にもあるんですか！！！」

キャ「そうね・・・後は有りの儘の自分でぶつかると、相手に自分の全てを知って貰つて、受け入れて貰えば絶対上手くいくわ」

シャ「有りの儘の自分・・・」

キャ「大丈夫！みんな可愛いから絶対に良い人に出会えるわ！まあ、でも私のダーリンには敵わないけどね？」

男たちの戦い？（後書き）

久しぶりの神の部屋

神「篝さん、大丈夫かな・・・流石に転生者4人は多かつたかな・・・ああ、心配だ」

天使「神様が調子に乗ってあんな機体挙げちゃうから・・・」

神「いや、挙げたんじゃなくて盗まれたんだからね？アレ」

天使「そんなんだから何時まで経っても神様の椅子はパイプ椅子なんですよ！」

神「うん、パイプ椅子なのに机が卓袱台だから書類が脛位の高さにあるんだよね・・・座布団無い？」

天使「無いですよ？私が使ってますし」

神「君、最近冷たくない？」

天使「ハッ！・・・そりゃあそうですよ・・・神様がそんなだから他の部署の天使に”ああ、あの神様（笑）の部署ね”って言われるんですよ！！」

神「ええ〜！？そんなに酷いの俺の評判！！」

天使「悪いですよ！食堂のおばちゃんにも”ああ、あの神様（笑）の所の”って言われておまけ貰うんですよ！！」

神「俺は大盛り頼んでやつと並だよ……」

天使「……………」

平和だった……

女も戦い(前書き)

強敵、トミーを倒した一夏と雪尚は更に奥へと進んだ

女も戦い

パシヤッ！パシヤッ！

—「おお！このカメラ、スゲー！！」

雪「トミーとか言うんが出て来たっちゅー事は、もう俺らは敵にバシとる訳や、気い引き締めるで！—夏」

—「カメラ、カッター！！」

パシヤッ！パシヤッ！

雪「……………ふんっ！
グシヤ！」

—「んなっ！？」

雪「次行くでえ」

—「ト、トミーの形見が……………」

女子側

キャ「それで言ってやったの、私得意料理は、活造りです……………
…ってね？」

セ「カツコいいですわ!!」

箒「なあ、そろそろ突っ込んでもいいか？」

ラ「そうだぞ、ちゃんと火を通さないとダメじゃないか!!」

キャ「あら! キャメルうつかり」

鈴・箒「うつかりじゃねええ!!」

—夏側

雪「しつかりしいやあ〜—夏」

—「大事にするって、大切にするって約束したんだ……」

雪「はあ〜……ホンマ先が思いやられるで……ん
?……おいつ!—夏! 奴さん来はったで!!」

シ「ふんっ! お前らが侵入者か? 生憎だが俺はトミーの様に優しく
は無いぞ……」

雪「いやっ! 優しい以前に自爆やで!？」

ピカーン

シ「貴様らに後悔させてやる! さあ、逃げるなら今の内だ!! もし、
戦うと言つのなら俺とこのゲキガンガーが相手だ!!」

—「それ、どう見てもナ シコのダイテツジンだよ!!」

シ「違う!!!この機体は漢のロマンが詰まった……ゲキガンガ
ーだ!!!」

雪「一夏!あの機体知ってんか?」

ー「ああ、背中が弱点だ」

雪「は?そんなアホ正直な場所が弱点な訳が……」

シ「何故それを知っている!?!」

雪「マジでか!?!」

シ「くっ!だが、弱点が分かったとしても俺が易々とやられると思
うなよ!!!」

シュンツ!

ー・雪「消えたっ!!!」

シ「此方だあああああ!!!ゲキガンフレア!!!!!!」
ブンツ!

雪「くっ!龍顎砕!!!」
ガキンツ!

ー「今だ!バスターライフル!!!」

シ「ちい!!!」

シュンツ!

雪「また、消えおつたで！？何なんやアイツ！！」

ー「くそっ！ボソソジャンプか！！」

シ「そうだ！良く解つたなあ！！！これがこの機体のワンオフアビリティー”ボソソジャンプ”だ！！」

ー「やっぱ、それダイテツジンだろ」

女子側

キャ「そう、そこでバニラエッセンスを少々入れるの」

セ「こゝ、こゝですよ？」

キャ「そうよ！上手じゃない！」

箒「キャメル！」

キャ「どうしたの？箒」

箒「そろそろ私は行かせてもらつぞ？」

キャ「そう、行っちゃうのね……わかったわ！私も行くわ！！」

鈴「何のつもり？」

キャ「さあね……ただ気付いたら貴方達と仲良くなり過ぎたみたいね……」

篝「言つとくが……」

キャ「わかってる……ダーリンを殺すのよね？」

シャ「ねえ、どうしたの？」

キャ「フフフ……ちょっとダーリンとお話しして来るだけよ」

ラ「嘘だな、さっきの話から察するにお前はダーリンという奴と戦いに行く気だろう？」

キャ「……流石はラウラちゃんね……そうよ私はダーリンを止めに行くわ！たとえ殺してしまったとしても……」

シャ「どうして！どうしてさ……」

キャ「そうね……良い漢女おんなつてのは、愛する人が道を踏み間違えたら正してあげないとダメなのよ？」

セ「そうですね……それなら、キャメルさんと一緒に作ったこのクッキーの味見をしてみてくださいな」

キャ「あら、美味しそうね……それじゃあ」

篝・鈴「（ああ、死んだな……）」

セ「……………どうですの？」

キャ「フッフ…砂糖と醤油を間違えてるわよ」

セ「うう／＼」

キャ「でも、セシリアちゃんの気持ちは一杯伝わったわ！ありがとう」

鈴「よし、そろそろ行くか」

第「そうだな……………だが、キャメル！！お前が紐パン、エプロン着替えてからだ！！」

キャ「あら、ヤダ私としたことが！？」

一夏側

シ「ハハハ！！どうした！お前らの気合はそんな物か！！」

雪「くっ！さつきから一昔前のロボットみたいな攻撃してきおってからに！！」

一「くそっ！ゼロシステムが使えるば……………使えてもダメか……………」

シ「フンッ！つまらんな……………ん？おい！お前！二次移行できるぞ

「！」

「は？・・・あっ！ホントだ！？有難う！」

シ「何、構わんよ」

「じゃあ、二次移行開始！」

雪「バカッ！そんな事したら敵に狙われるでー！」

「シ」は？？何言ってるの？」

雪「はい？」

「狙って来る訳無いだろ？変身中だぞ？」

シ「そうだぞ、戦隊モノのヒーローの変身中に敵が攻撃しないだろ
うが？」

雪「何でや、何で俺が悪者みたいな感じになつとるんや・・・」

「まあ、そんなこんなで二次移行終わったぜ！さあ、ゼロカスタ
ムの性能を見せてやる！」

シ「そうか、それならば・・・」

「ゼロシステム作動」

シ「遠慮せず行かせてもらっぞー！」

シュンッ！

—「そこだ！バスターライフル！！！」
バビューンッ！

シ「ぐわっ！何故だ！？」
シュンッ！

—「エイッ！」
バビューン！

シ「ぐっ！まだだ！まだこんな所では終わらん！！っ！？」

雪「龍連打あああああ！！！！！」
ズガガガガガ！！！！

シ「グ、グハア！！！！！！」
ドーン！

—「シロウ・・・アンタは強敵だったよ・・・準常識人の部類で
は・・・」

雪「一夏！何やさっきの！急に攻撃が当たりだして！」

—「うゝん・・・ゼロシステムって言って敵に勝つためにコンピュ
ータが行動を選択してくれるシステムなんだけど・・・何か全く違
ってた・・・って言うか何だったんだろ？」

雪「うゝん実は気合とかちやう？」

—「なるほど気合いか！！！！」

雪「よし！気合で強なるんなら今の俺らは最強だ！！一気に行くで

「…」

「…っすいお」

女も戦い（後書き）

天界 神の部屋

神「はあゝ．．．最近大盛りで頼んでも半ライス位の量しか出なくなつたな食堂」

天使「私は別の部署に行つたらお土産貰えるようになりました」

神「何それ．．．何なの！俺、神よ！？何でこんな扱い悪いの！！何でさ！！！！」

天使「日々の生活態度じゃないですか？」

神「で、その手に抱えてるのがさっき行って来た部署のお土産？」

天使「はい、玉露だそうです」

神「玉露？何それ？」

天使「さあ、雰囲気的にはお茶みたいですが．．．」

神「．．．．．とりあえず、お茶入れて」

天使「ヤダ」

神「．．．．．何なんですか！！大体お土産とか貰わんといて下さい！！！！」

天使「・・・・・・・・んなもん知るかあああああ!!」

神「ええ〜!?!」

ビクッ!

天使「お前に分かるの?行く先々の部署で”仕事、頑張りなよ”って言われてお土産貰って来る気持ちがお前に分かるのか?ああ?」

神「誠に申し訳ありませんでした!!」

天使「わかりやあ良いんだよ・・・分かりましたか?神様」

神「はい、すみませんでした」

天使「じゃあ、私次の部署に行くので仕事して下さいね」

神「あの〜その前にお茶を入れてくれないかな〜何て・・・」

天使「良いですよ、そう言えば私の名前って知ってますか?」

神「すみません!!!忘れました!!!」

天使「そうだろうと思いましたが・・・チロルです」

神「マジですか?」

チ「マジです」

神「いや〜そうっすか〜(だから怖いのか・・・)」

第「ハクシユン!!!」
.....
風邪だな!!!」

これが私の綺 星？（前書き）

前回シロウを倒したりして今回は・・・

これが私の綺 星？

鈴です。今私たちは窮地に立たされています。

箒「くっ！キヤメル！！私は、もう限界の様だ」

キヤ「ダメよ！折角此处まで来たんだもの何が何でも耐えるのよ！
！」

鈴「頑張れ！箒！！」

箒「む、無理だ・・・地底湖とかムリーーーー！！」
ガタガタ・・・

キヤ「う、うそ！？あの箒が怯えてるの！？」

箒「・・・・・・・・・・オウフ・・・・・・・・」

鈴「頑張るんだ！箒！後もう少しで出口だから！」

箒「死ぬ〜！IS起動させて〜！」

キヤ「起動させても良いけど寄って来るわよ？主に蝙蝠とか」

箒「・・・・・・・・・・それも無理・・・」

鈴「じゃあ、ドンドン行こうか」

どう言う状況ですか？と言う人が殆どと言うか、作者もこう言う表

記だと「どういう状況だよ！」と突っ込んでしまうので……

状況説明

現在、敵アジト基地の最後の一人、キヤメルが言うにはBOSS的ポジションの人物がいる部屋に奇襲をかけるため地底湖をゴムボートで移動中（なお、IS起動時には蝙蝠が寄ってきます）

鈴「と言うより何でゴムボート在るの？」

キヤ「ああ、それわねダーリンがこの地底湖に私のダーリンが手がけるプロジェクトの産物を飼ってるからよ？」

鈴「プロジェクト？」

キヤ「そうよ、プロジェクトFと言うらしいわ、何でも元は医療技術らしいけど今ではダーリンが理想の嫁を創るとか言ってたわ……私と言う者が在りながら……キーーーーー！！！！」

鈴「じゃあ、産物って？」

キヤ「うーん……全長16m分かっているのは基本的に雑食だけど主に肉などを好む、捕食に関しては貪欲で共食いをする。ってこのボートが置いてあった場所で見つけた本に書いてあったわ！」

鈴「……えっと……と言うことは今凄く危険じゃない？主に私達」

キヤ「大丈夫でしょ、こんな食べ物もないような所で、しかも共食いよ？と言うことは、もう一匹も残っていないはずよ」

鈴「それもそうか……所で箒どうしたの？やけに静かだけど？」

箒「……………」

鈴「？……箒！」

箒「っ！……よし！IS使うー！」

キャ「どうしたって言うのよ、蝙蝠が寄って来るわよ？」

箒「だって……さっきから私のゲッターサイトで変な触手を斬ってるんだけどさ……全長16mだっけ？そんな話聞いたら、もう怖くてトイレに行きたいです……」

鈴「syokusyuu?……触手?……よし！ISで逃げようー！」

キャ「ココ上に穴空いてるから行けるわよー！」

ピカーン

箒「よし！二人とも逃げますですわい！」

鈴「落ち着くんだ、箒ちゃん！」

第一行は、恐怖の余り地底湖から逃げ出した……

？「オオオオオオオオオオ……」

ザブーン！

「同」「！！！！！！！」

箒「聞こえない！聞きたくない！聞いてないでゴザル！」

鈴「よしよし」

キヤ「箒って壊れるとこうなるのね……」

一方その頃一夏達は

ゾンビ達「ああああああ……」

「リアルバイオハザード……いやあああああ！！！！」

雪「走るんや！後ろ振り向かんこう、走って目的地まで行くんや！！」

「でも、雪尚あいつ等何とかしないとエレベーターに乗れないぞ！！」

雪「そないなこと言うても……よおゝ考えたら一夏お前がバスタ
ー何ちやら撃てばええん違つか？」

「あっ！それ無理！今エネルギーチャージ中だから」

雪「じゃあ、ISで飛んで行くとかはどうや？」

「そんな、ISで飛ぶとか夢みたいな事……あつ……!」
雪「さつさと気づかんかい、ボケ……!」

所変わって箒側

箒「何だかんだでこの奥に最後の奴が居るわけだが……」

鈴「キヤメル……ダーリンって名前だったのか……」

キヤ「えっ? そうよ、知らなかったの?」

箒・鈴「知るかい……!」

箒「こうなったらさつさと取っちめて帰る……!」
ガチャッ!

ダ「何だよ! 入って来るなよ……!」

箒「開けなさい……!」

ダ「どうせ、箒の声真似したキヤメルだろ……!」

箒「ダー君、お母さんそんな子に育てた覚え無いわよ……!」
子供すら居ないわよ……!」

ダ「……」

箒「力づくで開けるか？」

キャ「地底湖の時と比べると凄く違っわね……」

鈴「そう言えば、キャメル、ダーリンってヒツキー？」

キャ「シャイなだけよ」

ベキツ！

鈴「あつ箒がドア壊した……」

箒「もう！こんなに散らかして……」

ダ「何だよ！入って来るなって言っただ……ろ……本物？」

箒「何が？」

ダ「えっ！？ええっ！キャ、キャメルじゃない！？何で……ああ、そう言う事か……なあ、キャメル何だろ？ホログラムなんて造って……このっ！」

ガシツ！

箒「っ！！何、胸触るとんじゃあああああ……」

背負い投げ！効果！！

ダ「カハツ！……ホログラムじゃない？」

箒「最初は気にしてなかったけど？流石に7年間女やってると常識

の範囲内で恥ずかしいわ!!」

ダ「えっ?でも、何で此処に篤が・・・」

キャ「ダーリン、それは今説明するわ・・・篤達を連れて来たのは私達よ」

ダ「キャ、キャメル!?どうして!?!」

キャ「それはダーリンが此処に転生してから3ヶ月間ずっとトレーニング室に籠ってたからよ・・・」

ダ「そ、それは原作開始までに強くなつて一夏負かして俺様ハールムを造る為に!」

篤「転生者なんだからチート化とかしたのか?」

ダ「えっ?うん、色々として貰ったけど・・・」

篤「そう言った過程で、見た目がアスランだと?私の時は転生とか無理的な感じの会話だったのに?アナログスティックにその他もろもろ失くしたって言うのに?・・・」

ダ「とにかく、篤や鈴音に在ってしまったんだ、計画が崩れたよ・・・こんな世界ぶち壊してやる!」

鈴「アレ?コイツ変な人だ」

ダ「アプリボウゼ!!!ザメク!!!!」

キャ「ま、不味いわ！？ザメクでこの星のリビドーを吸い尽くす気
だわ！！！」

箒「リビドーって何？」

鈴「調味料じゃない？」

箒「何だ、調味料だったのか」

キャ「こうなったら・・・アプリボウゼツ！！」

箒「綺羅星！！」

鈴「綺羅星！！・・・何か返したけど何？綺羅星って」

箒「うん・・・重要性で言ったら7並べの5位」

鈴「うん、どうでも良い」

キャ「銀河美少年！！タウツ！バーン！！」

箒「お、お前が銀河美少年だったのかあああああああああ！！！」

鈴「と言うか、美少年じゃないだろ！！バルトス見たいな顔しや
がって！！！」

キャ「さあ、貴方達も早くアプリボウゼしなさい！！」

箒「・・・ビッグ・オー！ショータイム！！！！」

ピカーン

箒「って言ってもゲッターなんですけどね」

鈴「うわっ！何か聖天八極式に成ってる！！」

箒「鈴さん！ラムダ・ドライバって何？」

鈴「分かり易く言つと気合で大体の事が出来る奴だった筈？」

箒「じゃあ、気合で何とかする奴がワンオフアビリティーか」

鈴「マジっすか！？箒さん！！」

箒「そろそろキャメルさんを助けに行きますか？」

鈴「え〜！」

神「箒さん！箒さん！！聞こえてますか！！」

箒「聞こえてるよ、今忙しいんだけど？」

神「あっ！そうでしたかすみません！では手短かに、僕結婚するんですよー！！」

箒「えっ？うん、おめでとう？」

神「なので、披露宴にはぜひ来てください！！」

鈴「箒どうした？いきなり独り言なんて言い出して」

篤「いや、私達を此処へ送った神が結婚するんだって?」

鈴「ああ、アイツか!」

そうこうしていると・・・

キャ「銀河! 十文字切り!!!!」

ダ「バ、バカなあああああああ!!!!」
ドカーン!

篤・鈴「・・・・・・・・・・・・・・・・」

キャ「銀河が変わってO・S・H・I・O・K・Iよ」

篤「ゲッター・ビィビィイムツ!」

鈴「輻射波動砲弾!!!!」

キャ「おのおおおおれええええええええええ!!!!」
チユドーン!!

篤・鈴「キャメル・・・相打ちだなんて・・・」

こうして、この二人にツッコミが入ることなく、二人は少々の不満と助けに来ていた事を知らなかった、一夏と雪尚を残して日本へと帰国した・・・

—「箒待つてろよ!！」

雪「シャルさん!！」

ゾンビ達「あああああああああああああ……」

—「雪」「おおおおおおおおお!！」

これが私の綺 星？（後書き）

神の部屋

神「はあゝ……結婚してゝ……」

チ「ムリダナ（・x・）」

神「……君って酷いね……」

チ「まあ、好きな人を虐めなくなる性格ですから」

神「と言つことは僕の事が好きなんですか？……結婚して下さい
！！」

チ「良いですよ」

神「……フオオオオオオオオオオウツ！！箒しゃん！箒
しやああああああああああん！！！」

いつもの日常（前書き）

作者の夏がオワタ・・・・・・・・

いつもの日常

一夏です。最近神様が結婚したり、披露宴に行こうと思ったたら死ぬしか行く方法ないって発覚したり、新学期始まつたり、東さんがIスコア造つたり、何か箒が不機嫌だつたり・・・まあ、今日も今日で担任の先生が・・・

担任「ええ、先生明日から1週間、駅前のクジ引きで当てた特賞の南極旅行ペアチケット使つて旅行してきます。お土産に皆さんに南極の氷持つて帰ります」

箒「先生！多分帰つてきたらその氷はもはや水です！」

担任「チツ！・・・じゃあ、生肉とかで」

雪「いらんわ！」

一「ちなみに何の肉ですか？」

担任「適当にホッキョクグマとかでいい？」

箒「・・・OK！」

雪「一「いいんかい！！！」」

担任「じゃあ、先生が居らん間の代わりは篠ノ乃、お前やれ」

箒「給料出ますか？」

担任「うん……篠ノ乃ちよっと」

篤「え？」

担任の先生の手招きにより先生の所へ行く篤そして・・

担任「まあ、大きい声では言えんけど……これ位」

篤「マジですか？桁多くないですか？」

—「先生！そういう話は聞こえない所でしてください」

担任「それはそうじゃ此処は結構給料高いし、儂学園主任じゃし」

篤「先生が学園主任だったのが驚きです」

担任「で、どうじゃい？やってくれるか？」

篤「任せて下さい、適当にやります！」

担任「いきなり不安じゃの〜」

雪「俺らが不安じゃ！」

こうして一抹の不安を抱え翌日……

朝 学校

「うわ〜・・・ホントにやってる・・・」

篤「はい、皆さんおはようございます。」

「お、おはようございます・・・」

篤「それじゃあ、授業を始めます・・・その前に皆さんとは初めての授業なので自己紹介します。」

「知ってるよ！初めてって言うか、いつも会ってるよ！教室で！」

篤「はい、私語をしない
スッ！」

「えっ？」

そう言つて篤が手を少し動かすと俺の頬を何かよく解らない物体が掠つて行った・・・

せ「せ、せっせせせ、先生！私の机に！わ、私の机に、か、鍵が刺さってます！！！」

篤「そうですか？まあ、そうですね 皆さん寝たり私語をすると先生・・・モノ投げますよ？まあ、理由としてはTVとかで教師が生徒にチョークとか投げ付ける様子を見て参考にしたので・・・まあ、投げられたのがチョークだったらいいですね」

クラス一同「（う、迂闊に動けない！？）」

箒「……………冗談ですよ？」

雪「冗談かい！！ってさつきからツツコンでばっかやな」

—「はあく……………脅かすなよ」

ラ「……………」

シャ「どうしたの？ラウラ」

ラ「シャ、シャル！？私語はダメだ！死ぬぞ！！」

シャ「ラ、ラウラ……………アレは冗談だって箒も言ってたよ」

ラ「ん？何だ冗談だったのか」

シャ「ラウラ……………」

箒「まあ、とにかく授業だけど……………私の授業方針はノビノビ教育
！と、言う訳で皆さん！！今日から1週間休み！！解散！」

ダツ！

クラス一同「……………えっ？……………う、うわああああああ
あい！休みだあああああああ！」

織斑家

一「と言つ訳で箒が出した宿題を皆で片づける訳だが……
箒！問題意味分かんない！！」

箒「ハア〜？アンタバカア〜？」

一「……………」

箒「御免なさい調子に乗りました」

鈴「箒！この問題ナイス！」

セ「一夏さん、このMr・サタンとはどんな人物ですか？」

一「……………アフロ？」

セ「アフロ？」

ラ「アフロなのか？」

シャ「アフロってあのモジャモジャした髪型の？」

一「……って言うかこの問題の作品この世界に無い奴じゃん！」

箒「ええ〜！でも神経由でアテネとか言う人に作ってもらったんだぞ？」

鈴「そいつの好きなキャラは？」

箒「う〜ん……………確か……………イリヤとか言ってた気が……………」

—「f a t e?」

篤「多分、f a t e」

鈴「宿題無にしない?」

篤「OK!」

—「良いのかよ!」

セ「さつきから騒いでどうしましたの?」

篤「宿題ムズいから無って話」

シャ「えっ? そうなの? 良かった〜僕全然分からなかったから」

セ「それじゃあ、これからどうしますの? 1週間お休みですわよ」

篤「・・・じゃあ、姉さん所へ行って見ようか、何かIS出来たら
しっし」

—「へえ〜・・・えっ! ? じゃあ、来年アレですか?」

篤「いや〜何か私達の戦闘映像出らしいよ?」

鈴「じゃあ、篤引つ越すの?」

篤「引つ越す? そんな分けないって・・・待遇にもよるけど」

セ「篤さんお引つ越ししますの?」

箒「ふんっ！」
ブワッ!

一同「!!!!!!」

セ「な、なんですか？それは!!」

箒「フフン・・・ユー　ヤンで得た新たな力だ!!」

セ「なっ!? 貴方もユ　キャンで力を付けていたと!?!」

箒「さて・・・行くぞ! セシリア!!」
ダッ!

セ「逃げるが勝ちですわ!!」
ダッ!

ガシッ!

箒・セ「!!!!!!」

一「まあ、俺もユーキヤ　で神速使えるようになったんだけど・・・」

セ・箒「な、なんだってー!!」

鈴「お前等に言うておくがユーキ　ンにそんなモノが使える様になる資格は無い!!!!」

一・セ・箒「な、なんだってーーーー！！！」

シャ「凄いね！みんな資格なんて持つてるんだ！！！」

ラ「ああ、私も持っているぞ」

シャ「何の資格？」

ラ「アルティメットローラーだそうだ」

一同「何それ？」

箒「うーん・・・それどつかで聞いた事ある様な・・・」

セ「シャルロットさんは何か持ってますの？」

シャ「そんなスゴイの無いよ精々ANGEL PLAYER 1級とかだよ」

一・箒・鈴「・・・・・・・・・・」

セ「よく解りませんが1級と言うことは凄い事ですよ」

ラ「そうだぞ？1級だぞ」

シャ「そ、そうかな？まだ、ハンドソニックしか創ったことが無くて・・・ノノ」

箒「（設定とか無視？ハンドソニックとかヤバくね？）」

「（ハンドソニックとか！俺か雪尚いつかバラバラだわ・・・）」

鈴「（私も何か資格取ろうかな・・・って、まで小2だし良いか）」

ラ「そう言えば、どこか行くんじゃないか？」

第「えっ？・・・まあ、良いんじゃない？」

いつもの日常（後書き）

神の部屋

神「チロルさん、お茶下さい」

チ「私は珈琲派なんで無いです」

神「じゃ、じゃあ、珈琲で」

チ「自分で淹れて下さい」

神「上司ですよ？」

チ「妻ですよ？」

神「お願いします、何でも良いんで何か下さい」

チ「じゃあ、最近近所に来たお店に在るキャメル水すいで良いですか？」

神「ホントすいませんでした！！・・・暇だね」

チ「そうですねー私は楽しいですよ？」

神「へえー例えば？」

チ「旦那虐め」

神
「
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.
」

取り敢えずカウントダウン(前書き)

休み・・・・・・・・ヒーーーーハーーーー!!

取り敢えずカウントダウン

篝です。今日は日曜日、天気も快晴遊びに行くには最高のシユチュエーションだったのだが……

束「篝ちゃん、ちょっといい？」

篝「ああ？」

キツカケは篠ノ乃篝ほしののの姉こと篠ノ乃束の一言だった。

篝「何さ？姉さんこれから遊びに行こうと思ってたのに」

束「うん……ちょっとね」

篝「ん？」

束「実は……」

姉さんは、こう言った『篝ちゃんが私に見せてくれた、IS……アレを造れるようになった』そんな事は割と前から分かっていたのだが……ん……引越……だそうで……

束「私は世界にISを発表したい……でも、発表したら多分……うっん、確実に私は世界中から狙われる……ISを最初は宇宙で活動できるパワードスーツ……そういう目的で造ったんだ、だけど学会や国は違ったよ……兵器って……篝ちゃん達が見せてくれたISを……初めて見せてくれた時ホントに心から感動s」

TV「明日も暑いので水分補給をしっかりと採るようにしましょう！」

篤「……………夏だな」

束「……………篤ちゃん……………話聞いてた？」

篤「ん？……………ハア……………もっと簡単に分かり易く話して、さつきから右から左に受け流してはっかりなだけだ」

束「そんな事だと思ったよ……………じゃあ、分かり易く紙芝居で……………」

篤「わ〜い……………」

束「ハア〜じゃあ、行くよ？」

題名

束さんの？でもわかる！！ISを発表したら

紙芝居内容

束さん「ヤホ〜！私がISを複製に成功させた篠ノ乃束さんだよ！今日はこのISを世界に発表するんだ！！」

国A「ぐへへへへ……………ISこれが在れば他に国に侵略できる！！」

国B「そうはさせるか〜！国AにISの製作者を渡すか〜！！……………」

そつだ！拉致しよう！！」

国C「IS・・・こんな物を国A・Bに渡すか！！・・・そつだ！
ISを国A・Bに渡す位なら製作者の束さんをやっつけよう！！」

束さん「へっへん！束さんがそう簡単に捕まるもんか、やっい
！やっい！！」

国達「クソ！束さんには敵わないや・・・そつだ！束さんの家族
を人質にしよう！！」

篝ちゃん達「うわん怖いよお姉ちゃん」

紙芝居終了

束「どうかな？」

篝「・・・・・・・・次回作に期待」

束「・・・・・・・・」

とにかく、束さんヴォイスで紙芝居を読み聞かせられた訳で・・・

篝「つまり私が何処かの国に誘拐されそつだから篠ノ乃父、母を置
いて一緒に行こうと？」

束「そう！」

箒「まあ、私としては篠ノ乃夫妻が心配なんだけど？・・・アレ？名前なんだっけ？」

束「大丈夫だよ、あの人はこの国が保護してくれるだろうから・・・で、どう？箒ちゃん」

箒「ふん・・・で、本音は？」

束「箒ちゃん強いし、守って貰おうかな？なんて・・・後、寂しいし・・・」

箒「で、いつ出発？」

束「準備して1週間・・・って！？ついて来てくれるの！？」

箒「当たり前だろ？私、姉属性だし？」

束「いいの？皆に会えなくなっちゃうんだよ？」

箒「任せる！（まあ、会おうとすれば会えるし・・・邪魔する奴は、ゲッターアタックするし）」

束「・・・じゃあ、束さんは色々準備するから・・・箒ちゃんは皆とお別れして来て」

箒「それじゃあ、遊びに行ってくるから」

そう言っつて私は最初に織斑家に行った・・・

織斑家

—「姉さんってさ」

千「何だ？」

—「実は錬金術使えるでしょ？」

千「ハア〜？何を言ってるんだ・・・そんな事は良いからさっさと昼食をとってしまえ」

—「いや、でもこれヤバいって！もうヤヴァいって！！今までは美味しい暗黒物質だったのに今回はハガンのホムンクルスみたいなんだもん！！」

千「・・・味は良かったぞ」

—「・・・（食べたんだ）そ、それじゃあ」

そう言つて一夏はテーブルに置いてあつたフォークを皿の上のホムンクルスに突き刺してみた・・・

??「ギヤアアアアアアアアア！！イタイ！イタイ！イタイ！タスケテ！イヤアアアアアアアアア！！」

—「・・・キヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！」

千「・・・味は良かったぞ？」

—「ま、まだまだ！俺はこんな所で終われない！！終わらない！！！！」
ズブツ！！

??「アアアアアアアアアアアア！！！！ウデガ！！オレノウデガ！！」

—「・・・・・・・・・・・・・・・・」

この後、一夏は顔を真っ青にしてこう言った。

—「目が・・・・・・・・目が合ったんだ・・・・・・・・」

ちなみにあの物体はと言うと・・・・・・・・

箒「一夏く遊ぼうぜえ〜！」

—「うわっ！懐かし！高校時代振りに聞いた！！」

千「ん？調度良い・・・・・・・・箒これを食べってみる？」

箒「えっ？・・・・・・・・フンツ！！」
グシヤツ！！

??「ガアアアアアア！！」

箒「秋沙雨ver箒！！」

グシャッ！ザクッ！・・・・・・・・・・・・・・・・

??」・・・・・・・・・・・・・・・・」

ピクピク・・・・

—「・・・・・・・・・・・・・・・・」

箒「で、このホムンクルス何？」

千「何を言っている？オムライスに成る筈だっただったモノだ」

—「箒」・・・・・・・・・・・・・・・・」

こうしてあの悪夢の様な箒による皿上の公開処刑を終え返り血？（千冬曰く：ケツチャップ）を腕とその手に持った鉄の光沢を放つフオークに浴びて箒は・・・・・・・・・・

箒「取り合えず手、洗って良い？」

—「・・・・・・・・・・どうぞ」

千「さて、動かなくなった様だし・・・・一夏、食べてしまえ」

—「えっ!?!?」

そうして一夏はホムンクルス（オムライスに成る筈だったモノ）の残骸を全精力を持って完食した。
完食後一夏はこう語った

「味は凄く美味しいオムライスだった・・・見た目はアレだけど・・・」

取り敢えずカウントダウン（後書き）

千冬調理風景

一「今私は千冬姉さんの料理風景を覗こうと思っ」

千「何をやっている！一夏！」

一「決定的瞬間の撮影」

千「バカな事してないで待ってる！」

一「了解」

一夏が台所を出てから少ししたら何人もの人の叫び声が聞こえたと語った・・・

朝令暮改（前書き）

束のカミングアウトチックな発言により外国へ高飛びする羽目になった。筈に残された時間は・・・・・・後・・・・・・6・・・・・・7?・・・・・・うん！あんまり無い！！

朝令暮改

本日午後十三時、東による・・・

東「IS発表します!」

箒「よろしい、ならば・・・ならば・・・どうしよう?」

と言う姉妹会議（東による一方的説明）により篠ノ乃姉妹（箒的^{ちのう}には現実受け止めアナログスティックを諦めた）はISを世界へ発信する為、発信と同時に雲隠れ!!

作戦名

『SKB』

S 〓 それはさて置き

K 〓 かあさん

B 〓 晩御飯なに?

略して『SKB』を発動

箒「で、晩御飯なに?」

篠ノ乃母「餃子よ」

・・・餃子でした

そんなこんなで現在織斑家でのほほんとしてマタ〜りしている篤さんと織斑姉弟は昼ドラを見ていた

TV

『道子!!』』

『弘さん!?!』

『愛してる!!結婚しよう!!』』

『もう!寂しかった!!』

『……この泥棒猫』

『義姉様!?!』

篤「このお姉さんブラコンなのかな?」

一「安心しろ篤!俺はISメンバー一筋だぜ!!」

篤「……浮気者」

一「っ!!……ま、まさか篤さん嫉妬してくれるんですか!?!」

篤「べ、別にアンタなんか嫉妬なんてしてないんだからね〜(棒)

「

「……………」

千「……………この泥棒猫め」

篤「！？」

千「……………」

篤「……………」

千「すまん、何だかよく解らんが楽しそうだったんでな？その……
ついで……」

篤「(。(。(ほ、ほら一夏！嫉妬だぞ！？嬉しいだろ?)」

「(。(。(えっ！？イヤイヤ！いきなりそんな事言われて
も！？)」

千「(*。x。*)」

「え、え〜つと……その何て言うか……」

千「……………一夏！私は、いきなり眠たくなった！勘違いするな！
決して！そう、決して恥ずかしくてこの場から逃げたい訳では無い」

千冬 自分の部屋に離脱

—「千冬姉……立ち直れるかな」

箒「（・x・） ムリダナ」

—「所で箒の中に俺への恋愛感情って在るの？」

箒「何その大豆を発酵させたみたいな感情」

—「納豆だね……で、結局在るの？」

箒「ハハハ！そんな全銀河的奇跡が転生以外で起こる訳無いでしょ？」

—「……マイクロサイズでも良いから在って欲しかった」

箒「死ねえ〜マイクロロン共め〜」

—「ゼントラですか！？」

箒「ハハハ！……あ、っ！？」

—「どうした？いきなり”あ”に濁点何て付けて」

箒「実は姉さんが……プルプルプル！！」

—「ん？電話に出てくる」

箒「了解〜」

—「はい、もしもし織斑です……ああ、東さん……箒ですか？
はい……箒、東さんが話が在るって」

箒「ああ？……なに？姉さん」

東「箒ちゃん、ごめんね！何かISしても少しは余裕在ると思ってたのに何かヤバいっばいから明日出発するね」

箒「オフコース……いやっ！待って今の冗談だから……切れた」

—「東さん何て？」

箒「……（……電話は掛かって来なかった……よし！）」

—「箒？」

箒「一夏！私と姉さんはIS開発関係で世界中からヤバげな視線だから……ドロンします……！」

—「ワン モア スピーク ジャパニーズ」

箒「うん……IS発表 私の姉スゲエ 私の姉、世界中から狙われる 姉、妹心配 時代ズレくのいち姉妹誕生 私達雲隠れ 私現実逃避……わかった？」

—「ああ！十割中十三、六二割はわかった！」

箒「後の3・62割は何だ？」

―「とにかく！この事は鈴には言ったのか？」

箒「鈴はね、今中国へ里帰りしてるんだって……あの中国め！」

―「せ、セシリア達は？」

箒「ラウラには会えた」

―「他は？」

箒「居なかったから置手紙を置いて来てんで、縦笛の啜える所を……」

―「まさか持つて行くのか？」

箒「いや、縦笛の下り嘘だから」

―「で、いつ出発？」

箒「うん……」

ピンポーン

―「はい！」

束「やあ！いっくん！箒ちゃん！爆発まで残り5分を切った時限爆弾（束さん特製）を体に埋め込まれた人位危ない状況に成ったから今から出発するよー！！」

篤「なっ！？そんな事言っても姉さん！準備が！？」

束「諦めようか！！」

篤「しょうがない……ハア！着替えも何もかも全部私のISSの空き容量の中だよ……準備できてるじゃん」

一「うづくん……じゃあ、またね〜！！」

篤・束「それじゃあ、またね〜！！」

一「アレ？いつ帰って来るんだろ？」

千「一夏誰か来ていたのか？」

一「ああ、束さんが来てた」

千「束が？それで奴は何処にいる？」

一「うづくん、何か世界中から指名手配されるから雲隠れするって」

千「束……遂にやったか……」

一「ね、姉さん？」

朝令暮改（後書き）

神の部屋

チ「貴方、これは何ですか？」

神「ラノベです」

チ「作者名貴方の名前ですよ？」

神「自己出版です」

チ「売れ行き良かったんですか？」

神「平安時代に売れました」

チ「へえ〜竹取物語ですか・・・」
「物語シリーズに喧嘩売る気
ですか？」

神「いえっ！決してその様な事は！！！」

チ「そうですか・・・私実は
物語大好きなんですよ？知って
ました？」

神「すみません！知らなかつたです！！！」

チ「ちなみに私は理由も無く殴れる人が欲しいですね〜何処かに居
ませんかね〜ア・ナ・タ？」

神「ガタガタガタガタ」
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
「

中学生編スタート（前書き）

前回から三年の月日経った。

中学生編スタート

篤です。一夏達と別れて三年が経った。この三年の中で女尊男卑の傾向が出たり、私や姉さんを暗殺又は、誘拐を企む組織（国を含む）を何だかウザかったと言う理由で叩き潰したり、姉さんが気に入らない研究をしている施設の破壊活動を手伝ったりと割と充実した生活を送っている。今も姉さんが気に入らない研究施設をアレして来ると言う暇つぶしの真っ最中だったのだが……

場所某国山中施設内

篤「姉さんこの施設大体制圧したよ」

東「流石だね！篤ちゃん！じゃあ、もう帰ってきていいよ」

篤「了解」

と、こうして今回の任務（暇潰し）を達成して帰るつもりとしているのだが……

篤「……………」

ヒタヒタヒタ……………」

篤「（ヒ、ヒタヒタ言ってるうううううう！?）」

ヒタヒタヒタ……………」

箒「いや、まさか怪奇現象とは・・・確かにここ廃墟っぽいけどさ」
チラッ!

?「・・・・・・・・・・・・・・・・」
ビクッ!

箒「・・・・・・・・・・・・・・・・」
ビクッ!

箒「お、女の子?・・・・・・・・ああ、幽霊ですねわかりました・・・・・・・・
分かりたくなかった」

?「・・・・・・・・ふ、不審者だ」

箒「お前が言うか・・・・・・・・」

今、私の目の前に小学1年生位の女の子が居る!夢でも幻でもない
!!そうこれは現実なのだ!!私が幽霊に遭遇する何て・・・・・・・・

箒「・・・・・・・・成仏しろ」

?「断る!!」

箒「ハハハ・・・・・・・・イヤアアアアアアアアアアアアアアア!!」

?「ちよっ!?話聞いて!!」

こうして私はこの少女と出会った・・・・・・・・

所変わって一夏側

一「ハア〜・・・暇だな・・・」

雪「しょうがあらへん、今自習やで？」

鈴「私も暇だよ・・・」

弾「ハハハハ・・・まだ授業すら始まってないぞ？帰りにどっか寄って行くか？」

織斑一夏こと元キラは現在中学生である。三年前篝が居なくなつてからセシリア、シャル、ラウラ達は母国へ帰つて行った、主にISが発表された事により女尊男卑の傾向が始め、世界が少しずつかしくなつていった、セシリア達も篝が居なくなつた理由を聞いて・・・

セ「何故、言ってくれなかつたんですの！！」

シャ「僕たちそんなに頼りないかな・・・」

ラ「強くなる・・・篝が安心して私達に会いに来てくれる様に・・・」

と、言い残して帰って行ったその時雪尚がシャルに着いて行くこととするのを止めるのに大分苦労したけど・・・

―「最近噂に成ってる誰も乗ってない車、アレ今日見たぜ」

鈴「ああ、あの 萌先生みたいな担任の車でしょ？」

雪「アレ前から思ってたんやけど前見えてるのかな？」

弾「さあ〜？まあ、大丈夫なんじゃないか？」

―「弾が言つと説得力あるな・・・」

鈴「いや！アレ明らかに危ないから！！」

ガラガラガラ・・・

担任「は〜い！皆さんHRを始めますよ〜！何と！今日は皆さんに嬉しいお知らせです！！さて、それは何でしょうか？織斑ちゃん！！」

―「ええ〜つと・・・宝くじが当たった？」

担任「全然違いますよ〜 では・・・鈴ちゃん！！」

鈴「・・・手相を見て貰ったら内容が良かった？」

担任「はい！違います・・・では、今度こそ！！」

第「いい加減にしないと幼稚園に叩き込むぞ！！」

―同「！！！！！！！！！！」

箒「……あんまり見るな……興奮するだろ？」

—「……えっ!? 箒!? 何で!?!」

箒「いや、転校しに……」

鈴「おかえり〜」

箒「ただいま〜」

ナデナデ

鈴「やめるよ〜」

「す、鈴さんが……」

「ど、毒舌の鈴さんが転校生のネタに乗ってる……」

担任「と、とにかく!?! 転校生です!?! では、自己紹介をして下さい」

箒「ええ〜つと……篠ノ乃箒です。好きな物は秘剣燕返し、特技は秘剣燕返し、趣味は秘剣燕返し、覚えている呪文はベギラゴンです!?!」

「……(好きなんだ……燕返し)……」

箒「嫌いなものは燕です!?!」

「……えっ!?!?」

担任「以上！篠ノ乃箒ちゃんでした〜！！」

そんなこんなで自己紹介も終わり休み時間

屋上

箒「そして〜！！」

ガラガラガラガラ

？「私、参上〜！！」

箒「……2点」

？「酷い……」

箒「……私の子供だあああああつあああああ
！！！！」

一同「ええ〜！！」

箒「？」「どうだ〜！！驚いたか〜！！」

鈴「じゅ、十四歳の母だと〜！！」

雪「お、おまつ〜！！早すぎるやろ〜！！」

「は、離してくれ弾！俺はこの悪夢から抜け出すためにそこから飛び降りるんだ！！」

弾「落ち着け！一夏！……で、誰との子供なんだ？」

篝「ん、一夏だが？」

？「母さんアレが父さん？」

篝「ああ、非常に残念だがあそこで自殺しようとしているのが父さんだ……」

「……え？父さん？」

鈴「……どゆ事？」

篝「まあ、この話は後でな……それよりこの子……名前が無いんだよおおおおお！！」

「・鈴」考えろや！！」

雪「ホンマ、サイテーやな親として」

弾「篝、何で名前が無いんだ？」

篝「それは簡単だ……この子と会ったの1週間くらい前だからな」

「同」……は？」

箒「いや、それがこの前行った施設潰したんだけどさあ、その施設が生物系の施設で、その時出会ったのがこの子だ！」

？「私だ！！」

一「じゃあ、何故に俺が父親？」

箒「いや、そこなんだよ・・・この子が出て来た生体カプセルの奴の近くにこの子の着けてたストラップ見たいな奴に書いて有ったシリアルナンバーと同じ資料が在って見てみたら・・・」

篠ノ乃箒

×

織斑一夏

と、書いて有った」

？「どうだ参ったか！！！」

鈴「いや、嘘だって！じゃあ、二人の好きな物は？」

箒・？「キャノン！！ガンタンク、ガンキャノンは正義！！！」

一・鈴「ほ、箒の子供だああああああああ！！！！！」

雪「な、何でそれで箒の子供やねん！！！」

弾「じゃあ、二人の嫌いなものは？」

箒・？「主に足が無くてヌルヌルした生き物！！！」

弾「……うん、箒の子供だ」

一「でも、箒達は世界中から狙われてるんじゃない？」

箒「いや、それが狙って来る奴等のせいで寝不足でね……うん」

弾「そうか……寝不足だとどうなるんだ？」

一・鈴「お、沖縄の帰りの時みたいなのが……」

弾・雪「？」

箒「？」「ハハハハハ！！」

篠ノ乃箒、参加で中学生編スタート！！

中学生編スタート（後書き）

第「で、結局名前どうしょ？」

一「えっ？考えてないの？」

第「うん！！」

一「清々しい！！・・・で、今までは何て呼んでたの？」

第「サブキャラ」

一「虐待ダメ！ゼツタイ！！」

第「考えるかな・・・何時か」

一「ハア〜……………」

命名？（前書き）

前回

第が小さな女の子を引き連れて、一夏達の前に衝撃的な登場をした

命名？

一夏です。今日は俺達の学校について、まず話しておこうと思う。俺たちの学校は『IS学園付属第二中学校』と言って・・・ここまて言えば分りますか？そう、この中学校は将来IS学園に入学する事を希望する人達がIS学園に入るために勉強する事ができる世界的にも割と・・・かなり珍しい中学校である。と、言っても普通の学校でもある為、IS学園に入学する意志の無い人も居る。ちなみにこの学校でIS学園に入学を希望しているのは、雪尚だけ（政府的には行って欲しい）後の俺と鈴は日本政府による強制手段等の行使では無くただ単に家に近いからである。

そんなこんなで・・・

校長室前

篤「何故に校長に呼び出されにやなんのですか？」

鈴「さあ？退学じゃない？」

篤「今日入学したのに？」

一「じゃあ、俺達も退学か・・・」

雪「納得いかへん！何も悪い事してへんのやで！」

？「お母さん、入らないの？」

篤「いや、まだ早い・・・」

校長「入りたまえ」

一同「・・・ゴクリ」

ガチャ！

校長「初めまして、篠ノ乃箒さん私は・・・」

箒「・・・スネーク？」

校長「っ！？・・・驚いたな、伊達に天才の妹君では無いか・・・
そうだ、そのスネークと言う呼び名は昔、私が使っていたコードネームだ」

一「た、他人の空似だと思ってたのに・・・」

鈴「BIG BOSS!!」

雪「？」

箒「でも、何故此処に？」

校長「戦士は戦いの中でしか生きれない・・・だが、ISが世界的に普及した事により私の様な古い戦いをする者は不要になってしまつてな・・・だが！生きるのも戦いだ！！確かにISによつて私の様な者は不要となつたが、紛争や内乱がISと言う『力』によつて減つたのも確かだ・・・だから私は考えた！ISと言う『力』は偉

大だ！だが、それと同時にとてつもない脅威に成る・・・今の世界を変える為には、大人達を説得しても時間が掛かるだけだ！！成らば如何すれば良い？・・・答えは簡単だ。今の子供達が将来大人に成つてとてつもない『力』得た時、その『力』を前にして過ちを犯さないか？何の為にその『力』を使うのか？そう言う状況に陥つた時に後悔して欲しくは無い・・・だから私は教師と成つた！！私と共に過ごした子達は今貧困や飢饉によつて苦しむ人達を助けているそつだ・・・これ程までに嬉しかった事は無い・・・」

鈴「全員、敬礼！！（泣）」

篤「・・・（泣）」

一「・・・（泣）」

雪「・・・（泣）」

？「・・・お母さん、トイレ！！！」

校長「八八八・・・今の私は只の中学校の校長先生だぞ？」

一同「（校長先生！！）」

30分後

校長室

校長「諸君、落ち着いたかね？」

篤「で、話って何ですか？」

校長「ああ、それについてなんだが政府からの要請でな、この前から建設していたISパイロットの保護を目的とした学生寮が出来たのでIS学園入学希望の君達とそこのお嬢さんを含む5人に入寮して欲しいと政府からの要望だ・・・私としては決定事項らしいが君達の意見を尊重したい」

篤「私は良いですよ？」

一「俺も別に構いません」

雪「俺は・・・うん、ええよ」

鈴「一人部屋ならOK！」

？「お母さん、お引越し？」

篤「うん、お引越しだね」

一同「（ほ、篤が何かおかしい！？）」

校長「おお！！そう言ってくれるか！では、不備が在ったら直ぐに言ってくれ」

篤「校長先生、私達一夏と同じ部屋なんですが？」

校長「ああ、そうだが？」

「校長！？何ですか？」

校長「その子は篠ノ乃さんと織斑君、二人のクローンだそうじゃないか？なら君達は親として一緒に居てやらなくてはな？」

？「お父さん（仮）と一緒にですか？」

校長「ああ、そうだよ」

？「なんてこつた・・・」

篤「ああ・・・何でこうなった・・・」

orz

校長「それにまだその子には名前が無いそうじゃないか、それはいけない！と、言う事で今日の授業はもう休んでいいから早くその子の名前を決めてあげるんだ、よろしいかな？」

一・篤・？「イエッサー！！」

学生寮 10号室

篤「部屋が端っこだな」

？「何でだろうね？」

—「置手紙が在ったぞ・・・何々・・・え〜っと、学生として不純異性交遊は認められないがしかし若さが有り余って・・・と、言う事も在る。一応防音には成ってはいるが・・・p.s.寮監に君達の縁のある『元』教え子達に頼んで置いたので久しぶりに友好を深めたまえ・・・だそうだ」

箒「その手紙の内容だと・・・鈴を襲えと言う事か！！！」

—「違うよ！？・・・多分」

？「お父さんがお母さんを襲えばいいんだよ！大丈夫安心して最後まで見てるし！もし誰か来ても私がお父さんとお母さんはプロレスごっこ中です。って言っというてあげるから！！！」

—「な、何て出来た娘なんだ！！！」

箒「平和の為と称して抹殺するぞ（怒）」

—「・・・？」「ふざけ過ぎました！！！」

コンコン！

箒「はい」

ガチャ

千「此処に居たか一夏」

一「ち、千冬姉さん!？」

?「?」

千「織斑、篠ノ乃今日から不本意だが……本当に不本意だがこの寮の寮監に成った……その子供が……」

東「箒ちゃんといつくんのクローンだね? 大方いつくんと箒ちゃんのクローン造って混ぜたんだね それにしても箒ちゃんあんまり驚かないんだね?」

箒「まあ、姉さんが来る事くらい予想済みだ」

一「千冬姉さんが居たら大体セットだもんな」

千「本当にあの校長め……まだ、教師をやっていたのか(怒)」

東「ホントだね! もうとっくに還暦過ぎてるのにね!」

校長「だが、まだ現役でも行けるぞ?」

東・千「っ!？」

箒「どうしたんですか? 校長」

校長「ちよつと昔の教え子に会いにな?」

千「っ!?! / /」

篤「(何で千冬さんは顔赤いの?)」

東「(ああ、それはちーちゃんの初恋の人が校長だからだよ)」

一「(だから、顔が赤いのか・・・えっ!?じゃあ、千冬姉さんってオジコン!?)」

校長「いや、それにしても二人とも美人になつたな?」

千「えっえとあの!し、失礼しまつされました!」
ダッ!

東「ハハハ・・・ちーちゃん待つてよ」
ダッ!

校長「ハハハ!元気そうで何よりだ・・・では、用事も済んだ事だし帰るとするかな?二人とも失礼するよ」

一「・・・・・・・・・・・・・・・・」

篤「一夏・・・人は誰でも何か抱えてるモノさ・・・」

?「主に性癖ってやつだね!」

篤「・・・・・・・・名前どうしよ!」

一「ああ!そうだった!名前考えなきゃ!」

篤「何か候補ある？」

—「……………華恋カレンは？」

篤「ハハハ……もう少し考えるか……」

？「厨チウ二ニくクさいサイい

—「……………」

Orz

篤「うん、今度からはもっとソフトにお父さんと接してみようか？」

—「ほ、篤iiiiiiiiiiiiiiiiiiii！！」

？「つ！！シャッターチャンス！！」

篤「奥義！ロストアナログスティック！！」
ズドツ！

—「……………こんな時如何すればいいのかわからないの……」

？「……………笑えばいいと思うよ」

—「……………ニヤリ」

篤・？「これが私達の殺劇武荒拳！！」

ズガガガ！！

薄れゆく意識の中で、俺は閃いた・・・そうだ、あの子の名前はチリトリにしようと・・・

篤「却下だ!!！」

ズカッ!

ダメだったか・・・

?「お母さん結局私の名前決まったの?」

篤「うん・・・春香?」

春「うん、お父さんの所みたいに季節を名前に入れたんだね」

篤「いや、何か一瞬『みみけ』の長女の名前が・・・ね?」

春「いいよ、お母さんの所みたいに掃除用具の名前やダモン」

篤「この名前でも私は生きてきた!!！」

春「ドゴンールで言うブマみたいな事だもんね」

命名『?』は『春香』に成った!!!

とある休日（前書き）

夜 学校

兵A「兵B！兵B！！応答しろ！！こちら兵A！！兵B！兵B！！」

兵B『こ、こちら兵B・・・敵の罠によりこちらのチームは壊滅・・・繰り返す・・・こちらのチームは壊滅・・・』

兵A「兵B！どうした！？兵B！！」

校長「動くな！」

兵A「っ！！」

校長「そちらの戦力は既に潰した、無駄な抵抗はやめて投降しろ・・・」

兵A「くっ！！・・・わかった・・・投降しよう」

校長「正しい判断だ」

兵A「なっ！？貴方はまさか！！」

校長「・・・今は只の平和を望む教師だ」

とある休日

今回も一夏です。箒がこの学校へ入学して数日、俺は今現在何故か・
・そう、何故かとても大きなベットで川の字で箒達と寝ています。
理由としてはもう一室在ったので中を覗いてみると大人3人が楽々
寝られるサイズのベットが部屋の中心に置かれて居たのである・
更に手紙がまた置いて在り内容が・・

織斑君たちへ

子どもと言うのは親の愛情を一身に受けて育つと良い大人に成る
とある本に書いて有った。それに東君からも是非織斑君と一緒に寝
られるようにして欲しいと頼まれてな、と言う訳で親子水入らずで
居られる様にファミリーサイズのベットを用意させて貰った。

ps・耐震性能はしっかりとしてあるので安心して欲しい

校長より

この手紙を読み上げた瞬間箒がゲッタービームで消し炭にしたが・

さて、話は戻って現在

10号室

「さて、今日は鈴の所でテイルズをやるんだった・・」

春「・・・・・」

ジ「・・・・・」

「……どうしたの？春香」

春「お父さん今日鈴さんと何かするの？」

篤「んっ……（）……二度寝しよ……寝付き悪いけど」

「ん？ああ、一緒にゲームをしに行くんだよ」

春「そしてそのまま帰って来ないんですね……」

「はい？」

篤「（はい？何？この面白い展開）」

春「この前テレビで言った！」

「いや、それ違うから！？遊びに行くだけだから！」

春「酷い……お父さん信じてたのに……（泣）」

「すみません！！行かないんで信じて下さい！！……」

春「本当？……じゃあ、お願い聞いてくれる？」

「極めて了解であります！！」

春「じゃ、じゃあ私妹か弟が欲しい！！」

「……えっ？」

第「いや、それは無理だろう」

—「任せる!!」

春「わ〜い!」

第「よし、一夏を殺そう!」

—「それじゃあ、春香お父さんはお母さんと少しお話が在るから
外で遊んできなさい」

春「は〜いっ!」

ガチャ!バタン!

第「(待て!行くんじゃない!春香!!と言いたいけど眠いし動き
たくない)」

—「さて、春香もそんな事言うように成ったんだな・・・」

第「(一夏騙されるな!春香は猫を被ってるだけだ!実際には・・・
ほら!春香のぬいぐるみの目は隠しカメラだ!)」

—「まあ、取り合えず・・・箒に飛び掛かるか」

第「ああ、飛び掛かって来い、IS展開して待ってるから・・・」

—「・・・何時から起きてましたか?」

第「私が眠りが浅いのは知っているだろう?・・・最初からだ」

—「・・・そういえば、そんな事言っていましたね・・・」

箒「まあ、春香の妹なら何とかなるぞ？」

—「は？」

箒「まあ、耳を貸せ」

—「なるほど！！その手が在ったか！！」

箒「まあ、そう言う訳で私はもう一眠りするから」

—「じゃあ俺は鈴の所で新しいゲームして来るから」

寢室の扉の外

春「チツ！失敗か・・・」

そんなこんなで時間が過ぎ

お昼前

TV

「今日、運が悪いのは『は』行の方！宿命のライバルが現れそうな予感」

春「だ、そうですよ？母さん」

箒「お前もだろ？春香」

春「それはそうといい加減私のオニギリから手を離して下さい、お母さん？」

箒「春香よ、甘いな！食事は戦争なんだぞ？」

春「親として此処は娘にオニギリを譲るべきでは？」

箒「例え今の私の行いがいけない事だとしても私はこのオニギリが食べたい！」

春「大人気無いですよ・・・お・か・あ・さ・ん？」

箒「いやいや私は、まだ十四歳だぞ？（中身は32歳です。）」

春「それホントに実年齢ですか？サバ呼んでんじゃ無いの？」

箒「お前こそ実は只の幼児体型なだけじゃ無いのか？」

春「っ！？今言っではいけない事を言いましたね・・・私は同い年に比べたら発育は良い方じゃない！！」

箒「それにしても絶壁だな？」

春「っ！！！！・・・言っただな？いくら母さんだとしても言っただい事と悪い事が在るよ？・・・お前のその乳！！揉みしただいたらあああああ！！！」

ガバツ！

箒「年上を舐めるなよ！春香！！！」

ガバツ！

鈴の室前

—「じゃあ、また昼作つたら来るわ」

鈴「いや、今度はこっちが行くから良いよ」

雪「俺は午後はちょっと買い物に行かなアカンから行けへんわ」

—「じゃあ鈴、部屋で箒と待ってるから」

鈴「それじゃあ、昼から」

10号室

—「ただいま〜箒〜春香〜起きたか？」

箒・春「ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

—「……何が在った？」

—夏が部屋に帰ってみるとそこには母親とその娘が息を切らせながら一つのオニギリを見ていた。

—「……うん、何となく状況が分かった……二人ともお昼にしようか!!」

箒・春「っ!?!?……一夏（お父さん）!!」
ガバツ!

—「ぐはっ!!!!」

この時春香の頭が鳩尾にめり込んだ為、一夏は痛恨の一撃を食らった!!

—「……ま、まだだ!!……所でなんで箒が作らなかったの？」

箒「メンドかった」

春「でも、私お母さんのチャーハン好き！」

—「確かに美味しいよね……親子丼の味がするけど」

箒「ホント私もそれについては不思議に思ってたんだけどね」

春「でも、お母さん確か親子丼作れないよね？」

箒「似たようなモノなら多分作れるぞ？」

—「よし、じゃあ今回は箒がお昼作ってよ？……って言うか千冬姉さんのお陰で女の人は『暗黒物質』^{ダイクマター}みたいな見た目の料理しか創れないって言う固定観念に囚われそうだからお願いします！！」

箒「今の所、男女両方経験してるけど大丈夫か？」

—「うん、見た目可愛い女の子だから大丈夫！」

箒「……………」

—「何故にそんな目で見つめて来るんですか！？箒さん！！」

箒「いや、さっきの何時ぞや読んだ小説で主人公の男の子が言ってたんだ、それで言われてた女の子が顔を赤くしてたんだけど……
・・・実際言われると厳しいというか、何と言うか……」

春「キモい！！だね！！」

ザクッ！

—「ぐふっ！！」

箒「い、一夏！？ち、違う私は、こつ何と言うか？アレだ！」

春「遠まわしにお父さんがキモかったって言いたかったんだよね！！」

グサッ！

—「ゲフッ！！」

篤「コラッ！春香！！確かにさつき一夏が言った事はキモかったしウザかったが！」

ドスツドスツドスツ！

—「……………」

春「プッ！……………」

プルプル

篤「それでも日頃から口には出さない様になっているんだぞ！一夏に謝りなさい！！」

—「日頃からそう思ってるんですね……ホント何かもつすいませ

ん(泣)」

ダッ！

篤「っ！待て一夏！！」

春「お父さ〜ん、ごめんね〜」

—「うわああああああん！！！！」

ダッ！！！！

篤「ほら見る！春香のせいで一夏が世界記録の壁を超えそうな勢いでフルマラソンしに行ったぞ！！」

春「…………多分、私だけのせいじゃないよね？」

箒「さあ？何の事かな？（笑）」

春「っ！？（コ、コイツ！？確信犯か！！）」

トントン

箒「はい！」

鈴「やつほ〜遊びに来ましたよ〜・・・一夏は？」

箒「さあ？何処行ったんだらうね？・・・フフフフフフ」

春「ホントだね〜お母さん・・・アハハハハハハ」

鈴「そ、そうか？（この親子怖いからヤダ）」

春「ん？・・・鈴さん！一緒にお風呂入ろう！！」

箒「春香何言ってるんだ？」

鈴「う〜ん・・・取りあえず理由は？」

春「鈴さんだ〜い好き！！」

箒「本音は？」

春「鈴さんよく見たら美人だった・・・ジュルリ」

鈴「断固拒否だわ！！」

春「ええ〜!!お母さん鈴さんとお風呂したいよ!!」

鈴「箒も如何にかしてよ……?」

箒「……」

ジーーーーー

鈴「箒さん?」

箒「……鈴、みんなでお風呂に入ろう」

鈴「っ!?(こ、この親にしてこの子在りだよ!!)」

箒「ほら、鈴だつて何か凄い汗だし」

鈴「このアホ共が!!箒に至つてはどう言う事だ!!私は狂学者だぞ!!」

箒「鈴……私は自分に被害の来る変態は嫌いだ……それにある番組で言っていた……未確認生物だろうがそこにオツパイが在ればいいんじゃないかと、鈴……いや狂学者!!君は今美少女さ」

鈴「この変態共がああああ!!手を離せ!!つて言うかお願いします見逃がして下さい!!」

春「鈴さん!!私と脱がせっこしよう!!」

鈴「助けてええええええええ!!」

春「フフフ……助けなんてこなっ!!」

ガクツ！

鈴「っ！？」

箒「ふう〜やつと油断したか・・・」

鈴「・・・どゆ事？」

箒「いや流石に自分の娘って言うかクローンだわ、今の今まで気絶させようとしたのに中々後ろ盗らせてくれなかったからさあ・・・悪いけどこのまま春香には寝て貰おう・・・鈴は危ないから逃げた方がよいよ？」

鈴「ああ、何かもう疲れたから部屋帰って寝るわ」

箒「お休み〜」

ガチャツ

箒「さて、春香をベットまで運ぶか・・・よっこいしょー！」

寝室

ドサツ！

箒「ふう〜・・・私も疲れたし少し寝ようかな・・・」

春「zzz・・・ニヤリ」

箒「っ！？不味いつ！！」

箒「春」……マジですか？」

担任「マジですよ」

箒「冗談じゃあ……」

担任「ちなみに焼酎なら一升瓶5本までなら酔いすらしませんよ、それにいつも携帯用灰皿もポツケに入ってます！」
エッヘン！

箒「ウチの子、身長127cm何ですけど……って言うか数cm位しか変わらないんですけど……」

担任「……身長についてはあまり探らないで下さい」

箒「はあ？……っ！……！」

この時箒は気付いてしまった。担任の先生の靴がとても……とても厚底だったことに……

担任「っ！！もうっ！！篠ノ乃ちゃん！！あんまり先生の足元見ないで下さい！！」

箒「すみません……あれ？なんだろ急に涙が（泣）」

担任「ちよっ！！篠ノ乃ちゃん！？なんで泣いてるんですか！？何処か具合でも悪いんですか！？」

箒「……（激泣）」
ブワッ！

春「ねえ!!」

担任「はい?なんですか?」

春「一緒に・・・うん!一緒に頑張ろうね!!」(泣)

担任「ちよっ!?!?どう言う事ですか!?!」

春「めざせ!!お母さんだよ!!先生!!」(泣)

担任「えっ?ええ!!?!」

とある休日（後書き）

あの後一夏は・・・

—「うおおおおおおおおおおお！……！」

雪「ん？……アレは……何や！一夏やないか！！迎えに来てくれたんかいな！！」

—「ちくしょおおおおおおおおおおおおお！！……！！」
ギユウウウウウウンツ！

雪「……あれ？」

現在スタートから126・3km地点通過
タイム3時間38秒

後、午後22時頃帰宅
総合距離336・8km
総合タイム8時間47分

IS関係だけと遠足!! (前書き)

束の部屋

束「ふんふんふん……あつ! そう言えば対簿ちゃん用のお薬切れちゃったの忘れてた! 危なかった……」

IS関係だけと遠足!!

皆さん・・・久しぶりの雪尚さんやでえええええ!!何と今回校長から・・・

談話室

校長「諸君!EUから君達にある依頼が来ている!その内容は欧州各国で造られた新型ISの模擬戦の相手をして欲しいとの事だ・・・私としてはまず諸君の意見を聞きたい・・・ちなみに参加しなくても良い・・・何、心配するな!連中が文句を言ってきたとしても私が対応しよう!」

鈴「その間授業とかどうするんですか?」

校長「公欠扱いだ」

鈴「行きます!!」

雪「行きます!!主にフランスを重点的に!!」

春「私も外国行きた〜い!」

篤「春香がそう言うんなら行こうか?」

春「わ〜い!!」

一「それじゃあ、俺も行こうかな」

校長「ふむ、兵器開発に手を貸している気がして少々気が引けたが諸君がそう言うなら良かった！諸君と一緒に千冬君と東君に引率として着いて行ってもらおう。話は以上だ。・・・では、千冬君後を頼む」

千「りよ、了解でありました！！！」

校長「ハハハ！千冬君は私の教え子だった頃から恥かしがり屋だったからな。・・・ほら、少し落ち着きなさい」

一同「（そ、想像できん。・・）」

千「あ、有難う御座いますノノ」

校長「では、今度こそ。・・また会おう」

千「。・・。・・。では、お前達！出発は明日午後14時のドイツ行き便だ！13時までには談話室に集合しろ！分かったら返事をしろ！分からなくても返事をしろ！」

一同「はい（変わり過ぎだろ！！）」

こうして、夜は更けていった。・・

午後12時30分

談話室

雪「はあく楽しみやわくもしかしたらまたシャルさんに会えるかもしれへんって考えただけで・・・」

一「雪尚、顔が大変な事に成ってるぞ？」

雪「ん？おう！一夏！そらくそうなつてもしやーないで！何たつて欧州ゆーたらシャルさんに会えるかもしれへんのやで？そんなん、うれしゅうてしやーないわ！」

一「ん？でも、確か雪尚シャルと電話番号交換してなかったっけ？」

雪「ああ、それなんやけどなんやシャルさん今回のこと聞いたら秘密やそうや・・・まゝ正直言い方がたまらんかったわ」

一「そうか、それは良かった・・・」

雪「所で一夏の荷物（熟睡中の箒）はそれだけかいな？」

一「ああ、ISの量子変換って便利だな・・・まあ、箒は四次元ポケットが在るらしいが・・・」

雪「はあ！？なんやとあの世界中の子供たちが大好きな青い猫型ロボットのパケットを何で箒がもつとんねん！？」

一「頼んだらくれたそうだ・・・」

雪「……いつたい誰に頼んだら貰えんねん……」

天界

神「ハクシユン!!」

チ「貴方、風邪ですか？」

神「いや？噂とかじゃない？」

チ「じゃあ、また箒さんから電話来ますね」

神「……」

ガタガタ

談話室

一「ハハハ……大変だな……」

雪「それにしても鈴、遅ないか？」

一「春香が迎えに行った筈なんだけど……」

箒「うう……ん？おはようユッキー……」

—「ん？箒起きたのか？なら自分で立ってくれ」

箒「zzzz……」

雪「なあ、鈴から聞いたんやけど箒って確か寝ててもすぐ起きるんちゃうかったっけ？」

—「ああ、箒はすぐ起きるぞ？しかも寝付きが悪い……」

雪「じゃあ、何でいま起きへんかったんや？」

—「それは箒が遠足とかの前に夜寝れない子だからだ……」

雪「な、なんやて！？……って言うのは置いて鈴そろそろ来んと不味いんちゃうん？」

バタン！

—「雪「っ！！」」

箒「っ！？……zzzz」

ビクッ！

鈴「ハアハアハア……誰だ！春香を起こしに寄越したのは……！」

—「いや、勝手に行ったんだけど……」

鈴「何でちゃんと止めなかったの……危うく食べられそうになったじゃない……！」

雪「まあまあ、子供がやった事やし？許したりーな」

鈴「普通に起こされればこんな怒らんわ！ー！」

ー「どんな起こし方されたんだよ？」

鈴「半裸で縛られてた・・・」

ー「・・・春香？」

春「・・・テヘッ」

ー・鈴・雪「はあ・・・」

箒「・・・んあ！？・・・ZZZ」

ビクッ！

ガチャッ

千「全員揃ったか？・・・篠ノ乃いい加減起きろ！」
ゴスッ！

ー・春「あつ・・・」

箒「・・・」

ブチッ！

千「はっ？」

箒「千冬さん？・・・一夏？・・・ん？まあ、良いか・・・私を起こしたのは貴様らかああああああああああ！！！！」
ビリビリッ！！

千「っ！？な、何と言う大声だ！」

束「ああ、箒ちゃん怒っちゃった・・・エイッ！」
ドスッ！

箒「オウフ！」
ガクッ！

一同「・・・・・・・・」
ドキドキ

束「さて、みんな行こっか？」

千「た、束さっきのは何だ」

束「ああ、アレは箒ちゃんが寝不足で寝てる時に起こされて辺り一面焦土にしない様に眠らせる薬だよ」

千「効果はどれくらいだ？」

束「普通の人なら一生起きないよ？」

千「・・・・・・・・」

一「えっ？じゃあ、箒は？」

束「それが筭ちゃんはこのお薬使っても普通の人が寝る位の睡眠時間しか寝てくれないんだ、しかも起こせば起きるし……」

一「よし！みんな絶対筭を起こさずにヨーロッパまで行くぞ！！」

一同「おーー！」

注意 小声です。

こうして一行は細心の注意を払って何とか飛行機に乗って離陸まで持ってきたが……

飛行機内

犯G「お前等静かにしろ！！」

「キヤアアアアアアアア！！」

犯D「騒ぐんじゃねえ！！」

犯A「良いかお前等ポニーテールの女は見つけ次第打ち殺せ！！」

犯達「オーーー！！」

一「お前ら騒ぐんじゃねええええ！！」
ドカツ！バキッ！

犯E・F「グハッ！」

犯A「な、何だ!?!」

千「箒が起きたら墜落するだろうが!?!」
ドコッ!ベキッ!

犯G「あべしっ!」

犯A「ク、クソ!?!お前等あいつ等を撃て!?!撃てええええ!?!」
パンッ!

箒「……んっ……」

千「……っ!?!」
ビクッ!

犯A「へへっそのまま動くんじゃねえぜ」

犯B「そうだ、動いたら撃つからな!」

千「わ、わかった!動かないから撃つな!?!良いか?絶対撃つな!
!撃つたら皆殺しだ!?!」

犯達「ええ〜!?!」

—「っつて言うか音たてんな!?!死にたいのか!?!」

犯G「何言ってやがる!?!死ねガキ!?!」

パンツ！

雪「一夏！！あんま挑発するなや！！死ぬ気か！？アイツ等の銃弾
なんざ俺の超能力で止めれるけど！俺でも音は止めれへんのやで！
！」

一「わ、わるい雪尚……手遅れか……畜生！！」

千「っ！！束！早く薬を！！」

束「ちーちゃんゴメンね……薬さつきアレ（犯G）が撃った弾が
当たってもう無くなっちゃった……いやああああ！！束さんま
だこんな歳で死にたくないいいいい！！」

千「た、束！落ち着け！まだ何とか出来るはずだ！！」

束「ああ……最後にちーちゃんに会えてよかった……」

千「束ええええええええ！！帰ってこい！！」

犯C「お前等何騒いでんだ！！」

第「騒いでんのはお前等だろ？」

犯A・B「っ！？お、お前は！！」

第「何だ？ハイジャックつていう奴？」

犯A「終わった……」

犯B「ママ・・・俺、ママより先に行くよ・・・」

犯C「お前達何言ってるんだ？あんなガキ一人にビビりやがって！！」

箒「よいしょっと・・・はい、出口を用意してやったぞ？」

春「お母さんこの飛行機一応、飛んでるんだけど・・・」

箒「それが何か問題か？」

一同「（あ、悪魔だ！悪魔が居る！！）」

雪「どうしたんや？箒、いくらなんでもそれは酷ないか？」

箒「ああ？」

雪「っ！！こ、此処は俺らに任せてもう寝とき！眠いんやろ？」
ビクッ！

箒「・・・わかった・・・だが、鈴を借りるぞ？」

雪「おうっ！えんりよせんと貰うとき！！」

箒「・・・わ〜い！！」

春「あっ！良いな〜！お母さん私も！！」

鈴「みんな・・・私と言う犠牲をどうか忘れないでくれ、そして覚えていてくれ・・・公共の場では他の人に迷惑を掛けてはいけないと言っ事を！！」

ズルズル

—「鈴！ゴメン！！俺、助けられなかった！！だって幕怖いんだもん！！！」

鈴「しょうがないよ・・・だって幕つてまず人かどうかが怪しいもん・・・」

—「リーーーーーーンッ！！！！！」

ガチャッ！

鈴「アーーーーーッ！！！」

—「千・雪」リーーーーーーンッ！！！」

犯達「・・・・・・・・・・」

雪「くっつ！！お前等！！絶対許さへんで！！！！！」

犯達「ええ~~~~！！！！！」

—「鈴の弔い合戦だああああああ！！！！！」

一同「オオオオオオオオオオオオ！！！」

犯達「ご、ごめんなさあああああああいつ！！！！！」

ドイツの空港

箒「んっ！んっ！はあよく寝た・・・」

鈴「あつという間だったね」

春「お母さんまだ眠い」

箒「抱っこしててあげるから寝てなさい」

春「は〜い・・・zzzz」

一「・・・鈴、大丈夫？」

鈴「何が？」

雪「鈴、お前箒に連れてかれとつたやん！！！」

鈴「一緒に寝てただけだけど？」

一・雪「・・・八八八」

東「ちーちゃん！東さん生きてる！生きてるよー！！」

千「わかった！わかったからいい加減離せー！！」

次回に続く！！

IS関係だけど遠足！！（後書き）

ドイツ基地

ク「まさかだったな・・・」

ラ「ええ、そうですね姉さん」

ク「ラウラ、お前は私の上司だぞ？」

ラ「なら、姉さんも敬語を使って下さい」

ク「ああ、分かっている、だが今は休暇中だからな、構わんだろ？」

ラ「まあ、私は言葉遣いに関しては相当問題がないなら気にしません」

ク「そうか・・・でも、本当に意外だったな」

ラ「ええ、本当に意外でした。まさかウチのフランクが実は雌だったなんて・・・」

現在フランクはシ バニア ミリー状態だった

ホテルから演習場まで（前書き）

春「この話終わってないのに続編出しちゃった」

第「春香・・・次回作にお前の出番は・・・ほぼ無い!!」

春「・・・お母さん・・・裏口って知ってる？」

第「意味が分かんないけど・・・うん、何かこの子は今此処で消さないといけない気がする」

ホテルから演習場まで

お久しぶりの鈴音です。さて今回のこの旅行の目的は欧州の新型ISの稼働テストを含めた模擬戦らしく、日本からドイツへと渡って来た訳なんです。途中ハイジャック飛行機をされた為にドイツのホテルへのチェックインが午後19時位に済む予定でしたが、あの馬鹿共（犯人達）のせいでホテルへのチェックインが午後23時に成ってしまい、そのせいでチェックイン時の状況は春香が寝て箒が抱っこして一夏はニヤニヤしながらその光景を見て千冬さんは虚空を見て動かなくなり、束さんは動かない千冬さんをニヤニヤしながら見つめて、雪尚は千冬さん同様動かなかったがブツブツと・・・

雪「大丈夫や、じつちゃん・・・俺はまだそっちへは行かへんよ・・・うん・・・うん・・・心配せんでも元気に過ごして・・・」

と、明かに向こう側へと渡り掛けていて・・・あつ・・・あつ・・・ああ、動いた・・・はい、お迎えが来そうな予感です。

308号室

箒「春香、ほらっベットだよ」

春「やあ～～～～」

箒「はあ～～～～」

千「箒、変わってやるうか？」

箒「大丈夫ですよ、私ももう寝ますから。．．．お休み。．．．
zzz」

鈴「それじゃあ、私も寝ようかな？」

束「うん。．．．」

千「どうした？束」

束「いや、ちーちゃんと一緒に寝ようか、箒ちゃんと一緒に寝ようか迷ってて」

千「一人で寝ろ」

309号室

雪「なあ、一夏明日は何所と模擬戦するんや？やっぱりドイツか？」

一「いや、明日はフランスとだった気がするけど？」

雪「はあ？なんでドイツに来てフランスと何や？フランス行ってからフランスの奴らと戦うん違うんか？」

一「雪尚話聞いてなかっただろ？」

雪「は？いや聞いたったで？でも、何いっとるんかはさっぱりやっただけだな！」

一「まあ、説明したのが束さんだったからね。．．．多分箒も。．．．
ううん箒は全く知らないんじゃないかな？」

雪「ちょい待ちーな！何で一夏はわかって妹の篝はわかって無いんや？」

—「多分篝は束さんが話を一回脱線させたらもう聞いてないと思う」

雪「篝・・・姉さんやのにキツイなあ・・・」

—「篝あいつだから・・・」

こうして夜は更けていった・・・

朝

309号室

—「う、うづん・・・っ!?ベ、ベットの中に誰がいる!？」

雪「んっ・・・何や一夏人が気持ちよう寝とった時に・・・一夏」?

—「雪尚・・・じゃない・・・ま、まさか!?篝さん!!いや、春香という可能性もある・・・一体・・・一体誰が中に!！」

春「ワクワクワクワク」

—「・・・は、春香しゃんが此処にいるという事は・・・篝が俺のベットの中に!！」

一夏が、そう言って息を荒くし始めたとき突然一夏たちの部屋のドアが開いて

第「春香〜ご飯だよ〜」

春「は〜いつ!!・・・お父さん、私ねこの前TVで 怨つていう映画見たんだ〜」

一「へ、へえ〜それで?」

春「主人公の子がね布団で寝てて起きたら布団の中にお化けが居たんだ!」

一「春香さん何故今その話を?」

春「ん?理由はね〜お父さんが寝起きでいきなり恐怖体験したらスツゴイ面白いだろうなあ〜って」

一「じゃ、じゃあベットのの中には春香がドッキリで用意した何かがあるだけか・・・ああ、動いてる・・・人形じゃなかった・・・」

第「・・・一夏」

一「何?」

第「ニコッ・・・」

この時の第さんの笑顔はとても黒かったと後に雪尚によって証言された

篤「じゃあ、春香行こっか？」

春「うん！バイバイ！お父さん」

一「待つて下さい！！・・・くっ！もう居ない・・・雪尚！！」

一夏が振り向くと其処に雪尚の姿は無く、只一枚だけ書置きが置いて在った、一夏は内心ブチ切れながらも精一杯の理性で堪え雪尚が残したであろう書置きを読んだ

一「・・・『まだ、死にた無い』・・・俺も死にたくないわああああああ！！！！」

一夏の理性は崩壊した

一「アハハハハ・・・行くのは一瞬だ・・・」

そう言つて毛布を捲つて見ると中には・・・

東「んんっ・・・朝・・・おはようつくん・・・」

何とベットの中から野生の束が現れた！！

コマンド

たたかう

千冬召喚
パルンテ
現実逃避

一「千冬召喚で」

何と！MPが足りない！！

一「なん・・・だと・・・パルンテ！！」

一夏は生き残った喜びで束に抱き着いた！！

一「束さん！俺・・・俺生きてる！！」

束「えっ？う、うん生きてるね？」

ガチャッ

千「一夏、そろそろ起きないか・・・何をしている？一夏」

一「バ、バカな！？MPが足りないんじゃない？」

箒「説明しよう！！」

一「ほ、箒さん！？」

箒「パルンテとは唱えると何が起こるかわからない・・・一夏・

・・姉さんに何をしている?」

一「ああ、俺は詰んだんですね、わかります。」

千・箒「フンッ!」

一「ぐふっ!・・・だ、だが箒の攻撃は嫉妬だったと思いたい・・・」

箒「特に理由はない!・・・只私の所には千冬さんが居てな・・・もう、起きていきなり気が気じゃ無かった・・・それだけだ」

一「それって・・・只の八つ当たりなんじゃ・・・」

箒「そうとも言っな!」

一「清々しく言い切った!?!」

箒「まあ、安心しろ犯人は、もう処刑済みだ」

千「処刑というか無理やり嫌いな食べ物口に突っ込んでたな」

一「一応聞いとくけど・・・犯人って?」

箒「春香だが?」

一「虐待ダメ!!ゼツタイ!!」

箒「安心しろ!椎茸は許してやった!!」

千「ん？椎茸がダメなのか？」

箒「ええ、基本的に味覚は私と同じなので……」

千「じゃあ、箒も椎茸がダメなのか？」

箒「はい、具合で言うとなんただけで吐き気をもよおします……！」

千「だが、好き嫌いは良くないぞ？」

箒「食べましようか？食事中何度もリバーヌしますけど？」

千「わかった、だから椎茸は今後避ける」

束「所で何で私は、いつくんの所で寝てたの？」

箒「春香が夜中姉さんを起こして寝ぼけている内に誘導したんだって」

一同「（ああ、やっぱり箒の子供だ……）」

鈴「千冬さ〜ん！！ドイツ軍の何か偉そうな方が来てますよ〜！」

千「っ！！全員120秒以内に準備しろ！！」

一同「はあ〜い」

千「因みに遅れた物は……」

そういつと千冬はカバンから脇差位の小刀を取出し

千「切腹してもらおう!?!?!」

一同「ラ、ラジャー!?!?!?!」

某所

ドイツ軍演習所

千「各自、呼び出しのアナウンスが流れるまでストレッチでもする」

と、言っただけ千冬はテントの中に入って行った

箒「あゝさぶっ……姉さん……ってアレ?」

鈴「箒、どうしたの?」

箒「いや、内の姉が居なくて……」

鈴「東さんなら千冬さんを追いかけてテントの中に入っていったけど?」

箒「はあ……模擬戦の間春香を見ててもらおうと思ったのに……」

鈴「また後にも言えば?」

箒「そうするか……所で一夏たちは？」

鈴「シャルを探すんだ〜って雪尚に連れてかれてた」

箒「………春香」

春「何？お母さん」

箒「人はね、どこまで行っても一人なんだよ」

鈴「ちよつと待て！春香ちゃんを放置して逃げよつとするな！！」

箒「大丈夫だつて見てみ、春香を」

春「おお〜！！あのお姉さん胸おつきい〜……揉ませてくれな
いかな〜」

箒「さっきの言葉は撤回する……見てないと不安だ……」

鈴「安心して手伝うから………」

次回！！IS模擬戦！！相手はフランス！！

春「おお〜あつちの人も中々………」

ホテルから演習場まで (後書き)

一夏側

雪「ん？ア、アレは！？シャ、シャルさん！！！！」
ダッ！

一「ゆ、雪尚おおおお！！ダメだ！！今行っても警備員に！！」

警「はい、ちょっと一緒に来てもらおうか？」

雪「愛の為に戦うだけや……」

警「はい？ぐっ！……」
ガクッ！

雪「シャルさん！！」

この時一夏はこう思った、そうだ俺に出来るのは今すぐ此処に千冬姉さんと呼ぶ事だと、一夏は後方へ全速前進した……

後に千冬姉さんがとてもスッキリした様子で雪尚を引き摺って居た
そうな

友人と再会（前書き）

某国長官「全く！あの yellow monkey 共め！調子に乗りおつてからに！！大体あの様な辺境の島国に我が国の技術力が負けているというだけでも腹立たしいのに！ブツブツ……」

篤「聞いた？」

鈴「うん、ハッキリと」

—「アイツ、どうしてくれようか？」

雪「取り合えず、シバかんとなあ〜？」

東「フフフ……東さんカチーンっと来ちゃったかなあ〜」

友人と再会

どうも筈です。さつき案内アナウンスが流れて現在私達はピットで準備している訳なんです、さつき何処ぞのお偉いさんが、ちよ／＼と私達の悪口を言ってますね／＼それで姉さんにも手伝って貰いましてね／＼．．．はい．．．そこで私達は思ったんですよ／＼『そうだ、欧州の新型IS全部爆散させよう！』と、只雪尚がシャルだけはやめてあげて．．．言っていたんですが．．．私達が、あんな良い子を攻撃できるわけないんです！！

演習場

一夏側

筈「さて、出て来たのは良いんだけど」

鈴「こつち4機なのに何で向こうは10機位居るのかでしょ？」

一「まあ、シャル以外は．．．．．」

雪「可哀想やけど瞬殺や！！」

フランス側

シャ「みんな！気を付けてね！絶対に一人で戦ったらダメだよ！特にあの赤い機体は戦ったら絶対撃墜されるから！！一番最後に全員で集中攻撃だから！！もし狙われたら少しでも時間稼ぎをしてね！」

「「「「「はい！」「」「」「」

こうして一夏達とフランス代表の模擬戦もとい一夏達の八つ当たりが始まるうとしていた

千「では、これより模擬戦を開始する！！」

千冬が模擬戦の開始を双方に伝えた為、フランス陣営が一夏達の方へ向くと

鈴「皆殺しじゃああああ！！！」

箒「最初から全力で叩きのめしたらああああ！！！」

—「戦じゃああああああ！！！」

雪「シャルさん！！愛してるうううううう！！！」

シャ「ゆ、雪尚！？恥ずかしいよ！！！」

仏一同「（ああ、来るんじゃないかった・・・）」

其処からは、まさに地獄絵図だった、箒の攻撃が掠っただけでシールドエネルギー（以降SE）は削られ、一夏がバスターライフルを打つ度に一機つつ戦闘不能になり、鈴は副射波動を乱発し相手側をビビらせ、雪尚はシャルと会話を楽しみつつサイコキネシスで相手の銃弾を止める等フランス陣営はボロボロ（シャルロット以外）だったトドメに箒が

箒「何故君たちがこんな目に在って居るか理由を教えてあげよう！
姉さん！！」

束『OK！箒ちゃん！！』

箒が束との通信を終えて直ぐに

箒「みなさん！モニターに注目！！！」

箒がそう言つと各国の来賓やIS関係者がモニターを見た

某国長官『全く！あのyellow monkey共め！調子に乗りおつてからに！！大体あの様な辺境の島国に我が国の技術力が負けているというだけでも腹立たしいのに！ブツブツ・・・』

雪「ちゅー訳で！！」

「俺達は此処に宣言する！！」

鈴「さっきの奴！無事に帰れると思つな！！」

箒「そして内の春香をやらしい眼で見んな！！」

その後、某国長官は一夏達に処断され、会場からは歓声が上がった

一同「（こいつとんだだけ嫌われてんだよ）（や）（）」

こうして一回目の模擬戦が終わった

夕方 ホテル

308号室

篤「牙折った〜!!」

一「刃翼壊した〜!!」

鈴「フレンドリーファイヤー味方射撃!」

一「グハツ!」

春「止め刺した〜!!」

一同「イエ〜イ〜!!」

思ったより模擬戦が早く終わった為、暇を持って余した一夏達は部屋で某ハンターがモンスター達と死闘を繰り広げるゲームをみんなでしていた、何故雪尚が居ないのかというと単にシャルの泊まっているホテルへ遊びに行つて居る為である。その事を一夏達に伝えると『リア充爆ぜろ』とキレられ部屋から追い出された訳である

某ホテル

雪尚側

雪「シャルさ〜ん!遊びに来ました〜!」

シャ「雪尚、シャルで良いって何度も言ってるのになかなか“さん”付けやめてくれないね？」

雪「フッフフ・・・それは俺が思春期の少年やからですわ」

シャ「フッフフ、雪尚ってやっぱり面白いね」

雪「所でシャルさん時間あるんやったら一緒に遊びにいかへん？」

シャ「うん、今日の事があったから明日まで暇だったから調度良かったよ」

雪「それじゃあ、どこか行きたい所とかあるん？」

シャ「うゝん・・・お城とか見てみたいな」

雪「お城かゝ・・・ドイツは、あんま詳しく無いからなあゝ有名なお城とかあるん？」

シャ「ここに来る途中、観光ガイドを見てたらね、ヴァルトブルク城っていうお城の写真を見つけたんだ、その写真のお城がとっても綺麗だったから見てみたかったんだ」

雪「よっしゃ！なら其処行こか」

リア充移動中

ヴァルトブルク城

改修中により此処より中へは立ち入らないで下さい

シャ「……………」

雪「シャ、シャルさん元気出して!」

シャ「う、うん!ゴメンね、付き合ってたのに……………」

雪「いやいや!気にしてへんよ、俺はシャルさんと居れるだけで、えかってんから!」

シャ「ゆ、雪尚……………」

雪「シャルさん……………」

二人がいい雰囲気で見詰め合っていると

箒・春「……………」

ジ……………」

雪・シャ「っ!?ほ、箒!」

箒「ん?ああ、私の事ならお構いなく、只食べ歩きしてたら久しぶりにシャルに合ったから話掛けようとしたただだから」

春「ねえ!ねえ!キスするの!私とお母さんは気にせず!」
「っ、
ディーブな奴を!」

雪「は、春香ちゃん何ゆーてんねん!」

シャ「ハハハハ・・・ん？お母さん？・・・ねえ、箒」

箒「何？」

シャ「その子、箒の事お母さんって呼んでたけど・・・まさか箒の子供じゃ・・・」

春「どうも初めまして篠ノ乃、又は織斑春香です。」

シャ「ほ、ほっほほ、箒！？何やってるの！？流石に子供は、まだ早いよ！！そ、そりゃ〜若さ有り余ってって言うのは在るだろうけどー！ー」

箒「シャ、シャル？」

シャ「それでも若すぎるよ！！相手は誰？一夏なのは分かってるけど違うかもしれないし、一応聞いてあげるから！！」

箒「い、いや、だから」

シャ「とにかく、一夏の所に行くよ！！！！」

箒・春「えっ！？」

雪「えっ・・・シャ、シャルさ〜ん！！街中でESはアカンて〜
~~~~！！」

シャルは雪尚達を抱えてドイツの空へ飛び上がった



少女暴走中

ホテル

308号室

一「暇だな」

鈴「暇だ〜〜箒達と一緒に食べ歩けば良かった」

一「でも、もうすぐ雨降るらしいぞ？」

鈴「じゃあ、行かなくて良かった」

一・鈴「はあ〜〜」

一夏達がダレしていると突然、ドアが開きシャル達が入ってきた

一「ん？…ってシャル！？どうした？」

シャ「一夏！何時かは、やるとは思ってたけど…！いつの間に子供作っただの…！」

一「はあ〜！…？ちょっとそれどういう…！」

シャ「惚けないで…！幾ら箒が強くつても一応女の子なんだよ…！」

箒「そういえば私は今女だったな…！」

ハッ!

春「えっ!?お母さん!?まさか、天然!?!」

雪「箒、時々おかしな事言ってたのは天然やったからか」  
納得!

鈴「前にも『あっ!俺今18歳じゃん』とか言ってたもんね(前世的)」

春・雪「えっ?」

シャ「と、とにかくちゃんと責任取らないと!!傷つくのは箒なんだよ!」

箒「・・・ハッ!閃いた!!エイッ!  
ペシッ!

シャ「イタッ!ほ、箒何するの!?!」

箒「いや、こうしたら話聞くな〜って」

シャ「話?」

箒と一夏はシャルロットに春香について説明した、途中春香が話を邪魔しようとしたので箒が寝かし付けた、その時シャルが

シャ「虐待ダメ!ゼツタイ!」

と言っていた

シャ「という事は、僕の勘違いって事？」

篤「一」そういう事に成るかな？」

シャ「ハ、ハハハハ・・・ゴメン！一夏！篤！」

一「良いつて、気にしなさんな」

篤「そうじゃ、若い内は、よお間違っもんじゃて」

雪「お前らは老人かいな・・・」

シャ「プツ！アハハハハ！ふ、二人ともお年寄りみたい！！」

篤「一」フオツフオツフオツ！！ホンに年は取りとうないわい」

雪・シャ「・・・・・・・・」

演技が上手すぎて言葉が出ない十代の少年少女

篤「一」はあく何かダルイ・・・」

そんな二人を心配しつつ、体調不良な十代（精神年齢32歳）の少年少女達

鈴「お腹減ったな？」

自室で空腹な十代（精神年齢32歳）の少女

友人と再会（後書き）

その夜

308号室

春「フハハハハハ・・・お母さん・・・もっと打って・・・」

篤「・・・・・・・・・・」

春香の教育について真剣に考え始めた篤さんでした。

秩序無い戦い（前書き）

PV49000・・・す、  
凄いのか基準わかんねえ

## 秩序無い戦い

箒です。今日もまた演習場です。昨日フランスのIS部隊をデストロイしてしまつたせいで他の国が模擬戦をキャンセルして欲しいと言つて来たので日本に帰れると思つて居たんですが、何やら私と一夏に一对一の模擬戦を挑んで来ると言う奴がいて・・・

### 演習場

箒「何で！何で帰れないの〜！……つて少女っぽく言つちゃう位だよ」

一「そんなん、アンタと戦いたいつて人が居るんじゃあね！……つて事だからだと思つけど？」

千「あんまり騒ぐな、大体日程ではお前達は後四日は帰れなかつたぞ」

一「いや、まあ……そう考えると早いんだろつけど、そういえば姉さん、昨日どっか行つてたけど何してたの？」

千「ん？モンド・グロツソに出ていた」

箒「何それ？」

一「アレだよ……うん、アレだ」

箒「アレか！」

千「お前達、分かっていないだろう・・・」

箒「アレでしょ？IS乗りの最強を決める大会」

千「何故さっきのやり取りで通じるんだお前は・・・」

—「愛だよ！」

箒「うん、そだね〜愛だね〜」

千「篠ノ乃、投げやりになるな」

箒「うん！愛だよ！LOVEなんだよ！一夏！！」

そう言って箒は一夏に抱き着いた

—「ほ、箒ノノ」

箒「愛なんだよ！！」

そして一夏をガツチリ捕まえて、脇腹を思い切り抓った

—「箒！？痛い！箒の愛が痛いよ！！」

箒「そう！私の愛（ストレス発散）をしっかりと受け取ってね！！」

千「し、篠ノ乃、性格が変わってないか？」

束「んふふふ！束さんが説明しよう！箒ちゃんはね、気まぐれなんだ！」



篤「あつ！姉さん！私の精一杯の愛を上げます！」

束「ほ、本当！？篤ちゃん！！」

篤「はい コレ」

束「・・・ほ、篤ちゃん、これ何？」

篤「何って！只の姉さんの黒歴史ノートに決ってるじゃないですか」

束「篤ちゃん、こ、これを何処で手に入れたのかな？」

束は滝の様な汗を流しながら見た目冷静に、内心メダパニ状態で篤に質問した

篤「もう姉さんったら・・・ほんの少し神頼み（パシリ）しただけですよ」

束「っ！！（あ、あわわわわわわわわわわ！！！？）」

一「（篤、ノリノリだなあ）」

千「（束、少し優しく接してやるか）」

篤「うふふふ・・・飽きた・・・模擬戦ってまだなの？」

千「・・・束、模擬戦の準備はまだ出来んのか？」

束「にやつ!?ちーちゃん!違うよ!!この中にちーちゃん宛に書こうとしたラブレターの下書き何て無いよ!!」

千「……模擬戦の準備はまだ出来ないのか?」

束「ああ!!模擬戦!!うん!出来る!出来るから呼びに来ただけだよ!!ア、アハハハハハハハハ!!」

そついうと束はもの凄い勢いで走り去って行った

千「……箒、度が過ぎるぞ」

箒「なら、金輪際姉さんに私と春香がお風呂に入ってる時に天井裏から乱入するのを止めさせて下さい」

千「……良い判断だった、箒」

一「束さん、箒の時にも入って行ったのか・・・(苦労してんな)」

箒「箒の時にも?・・・詳しく話、聞かせてくれるかなあ?」

一「ア、アレ!?箒、どうしたの?ま、まさか!?嫉妬!!」

箒「ヤンデレって言うのをやってみたぜ!」  
サムズアップ

一「……姉さん、助けて・・・」

一夏が千冬の方へ振り向くと

千「束め・・・コロスコロスコロスコロスウラヤマシイコロスコロスワタシモイチカトハイリタカッタ」

一「（わぁ〜お！姉さんが病んでる！）」

箒「（良かったじゃないか！ほら、嫉妬だぞ！）」

一夏達が千冬を宥めていると模擬戦の開始を知らせるアナウンスが流れた

### 模擬戦会場

千「二人とも！相手はお前らの戦いを見て、なお模擬戦を希望している！油断するな！」

一・箒「了解！」

一夏側

一「俺の相手はっと・・・アレ？何だろ、セシリアが見える・・・」

セ「お久し振りですわね、一夏さん」

一「うん、久し振りだね（ヤバい！アレってファンネル見たいな奴着いてたはず！）」

セ「では、お時間もあまり在りませんので、参りましょうか・・・行きますわよ！一夏さん！」

そう言ってセシリアはいきなりスターライトmk?を一夏目掛けて放った、だが一夏は余裕をもって避けたかと思うと

一「織斑一夏、作戦を開始する！」

セ「一夏さん！逃げますの！！」

もの凄い速さで上昇して行った、セシリアはと言つと開始早々背を向けて消えてしまった一夏に怒りを覚えていた

セ「もう！一夏さんつたら！男性のくせに淑女レディを置いて消えてしまふなんて！失礼ですわ！」

一方その頃一夏は

大気圏内

一「一回で良いから大気圏から落下しながらバスターライフル撃つて見たかったんだよね〜さて、織斑一夏！目標を狙い撃つぜ！！」

セシリア側

セ「・・・不戦勝ではツマリませんし、どうしましょっつ？」

そう言ってセシリアが余裕をかましている

セ「っ！いな、何ですの！？BT兵器！？」

一夏側

一「かあ〜！外した〜揺れるから狙い難いんだよな〜・・・よし！  
数撃てば当たるだろ」

一夏はセシリア目掛けてバスターライフルを乱射した

セシリア側

セ「きゃあっ！な、何なんですの〜！！」

セシリア、気合い避けにより、今だ健在

セ「もう！埒があきませんわ！」

一「大気圏と言つか、此処まで来てまた避けられた〜！」

セ「っ!?!」

一夏が撃ったビームをセシリアが気合い避けしている内に一夏はセシリアの近くまで落ちて来ていた、その事に驚いたセシリアは動きを止めてしまい

セ「あっ!?!」

一「チャンス!!!」

セシリア、撃墜

箒側

箒「いや〜ホント久し振りだね〜ラウラ?」  
ドカ〜ン!

ラ「ああ、心配したぞ?箒」  
シュツ!

注意：現在打合中

箒「いや〜それにしてもラウラのそれ、チーと過ぎない?」

ラ「A I C（慣性停止結界）の事か?一度捕まったのに力づくで逃げ出した箒の機体の方がズルいぞ?」

箒「まあ、そっ何ですけどね〜」

ラ「だが、どうする?箒の機体には射撃武器は無いのだろう?」

箒「いやっ!?分かんないって!凄いの在るし!!（ゲッタービームとか）」

ラ「ふっ・・・斧を投げるのだろうか?」

箒「か、鎌だつて投げるわい!!」

ラ「まあ、私のA I Cの前では無力だがな?」

箒「・・・特攻!!」

ラ「愚かな!!」

箒はラウラに突っ込んで行った、だがラウラのISのAICにより捕まってしまった

箒「くっ!!」

ラ「箒、そんな事でどうする!弛んで居るぞ!・・・だ、だが安心しろ、私がお前を守ってやる!／＼」

箒「・・・パドダウン?」

ラ「私がお前を守ってやると言ったのだ／＼」

箒「な、何故そついう事に?」

ラ「箒、覚えているか?私はまだ小学生で弱虫だった頃」

箒「(嘘だ!入学早々、上級生の男子14人を一人でシメたのを知ってるぞ!)」

ラ「シャル達と遊んでいた時に不審者に迫られていた時、箒が助けてくれたあの時だ」

箒「(・・・ヤベツ!記憶にねえ!?)」

注意：在ります(3〜4話辺り)

ラ「その時から、私は箒！お前に憧れていたのだ！」

箒「（何か、聞いてて恥ずかしいな・・・ゲッタービーム撃とうかな？）」

ラ「だが、その憧れは何時しか恋に代わっていた！」

箒「（アレ？ラウラフラグ！？ヤッター！女なのに！？百合っ娘フオ〜〜！！）」

ラ「初恋だった・・・だから！篠ノ乃箒！お前は私の嫁だ！異論は認めない！！」

箒「嫁ではなく婿をお願いします！！」

ラ「異論は認めん！お前は私の嫁なのだああ！！ムゲツ！」

箒「フゲツ！？」

箒はラウラに唇を奪われた、

1分30秒経過

箒「（AICで逃げられない！！ヤバい！息が！？さ、酸欠になる！？）」

ラ「んっ・・・箒、抵抗するな」

箒「酸欠になるだろうが！！ゲッターアアアアア！！ビイイイイイイイイイイムッ！！！！」



ラ「恥ずかしがり屋め……」

箒「ハア……ハア……窒息死するかと思った……」

ラウラ 撃墜

後に箒はラウラとの一件を一夏に話したら飛び掛かって来たのでISを展開、そのまま一夏を抱き締め、超至近距離でゲッタービームを喰らわせ、一行は日本へ帰った

仲良し六人組再び（前書き）

IS学園付属第二中学校

校門

？「とうとう来ちゃったね・・・」

？「ふん、私は嫁と一緒に居ただけだ」

？「貴方の言う嫁と言うのが何方かは知りませんが、他の方々に「迷惑を掛けないで頂きたいですわ」

## 仲良し六人組再び

こんにちは箒です。昨日、日本へ帰って来たので本日は時差調整の  
為にお休みになりました。と、言うか今日は土曜日なのでどちらにし  
るお休みな訳です。

朝 学生寮10号室

箒「zzz・・・」

春「zzz・・・」

ー「ハア〜・・・寝てる時は癒されるのになあ〜・・・さて、姉さん  
と朝練だ」

十分後

箒「・・・あ〜朝か・・・二度寝しよ」

そう言つて箒が横になると

春「お母さん！控えめボディの美少女が全裸で寝てたよ！！神は私  
を見放さなかつた！」

箒「春香〜危ない薬使つたんだね？おいで、お母さんが息の根止め  
てあげるから」

箒が春香の方へ振り向くと

春「さあ〜お姉ちゃん、私と良い事しようか〜」

ラ「っ！！親子のスキンシップと言う奴か！？」

春香とラウラが全裸でじゃれていた

箒「……………」

春「ウフフ！お姉さん中々のモノ持つてるね！」

ラ「この動き！？流石は箒の娘という事か！だが、親として負ける訳にはいかん！！」

二人の戦いは激しくなる中、箒はと言うと

箒「……………」

寝惚けて状況を理解出来ていなかった、そして二人の戦いは終局を迎えようとしていた

春「ハアハア……お姉さんそろそろ我慢出来なくなってきたから終わらせるね」

ダッ！

ラ「このラウラ・ボーデヴィツヒ、嫁の前で負ける訳にはいかん！

！」

ダッ！

二人が今まさに最後の一撃を相手に繰り出そうとしたその時

箒「・・・ああ、そうか・・・黙らせればいいんだ・・・」

そう言うと箒は、二人の頭を鷲掴みにした

ギリギリギリギリギリ！！

春「お、お母さん、死ぬ！！私痛くて死んじゃう！！」

ラ「よ、嫁の愛が痛い・・・」

箒「そうだ、ラウラ・・・これは私からの二人への愛（お仕置き）だ」

ガチャッ

ー「ただいま・・・箒、何やってるの？」

千冬の朝練の後、箒達を起こしに来た一夏は見てしまった、箒が全裸のラウラと春香をアイアンクローを噛ましながら浮かせているのを

箒「ああ、御帰り一夏」

春「お、お帰りお父さん・・・私、もう無理みたい・・・」

そう言って動かなくなる春香さん

ラ「久し振りだな？一夏、元気そうじゃないか」

「そういつラウラはすごく変わったね？」

箒「所でラウラ、何で此処に居る？ドイツで別れた筈じゃあ？」

ラ「何を言っている？箒、お前は私の嫁だ！夫婦とは互いに包み隠さず一緒に暮らすモノだろう」

箒「その結果が全裸か？」

「ラウラ……言つとくが箒は俺の嫁だ！！」

箒「おゝいー夏、私が元はお前と男友達だった事を忘れるな？」

「今は女の子だ！問題ない！！」

箒「ギャース！？」

ラ「フンツ！奪い取るまでだ！それはそうと箒、いい加減解放してくれないか？意識が遠くなってきた」

箒「ああ、ゴメン」

箒がラウラと春香から手を放すと

春「ぐえっ！！」

ラ「フンツ！だらし無いぞ！春香！」

箒「……こいつ等、精神年齢同じ位なんじゃないの？」

一「ハハハハ・・・何か段々春香が東さんに似て来たな・・・」

箒「っ！？春香！姉さんには近づくな！バカになるぞ！」

春「ええ〜！東さん頭良いよ？それに面白いし」

箒「春香・・・うん、春香は自由に生きるんだ！さあ、姉さんが待ってるよ！！」

春「じゃあ、遊びに行ってくるよ！」

一「ハハハ・・・春香、お父さんからのお願いだ！！せめて服を着てから行ってくれ！！」

ラ「春香・・・強敵だった・・・」

箒「一」・・・ああ、コイツも何とかしないと・・・」

校長「おはよう！諸君！おや？君は・・・」

一同「っ！？」

そう言ってラウラに近付いて行く校長、そして

校長「淑女が人前で肌を晒すのは良くない、さあ私の上着を貸してあげよう」

ラ「す、すまない／＼」

校長「何、当然の事をしたままで」

篤「一夏、あんな感じだったら私は寧ろ結婚して下さいだぞ？」

一「篤は俺に無理難題を言うね？」

校長「ラウラ君だったね？君の部屋まで行くのに上着だけでは恥ずかしいだろう、篠ノ乃君悪いんだが彼女に着替えを貸してはくれないか？」

篤「ん？良いですよ」

ラ「本当に何から何まですまないが、私は此処に来るまで服を着ていたから大丈夫だ」

校長「ふむ、ドイツ軍に新しく出来たIS部隊の確か・・・名前は“シュヴァルツェ・ハーゼ”だったかな？隊長殿」

ラ「っ！？何故それを！！私の隊は、まだ出来たばかりで何処にも情報は無いはずだ！」

校長「甘いなルーキー、戦いで一番大切なモノ、それは情報だ、そして君の服は春香君が大事そうに抱えて走っていたぞ？」

一「春香・・・何かあの人に似て来たな・・・」

篤「えっ？」

ラ「くっ！・・・どうやら口封じが必要なようだな」



箒「ほお〜ラウラカツコイイな？一夏、それ取って」

一「今良い所なんだから喋っちゃダメだって！はい、コーラ」

校長「良いだろう。手解きしてやる」

ラ「調子に・・・乗るな！！」  
ダッ！

その言葉を切っ掛けにラウラは箒達レベルの動きで校長に肉薄した、  
だが

校長「接近戦はナイフとCQCだ・・・まあ、淑女に刃物は向ける  
積りは無い」

一瞬だった、ラウラが校長に触れそうになった瞬間、ラウラは床に  
倒れていた、その場にいた箒達も『な、何だ！？このチートBOS  
Sは！？』と言っていた、そしてラウラはと言つと

ラ「・・・何が起きた？」

校長「出直して来い、何度でも相手をしよう！」

ラ「くっ！何時か！何時か必ず倒してやる！」

校長「良い返事だ！ではな、孫よ！」

一同「は？」

ブルルルルルル

ラ「もしもし、ラウラ・ボーデヴィツヒだ！何か用か、クラリツサ  
！」

ク「ラウラか？今は仕事は関係ない」

ラ「分かった・・・で、何の用ですか？姉さん」

ク「いや、ラウラに言い忘れていた事が在ってな、そこの校長は私  
達の祖父だ」

ラ「は？・・・ハア~~~~！？」

ク「まあ、許せ！私もあまり面識が無いのでな？綺麗に忘れていた」

ラ「姉さんそんな大事な事忘れないで下さい」

ク「いや、あまりにも偉大過ぎてな？親戚だという事を忘れていた」

ラ「偉大？・・・っ！？そ、そう言えば、父が昔、全面核戦争を止  
めたのは親父だ、と言って居た様な・・・」

箒「ん？泥沼って奴か？」

一「違うんじゃない？はい、角貰い」

箒「くっ！生意気な！」

箒対一夏

オセロ戦績

12勝0敗で一夏優勢

数分後

談話室

千「とまあ、そういう訳でイギリス代表候補生のセシリア・オルコットとフランス代表候補生のシャルロット・デュノア、ドイツ代表候補生、ラウラ・ボーデヴィツヒだ！まあ、昔からの知り合いだから大丈夫だと思うが、喧嘩なぞして他の生徒に迷惑掛けるなよ？私が面倒だ」

セ「皆さん、本当に御久し振りですわ」

シャ「昔みたいに仲良くしてね」

雪「はいっ！シャルさん！！！」

ラ「知っているだろうが……ラウラ・ボーデヴィツヒだ、以後よろしく頼む」

千「詳しい説明はお前らの担任がしてくれるだろう、あまり迷惑をかけるな？」

一「賑やかになったな」

春「みんな中々……ふむ、セシリアお姉さん！今日一緒に風呂入

ろ〜」

セ「あら？この子は・・・千冬さんの御息女ですの？」

千「いや違つ、そいつは箒の子だ」

セ「へ？・・・箒さん、説明して頂いてよろしいでしょうか？」

箒「ア、アレ！？セシリア何か前と何か違つくない！？っていうか病んでない！？」

セ「ええ、私イギリスに帰ってからは、あまり周囲と馴染めませんでしたの」

箒「うん、それで？」

セ「寂しい時に昔を思い出しては頑張っていました、でも毎回思い出すのは箒さんに私が追い駆けられている時ばかり・・・そこで私は思いました！ああ、私は箒さんに恋をしているのだと！！」

箒「うんうん・・・はい？」

セ「と言う訳で箒さん 私のフィアンセに成って下さいまし！」

箒「鈴、私はどうすれば良いと思う？」

鈴「ググれ」

箒「ア、アハハハハ・・・ちよつと部屋でググってくる」

ダッ！

春「あっ！お母さん待って！」  
ダッ！

ラ「セシリア！箒は私の嫁だ！そして一夏も私の嫁だ！」

一「俺、女の子にされちゃうよ……」

セ「納得いきませんわ！箒さんも一夏さんも私のフィアンセですわ  
！！」

一「鈴さん！俺はどうすれば良いんだ！」

鈴「だからググれって」

一「分かった！！ありがとう鈴！俺ググるよ！」  
ダッ！

シャ「雪尚、私料理の勉強したんだ！だから味見をして欲しいんだ  
けど……良いかな？」

雪「シャ、シャルさん！！俺、嬉しゅうて体中から変な液体とか出  
そうですわ！！」

シャ「えっ！？じゃあ一緒にお風呂入ろうか？」

雪「ハイッ！」

鈴「リア充共爆ぜろおおおおおおお！！！」

ラ「セシリアあああああ！！！」

セ「ラウラあああああ！！！」

その夜、セシリアとラウラは種でコーデイネイターな、主人公達の様な激戦を繰り広げた、だが早朝に寝不足でブチ切れた筈に二人は簀巻きにされた

## 人々の日常

某所健康ランド

女湯

篤「ハア〜・・・平和だ」

鈴「風呂は良い・・・リリンが生み出した宝だよ」

篤「あゝそれ知ってる・・・な〜な〜・・・古河渚だ」

鈴「渚違いだよ〜」

篤「今それが重要か？」

鈴「割とどうでも良い〜」

何故二人が他のメンバー無しで健康ランドに居るのかと言つと

某所百貨店

クジ引き会場

「大当たり〜！二等健康ランドペアチケット〜！」

篤「は？」

学生寮

談話室

箒「と言う訳で私は鈴と健康ランドに行ってくる!」

一「異議あり!何故、鈴と何だ!」

箒「唯一変態的要素無しで話せるからだ!残念なのは時々アヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ!と笑うくらいだ!」

鈴「そればかりは私にもどうにも出来ないんだ・・・」

春「お母さん!私も行きたい!」

箒「ア~~~~ア~~~~聞こえない!聞こえない!」

春「何でダメなの~~~~!」

箒「じゃあ春香、女湯は?」

春「桃源郷パラダイス!」

箒「乳とは?」

春「揉む為に在る!」



篤「はい、こんな思考のズレた子を連れっけたら問題起きて話になりません」

春「っ!？」

ORZ

ラ「では何故私はダメなのだ!嫁の背中を流したかったと言っのに!

篤「ラウラはね〜凶器持つてるから・・・銃刀法違反で逮捕とか目も当てられない」

セ「では何故私も行ってはいけないのですか?説明を求めますわ!

篤「だってセシリア昔と違って百合だもん」

セ「ゆ、百合ではありません!殿方も好きですわ!」

鈴「“も”って言ってんじゃん」

セ「くっ!」

—「俺は何でダメなんだ?」

篤「本気で言ってるのか?冗談は性癖だけにしとけ、私も人の子とは言えないけど」

雪「なあ、千冬さんは何でアカンかったんや?」

篤「千冬さんにはココの抑え担当だから」

鈴「まあ、取り敢えず行こうよ」

箒「そうだね、じゃあ後よろしくー!」

箒達がin健康ランドした後の学生寮

10号室

ー「あゝ暇だ・・・雪尚はシャルとデートだし、弾は家の手伝いだし」

ラ「だらけているな、一夏」

ー「ラ、ラウラ!? 何処から!？」

ラ「それは言えんが、暇ならこの寮に残っている者達と暇を潰せば良いではないか？」

ー「だって残ってるのラウラとセシリアと束さんと姉さんと春香だけだぞ？」

ラ「何が不満なのだ？」

ー「全員女だ、気まずいだろ」

ラ「そういう割には箒にはベタベタとくっついて居るではないか？」

ー「だって箒は俺の嫁だし」

ラ「一夏、訂正しろ！箒は私の嫁だ！お前も私の嫁だ！」

一「俺も嫁なのか・・・それよかうら、お前とは決着を着けないといけない様だな？」

ラ「フン！望む所だ！お前に分からせてやろう！私の嫁だと言う事実を！！」

一「ならうら、俺もお前に分からせてやる！出来れば俺はハーレムを作る！！そして箒をペロペロするのは俺だ！！（あっ！勢いで変な事言った！？）」

健康ランド

箒「おふっ！？」

ビクッ！？」

鈴「どうした？箒」

箒「誰かが私の対してセクハラ発言して気がした」

鈴「どうせ一夏だろ？」

箒「そうだな・・・よし、サウナ行こう？」

鈴「もうちょっと此処に入ってる」

箒「ええ、行こうやあ」

鈴「一人で行ってきなつて」

篤「私は寂しいと死ぬんだって、孤独死しちゃうから」

鈴「あゝ分かったから行くから、そんな蔑んだ眼で私を見るな」

篤「いや、そんな眼はしてないんだけど・・・」

学生寮

宿直室

千「東、何をしているんだ？」

東「ん？春香ちゃんと一緒にウマウマしてるだけだよ」

春「ウマウマ〜!!」

千「あんまり騒ぐな、近所に迷惑だ」

春「千冬姉さんも一緒にしようよ〜」

千「私は遠慮しておく」

東「春香ちゃん、ちーちゃんは恥ずかしがり屋なんだから分かってあげよう?」

春「わかった・・・」

千「東、誰が恥ずかしがり屋だ？それ位私でもやるうと思えば出来る」

春「ムフフフ・・・無理しなさんなって」

千「お前はホントに子供なのか？」

東「春香ちゃん、お外行こうか？」

春「はい！」

千「・・・ウマウマ・・・」

東・春・一

「かわついいいっ！！」

千「あ、ああ！？、お、お前ら外に行ったのでわ！！？それに一夏まで！？」

春「忘れ物取りに帰って来ただけだよ？」

東「私は付き添いで来たよ！」

一「俺は千冬姉さんが部屋の掃除してないだろうなって思って掃除をし・・・」

千「あ、ああ、あ・・・お、お前達・・・忘れるおおおおお

「……」

千冬は木刀を装備した

「うわっ！？姉さん危ない！！姉さん木刀なのに何で物が斬れるのさー！！」

千「うるさいっ！良いから黙って殺られるおおおおー！！」

「のわっ！？た、助けて！！束さん！！っていねえし！！」

千「さあー夏……さっき見た事を全て忘れろおおおおー！！  
ブンッ！」

「「ごはあっー！！」  
グシャッ！」

健康ランド

篤「はっ！ー夏が死んだ……」

鈴「そんな訳ないだろ？ー夏だよ？」

篤「それもそうかあ」

学生寮

雪「ハア〜！スゴイ楽しかったな〜！また今度遊びに行きませんか〜？」

シャ「うん、今度ね それにしても雪尚凄いね！バツティングセクターでホームラン出したんだもん！」

雪「ハハハ！運動は得意ですねん！それよかシャルさんもホームラン出してたやん！俺そっちの方がたまげたでえ〜！」

シャ「フフフ・・うん、私の運動は得意な方なんだ！  
エッヘン！」

雪「大人しめな感じやのに意外に運動神経もええなんてもう俺シャルさんのそのギャップがたまりませんわあ〜！！！」

シャ「もう、雪尚恥ずかしいよ〜／／」

### 健康ランド

鈴「リア充弾け飛べ・・・」

篤「どうした？鈴」

鈴「いや？何か急にそう思って」

篤「そうか？それにしても風呂上りはコーヒー牛乳か牛乳って言うけど冷たい飲み物なら大体美味しいなあ〜」

鈴「次マツサージ行こう」

篤「ああ、最近節々が痛くて・・・」

鈴「年寄か？」

学生寮

中庭

校長「ふむ、良い天気だ・・・それにしても今まで戦う事が俺の存在意義だと思つて居たが、植物を育てるのがこれほど楽しいとは・・・美味しいか？」

食虫植物

「キシヤアアアアアア！」

校長「よしよし！そうか美味しいか！今夜は満月だそうだ、一緒に月見酒と洒落込もうか？」

食虫植物

「良かろう、美味しい酒を頼む」

校長「ふむ、それは良かった！ところで君は喋れたのか」

食「うむ、気合いを込めれば、植物だって喋れるわあ」

校長「フフフ・・・食えない性格だ」



食「俺を喰らうか？この愚か者があ！」

健康ランド

鈴「あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ気持ち良い〜」

箒「ホント気持ち良いなあ〜」  
バキバキバキ！！

鈴「・・・箒何か箒から成ってはいけない音が聞こえるんだけど？」

箒「最近凝ってたからじゃない？」

鈴「そうか〜凝ってたのか〜」

夜

学生寮

10号室

箒「ただいま〜一夏〜！春香〜！帰ったぞ〜！」

一「おお、御帰り箒、今日何処行ってたんだ？」

箒「は？言っただろ、健康ランドに行つてくるって？」

一「いや！？聞いて無いって！何それ俺も行きかけた！」

篤「一夏？今日何が在った」

一「知らん！起きたら夜だった！休み寝過ぎた！」

篤「そ、そうか・・・じゃあ今日はもう寝るか（何かあったんだろ  
うなあゝメンドいし良いか）」

一「ええゝ寝るのゝ？俺寝てたから眠くないんだけど！」

篤「一夏・・・おやすみっ！！！」  
ドスッ！

一「ゴフッ!？」

篤「さあて、寝るか・・・」

春「あっ！お母さんお帰り〜！」

篤「春香、寝るよ〜」

春「胸触って良い？」

篤「イラッ！ツと来ない程度なら良いぞ」

春「じゃあ寝る〜」

学生寮

中庭

食「うむ！良い酒だあ！」

校長「確かに市販にしては良い方だ」

食「おい、お前の仕事だぞ」

校長「ああ、侵入者だな？それにしても良く分かったな？」

食「高が人間風情が気配を隠した所で俺に掛ければ只の幼稚なかくれんぼよお」

校長「良いセンスだ！悪いが月見酒は此処までの様だな、今度また飲み交わそうじゃないか？」

食「フン！俺と酒を飲みたがるとは・・・物好きな奴も居た物だあ」

校長「こちらスネ　ク、警備室！敵勢力の詳細を頼む！」

続く！

人々の日常（後書き）

宿直室

束「ちーちゃん！元気出して！」

千「うう・・・一夏に見られた・・・もう死ぬしか」

束「・・・えいつ！」

ブスッ！

千「イツ！？束！何を打った！！」

束「良い？ちーちゃん、今日起こった事は全部夢、夢なんだよ？分かった」

千「今日起こった事は夢、夢・・・zzz」

束「・・・医学の進歩に感謝だね」

お洒落に！KAISOU（前書き）

タイトルのまんまです

## お洒落に！KAISOU

どうも、そろそろ読者も忘れていると思うけれど！元・・・元男の！現女！失われ悲しみ（アナログステイック）を背負う篠ノ乃箒です。皆さん！ウチの母校ことIS学園付属第二中学校って在るよね？って事は第一中も存在する訳で、この前ヨーロッパに遠征に行つて完勝したわけですが、ウチの学校は欧州で、向こう（第一中）は欧米だそうで・・・しかも何かお互いこの遠征の経験で得た物を見せ合おうと、向こうの校長が言つて来たそうでした・・・はい・・・こっちのメンバーは

第二中

篠ノ乃箒

織斑一夏

鳳 鈴音

美堂雪尚

計4名で行く事となりました、その時の作戦風景

談話室

鈴「ウヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ！！ぶっ潰してやんよ！」  
悪乗り

箒「あぁんの糞女！目にモノ見せてやる！！」  
マジギレ

雪「い、一夏！何で箒と鈴はこない荒れとるんや!？」

「ああ、それはね・・・回想シーンっ！カモ〜ン！！」

雪「って回想かいッ！」

回想

校長室

第「何か用ですか？校長」

校長「ああ来て貰って悪かった実は篠ノ乃さん、君達に私の知り合いで第一中の校長をしている“サンデー・春巻”という男が居てね君たちと模擬戦をしたいと言って居るのだが、一応部長の君に話を聞こうと思ってるね」

第「模擬戦ですか？セシリア達にでも行って貰えば良いじゃないですか？」

校長「彼女達は日本に来日しているだけで実際は各国の代表だ、それに彼女達と正式に模擬戦をするには各国の政府に許可を求めなくてはいけない、そう言った理由から彼女達はダメだ」

第「ハア〜・・・じゃあ何とかしますけど・・・所で部長ってどういう意味ですか？」

校長「ふむ、それに着いては、もう君が受けたとばかり持っていたのだな！正式に受理してしまったが、その様子だと君には内密に書かれた物の様だな？」

第「ハア〜？それで部長とはどういう事なんでしょうか？」

校長「この学校は全員入部制でな誰も何かしらの部活動をしなくてはならないのだ」

篤「初耳ですね、その情報」

校長「そこで鈴君と一夏君がIS部成る部を結成すると言って来てな？その書類の部長名に君の名前が記して在ったと言う訳だ」

篤「へえ〜・・・その話、詳しく聞きたいなあ〜」

学生寮

一「そろそろ篤にバレたな！」

鈴「みんな！作戦名“命を大事に！仲間を見捨てても生き残れ！”」

雪「実際の所シャルさんは了解済みやけどセシリア達は勝手に名前をつこうたけどええんかいな？」

一「ああ！そこは俺が聞いてみたら許可が出た！」

？「ちよつと！その学生の方々！この辺に学生寮が在るらしいのだけど何処だか知らないかしら？」

一「学生寮ですら目の前ですけど？」



？「え？・・・あらやだ〜！私ったらおっちょこちょい何だから〜んっ！もっ！」

鈴「で、何の用なんですか？」

？「あら？何で小学生が此処にいるのかしら？」

鈴「・・・今なんつった！コラア！！」

ー「ちよっ！鈴！！落ち着けて！！」

？「あゝ貴方ね！ISに乗れる男の子って言うのは？思ったよりカッコいいわね〜」

ー「ええっ!？」

雪「そ〜言う姐さんは誰やねん？まさか!？俺のファン!？アカンで！今の俺はシャルさんのモノや！」

？「貴方はそこそこね」

雪「よっしゃ！いてこましたる！」

ー「お、落ち着け雪尚！」

雪「は、離さんかいつ！ー夏！このおばはんにめにもんみしたる！」

？「お、おばさんつて!？酷い！私まだ・・・ああもっ30代だつた・・・」

雪「あつ・・・なんかすみません」

？「良いのよ・・・事実だし」

一夏達がこの不審者（女）と話していると

第「ただいま・・・貴方がサンデー・春巻さん？」

八「ちよつ！？違う！それ違うから！また校長ね！私には“八雲紫”って名前が在るの！」

第・鈴「スキマBBA!？」

八「あゝ！貴方達もそうやって私を呼ぶの！？なんなのよ！ウチの学校の子達もそうやって私を呼ぶし！私はまだ30代なのよ！」

雪「で、紫ちゃんは何で此処に来たん？」

八「紫ちゃん！？い、いきなり名前！？・・・まあ、BBAって呼ばれるより良いわ・・・では気を取り直して！私が此処に来た理由は！貴方達に宣戦布告をしに来たのよ！」

第「はい、捕虜確保」

八「ええくん（泣）！助けて！何で！何でいきなり私捕まえられたの！もしかして！昨日寝る前に歯磨きしなかったから!？」

雪「姐ちゃんホンマアホやな」

八「あつ！アホって酷い！アホって言った方がアホなんだからね！」

一同「ああ……」

八「お家に帰してえ〜！私良い子にするから〜！」

一「この人どうしよう……」

するとそこへ

校長「やれやれ、もしかと思って来てみれば……何をしているの  
かね？諸君」

篤「折檻ですけど何か？」

八「ええ〜ん（泣）！校長助けてえ〜！」

一「知り合いですか？」

校長「ああ、IS学園付属第一中学校、校長 八雲サンデーだ」

八「違う！サンデー違う！何で何時までのあの時の罰ゲーム続いて  
るの〜！」

校長「いや〜君の反応が楽しくてね？」

八「貴方DSだわ！絶対そうよ！ふえ〜ん（泣）！助けて、藍ちや  
〜ん！」

篤「東方ですか？」

鈴「いや、流石にそこまで・・・」

校長「そういえば二人目の娘さんが入学したそうじゃないか？おめでとつ」

八「ありがつ！騙されないわよ！貴方ドS何だもん！絶対何か企んでるでしょう！」

校長「いや、心からの祝いの言葉だ」

八「良いもん！私は会いたかった子達には会えたし、良いもん！あつ・・・後これウチの学校の子から貴方達に御手紙預かってたんだつたわ・・・はい！」

箒「ああ、どうも・・・」

八「じゃあ私は帰るわね」

紫さんはそういうと走って帰って行った、だが箒達は思った『ああ！そんな丈の長いスカートで走ったら！・・・ああ・・・』三度ほど転びました、最後は半泣きで帰って行ったあの人を箒達は『頑張れ！頑張つて！』と心の底から応援しました

それはさておき手紙の内容は

箒「じゃあ読むぞ・・・」

初めまして私は更識楯無申します、今回貴方達に模擬戦を挑もうと思ひまして手紙を書いた次第です。

この雑魚共痛い目見たくなかつたら断れ！私の休みの為に！

by 巻紙礼子

第二中の生徒諸君へ」

「……口調可笑しくなつたね……

鈴「この手紙良く見たら取り合つたみたいな跡が……」

雪「ア、アハハハハ……げ、元気な文面やな」

箒「もしもし……篠ノ乃箒と申しますが第一中の更識さんは……  
あつ、はい」

一同「（行動が早い！？）」

第一中

生徒会室

楯「ハア……書類多いんじゃない？」

藍「これ位で音を上げないで下さい、私は今日は確実に8時回りま  
すよ？中学生なのに」

簪「川が……渡つても良い？」

藍「簪さん！？帰って来て下さい！」

巻「大丈夫だよ、藍は心配性過ぎんだよ！」

楯「ふふふ……でもそれが藍ちゃんの良さな訳だし〜良いんじゃない？」

巻「それもs」

プルルルルルルルル……

楯「誰かしら忙しい時に……」

藍「貴方はずっと休憩しかしてないじゃないですか！」

楯「もしもし、楯無です。」

篝「あ〜 楯無さんですか〜 私篠ノ乃篝と言うものです」

楯「（篠ノ乃……東博士の妹か）それはそれは、模擬戦を受けてくれるんですか？」

篝「はい、受けますよ〜 その前に……あの手紙の最後の部分を書いた人と少し話が……」

楯「はい？ちよつと待って下さいね？……巻ちゃん！話がしたいだつて」

巻「はあ？チツ……もしもし」

篝「テメエか？あの内容書いたの？死人出したいのか？ああ！」

卷「っ！へえ〜・・・そういうの乗ってくれるんだ・・・なんだか今の模擬戦楽しみになったよ」

篤『ホントだ・・・待ちきれないよ』

卷「今から来てもいいんだぜ？」

篤『言ったな？待ってる・・・』ほ、篤いきなりどうした!?!?『プープープー』

卷「ってマジかよ!?!?」

巻紙が電話を切ると窓の外から

篤「み〜つけ〜た〜・・・みんな・・・あそびましょ〜・・・」

人外篤さん、IS学園付属第一中学校生徒会室の窓の外に到着

一同「ヒッ!?!?」

楯「あら〜!貴方が篠ノ乃さん?まさか会いに来てくれるなんて〜お姉さん嬉しいわ」

篤「これはこれは貴方が更識さんですか?初めまして〜篠ノ乃篤です」

楯「これはどうもご丁寧に〜それにしても何か用事でも?」

篤「いや〜此处に居る手紙の最後の部分を書いた人と少しお話をしたいな〜何て」

楯「ああ！そういう事」

そう言うと楯無は扇子を開た、そこには達筆で“納得”と書いてあった

楯「巻ちゃ〜ん！篝さんがお話があるって〜！」

巻「分かってるって！・・・お前が篠ノ乃篝か・・・弱そうな奴だな？」

篝「随分と言ってくれるねえ〜おじさん、ちょっと力チンと来たよ？」

巻「へえ〜しかも更年期障害かよ」

篝「ハハハ・・・言うねえ〜おじさんとしては事を穏便に済ませたいんだ、言ってる意味分かる？」

巻「へっ！ウダウダ言っただねえ〜で掛かって来いよ！」

篝「楯無さん、この子借りて良い？安心して首皮一枚で五体満足で返すから」

巻「その口黙らしてやるぜ！」

そういうと巻紙はISを展開して篝に飛び掛かった

篝「（ココだと暴れ辛い！外に連れてくか・・・）」



巻「喰らいやがれ!!」

箒と巻紙は揉み合いながら外へと出て行った

楯「ん〜・・・不味いわね〜」

藍「そうですね、と言う訳で生徒会長、お仕事できましたよ」

楯「も〜・・・しょうがないな〜お姉さんがお灸を据えちゃっぞ!」

楯無は“成敗”と書かれた扇子を広げた

## 第一中裏山

巻「どうした!電話の時の勢いは何処行ったんだよ!」

箒「ハハハ!お前可愛いなあ!バカで!」

巻「っ!!糞がああああ!!」

巻がそう言つと巻の蜘蛛の様なISの足に付いた砲門で箒を狙つてきた

箒「そういえば蜘蛛って美味しいらしいな?食べる気しないけどザンツ!」

だが箒は自分を狙っていた足をゲッターサイトで叩き斬つた

巻「っ!?バカな!アラクネの足を切り落としただど!?!」

箒「止めだ!!っ!!」

箒が巻紙にトドメを刺そうとした時、午後6時を知らせる鐘が鳴った

巻「……っ!?何故トドメを刺さない!」

箒「何故っでもう6時だからな!帰らないと」

巻「ハア〜!?何言っただ?」

箒「知らないのか?6時を過ぎたら家に帰るんだよ、常識だ」

巻「ガキかよ……」

箒「私に負ける様な奴が言っっても痛くも痒くもない、勝ち逃げしてやんよ」

巻「あつ!待て!!負けてねエ!引き分けだ!!」

箒「次は勝ってみろよ」

巻「クソツ!覚えてろよ!加齢臭女!!」

ダツ!

箒「……この辺、焼き払おうかな……」

回想終了

「」って事らしい

雪「ああ！あの後そないな事が在ったんかあ」

—「まあとにかく・・・」

—・雪「巻紙死ぬよ・・・」

お洒落に！KAISOU（後書き）

神の部屋

神「なあ、私って重要な人だよな？」

チ「ゴミが・・・」

神「あざーっスー!!」

## 模擬戦

## サブタイトル雪尚VS藍

どうも一夏です。皆さん秋と言えば何を思い浮かべますか？俺としては秋と言えば食欲の秋何ですが、季節的にも涼しく快適に過ごせる季節です。夏や冬のように極地的季節も好きですけど、度を越えれば嫌いです。もう言ってしまうと姉弟全否定です。それで今回の話ですが、学校対抗のIS模擬戦です。

## IS学園

### 第2アリーナ 控室

第「流石に試合は此処なんだ」

一「それはそうだろ、外だと危ないし」

鈴「そういえば雪尚は？」

第「真打は遅れてくるもんだって言ってたから遅刻だろ？故意に」

楯「あら〜？それは団体行動としては不味いんじゃないかな？」

一「誰？」

楯「ああ！そっか！初めまして！私の名前は更識楯無っていいます！」

そう言つて“よろしく”と書かれた扇で口を隠す楯無

箒「そんでこの人は第一中の生徒会長さんだ」

箒も対抗して“因みに3年だ”と書かれた団扇で口を隠した

一・鈴「(箒、対抗してる)」

楯「それで君がISを使える男の子二人の内の一人？」

一「へ？ああ、そうなるな」

楯「へえ〜・・・しかも日頃から鍛えてるのかな？良い身体してるね！」

楯無は“君に興味津々”と書かれた扇子で口を隠し一夏にくっ付いた

一「えっ？ええっ！？何！？俺モテ期！？」

鈴「わあ〜一夏おめでと〜」

箒「一夏、春香を泣かせたら・・・」

箒は“わかってるよね？”と書かれた団扇で口を隠しながら冷たい目で睨んだ

一「っ！？あ、あれ〜？ほ、箒さんの反応がいつもと違う気がするな〜？(ヤバイ！あの眼はヤバイ！)」

鈴「一夏・・・作っちゃえよ・・・ハーレムを！」

一「作るか!!！」

楯「ええ〜！作らないの〜！？お姉さんガツカリだ」

楯無は“残念！”と書かれた扇子で口を隠した、だが一夏は見逃さなかつた、楯無がチャツカリ扇子の裏に目薬を隠していたのを

一「ハハハ・すみません」

楯「良いの・・・気にして無いから」

楯無は“嘘泣きだよ！”と書かれた扇子で顔を隠した・・・一夏の目には楯無が笑いを堪えている様に見えた、するとそこへ

簪「姉さん・・・何してるの？」

楯「あら？簪ちゃん？どうして此処に？・・・まさか！？お姉ちゃんが居なくて寂しかった！？ゴメンね！簪ちゃん！」

そついうと楯無は簪に抱き着いた、一方簪は

簪「姉さん・・・苦しい・・・離して」

楯「もう！簪ちゃんたら、シャイなんだから〜！」

簪「姉さん・・・邪魔」

楯「つ！！！！？酷い・・・簪ちゃんの意地悪〜！」

楯無は“でもそんな簪ちゃんも大好きなんだからねっ！”とギリギリに書かれた扇子を残して走り去って行った

篤「良い姉だな？」

簪「大好きだけど・・・人前だと恥ずかしいノノ」

鈴「って言うか試合まで後5分位だけど此処居て大丈夫？」

簪「・・・姉さん(怒)」

簪も去って行った

篤「第一試合雪尚何だけど・・・居ないしどうしょ？」

鈴「そのうち来るんじゃない？」

ー「それもそうか」

そうこうしていると試合の時間が来た

アリーナ

千『こちらの準備は出来ている！選手は速やかに発進しろ！』

第一中

藍「八雲藍、不知火！出る！！」



橙『お姉ちゃん！頑張ってる！』

紫『藍！頑張ってるね！』

藍「分かった！！頑張るよ！ちええええええんっ！！後、母さん」

紫『ヒドっ！？私だけ扱いヒドっ！？は、母親なのに・・・』

## 第二中

第「雪尚が来ないって事は・・・不戦敗です！！」

一・鈴「な、なんだってえ〜！？」

第「まあ、シユバツ！つと出て来んじゃない？」

アリーナ

千『これより第一中学校対第二中学校の模擬戦を行う！』

藍「すいません・・・」

千『何だ？』

藍「私の対戦相手は何時来られるのですか？もう5分位待っています」

けど」

千『……第一試合八雲藍の不戦s y』

千冬が藍の勝利を宣言しようとする、突然

雪「俺は此処や!！」

藍「なっ!?いきなり出て来た!？」

雪「ハハハ!真打は遅れて来るもんや!」

鈴「うっさい!どう繕ってもお前は只の遅刻者なんだよ!！」

—『どうせ寝過したただけだろ!』

雪「うっさいんじゃ!お前らはあゝ!！」

箒『雪尚君?』

雪「ハ、ハイ!！」

箒『君がさあゝヒーローは遅れてくる!見たいなあゝ感じて来たからね?箒さん、学校の偉い人達に頭下げて来たのね?言ってる意味分かるかなあゝ?』

雪「絶対に勝たせて頂きます!！」

箒『いや、別に勝ち負けに拘って無いから、後で皆に謝罪の言葉があるかどうかって事だから、それに箒さん君らが思ってるより鬼で

も悪魔でも無いから』

雪「試合後謝罪させて頂きます!!」

藍「た、大変なんですネ」

雪「おお！分かってくれるんかいな！アンタええ人やなあ〜！俺は只、愛しの人とギリギリまで近くに居りたかっただけなのに・・・」

千『雪尚、反省文20枚、期限は明後日までだ、わかったな？』

雪「はい、分かりました〜（俺の心の癒しはシャルさんだけやでえ・  
・）」

雪尚がシャルとの思い出を思い出してトリップして居る時試合開始のブザーが鳴った

藍「橙に悪影響が出かねない奴だな？」

藍はそう言ってショットガンを手に出し雪尚に構えた

藍「若干卑怯な気がしないでも無いが・・・関西弁だし大丈夫だろ！アフロ位には成るかもしれんが」

藍は関西人は基本的にギャグ体質だし、直撃しても髪型がアフロに成るボケをかます位のダメージだろうと思ってショットガンからグレネードに切り替えて

藍「うん！爆発するしリアクションも取り易いだろう」  
バシユンッ！

躊躇いなく引き金を引いた、アリーナで観戦している第一中メンバーは確実に当たったと思って居た・・・が雪尚にグレネードが当たる瞬間、突如として雪尚が姿を消した

藍「うわっ！？消えた！アフロネタさえやらずに普通に消えた！」

藍がショックを隠せないでいると背後で

雪「いや俺、確かに関西弁やけど生まれは中国やで？」

藍「なっ！何時の間に!？」

何と其処には姿を消した雪尚が構えていた

因みに箒達は管制室にて絶賛千冬さんをUNOで弄り中だった

雪「何時って・・・アンタが撃ってきたのが当たりそうやったからテレポートしてきただけや」

藍「テレポート？」

千「馬鹿者が・・・」

雪「はあ？・・・あ~~~~っ！そうやった！俺が超能力使えるちゅーのシャルさん達の反応のせいでバレたらアカンの忘れとったあ~~~~!!」

藍「超能力？・・・冬場に炬燵から出たくない時ぐらいしか役に立たんと思ってる居たが・・・そうか・・・お前が見せてくれたテレポートが在れば！」

雪「くっ！（迂闊やったで、この姉ちゃん超能力の使い道一夏達と殆ど同じやったけど一般人から見たらやつぱ恐ろしいもんちゅーんは変らへん筈やし・・・）」

藍「タイムセールの際に便利だな！まさか！？お前！その能力を使つて！」

雪「何や！言ってみい！どうせ俺の事化けm」

藍「私が買おうと思っていた御揚げが目の前で消えたのはお前の仕業かぁ！」

雪「全く身に覚えあらへんわぁ！！！」

藍が銃器を乱射しながら雪尚に突撃して来た、雪尚は藍のあまりの剣幕に若干引きつつ直撃しそうな弾だけを弾きながら逃げ回っていた

雪「何や！あの姉ちゃん！メチャクチャしよってからに！」

藍「御揚げ・・・私があの時買おうと思って居たラスイチの御揚げを返せえ〜！」

雪「だから！そんなん知らんちゅーとんじゃあ！」

雪尚は瞬時加速をして藍の懐に入った、そしてそのままの勢いで

雪「龍連牙 地龍！（まあ、此処空中やけど）」

藍「ん？」

肘打ちを喰らわせ藍がまさか相手が肉弾戦をして来ると思わず、怯んでいる隙に雪尚は二段蹴りを繰り出した、藍は隙を着かれた為反応出来ず、大幅にシールドエネルギーを削られた

雪「降参せえ！俺は女に手え出したない！」

藍「御揚げを奢ってくれるなら良いぞ」

雪「なつ！・・・ホンマ日本はええなあ！超能力程度じゃ誰もビビらへんし・・・藍ちゃんやっただけ？奢ったる！御揚げ位奢ったるでえ！」

藍「本当か！？いやゝすまんゝ！！」

雪「何なら稲荷寿司でも作ったるか？オトンが寿司好きだった時、知り合いの寿司屋のオッチャンに頼んで俺に寿司の握り方と酢飯の作り方を覚えさせられたんや・・・まあ俺が握れるように成った頃にはオトンは天ぷらに夢中やったけど・・・まあそんなこんなで料理は得意な方やから安心しいっ！？」

雪尚が虚ろな目で過去を暴露していると藍がいきなり雪尚の手を握ってきた

藍「そうか・・・お前も苦労して来たんだな・・・雪尚！結婚しよう！そして私に稲荷寿司を一生握り続けてくれ！！」

雪「フツ・・・そらあく魅力的な相談やけど・・・俺にはシャルさんとちゅーお嫁さんが居てん！悪いけど諦めてくれ」

藍「私は稲荷寿司と橙が在れば愛人でも良いぞ？」

雪「お、俺はシャルさん一筋なんやあ！！」

雪尚は全速力で引っ込んで行った

藍「・・・私の幸せの為に・・・犠牲に成れ！美堂雪尚おおおお  
お！...」

藍、雪尚を追ってSIDE OUT

箒『ええ〜・・・千冬さんがUNOで拗ねて女子トイレに籠ったの  
で私、篠ノ乃箒が代弁します。勝者 美堂雪尚！』

模擬戦

サブタイトル雪尚VS藍（後書き）

女子トイレ前

篤「千冬さん！いい加減出て来て下さい！」

千「一人にしてくれ・・・（泣）」

一「姉さん！拗ねてないで機嫌直して！！」

千「・・・拗ねてないもん」



第二試合・・・他は鬼畜（前書き）

どうも顎の関節が痛い作者です。・・・詰まったよ！！

## 第二試合・・・他は鬼畜

どうも〜一夏です。え〜本日は第一中対第二中IS模擬戦二日目何ですが、巻紙礼子対篠ノ乃箒だったんですが試合開始直後箒が巻紙さんに対して“大雪山おろし”をブチかまし、犬神家状態の巻紙さんに“ゲッタービーム”を叩き込むと言う悪魔の様な勝ち方で勝利をした為、(試合時間32秒)大幅に時間があまり一日一試合の筈が今日二試合目を行うと・・・結果織斑一夏対・・・

アリーナ

一「アレ〜？おかしいな〜？俺の対戦相手が貴女っておかしいな〜  
(汗)」

楯「いや〜私も唯一ISが使える男の子と対戦できるなんてお姉さんうれしいな〜」

一「(そういえば箒がこの人は水をアレするって言った様な・・・)」

千「それでは第三試合、織斑一夏対更識楯無の試合を始める！」

千冬が宣言した後、開始のブザー音が鳴り響いた

—「先手必勝！」

—夏は試合開始直後バスターライフルを楯無に向かって放った

—「もらった！」

楯「フフフ　せっかちさん何だね？」

しかし楯無はバスターライフルを余裕を持って回避した、これを見て一夏は一瞬怯んだがマシンキャノンで牽制しつつ距離を取った筈だった

楯「次は〜お姉さんが行っちゃおうよ」

—「ってマシンキャノン当たんねえ！？・・・アレ？俺バスターも当らないしマシンキャノン当んなかったら詰んだじゃん」

楯「考え事？今はお姉さんとの試合に集中してくれなきゃ」

—「っ！！！」

楯無は手に持っていたランスで一夏に高速で突きを放った

—「あまい！」

楯「っ！？」

—夏はその突きを足で蹴り上げその姿勢のままバスターを撃ったが楯無はギリギリの所で躲し一旦距離を取った

「チイツ！アレを避けるか」

楯「いや、お姉さんとしては私の突きを蹴り上げて不安定な姿勢のまま撃つて来たのに驚いたよ、それにしてもさっきのは本当に危なかった」

「ハハハハ！これでも姉さんと毎日朝練して鍛えてますから」

楯「へえ、凄いね！でもその大きな翼は少し邪魔にならないの？」

「ああこれですか？確かに近接戦では邪魔ですけど、箒がこの羽にアレを着けたって言ってましたので大丈夫です、それに新装備も在りますし」

楯「アレ？新装備？・・・お姉さん気に成っちゃうよ！教えて」

「俺に勝てたら教えてあげますよ！」

楯「フフフ 言ったからね？お姉さん本気出しちゃうよ」

楯無は瞬時加速を使って一夏に接近してきた、だが一夏もそれを予想したかの様にマシンキャノンを撃った

楯「(射撃の精度が上がった！？今まで当てに来てなかったって事！？)」

「(避けた！？ゼロの予想したコースに撃つたのに！) それなら！これでどうだ！！」

一夏が楯無の向ってそう叫んだら一夏のISの翼から何かが多数射

出された

楯「っ！？ミサイル！？」

—「これだけのアルテミス「永久追尾空対空弾」避けられるか！！」

楯「くっ！これは厳しいかも！！」

楯無はランスに着いているガトリングを使いアルテミスを墜いながらも、二発被弾してしまった

—「20発撃つたのに当たったの2発だけ！？」

楯「危ないな〜さっきのが新装備？凄いな！（嘘！？シールドエネルギーまだ400位在ったのにさっきの2発だけで103に成っちゃった）」

—「まあ、まだ隠し玉は在りますけど？そろそろお終いです！！」

楯「んふふふ〜 そうだね・・・棄権しま〜す！」

—「へっ？棄権？な、何故に？」

楯「だって私の機体もうダメージレベルC何だもん、これ以上戦ったらこの子が可哀想だからね〜」

—「・・・」

千『更識の棄権宣言によりこの試合、勝者は織斑とする！』

— 「良いのかな？」

控え室

篤「お疲れ」

— 「次は鈴だっけ？ガンバ！」

鈴「ん？私の試合は第1アリーナで一緒にやったぞ？」

— 「嘘・・・早くない？」

篤「映像見る？」

— 「お願い」

回想

— 「って回想かよー!!」

アリーナ

試合開始のブザー音が鳴ると

鈴「先手必勝!!」

簪「っ!!」

鈴は簪を地面に向かって殴り飛ばした

簪「くう・・・っ!!」

鈴「はい、止め」

簪は地面にぶつかる前に何とか体制を整え着地したが鈴に蹴り倒され

鈴「輻射波動!!」

簪「キヤアアアアア!!」

鈴は簪の上に馬乗りになって連続で副射波動を叩き込んだ、そして

「そこまで!!勝者 鳳 鈴音!」

回想終了

—「この悪魔共め!!」

鈴「違う!私は只の現中国人だ!!」

箒「私は只のいじめっ子だ!!」

—「ハア〜・・・帰ろう・・・もうこの学校の人達に合わせる顔が無い」

楯「大丈夫〜！実際には怪我人はゼロだし、問題ないよ」

—「ハア〜さよですか」

箒「たっちゃん・・・君の渾名はたっちゃんだ！！」

鈴「箒・・・せめてジヨン位にしなよ」

楯「アラ？反応薄いね」

楯無は“ガツカリ”と書かれた扇子を取り出して口元を隠した

—「で、何か用ですか？」

楯「んふふふ！お姉さん、一夏君に興味が湧いちゃってね〜」

—「さいですか・・・」

箒「ああ悪いんだがコイツとの間に可愛い可愛い義娘がいてね・・・  
・ついでに貰って下さい！」

—「って！おいつ！！何てこと言ってんだ！！」

箒「あっ！そうか！！ゴメン、義娘はあげれない」

楯「ん〜・・・しょうがないな〜じゃあ一夏君！是非更識家に婿とし



て！」

簪「姉さん……何言ってるの？」

楯「ん！簪ちゃん！今日からこの人が貴女のお義兄さんよ！！」

鈴「大丈夫か？」

箒「ああ……もう直ぐ其処まで来てるから……」

鈴「????？」

ガチャッ

千「お前らそろそろ帰るぞ」

—「千冬姉さん！」

楯「義姉さん！一夏君を下さい！！」

千「……何を抜かしおるか！！一夏は誰にも渡さん！！」  
ゴツッ

楯「っ!?!？」

バタッ

—「(コ、コイツ!?)」

一夏は見た、楯無が千冬に拳骨をされた瞬間懐から“無念”と書かれた扇子を頭へ乗せてから気を失ったのを

箒「やるな〜・・・まあバカだな」

簪「織斑先生、ウチの姉を止めてくれて有難う御座います」

千「ああ気にするな、コイツは家事とマッサージが得意だからな、こんな便利な奴を見す見す手放せるか」

一「（お、鬼だ！！）」

箒「（千冬さん、顔赤いなあ、ブラコンめ）」

鈴「あ〜お腹減った・・・」

こうして第二中学生寮に一夏一行は帰って行った

## 学生寮

### 10号室

箒「疲れた〜・・・あ〜もう寝よう・・・」

一「箒、せめて風呂入れよ」

箒「ハア〜動きたくない・・・」

一「箒・・・何か変わったね〜（前世的な意味で）」

第「うん、女に成ってて頭のネジが無くなった」

—「ああ〜！俺も何か最近、前（前世的）と何か違和感があるなあ  
〜って思ってたけど頭のネジが無くなったのかあ〜！」

第「……………」

—「……………」

—第「いや！これは不味いだろ！！！」

第「何なの！これ！！いつの間にか一人称“私”に成ってたよ！！！」

—「俺なんか！……………特に変わって無い」

第「いや！変わってるから！君！前（前世的）の一人称“我”とか  
“世”だったから！！同い年の友人にゲームで負ける時“調子に  
乗るな！ガキが！”って言ってたから！！しかもその子の方が10  
日位誕生日早いから！！！」

—「ギヤアアアア！！そんな恥ずかしい過去思い出させないでええ  
えええ！！死ぬから！悶え死ぬから！！！」

第「私だつて！！私だつて！黒歴史位たくさん在るわあああ！！  
……………うん、君よかマシだった」

—「うわああああああああん！！！」

第「お、落ち着け！一夏ううううううう！！！」

ガチャッ

春「お母さん達何騒いでるの……ってお父さん!? 何で発狂してるの!?!」

箒「春香! 一夏を抑えるの手伝って!」

春「ヤダ!! 変な汁撒き散らしてるもん!?!」  
ガチャッ

箒「春香! つてドア開かねエ!?!」

—「鬱だあああああ!?!」

数十分後

箒「ハア……ハア……」

—「ハア……ハア……」

そこには心に大きな傷を負った二人の姿が在った

箒「そういえば……鈴は変わらないな」

—「確かに……」

一・篤「何時までも変わらないそのままの君でいて!」

翌日

教室

担任「皆さん!先生の話をよくくつ!聞きやがれです!明日は皆さんが待ちに待った!文化祭です!騒いでも良いですが、他の方に迷惑を掛けないようにしましょう!」

一・鈴・篤「なん……だと……」

雪「シャルさん、二人で一緒に出店回りましょう!」

シャ「うん!楽しみだね」

ラ「文化祭……姉さんにどんな物が聞かなくては!……クラリッサ!私だ!」

セ「文化祭……お祭りですか?……お祭りでしたら一夏さんと篤さんに案内して貰いましょう!」

一「篤、どっしする」

篤「いや、知らない！？どうすんの？」

鈴「先生！私達のクラスの出し物は何ですか！」

担任「フッフッフツ！良くぞ聞いてくれました！鈴音ちゃん！何と！！2-1の出し物は！！」

メイド喫茶です！」

篤「メイドか……アレ？私……おじさん風邪みたいだな」

ガシツ！

箒「っ!!」

セ「まあ箒さん風邪を引いたんですの？な、なら私が看病いたしますわ、それにおかゆと言う料理も作ってみたいですし／＼」

箒「……………あ、あはははは!!元氣!私は元氣だから!」

セ「まあ残念ですわ」

一「まあ鈴と箒は大変だな?」

雪「何言うとんねん一夏、俺らは執事服着てやるんやで?」

一「おい!それはどういう事だ!メイド喫茶だろ?」

雪「うくん正確にはメイド&執事喫茶や、ホンマ昨日お前らが居らん間に女子が“織斑君の執事服姿……………ご飯7杯は行ける!!”ちゅー事でメイド&執事喫茶や」

一「そ、そんな……………弾!弾も執事やんのか!」

弾「ん?俺は裏方で料理専門だ、実家で接客してからそつちの道(任侠道)の人が人生相談に来るようになってな、週30人は話し相手になってるぜ」

一・雪「弾さん!お疲れ様です!!」

シャ「何か僕はメイド服じゃなくて執事服に成ってるんだ」

箒「……似合う〜」

セ「箒さんも似合いそうですわね？」

鈴「箒……」

箒「分かってる……鈴一人にメイド服と言う恥ずかしい思いはさせない！」

鈴「箒!？」

箒「篠ノ乃箒!鈴と共に逝きます!!!」

鈴「箒!私は裏で弾のサポートだ」

箒「無印時代のクロノ君!時の庭園の名言を世に広めてくれてありがとう!!覚えてないけど!!」

世界はこんな筈じゃなかった事でいっばいだとか曖昧な記憶力の箒だった



第二試合・・・他は鬼畜（後書き）

CP相手に将棋で詰んだよ!!

## 文化祭前

～出血～

秋、それは冬に向けて少しずつ寒くなって行くと言う季節……

11月某日 IS学園付属第二中学校

文化祭

2-1教室

今日の主な舞台となるその場所で周囲のクラスメイトがメイド服を着ているのに対して、一人だけ浮いている服装の生徒が居た……

—「篝……それは一体!？」

篝「どうした?一夏……私の格好が変とかか?」

鈴「篝……あんた……あんたは本物のメイドだよ!」

ガラガラ

シャ「皆、おはよう寒くてお布団から中々出られなかったよ……ア、アレ?……篝?」

篝「なに?何か違う?」

—「うん!違う!違うって言うか、もう職種が違う!何それ!?明らかにメイドじゃないよね!って言うか……誰だよ!!!!!」

箒「誰と言つか、家政婦さんだ！」

シャ「うん……でも家政婦さんって言うより……お母さん？」

ガラガラ

雪「すまん！おそなつたわ！……アレこの人誰や？誰かのオカシカ？」

箒「まあ、母（仮）ではあるな」

—「箒さん！結婚しよう！」

雪「ハハハ！一夏、唐突やな」

箒「でも私には旦那が……」

鈴「誰だよ、旦那」

—「二人で一緒に駆け落ちしよう！」

鈴・雪「こ、こいつ等！？まだこの茶番を続ける気か！？」

箒「で、でも！！」

ガラガラ

ラ「どうしたというのだ？朝から騒いで」

シャ「あっラウラおはよう」

箒「ア、アナタ！？」

雪「ええ〜!? 旦那ってラウラかいつ?!」

ラ「ん? 一体どういう状況だ?」

箒「アナタ、違つこの人は只の知り合いなのよ!」

ラ「へっ? いや、一夏は友人ではないか?」

鈴「(ラ、ラウラも状況わかつて無い!!)」

一「アンタが・・・アンタが箒を理解して上げないから!! 箒の心を傷付けた!! 箒は寂しがり屋なんだ!!」

ラ「わ、私は箒を傷付けたのか・・・」  
ガーン!?

一「ああ! そうだよ! だから俺が箒を慰めた!!」

箒「もしお前がそんな事したらお前を殺して私は不老不死に成る・・・アナタ! この人が言つて居るのは出鱈目よ!!」

鈴・雪・シャ「(今一瞬箒が素に戻つた!?)」

ラ「一夏! お前は私を騙したのか?」

一「何を言つて居る箒! 俺とお前にはもう子供が居るじゃないか!」

箒「・・・ギリギリ・・・居る?」

鈴「つて、居るだろ！！春香ちゃん泣くぞー！！」

学生寮

10号室

春「ハクシヨン！！・・・寒い」

食「お嬢ちゃん、腹あ出して寝てるから風邪を引くんだぜ・・・  
つて、ぶらあああああああ！！？」

春「おふっ!？」

校長「それは君もだろっ？さあ、そろそろメディックが来るから安心なさい、彼なら即死じゃ無い限り何とかできる程の腕前だ」

春「めでいっく?・・・医者？」

食「医者だあ？俺たちは医者はメツチャ苦手なのよおゝ助けてえゝ  
ママあゝ!!!」

春「お医者さんが怖いとか・・・プッ!」

食「今お前笑つただろ？」

春「うん、ふざけた植物が面白い事言つてたから、ついねえ」



箒「いや、それはマジでヤダ」

「……………」

午前九時

開店

シャ「いらっしやいませ、御嬢様」

「い、いらっしやいませ、御嬢様（シャル、何でそんなに生き生きしてるんだ!?!）」

「良い!!金髪の娘は女の子らしいけど……………これは……………逝ける!?!」

「ぎ、ぎこちないけど……………それがまた……………」

セ「いらっしやいませ、ご主人様」

ラ「いらっしやいませ、ご主人様」

敬礼!

箒「いらっしやいませ〜ご主人様共〜、お帰りはあちらです」

「ぐふっ！・・・メ、メイドさんが可愛過ぎて・・・やめて！俺のLPはもう、Oよー！」

「な、何と言う破壊力！あの敬礼している娘・・・蕩れ〜」

「なっ！？着いて早々行き成り出口を教える・・・何だろう、この扱い・・・何か感じる／＼」

一・箒「（お、男性客に真面な奴がいねえ）」

セ「箒さん、真面目にやらないと駄目ですわよ？」

箒「うん、ごめん・・・私はこう言うの全く分からないんだ・・・如何すれば良いんだ？・・・やはりココは・・・脱ぐか？」

シャ「ちよっ！？箒！どうやってたらそういう考えに辿り着いたの！？」

セ「箒さんが脱ぐ・・・裸・・・生まれた時の姿の箒さん・・・箒さん！やはりココは脱ぐしか無いですわー！！」

シャ「ダメだ・・・セシリアはもう昔のセシリアじゃないんだね・・・」

「



ラ「箒！人前で肌を晒すとは何事だ！！」

箒「うっ！ラウラ・・・」

シャ「（良かった〜ラウラは真面なんだね）」

ラ「お前の裸を見て良いのは私だけだ！！」

シャ「ぎゃああああああ！！！！」

箒「確かに！？ココで脱ぐと一夏位しか貰い手に成ってくれない！  
？・・・ってアレ？私は貰われるんじゃないかと、貰う方に成れば  
いいじゃないか！」

シャ「ほ、箒！？」

そんなこんなで午前終了

午後 2 - 1 教室

箒「（鈴・・・出番少ないなあ〜・・・）」

「やめて下さいー！」

箒「ん？・・・」

廊下

—「おいっ！その子を離せ！！」

「い、いやだ！この子は俺のメイドさん何だ！！」

—「いや、それお前の妄想だろ！！（クソ！あの子が人質に取られてるんじゃないか！！）」

箒「一夏騒がしいけど何かやってんの？」

—「箒！アイツが・・・ええ〜つと・・・同じクラスだけど名前を知ら無い、あんまり話した事無い女子生徒を連れて行くこうとしてるんだ！」

「ちよっ！織斑君酷くない!?!」

箒「・・・おいっ！人質変わってやるうか？」

—「ちよっ!?!?箒さん!!」

「ふんっ！良いよ！そ、それじゃあゆっくりこっちに来るんだ！」

箒「バカめ！！早歩きで行ってやるよ!!」

—「（バカはお前だああああ!!!!）」

「ふ、ふん！お前はもう要らないから解放してやる！」

箒「はいっ！人質交換完了！！さて・・・どうしよう？」

—「人質に成つといて何にも考えて無いんかい！！」

雪「おいっ！一夏！どうなつとるんや！？何で箒が大人しくつかま  
つとんねん！！」

—「確かに・・・箒！もういいから帰つて来い！！」

箒「すまん一夏、私の今の気分は“ちよつと乱暴されたい気分だ  
！！”」

—雪「い・・・言ってる意味わかんねえ！！！！」

—「ちよつと意味わかんね何？何なの！？」

雪「ちよつ！一夏落ち着け！お前、箒とは付き合い長いんやろ？ど  
ういう事なんか俺に説明せえ！」

—「知るか！箒オノオノについては謎が多いんだよ！って言うか良く分かん  
ないんだよ！！」

雪「お前それどないな友達やねん！」

「あ、あいつらが取り込んでる間に！おいっ！つ、着いて来い！」

箒「いや、こつ何と云つか・・・もつとこつ力強く腕を握ってくれ  
！」

「何コイツ！？言ってる意味分かんない！！！！」

「ああ〜!!もうこうなったらこの辺一帯焼け野原にしてやらあ  
〜!!」

雪「アホ!そないな事したら死ぬやろうが!するんならアイツの頭  
を焼け野原にしたり!!」

「雪」……………覚悟できてるんだろうな(やろうな)!!!」

「あの〜さっきの人なら何処かに行っちゃいましたけど……………」

「雪」……………テヘツ やっちゃった」

セ「……………御2人ともサツサと篝さんを助けに行つて来て下さい」  
カチャ

セシリアはスターライトmk-?を二人に構えて笑っていた

「雪」イ、イエス!マイロード!!!」  
ダツ!

一方その頃篝はといつと

屋上

「ふー！ふー！つ、疲れた・・・」

篤「お疲れ〜お茶飲む？」

「あ、ありがとう・・・って何でそんなに落ち着いてるんだよ！お前は人質なんだぞ！」

篤「ふむ・・・で、その人質をこれから如何するんだ？」

「それは・・・ええ〜つと・・・」

篤「・・・少し話すか？」

「・・・」

篤「少年、年齢は？」

「32・・・」

篤「・・・ゴメン・・・じゃ、じゃあ中年、何か悩みでもあるのか？」

「中年って・・・まあいいや・・・俺は無職何んだ」

篤「うん、いきなり私ではどうしようもない事を話し始めたな」

「それで・・・俺・・・唯一の癒しだった“メイド全集”って本を売っちゃったんだ」

篤「そうか・・・因みに篤たくさん的にはナースとか巫女さんとか年上

「が好みだぞ」

「俺はその本を守れなかった・・・頑張つてバイトして・・・休みも惜しんで働いて・・・そして俺はパソコンを買ったんだ」

第「ゴメン、段々言ってる事が分かんなくなってきた」

「そのパソコンで俺・・・色んなギャルゲーをやってきた・・・」

第「（あゝ、あの雲・・・雲みたいだな）」

「それからだ、中二と言う不安定な時期に俺はエロゲ、ギャルゲ等種類を問わず様々なジャンルのゲームをして来た・・・もちろんBもだ！」

第「腐つてやがる・・・」

「そして俺は目覚めた・・・そうさ、邪気眼と呼ばれる物だ・・・すると周りからどんどん友人が離れて行った・・・するとどうだろう？友人は消えたが俺には美少女ハーレムが残った！！」

第「エデンへ堕ちろ！！」

「百人の友より、彼女達を俺は選んだ！その結果がこれだ・・・年収2500万の大株主さ・・・笑えるだろう？」

第「リア充め・・・」

「妻は居るし、子供も居る・・・だが、無職だ！子供から言われたんだ、お父さんは何で御仕事に行かないの？ってな、だから俺は思

った！あの頃の・・・あの頃の友人が居なくなる前の俺の戻ろうと  
！」

第「・・・何故に、メイドを拉致ろうとした？」

「ふっ・・・それは友人が居た頃の俺はメイド萌えだったからだ！  
！！」

第「友人居た頃から腐ってんじゃん！！！」

「だから俺はメイドを捕まえに来た！当時の自分に戻るために！！  
そしてメイドさんとイチャイチャするために！！！」

第「お前そつちが本音だろう！！」

「君も大人に成ればわかる・・・その手の店は料金が高いんだ・・・  
」

第「ダメだ、コイツ・・・早く何とかしないと・・・」

「俺はメイドさんとイチャつく！その為には君に犠牲に成ってもら  
う！！心配するな！責任はしっかり取る！4人目の妻として迎えよ  
う！！」

第「あ・・・コイツあの時潰せばよかった・・・」

「君を連れて走って居る時に気付いたんだが、君は着痩せをするん  
だね、ゆとりの在るその服でも分かる位揺れていたよ？」

第「マジで！って言うか寧ろ私が揉みたいわ！！」

「さあ！心の準備は出来てるね？さ、さあ！行くよ！！」  
ダッ！

篤「うん、残念だ・・・私は年上のお姉さんが好みなんだ、男じゃない」

「そんな事！今は関係ない！！」

篤「一夏！！」

—「・・・篤、俺コイツの相手なんかヤダ」

「い、いつの間に！？」

篤「ツベコベ言うな、一夏コイツの家族の為にこの事は隠密に片付けるぞ」

—「アレ？篤、丸くなった？」

篤「いや、家族って良いなあ、って思ってたね」  
ドカッ！

「グフッ！」  
ガクッ

—「一件落着だな？」

篤「ああそつだな」



そして夜

学生寮

10号室

春「お母さん！東お姉ちゃんの所に行ってくる〜」

箒「行ってらっしゃ〜い〜」

一「母親結構様になつて来たな？」

箒「才能だ！母親としての才能じゃなく！子供に懐かれるという画期的な方」

一「画期的ね〜・・・そういえば箒、この東さんがくれたジュース飲む？」

箒「姉さんがくれた？・・・怖いからヤダ」

一「大丈夫じゃない？姉さんと一緒に近くのコンビニで買って来たらしいから」

箒「うん、それでも怖いから要らないって言うかもつ寝るから〜お休み〜」

一「……………箒、東さんはお姉さん何だからもっと信用すればいいのに……………」  
ゴクッ

—「っ!?!」

—夏がジュースを飲むと段々意識が薄れて行った、そして気が付いたら……

—「……………」

箒「暗黒の世界に帰れ……ハマーン・カーン……」

—夏が気が付くと目が虚ろな箒が横に寝ていた

—「一体何が在った……と言つか俺もしかしてやっちゃった?」

箒「愛と怒りと悲しみの……シャニングスタード……」

—「箒!何が在った!!と言つかガンダムネタばかり言うのやめて!?!」

箒「この俺を誰だと思ってやがる……」

—「ネタ変わっちゃった!?!」

箒「はっ!?!私は!?!……一夏……ココまでやっちゃたんだし……死ねるな」

—「箒さん、俺は一体何を!?!」

箒「いや〜・・・悪い夢を見てねえ〜」

一「ちゝ因みにどの様な夢なんですか？箒さん」

箒「うん、篠ノ乃箒が織斑箒に成ってしまった危険な状況に成った夢だ・・・はあく私が一夏に成りたかった・・・」

一「へ、へえ〜・・・??・・・っ!？」

箒「どうした？一夏」

一夏は気付いてしまった、ベットに何か赤いシミが在った事を・・・

一「俺、やっちやっただあ〜!!!!!!」

箒「は?」

一「箒!責任はきっちり取る!!」

箒「はい?」

文化祭 前

↳ 出血↳ (後書き)

真実

10号室

箒「うん……トイレ……」

箒は寝室を出てリビングに出た、するとそこには床に顔面を強く打ちつけて鼻血を出している一夏が居た

箒「……姉さん(怒)」

箒は取り合えずトイレに行ってから一夏をISを使ってベットに放り投げた

結果

ベットの赤いシミ

一夏の鼻血

箒のおかしな状態

沖縄旅行編の様な悪夢

この真実を一夏は知らない……

お菓子の箱で閃いてなんか無いんだからね(棒)(前書き)

神の部屋

神「あゝ・・・暇です・・・ZZZ」

？「兄さんちよつと良い・・・寝てる・・・ん？・・・篠ノ乃・・・」

お菓子の箱で閃いてなんか無いんだからね(棒)

文化祭二日目ってメンドいよね〜っと思って居る箒さんです。本日は文化祭二日目、メンドくさい事極まりないですが・・・

一「・・・・・・・・39.9」

箒「・・・・・・・・ゴホン」

春「お母さん大丈夫？」

箒「・・・・・・・・うつるから」

一「大丈夫だって微熱だし」

春・箒「・・・・・・・・」

一「おいおい・・・そんなジト目で見つめないでくれ」

春・箒「・・・・・・・・」

箒と春香は思った、『ああ、ダメだコイツ早く何とかしないと・・・

』

2 - 1 教室 朝

セ「まあ！それでは箒さんは今日は学校へは来られませんの？」

一「うん、箒を看病しないといけないし今日は早めに帰るから」

ラ「そうかそれは大変だ、よし！ならば私も行くぞ！嫁を放つては置けんからな！」

シャ「あっじゃあ、私も行くよ」

雪「なら俺も行くで？友達が苦しんどるのに見舞いにも行かんのはアレやし」

ドーーーーーン！

「キヤアアアアア！？」

一「っ！？」

一夏達が午後からの見舞いやら何やらの計画を立てていると突然学生寮の方から爆発音が聞こえてきた

学生寮

10号室

春「お母さん……」

箒「……人が風邪引いて辛い時に一体誰だよ……」

？「私だあ！」

春「誰だ、コイツ!？」

箒「……ゴホン」

？「おやあゝ？反応が薄い！ううゝんむ！篠ノ乃箒君！君……風邪をひいているのだろう？」

春「いやいや！見ればわかるじゃん!!」

？「うん？このお嬢さんは何方かな？……ああ！君の娘か!!  
うむ、君もその年で娘が出来て大変だろう？篠ノ乃箒君？……それともちろる君と呼んだ方がいいかな？」

箒「……春香……引き出しからアレ……取ってきて」

春「はあゝい！アレだね」

？「フッフ……やはり君は面白い!!いやあゝ別にキラ君でも良かったけれども此方に来てよかった！さて篠ノ乃箒君！ああ、君も此方の世界に慣れているだろうから篠ノ乃箒と呼ばせてもらおう？それよりも！篠ノ乃箒君！私の所に来て貰おうか？私は君が欲しい!!兄が極普通の人間の身体に君達の魂を入れただけだというのに君達は独自に自身の身体を進化、何よりも神に近い存在に成り掛



けている！その進化の原因とも言えるモノを私は知りたくて知りたくてウズウズウズしているんだ！と言う訳で私の所へ来てくれ！」

春「はい、お母さん」

箒「・・・ありがとう・・・」

謎の人物が勝手に話している間に箒は春香からアレを手渡されていた

？「おやおや？何だいそれは？気に成るじゃないか！私に教えたまえ！」

箒「・・・うるさい・・・頭に響く・・・」

？「・・・まだかね？・・・まだかね？・・・まだかね？・・・まだかね？」

箒「ハア・・・春香・・・相手してあげて」

春「ええ～・・・ハア～お兄さん、お母さん風邪ひいてて喉とか痛いから察してあげて？」

？「だが気に成るだろう！私はこの溢れ出す知識欲と高まる好奇心でもはやこの胸が張り裂けそうだ！！」

春「それはお兄さん・・・恋だよ！！」

？「な、なんだと！？私が！？恋だと！？・・・フ・・・フハハハハハ！そうか！これが！この感情が恋愛感情と言うものか！少女よ！こんな時私はどうすれば良い？」

春「考えるな……感じる……って言うか本能に身を任せちゃえ」

？「本能に身を任せる……なるほど！！理解した！」

箒「見舞客じゃないなら帰ってもらおう……」

謎の人物を春香が弄んでいると何時の間にやら箒はロケットランチャーを謎の人物に構えていた

？「ふむ……それはココ人間がISが出来る前に使っていた武器ではないか？」

春「お母さん！そんなモノこんな所で撃ったら！！……せめて外で撃つて！！」

箒「大丈夫……コイツの威力は精々普通の人間一人が即席ハンバ―グに成る程度だから」

春「じゃあ、安心だ」

？「ふむ、だがその説明だと私をハンバ―グ、焼き加減をレア程度にするという事ではないか？」

箒「ツッコむの厳しい……喰らえ」  
バシユン

ドーーーーーン！

春「お母さん……今日の晩御飯私焼肉がいい」

箒「……目の前に在るから勝手に食べて……」

春「うげえ……人は無理」

？「いや、この世界には人食い人種も居るそうだ、案外美味いかもしれん」

春「あつ生きてた」

箒「……もう寝るから……適当にあしらって帰って貰いなさい」

？「さてでは私は今自分がしたい事をしよう！」

そういうと謎の人物は箒に近づきそして

箒「ムゲツ!？」

？「……………」

春「あらあら」最近の若い子って直ぐにキスするんですねえ」

春香が内心ボケを無視されて傷付いていると其処へ

ガチャッ!

一「箒!さっきの爆発は一体!??ってお前誰だ!!」

？「ん?ああ!初めまして、私は貴方達を此処へ送った神の弟のモ

リナガと言います。以後お見知りおきを・・・

—「そういう事だったのか・・・取り敢えず殴らせる！顔が誰だか分からなくなってもお前が死ぬまで殴ってやるから！！」

モ「おや！野蛮ですねえ〜どうしてそこまで怒っているのでしょうか？」

—「お前が俺の女に手を出したからだよ！」

そう言つてモリナガに殴り掛かる一夏、春香と箒はその光景を見ながら

箒「気持ち悪い・・・」

春「お、お母さんしっかりして！？そして何が気持ち悪いの？お父さん？風邪的なモノ？」

モ「ハハハハ！やはり貴女は面白い！何が何でも手に入れたくなりました！！」

モリナガはそう言つと一夏の攻撃を左腕で防ぎ一夏の鳩尾に掌底を叩き込んだ

—「カハツ！？」

春「お父さん！？」

箒「一夏！？クソツ！！」

箒はISを展開してモリナガを掴みそのまま外へ押し出した

モ「グッ!!」

箒「風邪とかインフルエンザとか主に風邪え〜!!」

モ「クッ!無理すぎですよ!!・・・まあいいです。このまま連れて行くので」

箒「フォニムばくは〜っ!!」

モ「っ!?!」

箒は風邪の悪化で錯乱状態に陥っていた為真面な判断が出来ずモリナガを右腕で貫いていた

箒「あれ〜モリナガさ〜ん?死んじゃいましたか〜?」

モ「いえ、この体はホッチキスの針位の使い捨てなので全く平気です」

箒「あらあら〜代わりはたくさん居るんですね〜」

モ「ああですがこの体は使用后消滅するようになっていたので早く腕を抜かないと無くなりますよ?」

箒「あ〜それがレザーに引っ掛って抜けないんです」

モ「えっ?大変じゃないですか!良いでしょう!この事態は私が兄が転生させた人達に会いたかっただけなのに欲しくなって帰

ろうつとした私の責任です！！今から私が箒さんの右腕を切り落とします、そして斬ったと同時に治癒魔法をかけるので・・・ああ！痛いのは一瞬ですから」

箒「痛いのは嫌です！」

モ「その年で子供みたいな事言わないで下さい！」

そついうとモリナガは箒の右腕を斬り、治癒した

箒「あれ？何時やりました？」

モ「今ですよ　では腕の方は準備ができましたら治しに行きます」

ドーーーーン！！

箒「・・・右腕は私の利き腕なんだけど・・・春香・・・ダメだ！調子に乗る！・・・」

学生寮

10号室

「くっ！箒の風邪は、まだ治って無いんだ！早く探さないと！」「  
ただいま」

セ「一夏さんの言う通りですわ！早く探しませんと！」

お母さんおかえり、手どうしたの？

ラ「千冬さん！私の隊は皆準備は万端です！」

うん・・・話せば長いから、それよりフラフラするから寝かせて

千「落ち着け！一夏、お前が勝てないのならお前達が勝てる訳が無いだろうが！それにいま束が引く位の顔で箒を探している」

雪「モリナガちゅーんかいな？見つけたらぶっ殺したる！！」

シャ「うん、箒は直ぐ無理するから」

一同が箒の帰宅したのを完全に気付かないままモリナガを八つ裂きにする計画を立てて居ると其処へ

ガチャ！

束「皆見つけたよ！！この部屋の寝室に箒ちゃんが居る！！」

一同「はあ！？」

寝室

ガチャ!

—「篝!—!」

篝「……………ZZZ」

春「ん?どうしたの?お父さん」

千「一体何時帰って来たんだ?」

春「くっ!篝の風邪は、まだ治って無いんだ……位?」

—同「(さ、最初からじゃないか!?)」

春「あゝ!そうだ聞いてよお父さん!—!」

—「ん?どうした?」

春「お母さん、利き腕が無くなったんだって!—!」

—「……………はあああああつあああ!—?」



お菓子の箱で閃いてなんか無いんだからね（棒）（後書き）

神の部屋

モ「ふう〜ホントに強引な方でしたね〜…………篠ノ乃箒さん…………  
ですか」

神「お〜モリナガ、久しぶり〜」

モ「相変わらずですね？メイジ兄さん」

チ「（こいつ等の親絶対名前適当に決めたな…………チロル…………  
…………私もじゃないか！？）」

亡国機業と書いて”ダメ人間”と読む(前書き)

とある惑星

仲の良い親子がキャッチボールをしていました

子供「行くよ!とーちゃん!」

父「おう!とーちゃん目掛けて思いつきり投げてきな!」

子供「えいつ!」

子供が投げたボールが的の外れな方向へと飛んで行きました

父「ハハハ!下手糞だなあ!待ってる、とーちゃんが見本見せてやるから」

子供「うん!」

父「行くぞお!」

ジュツ!

子供「うわっ!?!」

これが僕と、とーちゃんとの最後の会話でした

教室

先生「スグル君、貴方のお父さんはきつと生きているわ」

ス「えっ？」

先生「だってほら今日の授業参観に出て来ておられるもの」

父「オイッ！スグル！父親を勝手に殺すんじゃあねえ！！」

ス「……一応実話だから良いだろ！とーちゃん！」

第「……最近まともな夢見ねえ」

亡国機業と書いて”ダメ人間”と読む

日曜日それは「あゝ！明日から学校だよ」と小学生に言わせる魔の休日

日曜日それはお父さんが前日に「よっしゃ！明日は休みだし今夜は飲むぞあゝ！」と歓喜するほど狂おしい日

日曜日それはお母さんが「あゝ・子供たちが家に居る」と絶望の淵におかれると言つ厄日

一部の人々を除けば大体が人生の内に何度か感じるこの瞬間今日はそんなお話

嘘です。

12月27日

学生寮

談話室

—「第160回！筭の右腕の代わりにどげんかせんといかん会議！」

一同「わああああ〜！」  
パチパチパチ

東「ちーちゃん最近丸くなったね」

千「こいつ等の前で真面目にしているのがバカらしくなってな？筭、ミカンの皮が剥けたが食べるか？」

筭「いただきます」

鈴「何で炬燵は談話室にしかないの？って言うか冬休み始まってから皆談話室で生活してるよね〜」

春「寒いからなのじゃ〜 あっお母さんお餅焼けたよ！」

ラ「あああ〜日本に永住しよう・・・ドイツの冬を炬燵無しではもう過せんしな」

セ「あっ！？シャルロットさん！一体幾つ地雷を置きましたの！」

シャ「うーん・・・地雷じゃなくてセシリアが勝手にボ 兵に突っ込んで場外に飛んだだけだよ」

雪「俺の・・・俺のリュ が最強なんやあああ!!」

ク「ふん、箒の方がまだ強いわ!」

ラ「姉さん、黒ウサ隊はどうするんですか?」

ク「仕方なからう、黒ウサの隊員達に日本の温泉について話したらアイツ等有給取って熱海に行くなどと言うし」

箒「熱海ですか?良いですね〜温泉」

千「ココにも温泉では無いが殆ど銭湯の様な風呂が在るだろう?」

鈴「まあ、温泉は置いといて千冬さん、一夏がそこで拗ねてますけどどうにかして下さい、鬱陶しいです」

千「・・・ハア〜・・・箒、ウチのバカを頼むぞ?」

箒「ハハハハ・・・冗談は止して下さいよ〜」

束「所で箒ちゃん、さっきから何してるの?」

箒「デイス イア2」

鈴「何それ?」

篤が鈴の質問に答えるべくデイス イア2の箱の裏を見始めた

篤「史上最凶やりすぎシミュレーションRPGだそうだ」

鈴「ふん．．．おもしろい？」

篤「．．．ユニークとでも答えると思ったか？」

鈴「チツ」

ラ「デイス イアなら私は4をやったぞ？只、得た物はイワシに関する一度聞いただけでは覚えられない豆知識だったが」

篤「そうか．．．イワシ．．．好きか？」

ラ「ヨーロッパの何処かの国の缶詰の性で嫌いではないが良い印象ではないな」

セ「あゝそれはスウェーデンのSurströmmingと言っ物ですわ．．．」

春「おおゝ流石イギリス人、発音良いゝ私てつきりセシリアは日本人だと思ってた」

セ「．．．普段私の事はそう思われていたのですね．．．」

シャ「篤、セシリアを慰めてあげて．．．」

篤「？．．．取り敢えずこのミカン食べてからでいい？」

シャ「いや・・・良いけど」

セ「篝さんの中で私はミカン以下ですね」

シャ「ちよっ！？セシリア！すっかりして！」

雪「（あ、ありえへん！！11戦全部自滅なんて！！）」

セシリアが拗ね、一夏も拗ね、雪尚は笑いを堪え、千冬は寝て、束も千冬に抱き着き寝て段々とお昼寝するか見たいな空気が漂い始めた頃、一本の電話が鳴った

春「今出ますよ」

タツタツタツ！

鈴「春香は元気だね」

篝「だって皆が寝たら春香はセシリア達をまさぐり放題だから嬉しいんだよ」

鈴「よし！目覚めた！」

春「お母さん、電話」

篝「あいあい・・・もしもし篝です」

卷「お～！篝か！私だ！巻紙だあ～！ハハハハハハ！」

篝「お前・・・飲んだら？」



卷「気にすんなってえ〜！樽の2つや3つ飲んだ内に入らないつてえ！」

箒「呑兵衛めっ……で、何か用か？」

卷「いやあ〜！それが今さあ〜亡国機業ファントム・タスクの仲間と飲んでんだけどさあ〜、エムもスコールも酒に弱くって寝ちゃったから暇でさあ〜！取り敢えず箒に電話してみた！」

箒「……そつかあ〜お前今とんでもない事口走ったからな？まあ聞かなかつた事にして置いてやんよ」

卷「おお〜！箒、お前つてやっぱり良い奴だなあ〜！年賀状書くぞ！絶対書くからな！だからお前も送れよ年賀状！待つてるお〜今アジトの住所言うから……おいっ！エム！いきなりどうした！？ちよっ！今箒と話してんだから！おいっ！！！」

工「……聞いたか？」

箒「なあ、いい加減電話切つて良い？聞かなかつた事にして置いてあげるから、つて言うかお願いします」

工「すまない」

箒「春香〜電話置いて来て〜」

春「ええ〜！もう少してベツトシーンだったのにい〜！」

箒「……どつちの姉？妹？」

春「先輩の方！」

箒「チツ・・・その先輩は好みだから今回は許してやる」

鈴「おいつ母親！」

そして時は過ぎ

午後15時

談話室

一「鈴・・・見てみる・・・あの大き目のゴミ箱に頭から突っ込んでるの俺の娘なんだぜ？」

鈴「知ってる、嫌がる箒にしつこくセクハラしてたら箒がキレて投げたんだよね」

春「・・・放置プレイ・・・来年は流行る！！」

ラ「存外遅しく育っているな、現在進行形で・・・」

一「ア、アレ！？おかしな！？目から汁が！！」

鈴「一夏・・・」

一夏が娘の成長に涙していると電話が鳴った

千「箒、出てくれ」

箒「ハア〜・・・もしもし」

工「ああ私だ、何時ものを頼む」

箒「はい？」

工「何だ？新人か？うむ、注文だ、チャーシューメン、焼飯、餃子、唐揚げ、酢豚を頼む」

箒「・・・お箸は何本御付けいたしましたでしょうか？」

工「ふむ・・・一本で良い、食べるのは私だけだからな」

箒「うん、昔の私でもそこまで食べれなかったぞって言うか、亡国機業やめな！織斑さん家に引き取って貰いなさい！」

工「は？・・・ま、まさかその声は！？篠ノ乃箒か！おのれ、まさか傍受されていたとは！おいっ！おやじさんは無事だろうな！」

箒「うつせえ！一体何回私に電話かけてくんだよ！お前と巻紙含めて亡国機業からの間違いもとい迷惑電話三件目だよ！誰だよスコールって！アニメイトと間違えられたよ！！何で魔法少女のフィギュアの予約してんだよ！ウチの姉さんに代わったら姉さん何か引いたよ！姉さん何か電話に向かって『デバイスンバスター』って言うてたよ！って言うかフィギュア代、亡国機業の予算から出してたぞ

！」

工「はあ？・・・あつ！？まさか！あの新予算割り振りに書いてあった私用運営費って・・・ハア・・・実動部隊に割り当てられた予算より多かつたぞ・・・篠ノ乃、出来ればこのことも内密に」

篤「苦勞してんだな、わかつた秘密って言うか忘れてやる・・・辛かつたらコツチ側（織斑家）に来て良いからな？」

工「・・・・・・・・・・うん」

篤「千冬さん・・・」

千「ん？何だ？今もう少しでシューンを倒せるんだ、些細な事なら後にしてくれ」

篤「千冬さんに妹出来ても良いですか？」

千「何だ、ウチに嫁ぐのか？」

篤「いや、苦勞人な千冬さんそっくりな顔の知り合いが居まして」

千「構わん、お前達を一人で相手していると疲れてな、と言うか昔からお前達姉妹を見ていて妹が欲しくて調度良かった位だ」

束「見てみて！ちーちゃん、今夜地球滅ぶんだってえ」

千「何バカな事を言ってるんだ？東」

東「とにかくニュース見て」

TV

『皆さん、年末をどうお過ごしでしょうか？私は今死ぬ前に大好きな女子アナウンサーに告白して実は両想いだった事がわかり非常に興奮しています。何でも巨大な隕石が日本に向かってピンポイントぶつかるコースで向かって居る様で、後40分後には世界地図から日本が消えるそうです。怖いですね』

『はい怖いですね。皆さんもコレを機に死ぬ前に気に成る相手に告白してみるのはいかがでしょうか？因みに私は実は男です』

『お母さん・・・』

セ「死んじゃうんですのね・・・思えば箒さんと出会ってから退屈しなくなりました」

ラ「確かに私は友人が増えたぞ」

箒「隕石くらい私と鈴と一夏に掛かれば消し去れるけど・・・どうする？一回死ぬ？」

シャ「ハハハハ・・・箒、私まだ親孝行して無いんだ、だから分かってるよね？」

箒「シャ、シャル！？そのサバイバルナイフ何処から出したの！？」

千「箒……私はまだこの年で死ぬのは御免だ、さあ、選べ此処で血祭りか、石ころを消すか」

箒「石ころ消したいなああああああ！！！！」

一「お、俺も急に隕石吹き飛ばしたくなつたなあ〜！！」

鈴「じゃ、じゃあ私も日課の隕石除去しようかな〜！！」

その後隕石は一夏のツインバスターライフルで粉々に成りました

## 神の部屋

モ「ん？箒さんの居る世界のニュースか・・・」

TV

『隕石落下で日本が消えます』

モ「ぶううううう！！？ま、まずいじゃないですか！？……ココは神であるこのモリナガが人々に救いの手を差し伸べなければ！！そう、決してそれを口実に箒さんに会いに行こうなんて思つてませんよ！ええ！思つてませんとも！」

宇宙 隕石前

モ「フフフフ！こんな石ころ神の力を持ってすれば小石も同然！・・

・・吹き飛ば」

ジュツ！

それは一瞬の事だった、モリナガが隕石を消し飛ばそうと意気込んで向かって行こうとした瞬間、地球から一筋の魔砲が射程内の物体を蒸発させながら向かって来てモリナガごと隕石を焼き払った

中学校

グラウンド

第「一夏、隕石殺った？」

一「ああ！バツチりだ！」

鈴「紅蓮の輻射波動に此処までの威力は無かった筈なんだけど・・・  
・まさかフレイヤ？」

地球の危機はこうして救われた

因みにとある惑星である親子がキャッチボールをしていて父親が謎の光を受け服が焼け公然わいせつの疑いで逮捕され掛けたかどうか

は本人のプライバシーにより言えませんラッシャイ！



あの時の幕、再来（前書き）

この話の続編・・・設定的な登場人物的な問題でディスガイアのな  
感じで行きます！！

あの時の箒、再来

12月28日

朝 学生寮

10号室

—「zzzz……」

春「……おばい……フヒヒヒヒヒ……」

箒「……うゝん……」

今年も後3日と成った今日この頃この一家（仮）は幸せそうに寝ていた、娘が寝惚けて母親を襲っている以外は全く持って普通の日常だった

春「ココが……ココがええんか？……」

箒「……フンッ！」

—「もがっ!？」

しつこいセクハラに箒は春香を一夏に向かって投げた

春「ううん……」

—「うゝん……ん?何で春香が俺の上に乗ってるんだ?」

一夏が息苦しさを起床すると春香が上に乗っていた事について不思議がっていると突然

箒「・・・ぐえっ!？」

ゴツン

一「ほ、箒・・・大丈夫か？」

箒「ううん・・・頭を打つちゃいましたけど大丈夫ですよ」

一「そうか良かった・・・うん？箒さん？」

箒「はい、何ですか？一夏さん」

一「・・・・・・箒がおかしくなった!？」

春「うっさいなあ！お父さん、朝から騒いでどうしたの？」

一「は、春香！箒が!」

春「ハア？お母さんがどうかしたの？」

箒「お母さん？・・・っ!？私何時の間に子供産んだんですか!？」

春「ハア？お母さんどうしたの？」

一「春香、良く聞け箒は頭をまた強打して記憶が飛んでしまったよ  
うだ」

春「お父さん何言ってるのお母さんが頭打ったくらいでこんな・・・  
・・・お母さん！一緒に風呂入ろう！」

—「春香何言ってるの？」

箒「ハッ！？愛娘からのスキンシップ！？これは！！・・・フッフ  
春香ったら甘えんぼなんだから」

—「アレ？箒さん？」

春「えっ！？お、お母さん・・・春香洗いつこしたいなあ」

箒「いいわよ」

春「・・・お父さんヤバイよ！？お母さんホントに記憶喪失だ  
よ！？」

—「ちよつと待て、何で今のやり取りで判断したんだ？」

春「だつてお母さんだよ！？利き腕の無い今お母さんが全裸と言う  
完全無防備で私の前に居るはずがあいよ！最低でも手錠、足枷を着  
けないとお母さん片手に成ってから入ってくれなかつたもん！」

—「箒・・・だから俺に春香と風呂に入ってくれとか言ってたんだ  
な・・・」

箒「もう！私を仲間外れにして！二人とも酷いよ？お母さんも混ぜ  
て」

二人は箒に抱き着かれながら考えていた

「（ああ、この後どうしよう）」

春「（アレ？これってチャンスじゃない？）」

そう思い春香は箒を見たが目が合った

箒「？どうしたの、春香」

春「（ギャアアア！そ、そんな綺麗な目で私を見ないでえええ！罪悪感が！罪悪感に苛まれるからあ！）」

箒「あゝ！春香の頬つぺたプニプニして気持ち良い！頬ずりしちやええ！」

春「やあああ！？そんな純粋な目で子供みたいなことしないでえええええ！！何か不純な事考えてた事に対して罪悪感がモノ凄いからあああ！！！」

「は、春香あああああ！！？」

一夏は思った、これは悪魔被いの光景かと

## 談話室

春「っていう訳なんだけど・・・」

鈴「それで？箒は、また頭打っておかしくなったと」

千「東、どうするんだ？」

東「うーん・・・元に戻したいけど・・・」

—「また頭叩きますか？」

東「いや、当たり所悪いと死んじゃうし」

千「何とか元の箒に戻さなければな？」

5人が『あの頃の箒 come back 作戦』について話しあっていた、因みに雪尚とシャルはデートに出た途中、箒に遭遇したが雪尚が箒（記憶喪失）を見てあまりに普段とのギャップが激しく、やけに女性らしかった為対応に困っているとシャルに『雪尚、箒を見てデレデレしてる』とジト目で見られていた

箒「一夏さーん、お茶入りましたよ」

—「ありがとう・・・」

箒「はい、お姉さんもどうぞ」

千「ん？ああ、すまない」

箒「はい、こっちは姉さん」

東「ウソっ！？箒ちゃんが私にお茶を淹れてくれるなんて・・・」

箒「はい、鈴ちゃん」

鈴「ありがとう」

箒「春香はリンゴジュースね」

春「おお！リンゴジュース！！」

箒「所で皆さん何を話してたんですか？」

一同は思った、アレ？箒このままで良くね？・・・と

一「いや、他愛も無い事だよ」

箒「そうですか？それはそうとお昼何にします？」

鈴「ラーメン！」

春「醤油味！！」

箒「ふふふ じゃあお昼はラーメンにしますね」

そう言っ箒は部屋を出て行った

束「ねえ、いつくん、束さん、箒ちゃんは今のままで良いと思うんだ」

一「奇遇ですね、束さん俺もそう思って居たところです」

千「ああ、箒があのままなら私の仕事は大変楽に成る」

春「私もお母さんあのままで良いと思う！優しいし！！」

そうこうして居る内に数十分が経ち箒がセシリア、ラウラを連れて戻ってきた

箒「皆さんは先に食べて下さい、私は一夏さんとセシリアさん達で少しお話が在りますので」

箒「という訳で一夏さん、何でラウラちゃんは一夏の事を嫁と呼んでいるんですか？セシリアちゃんも一夏の事をフィアンセと言っていましたし、どういう事が説明してくれるんですよね？」

一「ア、アレ！？箒が巻いた種が俺の性に成ってる！？」

箒「何言ってるんですか！私が何したら一夏さんに二人も婚約者が出来るんですか！！」

一「いやっだから箒さん」

箒「私と春香と言う物が在りながら浮気なんて……何か弁解は在りますか？」

ラ「さつきから箒はどうしたんだ？私は嫁達が争うのは見たくはないのだが？」

箒「嫁達って……一夏さんだけじゃないんですか！？」



セ「ちょっとラウラさん！一夏さんと箒さんはラウラさんのお嫁さんではなく私の婚約者ですわ！」

箒「ちよつ話が見えない！？何で私まで二人の嫁なんですか！？」

一「だからこれにはペットボトルの蓋よりも深い訳が・・・」

箒「落ち着いてください！ペットボトルの蓋は深くないです！寧ろ浅いですから！」

セ「それは置いといて貰って箒さん、どうしたんですの？今日はなんだか何時もと違い何だか女性らしいですわよ？」

箒「当たり前です、女ですから」

ラ「なるほど、私達との将来の為に花嫁修業をしているのだな？」

箒「いえ、これは素です」

一「まあ、とにかく話を聞いてくれ」

一夏は二人にまだ小学生だった頃近所の祭りで箒が転んで記憶喪失に成った時と同じ事が起きた事を二人に話した

ラ「そうか、では箒は記憶が無いままなのだな？」

セ「ですが、この女性らしい箒さんも中々・・・」

箒「ん？・・・ハッ！セ、セシリアちゃん！私には夫と娘が／／」

「と、まあこんな感じだから」

ラ「よし！それならば・・・箒、忘れてしまったというのか！」

箒「は、はいっ！？いきなりなんですか？」

ラ「二人で共に過ごしたあの日の夜を忘れたというのか！！」

「ちよっ！？ラウラ！何言ってるの！？流石に箒でもそんなウソ引つ掛る訳」

箒「えええ！？そ、そんな・・・私一夏さん以外の方と・・・」

「ちよっ！？箒さん！？」

セ「あゝ！ラウラさんズルいですわ！箒さん、私も箒さんと・・・その・・・あ、熱い夜を・・・／＼」

「ちよっ！？セシリアまで！箒、騙されるな！」

箒「わ、私は・・・とんでもない事を・・・死んで詫びます！（泣）」

「セ・ラ「ちよっと待てえええ！！！」

こうして一夏達はどうか箒を説得しホツとした所で談話室に戻り箒が作った伸びきったラーメンを啜った、鈴はその光景を見ながら嘲笑っていたが春香が背後から迫っていたのに気付かず悲鳴だけが学生寮に響いた

午後19時

大浴場 男湯

一「ハア〜・・・箒にはって言うかちろる君には悪いけど箒はこのま  
まがいいな」

一夏が一人では広すぎる風呂に浸かりながらのんびりしていると更  
衣室に誰かが入ってきたので『ああ、雪尚が帰って来たのか』と思  
って居ると

箒「一夏さん、お背中流しに来ました」

一「ああ、俺はこう言ってくれる今の箒が良い・・って言うか、何  
故に男湯に？」

箒「だから、一夏さんのお背中を洗いに来たんですよ」

一「バカ、雪尚が入ってきたらどうすんの」

箒「大丈夫ですよ、さっきシャルロットちゃんから今日は帰らない  
って電話が在りましたから」

一「・・・ああ、そっか・・・アイツ等大人に成って帰ってくる  
んだな」

箒「う〜ん、何でも雪尚さんの実家に行ったは良いけど大雪で帰っ  
て来れないそうです」

一「じゃあ、実家で大人に成るんだな」

篤「あっ！そつだ！一夏さん、やっぱり胸で洗う方が良いんですか？」

一「そりゃあそつちの方が良いけど・・・どうしてそんな事聞くの？」

篤「春香が一夏さんの・・・あの・・・そ、そういう本だって言っ  
て見せてくれたんです・・・そ、そこでこんな事をしてたので好き  
なのかなって／＼」

一「（え、ええ子やあゝ！メツチャええ子やあ！・・・ってヤバッ  
！？何この篤可愛過ぎて一瞬間西弁に成っちゃったよ！！）」

篤「いや・・・ですか？」

一「・・・・・・・・・・（で、でもこんな純粋な子にこんな事させて罪悪感  
が・・・・・・・・フツ・・何を迷ってるんだ俺は・・・・・・・・ちろる君なら言  
つたはずだ）」

篤「アレ？おゝい、一夏さん」

篤がフリーズした一夏の頬を突いていると一夏はゆっくりとそして  
力強く言った

「お願いします!」

箒「よいしょとっ……こんな感じですか?」

「さ、最高っス!感激っス!」

箒「ふふふ 一夏さん何だか変ですよ?」

「そ、それにしても箒、何でこんな事しようと思ったの?」

箒「……言わなきゃダメですか?」

「いや、言い難いんなら別にいいけど……」

箒「うん……やっぱり言います」

「あっ言っちゃうんだ」

箒「多分焼きもち焼いてるんだと思います」

「焼きもち?」

箒「はい、一夏さんの周りには可愛い子がいっぱい居るじゃないですか、セシリアちゃんと姉さんはスタイル良いし、ラウラちゃんは可愛いし、それに一夏さんってお姉さんの事大好きじゃないですか？」

一「き、嫌いか好きかなら、大好きです」

箒「素直で宜しい、まあ、それに比べて私は右腕が無いですから・・・でも、他の子に一夏さんを譲りたくはないし・・・複雑なんです、女心って」

一「・・・・・・・・箒！」

箒「っ！？一夏さん！」

一夏は箒を押し倒した

ゴ  
ッ  
ン  
！

「.....」 |



箒「……なあ、一夏……人は死んで更に魂まで死んだら何処へ行く？」

二人は見詰め合っていた、ラブラブな雰囲気など微塵も無く、在るのは顔面蒼白の一夏と怒りで体を震わせながら目の色が段々と紅くなっていく箒の二人だけだった

箒「最後に言い残す事は？」

一「人の脳って外的ショックに弱いんだね」

そして学生寮中に一夏の断末魔が響いたこの時学生寮に居た千冬、

束、ラウラ、セシリア、鈴、春香は揃って思った

『あつ算が元に戻った』

予告！次回のタイトルは登場人物紹介だ！！（前書き）

午後14時 駅前

千「クラリツサめ、こんな所まで呼び出しおって」

束「まあまあちーちゃん良いんじゃない？束さんは学生時代を思い出したよ」

二人がクラリツサに荷物を運ぶのを手伝って欲しいと頼まれ駅まで来たは良いがクラリツサが見当たらないので先ほどから周囲を探していた

束「それにしてもクーちゃん居ないね？」

千「ああそれについてはもう大丈夫だ、見つけた」

ク「お〜い！二人とも！此処だ！！」

千「全く、お前は荷物持ちに呼んだと思えば荷物はそれだけか？まあ良い、それ位なら私が持ってやる」

ク「ん？良いのか？千冬、一人では厳しいぞ？」

千「大丈夫だと言っている」

束「じゃあ束さんはクーちゃんの手に乗ってるのを持ってあげるよ」

ク「二人ともすまないな・・・さて千冬、この段ボール何だが」

千「ちょっと待て！それはどこその業者の物ではないのか！？」

ク「何を言っている、これは私の私物だ！」

千「……………やってやる！！運んでやる！！！」

### 本編より後日談

千冬はこれにより筋肉痛に苦しめられたそうなの

予告！次回のタイトルは登場人物紹介だ！！

12月29日

今年も後2日と迫った頃、ISメンバーは今日も学生寮の談話室で炬燵に入ってるのんびりしていた

セ「ハア〜今年も後少しですね」

鈴「・・・あつ！そういえば私お年玉くれる人いない！」

箒「ハハハハ！ウチだって居ないよ」

一「ああ！なんとたつて俺達の姉は・・・」

箒・一「無職だから！！」

千・束「ちよつ！？箒ちゃん（一夏）！無職じゃないから！」

一「えっ！？」

束「何、その『えっ！？何言ってるのこの人達』見たいな眼はやめて！」

千「そうだ！大体私と束は、この学生寮の寮監だぞ！」

箒「あゝそういえばそうだった！？」

束「もう！箒ちゃん、そんな事言う子にはお年玉あげないよ？」

篤「じゃあ、来年サンタさんは来ないから」

東「えっ？っ！？ヤダ！！あげるから！！お年玉あげるからサンタさん呼んで！」

千「お、おい、東、サンタは架空の人物だぞ！？」

東「え？何言ってるのちーちゃん？サンタさんは居るよ、スッゴイ篤ちゃんに似てるんだよ！それでね、この前名前を聞いたらそのサンタさんの名前がシノノ・ホウキって言うんだって！スゴイ偶然だよ」

千「……篤？」

篤「いやメンドくて、つい」

—「それはそうとさっきから気に成ってたんだけど……」

篤「どうした？」

—「あの人って……誰？」

千「あの人？……もしかして山田君の事を言ってるのか？」

山「えっ！？私！？」

篤「……いやほら、最近来たんだって！」

山「あの〜織斑先生達と同じ時から居ましたけど？」

一・セ・鈴・箒「ハアアア!？」

山「えうっ!？」

一「いやいや!全く気付かなかった」

セ「あっ!今思い出してみれば見た事あるような気がしてきましたわ」

鈴「私も……あゝ忘れた」

箒「一夏……そういえば春香の面倒見て貰っていたぞ?」

一「あ……そんな事より春香のお年玉って……」

山「そ、そんな事って!？」

箒「何言ってるの?一夏……ハッ!？」

一・箒「orz」

鈴「大変だな、二人とも……人の不幸って……見てて楽しい」

セ「鈴さん、その性格は直した方が良くと思いますわ」

鈴「これが在りのままの私だ！」

セ「まさに外道ですわね・・・

山「アレ？私についての話題終わりですか！？・・・って事はもう  
出番は？」

千・東「・・・稀にある！」

山「酷い・・・」

こうして残念系メンバーは千冬と東がクラリツサに呼ばれて抜けた  
後、残ったメンバーはウダウダと午後まで駄弁っていた

### 学生寮 談話室

篤「所で私の腕って何時になったら直んのかな？」

一「モリナガが何とかするんだろ？」

モ「はい、何とかしますよ？」

一同「っ！？」



箒「ハア~~~~お前・・・ホント心臓止まるから！寿命縮んだよ？箒さん、早死にしちゃうんだよ？」

モ「お〜！それは好都合！ならば早く死んで天界で永遠に私と幸せに成りましょう〜！」

一「寝言は寝て言え！ってか箒の右腕治しに来たんだろ？サツサと治して帰れ！」

セ「もう！一夏さん、何て事を言いますの！」

一「ちよっ！？セシリア！？何でそいつ庇うの！？？」

モ「ハハハ！やはり私を敬っているのでしょうか！さあ！彷徨える、子羊達よ！私を敬い！奉り！そして崇めよ！」

一「くそっ！どうして！どうしてなんだ！」

ラ「何だ？一夏、そんな事も分かんのか？」

セ「全くですわ！この方は病気で動けない箒さんを襲い、在ろう事か怪我させたのでしてよ？」

ラ「全くだ！そんな不埒漢を易々見逃す、ましてや筋すら通させないで返すつもりか？」

モ「・・・・・・・・えっ？」

一「まさか・・・二人とも」

セ「ええ・・・以前、篝さんの御説明でこの方が“死なない”という事は知っています」

ラ「ならば、コイツには人が死ぬ程のダメージで1回と数えて最低でも100回くらいは死んで貰わんと気が済まん!!」

ー「うわっ!?!この人達スゴイエグい事言ってる!!」

モ「ま、ママ、ま、待ちなさい!そんな事が許されると思って居るんですか!」

篝「良いよ、二人とも、殺っちゃいな」

モ「ちよっ!?!篝さん!?!貴方にそんな権限が在る訳無いでしょうに!」

篝「アレ?言つて無かつたっけ?私、転生前に神から称号奪つただけだ?」

ー「え?じゃあ、俺も神?」

篝「一夏、アイツに称号返したじゃん?、“称号：神”は私と鈴しかこの場で持つてないよ」

モ「ちよっと待つて下さい・・・貴女達が奪つた神の称号と言うのは私の兄のモノですか?」

鈴・篝「はい、貴方の兄のモノです」

モ「……………あゝ〜〜〜〜！！あの時、面倒だからって兄さんに最高神の役職譲らなければ！！」

セ「アラアラ？何という事でしょうか！私達には神々（鈴と箒）が着いているそうではありませんか」

ラ「ああ、私は無教徒だがこの宗教なら入っても良い気がして来た」

モ「お二人とも……少し話し合いませんか？例えば恋等について！この議題の重要な部分はイワシの栄養価を知る事からは「ギヤアアアアアアアアアア！！！！……………」

数十分後

箒「で、私の腕は？」

モ「……………こ、此処に」

ー「うわっ！キモっ！？」

箒「キモいとか言っな！私の腕だぞ！」

モ「はい、では箒さん、肩を出して下さい、腕をくっ付けるので」

箒「それは脱げという事か？」

セ「淑女に人前で肌を晒せと言っのですか！？」

ラ「よし、嫁の為にこの場に居合わせる男は記憶が消えるまで殴る、ISで」

「……篤、俺は命を大切に作戦に設定してるからこの場から退避するよ」

一夏がそう言っただけで退室しようとした時、不意に服を捕まれて

篤「居てくれないと嫌！（泣）」

セ「一夏さん、覚悟をお決めに成って下さい」

ラ「一夏、私の嫁としてもう一人の嫁を支えてくれ」

篤「……………ニヤリ」

「くっ！……（コ、コイツ！）」

この時、一夏は悟った篤は怖くて俺を引き留めたんじゃない！俺がシバかれる所を見たいだけだ！と

モ「うゝん、痛いのは嫌なのでこの腕に術式を掛けておくので勝手に付けて下さい」

「モリナガ……いや、名医！俺の命を救ってくれてありがとう！」

モ「いえ、私は負けたのです！織斑一夏、いや恋敵よ！篤さんは貴方を選んだ！潔い私は身を引きましょう！そして後日！篤さんにしつこく求婚します！」

「うわあ〜コイツ迷惑な奴だ・・・」

モ「では、今日は泣き寝入りをしたかったので帰ります」

こうして箒が一夏に向けた言葉の意味を察せなかったモリナガを泣きながら帰って行った

「モリナガ・・・もう、来るなよ」

箒「・・・おお〜!!付いた!」

箒、右腕復活!!

ヲ「ああ、これで日常生活が大文楽に成ったな」

鈴「いや〜箒達見ると笑う人の影の泣く人達が面白いからいいわあ〜やっぱり傍観者って良い」

箒「鈴、悪どいなあ」

「人の不幸は!」

鈴「蜜の味!!」

箒「外道だ」

鈴「褒めるなよ〜」

セ「・・・アレ?私の感性がおかしいのでしょうか、さっきのは褒めて無い気が・・・」

ラ「セシリア……お前の感性は正常だ」

セ「そうですか？良かったですわ」

箒と鈴がハツチャケて居ると姉達が帰ってきた

ク「いや〜手伝って貰ってすまん、私の行きつけの店で年末セールをしていたので買い過ぎてしまっただけな」

そう言っただけ顔のクラリッサに対して他の姉は

千「おいクラリッサ、私だけ荷物の量がおかしかったぞ！」

東「まあまあこの中じゃあ一番ちーちゃんが力持ち何だし仕方ないよ」

千「納得いかん！」

千冬は人が三人は入れそうな段ボールをIS無しの片腕に一つずつの合計二つを持ち、東は紙袋を片手に一つ持ち空いた手で千冬のサポートをしていた

—「姉さんってもう人じゃないよね〜」

千「一夏め、覚えてろ」

箒「千冬さん持ちますって！見てて怖いし」

千「す、すまん箒、正直腕の感覚が無い」

セ「私も手伝いますわ！」

ラ「千冬さん、ウチの姉がすみません」

こうして談話室の隅に大量の荷物を置いて一同が寛いで居ると

一「はい、姉さんお茶」

千「すまん、頂こう・・・ッ!？」

それは突然だった一夏が千冬にお茶を手渡し、千冬が飲もうとした時、駅から徒歩30分、途中階段（少々長め）と砂利道を経てやつの事で学生寮に着くというこのコースを片腕に100?近い荷物を一つずつ持ちながら休みなく歩いてきたのが祟ったのか千冬も一応人間なので手を攣ってしまったお茶を持っている手をしかも手に持っていたのは一夏が淹れた淹れたてアツアツなお茶だったそれをモロに被ってしまい千冬が条件反射で仰け反ると今度は足を攣ってしまった

千「う、ううう・・・（泣）」

第「ち、千冬さん!？」

一「姉さん!?!大丈夫!?!」

その光景を見た一同は様々な反応を見せた、ある天才は鼻から愛を吹き出し、ある姉妹は笑いを堪え、ある妹は焦りながらタオルを渡し、ある弟は泣く姉を慰め、ある傍観者はニヤニヤし、ある天災料理人は何故か絆創膏を差し出す、という混沌空間が生み出された

数分後

—「姉さん大丈夫？」

千「・・・うん」

束「ハア・・・ハア・・・ハア・・・ちーちゃん、かあいよ・・・」

箒「姉さん、落ち着いて、ウサ耳取るよ？」

束「ごめんなさい!!」

ク「すまん千冬、やはり背負える様にするべきだった」

ラ「姉さん、腹を切る勢いで反省して下さい」

セ「ほら千冬さん、オロ インですわ」

鈴「セシリア・・・千冬さん無傷だから・・・ってか、どんだけチー  
ト何だよ」

箒「鈴！悪口はいけないと思うよ！治さないと春香と一緒に・・・  
・・・愛でるよ？」

鈴「すみません！調子乗ってました!!!!」

シャ「だいたいま・・・アレ？千冬さん何で泣いてるの？」

ラ「ん？シャル、雪尚はどうした？」



シヤ「雪尚はね・・・あ、あわわわわわわ／＼」

ラ「？」

T  
V

『皆さん、夕方のニュースです。今日12月29日午後18時に世界中で赤い空飛ぶ謎の飛行物体が確認されたそうです、詳細は・・・』

一「へえ〜UFOかな？ 篤」

篤「無理無理無理無理！ 宇宙人とかマジ怖い！！」

鈴「いや見た事あるじゃん、宇宙人」

ガタガタガタガタ・・・

セ「ほ、篤さん落ち着いて下さい！」

鈴「篤、どうしたの？」

篤「私は幽霊とかは怖い位だが宇宙人は幽霊乗幽霊×飛んでくるゴキブリ位ダメなんだ」

一「篤、落ち着け！ 言ってる事の意味が分かんないから」

セ「要は幽霊は怖いけど宇宙人はもつと怖いという事ですか？」

ラ「いや宇宙人より幽霊の方が怖いだらう？」

ク「甘いなラウラ、幽霊も宇宙人もそれはもはや私にとっては只の萌えポイントだ！」

ラ「姉さんは一度宇宙人にキャトられて下さい」

千「馬鹿馬鹿しい、宇宙人も幽霊も居るはずが無かるう」

束「そうだね、幽霊は居なかったもん」

箒「……姉さん……“幽霊は”ってどういう意味ですか？」

束「ん？ああ宇宙人は見つけたけど幽霊は見つけられなかったんだ」

箒「……宇宙人……居たんだ……信じたく……無かった」  
ガクツ

一「ほ、箒いいいいいい！？大丈夫か？しっかりしろ！」

千「ま、まさか箒、気絶したのか？」

一「はい、綺麗に意識が在りません！」

セ「アラ？一夏さん、その団扇はどうしたんですの？」

一「ん、団扇？……こ、これは！？」

ラ「どうした？一夏」

シャ「何か書いてあるの？」

一「ああ『怖いので寝る時に誰か一緒に寝て下さい by 箒』……と書いてある」

セ「私、その役に立候補致しますわ！！（意識の無い箒さんを……その……抱き締めたり／＼）」

ラ「私もだ！怖がっている嫁を放っておけん！！（箒と寝れるという事は一夏とも寝れるという事だ！嫁に囲まれて寝れる……ジュルリ）」

シャ「じゃあ私も立候補しようかな？箒とお話したいし（昔みたいにお泊りするみたいで楽しみだなあ）」

千「……お前ら一緒に寝ればよからう？」

一「じゃあ箒は任せて俺は春香と寝るかな？」

春「ヤダ！私もお母さんと一緒に寝るって言うかお父さん！何この楽しそうなイベントは！私今の今まで部屋でエロゲしてたのバカみたいじゃん！」

一「うん、取り敢えず春香の言ってたエロゲは没収だね」

春「ええ〜！！ちょっと待ってよ、今お母さん攻略中何だから！」

一「一体どういうゲームだよ！」

春「え？東お姉ちゃんと私以外の学生寮の女の子とエッチな事が出来るゲームだよ」

千「・・・たゞばね〜・・・これはどういう事だ？」

東「いや〜暇つぶしに作ったら、つい」

千「ハア〜・・・もうこんな事に慣れていて自分が哀れだ」

ー「春香、そのゲームの詳細を求む！」

春「良かろう！教えて進ぜよう！何と！！このゲームに使っているヴォイスは全部本人から貰いました！」

ー同「な、なんだって〜！？」

春「しかも！Hなシーンはお母さんだけだけど本人の声です！！」

セ「ちよっ！？私、それ買いますわ！」

ク「私もだ！三つ頼む！！」

ー「所で篝の・・・その・・・え、エッチな声はどうやって録ったんだ？」

シャ「あつ！それ気になる！あの篝が簡単にそんな声出さないし、録らせないでしょ」

春「寝てる時に弄り倒しました！！」

「……だからか！！最近箒が艶っぽい声を出してたのは！！」

春「いや〜大変だったよ、お母さん寝言が凄かったし」

セ「私、大変その話に興味がありますわ」

ラ「私もだ、是非聞きたいものだ」

千「面白そうだな？私も興味があるぞ？」

春「そう？ん〜そうだな〜例えば“カニみそっ！”とか“そして何よりも、速さが足りない！！”とか」

ク「流石と言うべきか何と言うか……箒らしい寝言だな」

東「でも私は箒ちゃんに抱き着かれながら“腸、ブチ撒ける！”って言われた時は怖くてその日眠れなかったよ」

一「箒……」

セ「私もそういうものを体験してみたいですわ」

ラ「ふん、箒は寝言では私にテレるのだ！」

千「さて、お前達はもう寝ろ、私は門限を守らないバカに説教をしなければならぬからな」

一「うん、取り敢えず箒を部屋に運ぶか」

鈴「私も手伝うよ、お泊りしてなかった分此処で補う！」

セ「では私達は直ぐに着替えて向かいますわ」

ラ「言っておくが筈の隣は私だ！」

セ「ちよっ！？ラウラさんズルいですわ！」

シャ「アハハハ・・・私はお風呂入ってくるから二人より遅くなるよ」

春「ウフフフ！今晚楽しみだなあ！！！」

一「春香はお父さんと一緒だ」

春「良いよ、私、最近女だけじゃなくて男もイける様になったから」

鈴・一「春香・・・恐ろしい娘！！！」

予告！次回のタイトルは登場人物紹介だ！！（後書き）

雪尚編

本日12月29日 夕方

この日雪尚とシャルはデートに出かけていた、そしてそろそろ寮へ戻ろうとした時の出来事を此処に記す

学生寮付近 夕方

雪「いや〜今日も楽しかったな〜」

シャ「ふふふ 雪尚今日見た映画で泣いてたね」

雪「いややわあ〜シャルさんからかわんといてえ〜な！その事は皆には内緒やで？」

シャ「うん！内緒だもんね」

雪「ハハハ！…ん？シャルさん、ここ等辺道が凍つとるさかい、きーつけてな？」

シャ「うん、ありがとう雪尚」

雪「ええよ、シャルさんが怪我したら俺、また泣くで？」

シャ「もう、雪尚つたら……あつ!？」

雪「ん?どないし……た……ん……」

この時雪尚は見てしまった、地面に張った氷が良い仕事をした性で見てしまった

シャ「ゆ、雪尚!見た?／／」

雪「見てないツス!!／／」

シャ「本当に?」

雪「白……見てないツス!!」

シャ「今、白つて!……雪尚のエツチ／／」

雪「……シャルさん、ホンマすいませんでしたあああああああああ  
ああ!……!」

シャ「ちよつ!?!雪尚!怒つてないから!!……行っちゃった」

雪尚はISを展開してまるで光速に喧嘩でも売るかの様な速さで飛んで行った

因みに帰って来た雪尚は真っ白に燃え尽きており、千冬は説教はしないで反省文5枚と割と優しくしたそう



登場人物紹介など（前書き）

番外編だよ！！

## 登場人物紹介など

### 主役陣

織斑<sup>キラ</sup>一夏

称号 転生主人公

性別 男（旧男）

年齢 14歳

特技 野球、絵、料理など

苦手 高所

外見

原作と同じ

補足

前世でちろる、狂学者と共に神をボコって転生した。性格は純粹で人や環境に影響されやすい、高所が苦手だがISで飛行する際は何故か大丈夫、料理が上手でお菓子なども作れる、千冬が家事一切出来ない為前世に比べ更に技術が上がった

IS ウイングゼロ

二次移行機

コンセプト

超遠距離射撃殲滅

武装

バスターライフル

マシンキャノン

永久追尾空対空弾「Artemis」

弓矢型最終兵器「APOLLON」  
ビームサーベル

補足

神から貰ったIS、神のちよつとした悪戯心でバスターライフルは電池式に成っており、単三電池二本で六発撃てる、これにより一夏から武装面で問題があると苦情が幕に寄せられた為、監修 幕、製作 神によって新装備を追加、因みにこの時幕が“そらの もの”にハマっていたとかなんとか、ワンオフ・アビリティーは疑似NTシステム（NTS）、一時的にNTになる因みに本人はワンオフ・アビリティーをゼロシステムだと思っている  
待機状態は腕輪

篠ノ乃箒<sup>しののほ</sup>

称号 神（最上位級）

性別 女（旧男）

年齢 14歳

特技 耳かき

苦手 高所、軟体生物、キノコ類、魚介類、宇宙人、勉強

外見

髪型はポニーテールでは無く、結ばず放置（ストレート？）、服装も着やすいからと黒いジャージ

補足

前世でキラ、狂学者と共に神をボコって転生した。性格はおっとりマイペースで割と人見知りをする、一夏と同様に高所が苦手、他にも食べ物でも好き嫌いが多く、その中でも椎茸は食べるのを想像す

るだけで吐き気を催す、前世の幼少期にナメクジを見た後に昼食で椎茸が出てそれを見た時に吐いた、前世で肥満体型の為最低限健康的な体に成りたいと神に交渉した結果太れない体質にされた、因みに姉属性

IS 真ゲッター

二次移行機

コンセプト

近距離短期決戦

武装

ゲッタービーム

近接武器など

補足

神から貰ったIS、神様仕様の為“真シャインスパーク”を撃てるし壊れないと言うチート機体、空き容量がとも多い為、いろんな所から割と不味い物などを容れている、ワンオフ・アビリティーはまだ無い、本人はゲッターから出る緑色のエネルギー体の形状を変化させれるのでラムダ・ドライバだと思っている、因みに<sup>sonic</sup>筈は決定的に英語が苦手なので見た感じの発音をした為、勘違いに拍車を掛けた

待機状態は携帯電話

鳳鈴音（狂学者）

称号 神（最上位級）

性別 女（旧男）

年齢 14歳

特技 WARGAME（大火力特攻）

苦手 怪奇現象全般（人並み）、高所（人並み）

外見

髪型は箒と変わらないが箒より身嗜みはキチンとしている

補足

前世でキラ、ちろると共に神をボコって転生した。性格は外道、人の不幸は蜜の味、食べる物が無ければ飢えれば良いじゃなあ〜い？まさに外道・・・但し相手を選ぶ（嫌いな奴限定）、親しい人又は初対面の人には人並みに接する、メンタル面が強く三人の中では精神的に最も大人なのだ。時々壊れる、勉強面でも三人の中でも一番成績が良い（英語以外）

IS 紅蓮聖天八極式

二次移行機

コンセプト

高機動一撃必殺

武装

輻射推進型自在可動有線式右腕部

ナイフ

小型ミサイル

スラッシュユハーケン  
飛燕爪牙

補足

神から貰ったIS、神様仕様の為エネルギー面での燃料切れは無い、この三人の中でアクロバティックな戦闘を得意とするIS、少々小

さめな為屋内戦も可能、ワンオフ・アビリティーは無い、  
待機状態は指輪

準主役陣

美堂雪尚

称号 主役（自称）、ユツキー

性別 男

年齢 14歳

特技 我流拳法、超能力、氣

苦手 玉ねぎの調理

外見

KOFの椎 拳崇

補足

月光閃火さん提案オリキャラ、性格は普段は飄々としていて素は見せないがシャルロットが居ると素が出る、シャルに告白した際”OK”を貰った嬉しさから拳を空へ突き出したら何かが出た（後に氣と判明）出身は中国であるが両親が途轍もなく日本マニアの為（両親日本国籍取得）こちらに引越してきた、当初引越してきた場所が関西だった為か関西弁、非常に正義感が強く本編に出て居ない時に人命救助、強盗犯逮捕などで表彰されている、好物は肉まん

IS サイ・ドラゴン

一次移行機

コンセプト

超能力併用近距離格闘戦

武装

拳

脚

補足

箒が当初神から貰った機体を束が解体して放置して居た物を箒救出の際にその場で急ごしらえしたIS、一応ISコアは神様仕様の為スペック的にはチート（主役陣を除く）、本来このISは装甲なども含めて神仕様であったが束仕様に造り替えた為リミッターが付いた、リミッターが着いて居る為エネルギー面は一夏達の機体の様に無尽蔵ではない、ワンオフ・アビリティーは超覚醒、この機体本来の性能を出す、使用時は神仕様ISコアをフル活用して戦闘するが装甲への負荷や雪尚が使用時に酔うので滅多な事が無いと使わない待機状態はネックレス

篠ノ乃（織斑） 春香

称号 次期主役（自称）

性別 女

年齢 4歳

特技 寝技、耳かき

苦手 箒と全く同じ

外見

トモ子

トモ子のおおまけ

補足

箒と一夏のクローン、身体能力では箒達が圧倒しているのに互角に戦う（例フリーダムvs旧ザク 因みに一般人（雪尚含む）を歩兵だと考えた場合）、基本的には工口に貪欲だが時々子供らしい時がある、当初は真人間だったが一週間篠ノ乃姉妹と生活して性格が激変した。

学生寮 談話室

篤「という事らしい」

セ「大体の事は分かりましたけれどそのプロフィールは本当ですの？」

一「いや俺達も良く分かんないし」

ラ「嫁の事を知れた良い機会だった」

篤「で、今度は質問コーナーだけでも！・・・質問ある？」

セ「あつ、では私が・・・篤さんは怒ると何故目が紅くなりますの？」

篤「ん？ええ〜つと・・・あつ在った何々・・・その方が萌えるから・・・腐ってやがる」

一「えっ？じゃあ、あの赤目って意味ないの？」

篤「そついう事に成っちゃいます」

鈴「・・・次！」



シャ「じゃ、じゃあ今度は私が・・・箒って英語読めないの？」

箒「読めるよ？GUM DAMとか」

鈴「じゃあこれは？」

Now loading

箒「・・・ノ、ノットローディング!!」

セ「・・・不正解ですわ!!」

箒「つ!?!?・・・orz」

一「次!!」

鈴「あくじゃあ私が・・・称号の神ってどういう意味？」

箒「・・・願いを神頼み（脅迫）したら叶うんじゃない？」

鈴「・・・ニヤリ」

一「じゃあ今度は俺、箒のISの待機状態って携帯って書いてあったけど失くしたり壊れたりしないの？」

箒「呼んだら来るし、壊れないらしい」

シャ「らしい？」

箒「うん、概念がどうか、特殊亜空間力場がどうか言ってた・・・」

・全く理解できなかったぜ！」

一「……亜空間？なにそれ」

鈴「……次！」

セ「私はもう質問は在りませんわ」

ラ「私もだ」

シャ「いや、まだ在るでしょ！春香ちゃん性格激変って！」

箒「ああ、春香と初めて会った時と今じゃあ性格は大分変わってるよ、最初は良い子だったのに……」

春「お母さん、私は何時までも変わらないよ」

一「本音は？」

春「おっぱいサイコー！」

箒「……」

一「箒、二人で頑張ろう」

箒「一夏……お前もあっち側だろ？」

一「っ！？……orz」

話の方向性はクイックターンの如く(前書き)

12月29日 深夜

某キヌヤ

箒「はあゝ・・・流石地域のタイムズスクエア・・・半額だな  
キリッ

この時箒は罰ゲームで買い出しに出ていた

箒「ん？お惣菜コーナーが騒がしいな？・・・まあいいや」

そういうと箒は冷凍肉まん、リンゴジュース、スルメ等を籠に入れて  
ていった

箒「さて、後はコーヒー牛乳か・・・カフェ・オレで良いか」

そう言って箒が半額シールの書かれたカフェ・オレに手を伸ばした  
とき

箒「ん？」

ドクッ！

何者かによって箒の意識がフラッグアウトした

話の方向性はクイックターンの如く

12月29日この日遅くまでシスターズ（千冬 東 クラリッサ）と学生寮メンバー（雪尚途中参加）は意識を取り戻した筈と一緒に再度談話室で駄弁つて居たら春香の「腹減った」の一言でイベント発生！ジャンケンで負けた人が買い出しに行くと言う特殊イベントが発生した。

筈「で、私が惨敗した訳だが・・・」

ク「私も“ビール”で」

千「私は“ビール”だ」

東「東さんはねっ・・・“チューハイ”！」

セ「私は“PMミルクティー”をお願い致しますわ」

ラ「“コーヒー牛乳”と何か摘める物を」

雪「俺は“オラア！お茶”と“肉まん”」

シャ「僕はセシリアと同じで良いよ」

一「“カラアゲ様”と“肉まん”」

山「私も良いですか？」

筈「良いですよ」

山「じゃあ、焼酎で」

校長「ふむ、俺も良いかな？ちょうど明日俺の昔の友人（戦友）の命日何でな」

篤「良いですよ、で？お酒ですか？」

校長「いや、アイツは一度で良いから日本のお茶を飲んでみたいと言っ居てな、俺を置いて行ってしまったアイツにとびきり苦いのを飲ませてやるうかと思ってな」

篤「じゃあ、この前みつけた“激渋”っってお茶で良いですか？」

校長「ああ、そいつを頼む」

春「お母さん！ジュース！ジュースが良い！！」

篤「・・・さて、じゃあチャーツと行ってくるわ」

この日篤を見た物は居なかった

12月30日

学生寮 10号室

そこではとある理由により何故か篤が布団で寝ていてその周りを一

夏と春香、東、千冬が心配そうに箒を見つめていた

箒「う、うん・・・」

―「箒！皆！箒が起きたぞ！！」

箒「・・・は？」

春「お、お母さん！・・・良かった・・・ホント・・・良かった」

箒「・・・は？」

東「箒ちゃん！・・・心配したんだよ！」

箒「状況を・・・この状況を説明してくれええええ！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

―「という事なんだ」

箒「ふむ、つまり昨日ジャンケンで負けた私は買い物に行ったと・  
・んで、たまたま居合わせた楯無さんに担がれて帰って来たは良い  
けど意識が無かったと」

春「ホントどうしたの？お母さんが気絶とかトラックにでも轢かれ  
ないといけないでしょ」

束「うんうん、しかも不意打ちでもしないとまず轢かれないし」

—「一体何が在ったんだ？」

箒「う〜ん．．．たしか近くの24時間営業のキヤに行つてそしたら．．．あつ」

箒が昨夜の事を思い出していたら何かを思い出した

—「何か思い出したのか！」

箒「確かコーヒー牛乳を手にとった時に誰かに頭を叩かれた気が．．．」

春「えっ！？お母さんが不意打ちされた!？」

箒の発言に一同が驚きを隠せないでいると

束「フッフッフッフ．．．私の箒ちゃんを傷物にした罪は重いよ．．．見つけたらユルサナイユルサナイユルサナイユルサナイユルサナイ．．．」

束がこの場の一同にドン引きされながら部屋を出て行った

千「と、とにかくこれは一大事だ！直ぐに警察を」

箒「いや、そこまでしなくて良いよ？そろそろ姉さんが見つけてるだろうし？こんな事で警察とか呼んじゃダメ、忙しいそうだしね？」

警察つて……それに……ココは正義に目覚めた箒さんが悪  
を虐殺……ゴホン！成敗しようかと」

—「箒……今虐殺つて？」

箒「言つて無いよ？」

—「いや、確かに言つてた」

箒「良いよ！認めるよ！言いました！言いましたとも！確かに私は  
犯人見つけたらターミネートするとか言いました！」

—「……いや、そこまで追い詰めてないよ」

それから数分後！

東「やほー！箒ちゃん、仇を取って来たよ」

箒「えっ？」

—「何時の間に？」

千「東！お前、やり過ぎてないだろうな？」

東「だいじょーVっ！ちゃんとな无事だから……精神状態以  
外は……」

箒「……千「あぁ……やっちゃまった」



東「それは置いといて、篝ちゃんを傷物にした犯人追いつめてる時に見つけた篝ちゃんリクの“体感シューティングゲーム”を見つけたけどやる？」

篝「えっ？アレって出来なかったんじゃ？」

東「うん、昔はね、今は余裕だよ！で、どうする？最大プレイ人数8人だよ、只ISのコアネットワーク等を使ってるからIS操縦者しか出来ないけど」

—「“等”って!？“等”って何さ！」

東「ISについては私も良く分かんないところが在るんだよね」

千「おい、開発者！」

東「いや、私のは行っても模倣品だから・・・で誰がやる？」

篝「うん、じゃあ・・・」

篝達がメンバーを誰にしようか悩んでいると突然談話室のドアが開いた

ク「その話！聞かせて貰った!!!!!!」

ラ「姉さん、近所迷惑です」

篝「はい、二人決定！」

—「早いな!？」

鈴「はいはい！私もやる！」

篤「鈴は最初からメンバーに入ってた」

一「じゃあ、残りは三人か」

篤「いや、居るじゃん残り」

一「え？セシリアと雪尚とシャル・・・アイツらやるかな？」

一夏達は取り敢えずその三人に聞いて見た所

セ「篤さんと同じチームなら・・・／／」

雪「シャルさんにかっこええ所、見たる！」

シャ「雪尚頑張ってるね！私もサポートするよ！」

こうして結局談話室

東「皆準備は良い？取り敢えず説明するよ？まずこのゲームはISをゲーム機本体として使うんだよ、それでねプレイヤーのISが持つてるIS操縦者の身体スペックがそのままゲーム内でのステータスに変わるから、後自由度をとてても上げてるから言っちゃえば現実とそんなに変わらないからそういうのがダメな人はプレイしないで

ね？んで、一応仮想空間って言ってもフィールドはその人の深層心理、言わば夢だね、プライベートな事がバレる場合もあるから悪しからず、一応シューティングだから銃とかバンバン！撃っちゃう訳だけどこのゲームは夢の共有だから相手が何に成るかわからないからね？気を付けるようにコツチからのサポートは装備の転送位だから・・・それじゃあ！説明終わり〜」

一「説明長かった・・・篝わかった？」

篝「思い出せ！カムバック！私のドリーム！！あの時のエッチい夢へ行ぜ！！！！」

一「ほ、篝！？皆！篝を止めるんだ！」

一夏が振り返ると其処には

セ「篝さんとイチヤイチヤ篝さんとイチヤイチヤ篝さんとイチヤイチヤ・・・」

ラ「嫁達と・・・た、たまらん！！／＼」

雪「うおおおお！！想像するな俺！あんな夢シャルさんに見られたら俺死んでまう！！」

シャ「ダメダメダメ！！お父さんとお母さんの修羅場<sup>ケンカ</sup>何か皆に見せられないよ〜（泣）」

鈴「フフ・・・フフフフ・・・アハハハハハハハハハハ！！」

ク「ま、まずい！このままでは最近見たR18指定のホラー映画を体験してしまうー！！また三日間寝込んでしまっうううー！！」

ー「うわー始まって無いのに先行き不安だ……」

東「まあ、いつくんがヤダって言っても、もうこのボタンを押したら始まるけどなー」

ー「……さ、させるかー！！」

東「エイッ」

ー同「オウフツ！？」  
ガクッ

千「……おい東、これは安全なんだろうな？」

東「安心してよ、ちーちゃん東さんコレでも天才だよ？」

千「ああ、お前は天災だから不安なんだ」

ゲーム内

ジャングル

一「ハア〜不幸だ・・・」

一夏が絶賛不幸満喫中の時一夏の背後から

箒「私の方が不幸だよ」

一「うわっ!?!?箒!?!」

驚いて一夏が振り返ると其処には木の後ろからひょっこり顔を出した箒が居た

箒「ホント何でお前は服装普通なんだ」

—「?・・・どういう事だ?って言うかこっち来いよ」

箒「いや私にも女性生活14年で最近女性としての羞恥心が芽生えてな?この格好は恥ずかしい」

—「うん、箒の顔に一切の変化が見られないけど?」

そう言いつつ一夏は箒に近付いて行った

箒「ちよっ!?コツチ来るな!この服動きやすいけどピッチピチ何だよ!」

—「・・・・・・・・」

—夏加速

箒「分かった!分かったから!!出てくから!!そっち行くから!!走ってこっち来るな!!」

数分後

箒「ハア・・・ハア・・・ハア・・・あゝやり直してえゝあの頃(転生直前)に戻りてえゝ」

—「箒、出て来いって」

箒「分かった・・・一応装備名は“スニーキングスーツ”だそうだ」

そう言つて箒は出て来た・・・黒色で箒が言つて居た様にピッチピチの服装もといタイツだった、所々ベルトやらが着いていたがそういう風に色を塗れば『アレ？全裸じゃね？』という程のピッチピチ具合の・・・うん、ウェットスーツだ・・・

—「うん、これは男だとしてもキツイな」

箒「本当だ、何だこれは？プラグス ツですかあ？それともマヴラのパイロットスーツ？・・・ふざけんじゃないよ！！」  
ドゴッ！

箒が怒つてさつきまで隠れていた木を殴ると木が折れた・・・箒は少しダメージを負つたようだった

箒「　　っ！！？・・・わ、私はココまでの様だ・・・  
(泣)」

—「いや、確かにリアルの身体スペックだな？」

二人が呑気に話していると

鈴「おゝさつきの音は箒か？」

—「鈴か！・・・アレ？箒はスニーカーキングスーツなのに鈴は迷彩服か？」

鈴「いや、これ初期装備だろ？なのに何で箒はピッチピチタイツ？」

箒「いやほら宝箱とか見つけたら開けたくなるじゃん？んで、開け

て気付いたらこのザマだよ」

鈴「こわっ！？宝箱、こわっ！？」

一「くっ、クソッ！不用意に宝箱が開けられないなんて！！こんな世界腐ってやがる！」

箒「皆、私という尊い犠牲を無駄にするな！」

鈴「あつ！そうか！箒はもう末期（格好）だからこれからは宝箱発見次第箒に開けさせれば良いじゃん！」

箒「この外道がああああ！！（泣）」

鈴が箒の画期的な使用方法を提案していると

セ「箒さ〜ん！やっと合流できましたわ」

一「おう、セシリア！・・・そのスナイパー御用達的な銃はどうしたんですか？」

セ「箱を開けたら入ってましたわ！」

鈴「セシリアそれ頂戴！！」

セ「それが一度手に入れた道具は手に入れた本人しか使用できないそうですわ、この銃と一緒にそう書かれた紙が御座いましたし」

箒「ああ、私の奴にもその紙入ってたぞ」  
スリーキング



「アイテム手に入れるのにリスクが伴うとは!？」

セ「所で箒さん、その格好はどう致しましたの？ハツ!？まさか私を誘っている!？」

箒「ハツ!？」

「いや違っつて!箒は・・・」

箒「ふゝ助かった」

「俺を誘ってるのさ!」

箒「ちくしよーっ!っ!っ!私はずっと狩る側の人間だと思つたのに!気付いたら狩られる側に成つてたああああ!」

鈴「まあまあ・・・実際そうだろ?箒の姉ウサ耳だし」

箒「まさか!？あの耳にはそんな伏線が!?!ウガアアアア!」

箒が頭を抱えて唸っている中、私は思った『いやそんな訳無いだろう』と

「まあ箒をどうするかは後にして、これからの事を考えないと」

セ「そうですね、やはりそういう事はゲームではなく生身でする事ですし」

箒「ふっ・・・私、このゲームが終わったら河童に“リクルート”」

って名前貰うんだ！」

鈴「あっ！やばっ！箒が壊れた、箒！箒いいいい！！箒！カムバア  
アアアアツク！！！」

話の方向性はクイックターンの如く(後書き)

現実側

千「所で箒を襲った犯人の動機は何だったんだ？」

東「ん？ああ、動機？ほら！ちーちゃんが昔買い物してる時襲われたって言ってたでしょ？」

千「ん？ああ在ったな・・・まさか」

東「うん、あの店他の店舗ではして無いけど此処のはタイムセールしてるでしょ？」

千「ああ私も何度かした事が在る」

東「それに箒ちゃんが巻き込まれちゃって・・・」

千「なるほど・・・確かに此処では一度は体験しなければならない現象だしな」

東「でも箒ちゃん凄いよ？気絶してるのに6人病院送りにしたらしいし」

千「・・・ああ・・・仕事が増える・・・」

未知との遭遇（前書き）

神の部屋

神「ハアゝ・・・暇だな」

チ「暇ですねゝ・・・あっお茶淹れて下さい」

神「緑茶ですね？」

チ「はい」

今日も天界は平和だった

## 未知との遭遇

御久し振りですね、鈴です。はい、始めましたこの出だしで大分久し振りな訳で……

年越し迫る12月30日今日は束さんが作ったゲームをみんなでプレイ中なわけですが前回から色々あって……現在そこにはピチピチタイツで説教している箒と頭から血を流しながら正座で説教を受けている一夏とセシリア、その直ぐ側で二人の手当てをしている鈴という四人の姿が在った

ジャングル

箒「とにかく！他のメンバーと合流しよう！」

一「セ「りよ、了解……」

鈴「二人とも調子に乗るから……一夏」

一「ん？」

鈴「ざまあ！」

一「うっさい……」

箒「ああ、もう私泣きそう……」

セ「大丈夫ですわよ、私が慰めてあげますわ。……アラ？あちら

にいらっしやるのは何方でしょうか？」

箒「は？・・・おい、二人とも！アレってさあ・・・タコだよね？」

鈴「ー「アア？・・・タコ？」

セ「何処からどう見てもまごう事無き“蛸”ですわ」

一行が見ている先には人間と殆ど大きさの変わらない巨大な蛸が此方を見ていた

ー「なあ、アイツこっちに近寄って来てない？」

鈴「うん、私の目が致命的に悪くなければ近寄って来てると思う」

「シンシュウシャハツケンコレヨリシンニユウシャトシヨクシユプレイヲオコナイマス」

鈴「た、たたた、た、たまったもんじゃない！」

セ「イヤー！・・・あつで、でも箒さんもご一緒なら／＼／」

箒「アレに弄り倒される位なら一夏の方がまだマシだ！！」

ー「えっ？じゃあアレ倒したら俺が箒を弄り倒していい？」

箒「はあ？・・・いやでも・・・で、でもアレよか・・・あゝ」



ク「おい！大丈夫か！！」

セ「ク、クラリツサさん！？ご無事でしたか！ラウラさんはどちらに？」

ク「ラウラとは逸れていた、それより何かあったのか？凄い悲鳴が聞こえてきたが」

ー「ああ、それは筍がその蛸に触られて壊れまして」

ク「蛸？」

クラリツサが筍がメツタ切りにした蛸を見て

ク「昼食か？ちゃんと火を通せよ？出なければ食中毒になるぞ？」

ー「い、いやさつきまでバーサーカー状態の筍がグツチャグチャにするという凄惨な光景が」

ク「ん？さつき調理したのか？では鮮度が良い内に頂こうじゃないか」

セ「ちよっ！？そ、それを食べますの！？」

ク「食べる訳無いだろう」

セ「ホッ・・・」

ク「ちゃんと火を通すわ！」



セ「あああああ……」

鈴「ワ、ワイルドだな……あつライター在りますよ」

ク「ん？すまんな借りよう」

一「（あの二人はもうダメだ、後はセシリアに任せよう）箒大丈夫か？」

箒「い、一夏……又、又ル又ルが……」

一「あゝうん、確かに返り血？的なモノを浴びたもんね（うわゝ見た目エロいな）」

箒「は、早くココを離れよう……アレのそばに居たくない」

一「ああわかった、皆！場所を移動しよう」

ク「やはり味気ないな」

鈴「調味料欲しかったですね？」

セ「素材の味がよく出ていて美味しかったですわ」

一「捕食者共め！」



鈴「箒いいいい！！ゴメン！何かゴメン！」

一「見てみる！将来の夢たい焼きに成ってたい焼きを食べるってお前・・・共食いだろつがああああああ！！！！どうすんだよ！バカな子に成っただろつが！！！」

セ「ああ！？箒さん！こんなに成って仕舞って！！！」

一「そうそう！反省しろ！」

セ「良いですか？箒さん、私は貴方の恋人ですよ？それで・・・それでしょ、将来を誓い合った仲なんですよ」

一「ってメツチャウソ教えてるううううう！？」

箒「ん？わたしたちおんなのだからけんこんできないんだよ！」

セ「なっ！常識が在る！？」

鈴「セシリアお前遠まわしに箒には常識が無いって言ってるようなもんだぞ？」

一「いや、常識あったからね！こうなる前の箒にも常識は在ったから！」

ク「ん？おい！皆、敵（食材）だ！」

一「また蛸か！！！」

ク「いや、今度は・・・何んだアレは？」

セ「はい？・・・人？・・・人ではないでしょうか」

鈴「えっ？誰ラウラ？それともシャルと雪尚？」

セ「いえ、ゾンビですわ」

一・鈴「は？」

ク「ああ言われて見れば確かにアレはゾンビだな」

篤「おにいちゃんぞんびってなに？」

一「うん・・・ゾンビって言うのは・・・説明し辛いな、篤この双眼鏡見てみな」

篤「うん・・・あつ！めになんかつけてるおねえちゃんがおそわれてる・・・ってラウラああ！？」

鈴「あつ篤元に戻った」

ク「はっ！？ラウラが襲われてるのか！？」

セ「あつ！確かに居ましたわ！！・・・まあ、何故かスルメを食べています」

一「ええ・・・と、とにかく急ごう！」

—夏の掛け声に走り出す一同であったが箒は

箒「ラウラアアアア!!」

—「ほ、箒!？」

ク「な、なんて脚力だ!」

箒は駆け出したかと思うと思いきりジャンプをし、空中で

箒「飛翔・・・爆炎脚!!!!!!」

—「えっ!?!ライダーキック?」

鈴「はっ!?!ウソそのまま!?!」

何と箒はジャンプした勢いそのままゾンビの群れている所へ着弾、文字道理、着弾したしかも爆発するというメチャクチャ振りを見せてくれた

ラ「箒!?!来てくれたのか!?!」

箒「ラウラ!無事か?」

ラ「ああ!所で箒」

箒「なんだ?」

ラ「その格好・・・まさか私を誘っているのか?」

箒「お前もか！！！」

一夏側

一「なあ、鈴」

鈴「なに？」

一「一応俺達もスペックでは箒と同じ何だよな？」

鈴「何言ってるんだ？私は人間だ」

ク「お前ら案外酷いんだな」

そんなこんなでラウラが合流した

ク「ラウラ、無事だったか？」

ラ「はい、私があんな煩惱塗れのゾンビには負けません」

セ「煩惱塗れ？どういう事ですか？」

ラ「ああ、アイツら私を見るなり・・・『ハアハアハア・・・未発育少女』等と言って居たからな」

セ「・・・ラウラさんそれは煩惱というより未練ですわ」

一「ゾンビだけにか？」

ラ「未練・・・では生前は悍ましい人物だったのだろうな？」

箒「ああ、春香には絶対見せれない大人だったろうね」

鈴「つてか敵に真面な思考の奴が全く居ない気がするんだけど？」

ク「・・・確かに思考回路は腐っているかもしれんが全部が全部腐っている訳ではあるまい」

セ「ええそうですね、いつまでも美味しい蛸や未知なる食べ物があるとは限りませんわ！」

箒「そこ食べ物なんだな？」

一「いや、まあ確かにあの蛸は美味しかったけどさあ・・・見た目最悪だったよな」

箒「一夏何言ってるんだ？蛸なんて在って無いぞ？」

一「は？・・・あ、ああそうだな、在って無かった（忘れたんだな、箒）」

ラ「では姉さん達とも合流できたしそろそろ出発しよう、シャルが気になる」

鈴「雪尚は良いのか？」

ラ「アイツは・・・大丈夫だ、関西弁の奴は大体ギャグ補正が掛かってるから死なんだろう」

セ「な、なるほど！確かにそう言われて見れば雪尚さんは無事そうですね」

ク「確かにアイツは大丈夫だろうが近くにシャルが居れば危険だぞ」

セ「どういう事ですか？」

ク「先ず雪尚のギャグ補正により強敵が現れるとする、雪尚はギャグ補正が掛かって居るから良いがシャルにはギャグ補正が掛かって無い」

ラ「そ、そうか！雪尚はギャグ補正で死にはしないがシャルはギャグ補正が掛かって無いから死んでしまう！！」

箒「一・鈴「いやいや！ギャグ補正とかアレは都市伝説だから！！」

ラ「と、とにかく急いでシャルと合流だ！」

セ「分かりましたわ！急ぎましよう！！」

一「ええ〜！何か熱い展開に？」

箒「ギャグ補正って・・・既に敵にギャグ補正掛かってるでしょ？」

鈴「・・・・・・・・・・・・・・・・」

一「鈴？」

鈴「次回に続く！！」



第「・・・次回に続く？」

—「続くんじゃね？」

未知との遭遇（後書き）

今日頑張っちゃった！そらあゝもう頑張っちゃった！座り過ぎて足  
ペンペン（パンパン）ですよ！

ISなのにIS乗らなくて良いのかなあ？

b y 等 (前書き)

前回の続き

ISなのにIS乗らなくて良いのかなあ？

b y 箒

前回から続いて現在、ラウラと合流した場所で地図を手に入れた一夏達はそれを頼りに次のステージの“廃墟”へと向かった

廃墟

箒「ふう〜やつと着いた」

ラ「箒、この程度で疲れるとは弛んで居るぞ！私と特訓するか、嫁に来るか選べ！！」

箒「一夏、廃墟に着いたは良いけど次は何処行けば良いの？」

ほ、放置プレイだと！？いきなり高度すぎるぞ！箒

一「ああそれは・・・あっちだな」

鈴「あっちか」

セ「ではそちらに」

ク「箒、ラウラを構ってやってはくれないか？泣いて居るぞ」

箒「はい？」

ラ「・・・嫁に嫌われた・・・ううううう・・・」(泣)

篤「ラウラ、あっち行くぞ」

ラ「わかった」

一同「（立ち直り早っ!?!）」

一同あっちへ移動中

廃墟 あっち側

セ「確かに此方の様でしたわね」

鈴「うん、こんなビルとかの建ってる中にサザエさんのEDの時の家みたいなのが建ってるし」

ク「一応警戒して行くぞ」

篤「ああ、それなら私が様子見てきます」

一「いやいや危険だろ?」

篤「でも私スニーカーキングスーツだから足音し無いし、それに敵は皆残念だから大丈夫だって」

一「わかった、無理するなよ?」

セ「心配されなくても私が篤さんに手を出す輩を此処から狙撃しま

すわ

ラ「私は支援砲撃しよう！」

箒「うわ〜安心できる？」

ク「何故、疑問形なんだ」

箒「……では、行ってきます」

ー「あつ逃げた」

箒はまるで逃走するかのごとく走ってサザエハウス（仮）に向かって行った

サザエハウス

箒「うん、此処まで障害なんも無かった……さて、中を覗こうか」

室内

ラ（偽）「ご主人様肩を御揉みします」

セ（偽）「ご主人様！鈴さんがいじめてきますの！」

シヤ（偽）「もう、ご主人様はホントにエッチなんだから」

鈴（偽）「はい、ご主人様御飲み物です」

第（偽）「ご主人様遊ぼうぜえ〜」

雪「皆、そないにいつぺんに言われたらわからんて、俺は聖徳太子じゃないんやで？」

一同（偽）「ご主人様おもしろ〜い!!」

雪「それにしてもシャルさん、こない浮気みたいな事してええん？俺なんや、心が痛むんやけど？」

シャ（偽）「良いよ、ご主人様が僕達皆貰ってくれるんでしょ？」

セ（偽）「そうですわ、私、殿方にこの様な恥ずかしい格好でご奉仕なんてご主人様にしか出来ませんわ」

雪「なんや皆嬉しい事言ってくれて！よっしゃ！貰ったるで！皆嫁さんに貰ったるわ!!」

一同（偽）「はい、ご主人様」

雪「なっははははは!!」

雪尚達が団欒な時を過ごして居る最中銃声が鳴り響いた

雪「なっ!?!何や!!」

銃声が鳴り止むと其処には雪尚以外に立っている者は居なかった

雪「ク、クソツ！許さへんで！誰や！皆を撃つた奴は！！」

雪尚が後ろへ振り返ろうとした時いきなり蹴り飛ばされ、そして雪尚が顔を上げた瞬間、雪尚の眉間に銃口が向けられていた

箒「鉛玉はいかがですか？・・・ご主人様」

雪「ほ、箒！？アレっ？今撃たれて!？」

箒「いいや？私は撃たれたんじゃない、撃つたんだ」

雪「何でや！何でシャルさん達まで撃つたんや!!！」

箒「それは簡単だアイツら偽物じゃん」

雪「偽物？でも、本物も居たかもしれへんやろ！」

箒「お前・・・本気で言ってるのか？・・・ん？ああそついう事か、じゃあお前にとってはココの居る奴らは本物って事か」

雪「な、なに言うてんや、箒」

箒が何か良く分からない事を言い始めた事で混乱する雪尚にこの状況を説明する人物が現れた

雪「それはお前も俺のニセもん、ちゅー事や」

雪（偽）「俺が居る!？」

箒「ユツキー・・・後で話がある」



雪「うわゝ篝の話は肉体言語もあるからキツイでゝ、その辺お前は幸運やな？楽に逝けるんやし」

雪（偽）「クツ！何や状況がよー理解できへんけど！皆の仇は取つたるー！」

雪「おお！流石俺や！かつこええ事言うやないかい！よっしゃ！掛かって来い」

雪（偽）「うおおおおおおおー！！！」

雪尚（偽）が雪尚（本物）に向かって行った

雪「お前には言わんでも分かる思うけど一応言っといたらあー！」

雪尚（偽）の攻撃を捌きながら雪尚（本）は叫んだ

雪「俺は別に負ける事は恥ずかしゅー無い！それは俺がそいつより弱かってんからしやーない・・・でもな・・・」  
ドカッ！

雪（偽）「クツ！」

雪「例えニセもんやったとしても自分に負けるのはメツチャ腹立つんじやあああああー！！！」

ドガガガガガガ！！

雪（偽）「ゲアアアアアアー！！！」

雪「……強敵やったで、俺」

箒「うわ〜何かシリアスっぽいなあ〜」

雪「フッフ！俺に惚れたらいかんで？俺はシャルさんだけの俺や」

箒「は？すまん、セシリアと通信していて聞いて無かった」

雪「orz」

箒「で、セシリア何かあった？……うん……よし、じゃあ行かしちゃえ」

雪「で、何やて？」

箒「いや、別に何も無いってさ」

雪「いや、今なんや楽しそうに『行かしちゃえ』って言うてたやろ？」

箒「いやいや、そんな事よりもだ、何気にカツコいい事を言ってたじゃないか？」

雪「なっ！？恥ずいからぶり返さんといてえな！」

箒「いやホント惚れ直しちゃったぞ？」

雪「いややわあ〜……ん？惚れ直した？」

箒「ん？気付かなかったのか？私はお前に一目惚れだったんだぞ？」

雪「何やて!?ア、アカン!アカンよ!?俺!箒も有りやなんて!  
俺にはシャルさんて心に決めた人が・・・」

箒「雪尚?おゝい、雪尚さんよゝい」

雪「(うわゝ!キュンって来た!今メツチャ!キュンって来たよ!  
?)」

箒「(ん、そろそろか)で、雪尚は私とシャル、どっちを選ぶんだ  
?」

雪「俺は・・・俺は・・・俺はな!!」

雪尚は箒の肩を掴み

雪「俺はシャルさんのk」

ガチャ

シャ「雪尚!此処の居たん・・・雪尚、箒に何してるの?」

雪「・・・ハッ!ま、まさか!??」

雪尚は箒に嵌められて居るのではないかと思ひ箒の顔を見ると

箒「ぷっ・・・くっくく・・・  
ブルブル

声を出さない様に堪えて笑っている箒の顔が在った

雪「ま、まさかやったあああああ！！」

シャ「雪尚、どうしたの？私にこの状況の説明してくれないと・・・ねっ？」

雪「（シャ、シャルさん笑ってはるけど何やメツチャ黒い！黒いよ！！）」

箒「いや〜楽しかった〜じゃっ！そういう事で」

箒が他の皆の所へ帰ろうとすると

シャ「待ちなよ、箒、僕、箒からも話が聞きたいな？・・・で、雪尚と何してたの？」

箒「ん〜シャルが来てるって報告が在ったから雪尚を陥れようと思っただ！後悔と反省は今してる」

雪「やつぱお前俺を嵌めよったんか！」

シャ「そ、そこまで正直に言われると逆に怒る気が無くなったよ」

箒「まあ、そろそろ皆と合流しようか？」

セ「その必要はありませんわ！」

ラ「何故なら！」

ク「私達が心配して！」

—「もう来ているからだ!!」

プレイヤー全員合流

サザエハウス前

篤「何か良く分かんないゲームだったな」

—「ああ、武器は出て来るけど敵が残念過ぎた」

鈴「てか、ゴールお粗末過ぎ」

現在一夏達の前にはゴールと書かれた紙の貼ってある見た目『どこでもドア』の様な扉が置いて在った

ク「では、全員帰るぞ」

学生寮 談話室

束「おかえり〜ゲームはどうだった?」

篤「もうやらない」

束「酷いつ!?!」

千「お前達何時までゲームしてる積りだったんだ? 今9時だぞ」

ク「何? 私達は8時間も束の作ったゲームの中で無駄な時間を過ごしたよ言うつのか!?!」

束「クーちゃんまで!?! 酷いつ! 酷いよ!! 束さんの心は硝子のハートなんだよ! 割れ物注意なんだよ! それを寄って集って酷いよ! 束さんは深く傷付いちゃったんだからね! もう、こつなつたら自棄酒だ!」

一「束さん、体壊しますよ?」

束「いっくん!?! いっくんだけだよ! 束さんを慰めてくれるのは」

箒「いえいえ、私も何だかんだで姉さん好きですよ? 姉属性だし」

束「ほ、箒ちゃん!?!」

千「箒、不純すぎるぞ・・・まあ、とにかくだ、さつさと風呂に入って寝ろ」

セ「そうしますわ、では箒さんお風呂ご一緒しませんか? / /」

箒「遠慮します」

ラ「そういえば箒は何故女同士なのに一緒に入らないんだ?」

箒「お前らが肉食系なだけだ」

一「まあ、確かに此処の百合率って結構高いよな」

鈴「言つとくけど私はノーム……百合だな」

千「ああ、確かにこれは不味い気がする」

東「えっ！？ちーちゃんってソツチじゃないの！？」

千「……当たり前じゃあああああ！！！！いつ私が百合と言つた！！！」

ク「そうだぞ、東、千冬は百合ではない、ブラコンだ」

千「クラリツサ、お前とも話し合わねばいけない様だな」

雪「百合やら何やら言ってるけど大元の原因は箒何やる？」

箒「何だ？ユツキーは私にゲイに成れと？」

雪「は？どないなったらそうなるねん！」

鈴「箒、私はもうこのままで良い気がして来た」

箒「鈴！？いや狂学者！諦めるな！まだ元に戻れるかもしれないだろっ！」

鈴「箒、考えてみる」

箒「何をだ……ま、まさか！？そうか！割引とか多いな！」

「ってそつちかよ！……まあ、多いよね」

鈴「他にも在るだろ」

箒「何？……体が柔らかくなったとか？」

鈴「いや、ってというか箒、ちろるの頃は別の意味で柔らかかったじやん」

箒「いやいや、お腹の肉が凹えて前屈とかし辛かったし」

鈴「そうじゃねえよ！ほら他にも在るだろ！！」

箒「………無いな！」

セ「女性の方が男性に比べて寿命が長いそうですわ」

鈴「いや、別にそれが言いたかった訳じゃ……」

箒「女最高！！」

「うわ〜何かもう、うわ〜」

箒「まあ、とにかくいい機会だし変わって見るか」

千「お前ら、話してる中、悪いがいい加減風呂に入って寝ろ！」

「一同」「了解！！」



翌日

12月31日

朝

学生寮

10号室

—「zzz・・・」

春「お父さん！！大変だよ！お母さんが！！」

—「・・・ん・・・何て？」

春「だから！お母さんがまた頭打った時見たいにおかしくなったんだよ！」

—「何だって！箒！」

箒「呼んだ？」

—「って早っ！？とにかく箒、大丈夫か？怪我とかしてないか？」

箒「何の話だ？」

—「いや、頭打ったんだろ？」

箒「は？私は頭なんて打ってないぞ？」

春「いやでもおかしいじゃん！お母さんさっき“行けるぞ、私！頑張れ、私！”って言いながら女性雑誌読んでたじゃん！お母さん今まで見向きもしなかったじゃん！！」

一「マジでか！？春香！箒、一体どうした！やっぱり覚えてないだけで頭打ったんだな！」

箒「今までお前達が私をどう見てたかわかったよ……まあ、言うなれば昨日私が色々諦めただろ？」

一「ああ、確かにそんな事言ってたな」

箒「んで、まあ、形から入ろうかと」

春「……お父さん、昨日何が在ったの？」

一「まあ色々かな」

箒「ついでにネコ被って見るのも面白いかなあ〜って」

一「どんな風に？」

箒「一夏さん、お風呂にします？それとも私にします？」

一「……お前は誰だあああああ！！！！」

箒「私だ！」

春「いや、さっきのお母さんも良いかも」



」！

春「イイエ」エ「エ」エ「エ」エ「エ」エ「エ」アアアアアア！  
」！

箒「二人ともいい加減にしないと！」

ガチャ

千「朝から何を騒いどるんだ！お前はああああ！！！」

ー「姉さん！聞いてよ！箒が！」

千「ちよっ！？一夏！？怖いぞ！？どうした何が在った」

ー「うん、一言でいえば箒が大人しくなった」

千「ハ？どういう意味だ？」

ー「見たら早いよ」

千「？？？これはどういう事なんだ？箒」

箒「そうですね、私がネコ被ってみようかなって思ってた今みたいに  
ネコ被ってたならこうなりました」

千「違和感しか感じられんが」

箒「それを本人の前で言うのはどうかと……」

千「お前もネコを被って居るなんて言う物じゃないのではないか？」

篤「それもそうですね」

千「・・・ハッ！？な、何だこの落ち着いた会話は！確かに篤がこれ程大人しくなれば私の仕事が大分楽になるな」

篤「いや、そこまで酷くは無かった気が・・・」

千「最近この辺りで走り屋や暴走族が出なくなったらしくてな、何でも長髪の女に片っ端からシメられたらしいんだ、それでこの辺での危険運転、若者の夜遊びが減っているそうだ」

篤「・・・仕方なかったんです、夜中煩いしイライラして・・・  
つい」

一「篤、ナマハゲみたいだな？」

春「まあ、怒ったお母さん怖いもんね」

千「まあ、これで面倒が一気に減るんなら私としては喜ばしいのだが」

一「まあ、とにかく、頑張っつてね篤」

篤「何時までも被ってませんけどできる範囲内で頑張ります」



ISなのにIS乗らなくて良いのかなあ？

b y 簿（後書き）

簿「次回予告！」

鈴「するの？」

簿「いやしないよ」

鈴「じゃあ、何で言ったんだよ」

簿「いや、何となく」

鈴「……………」

来年の抱負は”ハーレム結成”

by 春香

皆さん初めまして俺は真田・・・真田マツケンって言うんだ！今日は俺について新年だけど熱く語るぜ！まず俺には趣味が在る！そう言ったって極普通の趣味さ！その名も“バードウオッチング（覗き）”！！そう小鳥という女体等を覗くゲフンゲフン！！と、とにかく！！俺の趣味は小学生の頃に在った出来事が始まりだった・・・昔、俺は良く鳥を見ていた、主に更衣室や渡り廊下の下で大空を見ていた！！その時だった俺は出会った、出会ってしまった・・・そう！人はその出会いを運命という！！

因みに名前のマツケンは親がアメリカンドラマにハマっていてその時の勢いで付けた名前だ！と言われた

小学校 夏休み

真「ふう〜普通だ・・・この広い世界で俺を満足させる事が出来る奴は居ないのだろうか」

俺の観察ポイントは日によって場所が変わる、今日は渡り廊下の下だった

真「ハア〜・・・今日は確か女子達がプールに入ると言って居たな・・・覗くか」

最近俺は心に来るような一品に出会えて居なかった、その為俺は今日良い品出会えなければ足を洗おうとしていた、そして更衣室をウオッチしていたが途中から覗かず考え事に浸り始めた

真「（そうだ・・・これで、これで良いんだ、元々覗きはいけない



事なんだ)」

俺がこれまでのウオッチ道から足を洗おうと心に決めた時だった、その時俺は彼女に在った

箒「何してる？」

真「っ！！？」

箒「まさか・・・覗き？」

終わった、俺は足元から崩れ落ちた、だってそうだろ？現行犯でしかも同じクラスで女子の“篠ノ乃箒”さんに見つかっただんだけぜ？

箒「おい、どうした？・・・あっ！イチゴパンツ！！！」

真「なにっ！？何処だ！俺が確保しなければ！！持ち主に見つかる前に！！！」

俺は千里眼を持つ仙人が如く周囲を見渡した・・・・・・・・何もなかった、俺を見ながら必死に笑いを堪えている篠ノ乃さん以外

箒「・・・・・・・・・・プフッ」

真「っ！！？だ、騙したなコンチクショー！！！」

箒「いやゝ悪いつい出来心で」

真「っ！っ！じゃないよ！全くもっ！」

箒「いや〜ホント悪かったって、アハハハハハ！」

真「……………」

俺は正直驚いていた、普通そうだろ？俺、覗いてたんだぜ！なのにこの人、篠ノ乃箒は！何時も女の子なのに黒いジャージ着て完全鎖国体制で寝ているあの篠ノ乃さんが目の前で俺をからかい笑ってるんだぞ？怒るでも無く、只覗き？いや違うって彼はガラスに映ってる自分を見てたのさと言わんばかりの対応で接して来たんだ

真「（よゝよし！他に目撃者も居ないし、篠ノ乃は転校してきたばかりだから誰もこの事を信用しないだろうし大丈夫だろう！）」

箒「アレ〜？ダンマリですか？…………まあいいや、おい、覗き魔」

真「覗き魔！？失礼な！！俺は只純粹に鳥を眺めていただけさ！！」

箒「…………やめとけ、小学生の裸なんて見ていて悲しいだけだぞ？」

真「何おう！？お前！3組の紫藤さんは凄いんだぞ！」

箒「紫藤？…………ああ！紫藤涼の事か！」

真「ああ！その紫藤さんだ！」

箒「そいつは今私の友人だが？」

真「ウソだろ！？あの紫藤さんが他人と関わるなんて！」

ココで俺から皆へ説明タイムだ！紫藤涼むらじょう彼女は超小学生級のナイスバディだが何時も眉間にしわが寄って居てしかも性格もクールな為人付き合いが悪い、その為彼女は何時も一人で本を読んで居たり、その辺を徘徊している！

箒「確かに涼は凄いぞ、小学生にしては喧嘩慣れしていた・・・まあ、しつこかったからシバいたけど・・・」

真「ハア！？紫藤さんと喧嘩したのか！？中学生四人を締上げる様な奴だぞ！！？」

箒「まあ、確かに強かったけど・・・大人気なく絞め落しました・・・テヘッ」

真「あ、有り得ねえ・・・」

箒「私の領域に入った事が奴の敗因さ！まあ、近接戦せずにアウトファイトしてれば良かったのに」

真「ハア・・・有り得ねえ・・・で、篠ノ乃はこんな所で何やってんだ？」

箒「待ち合わせだ」

真「待ち合わせね・・・」

この時俺は篠ノ乃が誰と待ち合わせして居るか等気にして居なかった

数分後

真「なあ、いつ来るんだ、お前と待ち合わせしてる奴」

箒「……家に行くか」

篠ノ乃が待っている間俺は何故か篠ノ乃が一人だと退屈だ！等と言  
って帰してくれなかった為何故か今日は一緒に遊ぼう！という話に  
成った

真「で、そいつの家はまだなのかよ？」

箒「ん？もう着いてるじゃないか？」

真「ハア？どう見てもココは竹藪じゃないか」

箒「いやいや、さっき門を通っただろ、紫藤って書いてある奴」

真「ハッ！？アレか！？アレって人ん家のもんなのか！？」

箒「ああ、そうだぞ」

真「って待てよ、さっきお前紫藤って言ったか？」

箒「ああ、言ったぞ」

真「……帰らせてもらおう」

俺は行ったら確実に殺されてしまっただろうと思いき走りを試みたがし

かし

涼「おい！箒〜！！ココだ〜！」

箒「ヤホ〜！来ないから来たよ〜」

涼「ああ、すまなかった！ウチのミケが離してくれなくてな」

箒「ああ・・・それは・・・うん、生きててよかったね」

涼「何を言ってる？ミケは只の犬だぞ？少々大きいが」

真「犬かよ！？名前的には猫じゃねえか！！ってヤバっ!？」

涼「ん？お前は・・・確か同じクラスの真田・・・何故ココに居る？」

真「な、何でしょうね・・・ア、アハハハハ・・・  
ガタガタ

箒「ああ、私が呼んだ」

涼「何？・・・良いだろう、上げれ」

箒「オジヤマシマ〜トウツ〜！」

真「（ハア〜俺、生きてる）」

箒がご機嫌に紫藤邸に入って行った後、俺が生に対する心からの感謝を天に捧げていると紫藤さんが

涼「真田、箒と何が在った？答える、さもなければ私のこの手が無意識にお前を両断するかもしれん」

本日、二回目の死亡フラグが発生した

真「お、おお、俺と篠ノ乃の間には何も無い！」

涼「良いだろう、信じてやる」

真「アザアーツス！！」

涼「だが、もし箒に手を出してみる？只では済まさん！！」

真「わかりましたツス！手出ししませんツス！！」

涼「よろしい」

箒「お前ら何してる、行くぞ」

真「えっ？」

涼「なっ！？」

俺と紫藤がOHANASHIしていると箒が俺達の間割って入って来たかと思うと俺の手を掴んで引っ張って行った

真「（手、柔らかかぁい・・・ハッ！）」

俺が女子の手の感触にトリップしていると背後から殺気を感じ振り

向くと

涼「真田……殺す」

完全にダークサイドに落ちた紫藤さんが俺を見ていた

紫藤邸

涼の部屋

涼「まあ、寛いでくれ」

箒「で、今日は何か用が在ったんだろ？何だ？」

涼「ん？ああ、それは良いんだ」

箒「ん？まあ、用が在ったら言ってくれ、暇だったら対応する」

涼「ああ、すまないな……本当にすまなかった」

ギロリ

真「（す、すいませんッス！）」

箒「そついえば涼、ミケは？」

涼「ああ、ミケは……多分この中だろう」

そついつて紫藤は自室の押入れを開けたすると中からミケが出て来た

.....

熊だった

真「うわっ！？熊だ！」

涼「ハア？何を言ってる、確かに犬にしては大きいけど見ても犬だろうが」

真「いやいや熊だって！犬にしてはとかじゃない！まごう事無き真正銘の熊だよ！！」

涼「何を言う！ミケが熊だと！有り得ない！私だってバカじゃない！ミケは犬だ！」

真「そんな・・・篠ノ乃！何とか言ってくれよ！」

ミケ「ガウツ！ガウツ！」

箒「ハ、ハハハ・・・ミ、ミケ・・・ミケさん！分かりました！分かったから！怖い、マジ怖いから！」

真「箒が熊に襲われてるうううう！？」

涼「ホントに箒は犬が苦手だな」

真「ううん！苦手とかじゃないから！アレはもう生死に関わるから！」

箒「ヤバい！ホントにヤバいって！助けて〜！」

真「おい！不味いって！篠ノ乃が死ぬぞ！」



涼「何を言って居る、ミケとじゃれてるだけじゃないか、何も問題ない」

真「俺はアンタの頭が激しく心配だ！」

涼「お前・・・頭を割りたいのか？」

真「ハハ、ハハハ・・・い、いやだな冗談ツスよ！」

涼「分かれば良いんだ」

箒「た、助けて・・・もう手が限界だ・・・あっ」

プチッ！

涼・真「ほ、箒（し、篠ノ乃）！？」

今日、俺はクラスメイトが体長2mの熊に潰される現場を見た

数十分後

涼「すまなかった、ウチのミケは箒に懐いてるから嬉しかったんだろっ」

箒「ああ大丈夫、気にしないで何か獣臭いけど」

真「確かに・・・獣臭いな」

涼「ああそれなら風呂に入るか？」

箒「うん、何か悪いしな」

涼「構わん、ついでに背中も流してやる」

箒「ならいつその事、真田？君も入るか？」

真「良いんスカ!？」

箒「構わんよ」

涼「箒っ!？」

箒「と言う訳で涼、水着を貸して下さい」

真「いやいや無いだろう」

涼「良いだろう!ココに偶然、本当に偶然新品の水着が数着在る」

箒「おうっ!偶然だな!」

真「(んな偶然あるか!・・・とツッコみたいが一緒に風呂に入りたいから言わない)」

箒「いやいや新品は罪悪感に苛まれるからお古で良いよ」

涼「何気にするな!箒は只着用後の水着を私に只黙って渡してくれれば良いんだ」

真「(コ、コイツ!?まさか百合か!?認めない!認めない!俺は百合を認めない!そんな非生産的な行為を俺は認めん!!)」

涼「うわっ!? 箒、結構着痩せするんだな、思ったよりも大きいな」

箒「いや〜涼も結構大きいだろ?」

涼「わっ!そ、そんな触るな・・・いや!もっと触ってくれ!寧ろ触り合おう!」

真「(うぐっ!)」

俺の鋼の決意が揺らぎまくった瞬間だった

紫藤邸

大浴場

箒「いや〜友人の家のお風呂に入るのはこれで三回目だな」

涼「ほう、それは女友達か?」

箒「いや、男友達だ」

涼「な・・・に・・・」

真「おっ篠ノ乃はもう男とそういう関係なのか?」

箒「いや〜高校時代の友人の家でね〜」

涼・真「ハア？」

箒「それにしても真田？君良かったな？その年の男の子は女の子と風呂には中々入れんぞ？得したな！」

真「ああ篠ノ乃に着いて来てよかったよ、所で何で俺を呼ぶ時疑問形なんだ」

箒「いや、名前知らないし」

涼「何だと！？では名前も知らない男と何故このような状況に成っているのだ！！」

箒「・・・何言ってるんだ・・・あつ」

涼「あつ・・・では無いぞ！どういう事だ！知り合いではなかったのか！？」

真「今日初めて話したぜ、因みに俺も何で今こうなったのかは一切わからん！」

涼「・・・ハア」箒の将来が心配だ」

箒「大丈夫だ、少なくとも嫁には貰ってくれらるだろう人物が一人いるしな」

涼「真田・・・お前本当に箒に何をした？」

真「お、俺は知らない！」

涼「真田、私の日課に薪割りが入ってな？それで毎日20本ほど割っているんだ・・・素手で」

真「お、お願いだから！そんな話をしながら俺向かって手刀を構えないで！！怖いから！」

箒「何やってんだ？言っとくが真田じゃないぞ」

真「ハハ・・・そうだと思ってたよ・・・」

涼「えっ！？そ、そそそそ、そんな・・・だ、だが箒が私で良いと言っているなら／＼」

箒「お前でも無いぞ」

涼「何っ！？・・・誰だ、私の箒に手を出した奴は・・・切り落としてやる」

真「(どの部位をですか!?)」

箒「まあね、うん、それは止めてあげてくれ、もう・・・誰にもアナログスティックを失う悲しみを味合わせたくは無いだ」

真「一体今までお前の人生に何が在ったんだ!?!」

涼「・・・おい真田、お前そろそろ帰らなくて良いのか？親が心配するぞ」

真「何言ってるんだ？今はまだ13時だぞ？」

涼「ココからは女同士で話したいんだ・・・そう！女同士で！」

真「（コ、コイツ篠ノ乃を食べる気だ（性的に））」

箒「ん？真田帰るのか？じゃあ私も帰るか、帰りに一人は寂しいしな」

涼「なっ！？・・・チツ、真田帰るな」

真「えっ！？どっちだよ！」

涼「口答えか？」

真「滅相も御座いません！！」

涼「よろしい・・・（それにしても箒はこんな奴を連れてきて何を考えているのだろう）」

真「（全く！篠ノ乃は何を考えているんだ！まあ、嬉しいけど！！）」

俺と紫藤が箒に振り返ってみると

.....  
.....  
.....

箒「あゝ・・・あゝ・・・ああゝ？」

涼・真「（全く何を考えているのかわからん！！）」

学生寮 談話室

箒「つて事が在ったんです」

一「こんだけ長い前振りしといてオチ無いのかよ!!」

束「あゝ！箒ちゃんが日本人と会話してるつて事はあの時か」

ク「まあ、それはさて置きその真田という奴は大分良い思いをしたな」

ラ「全く！私ですら最近是一緒に風呂に入って居ないのに!!」

セ「全くですわ！その方は贅沢すぎます！何時か絶対に地獄に落ちますわ！」

千「箒、お前の周りには変な奴が多いな」

雪「全くやな、箒何か憑かれとるんちゃうか？」

シャ「ゆ、雪尚も世間一般的には普通じゃないよね」

鈴「じゃあ、次にサイコロ振るの誰？」

一「おゝ俺だ」

セ「出来ればまた箒さんを当てて欲しいですわ！」

千「全く一体誰がこんな遊びを考えたんだ？」

束「私だ！」



千「お前か」

東「痛い！痛いよ！ちーちゃん！」

現在一夏達は年越しまでの時間を潰すためあるゲームをしていた、それは単純でいてとても恥ずかしい内容だった、まず全員の名前の書いてあるサイコロを振り、当たった人は過去の恥ずかしい話（実体験）をみんなに暴露しなければならぬと言った過酷な内容だった

一「よし、それじゃあ行くぞ〜」

一夏がサイコロを振った

箒「また私ですか？姉さんサイコロに細工して無いですよね？」

東「言い掛かりだよ〜箒ちゃん！東さんは正々堂々が売りだよ？（まあ、してるんだけどね）」

箒「そうですね〜・・・この口調飽きたな〜」

一「早っ！？さっき始めたばかりだろ」

箒「良いんだよ、飽きたし・・・じゃあ、そうだね〜・・・

・・・

あっ！そうだ」

セ「何かありますの?」

箒「在るよ、スッゴイとっておきのが」

ラ「早く言え! 気に成る」

箒「じゃあ言っぞ〜・・・・・・・・・・・・・・・・・・  
・・・・・・・・・・・・・・・・・・実は最近一夏と合体した」

ラ・セ「ハ?」

シヤ「えっ?」

雪「ちよっ!?! お前まさか!」

千「ふう〜・・・・・・・・終わった」

束「ヤホ〜! いくくんが弟に成った〜」

鈴「マジで?」

箒「マジで」

一「でもアレはもはやアレだったよね」

箒「ああ！私の中のムラムラが溢れ出した結果だ！」

ク「つまり箒が一夏を襲ったと？」

箒「正確には襲われて、スイッチは行って返り討ち」

一「あの後あまりのショックで寝込んだな俺」

箒「ああ！二人とも選んだキャラ男なのになー！」

セ・ラ「はい？」

シャ「ええ〜つと・・・キャラ？」

一「ああ、人生ゲームで二人とも男のキャラを選んだんだけど、途中で箒が」

箒「男のキャラ同士で結婚って出来んの？って言ったらやって見たら」

雪「案の定出来たと」

一「ああ、一夏って名前付けてたのに箒のキャラの名前は」

箒「・・・・・・バルトス」

鈴「ブツーーー!!!？」

一「んでショックのあまり俺は」

第「拗ねてさあゝ寝めるの大変だったんだよねゝ」

千「良かった、本当に良かった、ウチのバカがやらかしたのかと」

束「チツ！そういうオチか！今度一人にとびきりの媚薬飲ませようかな」

ク「やめとけ、今度こそ死ぬぞ」

一行はこんな感じでダラダラと新年を迎えた

ジェンガとは……おもちゃだ！（前書き）

学生寮 談話室

第「ハアハアハア……ふう〜……とりやつ！」

ガラガラガラ！

一「第……四個抜きは無謀だよ」

ジェンガとは……おもちゃだ！

こんにちは一夏です。最近この小説で篠ノ乃つて書いていたけれど実際には篠ノ之つて気付いてアラ〜！？つて思っていたら何時の間にかやら年越しですよ。そんなこんなで雪尚がみんな揃って初詣に行こう！と提案したので……

学生寮 談話室

雪「ちゅー事で！初詣行こうや！」

一「お〜良いね！行こう！」

千「ではココの近所の“篠ノ之神社”に行くか」

篝「何その神社……祀ってるの誰さ？私？」

千「何を言ってるんだ？篝」

篝「いや〜私、自分の名字は篠ノ乃つて書くと思ってたよ」

束「篝ちゃん……その様子だと実家が神社って事も知らないんじゃない……」

篝「ハア！？いやいや！嘘だよ！それ絶対嘘だね！私と姉さん見たいな子供の親が神職者とか何それ！その人何処の工セ坊主さ！」

春「という事はお母さんってお坊さんの娘って事？」

箒「いや〜ココに着て、驚愕の新事実だわ〜」

千「お前・・・昔その神社に住んでいただろうに・・・」

箒「いや、てつきりウチの父さんの趣味かと」

束「あ〜確かにあの人はそんな趣味が在った様な・・・」

一「つて言つか昔行つた夏祭りの会場も其処だつただろうが」

箒「ん〜、今まで考えた事無かつたけど今気付いたら確かに父さんが何かしらのお経的なのを読んでた様な・・・ボケたんだと思つたよ」

雪「まあ、そんな訳で初詣に行こうや！俺、早よ〜シャルさんの着物姿みたいねん！」

一「ハツ!?!?・・・その〜箒は着ないの？晴着・・・」

箒「いや〜アレって、着るの結構大変だしね〜それに下着付けちゃダメだしさ〜」

春「つ!?!?下着着用不可!?!?お母さん!何やってるの!?!?早く着物来て!そんでもって私に帯の端っこを渡しなさい!?!」

束「お〜それはアレだね!良いではないか〜良いではないか〜つて奴だね!良いな〜束さんも箒ちゃんやちーちゃんにそれしてみたいよ!」

千「私はジャージで充分だ」

箒「私もジャージで行くよ？」

春・東「神は我らを見捨てた!？」

一「段々春香が東さんに似て来たな……」

箒「母親として春香の将来が非常に不安だ……」

一「頑張れ、お母さん」

箒「頑張れよ……お父さん」

着物を着ない一行が着物組を待っていると談話室の扉が開いた

ラ「箒、どうだ!」

そう言いながら最早ミニスカの如き着物?姿でラウラが談話室に入ってきた

箒「サイズ間違えたの?それじゃあ最早着物じゃなくてコスプレだよ」

ラ「何っ!?姉さんが最近の流行はこれだ!と言って着せて貰ったのに……」

だが、箒は敢て触れなかった、ラウラの背中に“破壊”と意味の良く分からない文字が在った事に



シャル「雪尚、どうかな？似合う？／＼」

雪「メツチャ似合ってるよ（い、言えへん！背中に“裸豪”って意味の分からん文字が書いて在る何て言えへん！）」

シャル「そうかな？・・・でも残ってた、着物がコレだけだったんだよね・・・幾らなんでも“裸豪”は無いよ！しかも意味が分からないし（泣）」

雪「き、気付いてらっしゃった！！？」

続いてシャルも入って来たのだが何故か背中に“男気”と書かれた着物だった

セ「箒さん！どうですか？私の着物姿は！！！」

シャルに続きセシリアも入って来たが

箒「普通だな？・・・いや、もう流石に無視できないよ、何さ？その背中文字は・・・」

一「ハア？・・・“守斗来駆自由”？」

箒「しゅとらいいく？・・・すとらいいく自由？・・・ストライクフリーダム・・・ブツ！？」

一「ストフリってアンタ！？もう既に何かパクってる感の在るIS乗ってるのにそれは不味いだろ！？」

セ「ちよっ!?何なんですの?ストライクフリーダム?何ですのそれは?」

一「待てよ!じゃ、じゃあ今までのラウラとシャルの背中 of 文字にもガ ダム的な読み方が!?!」

箒「裸豪……らごう……ラゴウ……砂漠の虎!?!」

一「ええ〜つとじゃ、じゃあ破壊つてのは、デストロイだな……

」

一夏と箒が慌てていると鈴とクラリツサがやって来た

鈴「ハア〜笑うなよ!お前ら絶対笑うなよ!!!」

そう言いつつ鈴は箒達に背中を見せた

“無限正義”

一・箒「……ブツ!?!」

鈴「笑うなああああああ!!!」

ク「それにしても折角箒や一夏の着物も用意したのに……」

一「因みにどんな奴ですか?」

ク「ん?一夏のは背中に“一角獣”と書かれたものだ」

—「ユ、ユニコーン!?何かごめんなさい!Wに乗っててごめんなさい!」

箒「ハハハハ!一夏今まで種系のMSだったのに作品違うし!やあ、いい、仲間外れ!」

—「うっさい!」

ク「因みに箒のは“思春期”だ!」

箒「ちよっ!?おまつ!いじめか!?それは直球過ぎる悪意だろ!流れからして何かしらのロボットの奴にしるよ!」

ク「何を言ってる!思春期の女の子だぞ!?萌えるだろ!」

箒「・・・フツ・・・否定できねえ・・・何て言うと思ったか!」

ク「冗談は置いて流石にこれは酷いと思ったので私が別に用意した物が在る、それがこれだ!」

クラリッサは何処からか着物を取り出した!その着物には背中に“紳士”と書かれたものだった、だが箒は何だかクラリッサが信用できず、その着物の裏を覗いてみると

“変態”と書かれていた

篤「・・・変態という紳士だよ・・・あゝ！！良いさ！良いさ！  
こうなったら変態でも何でも成ってやるうううう！！覚悟しとけ  
よ、お前ら！初詣行って帰って来たら篤さんはもう大人だかな！  
！うわああああん！！」

一「何故俺を引つ張るううううう！！？」

こうして一夏と篤が自室に籠ったのでその他の一行は取り敢えず初詣に行った

数十分後

初詣 帰り道

春「いやゝ良い所だなゝ神社！巫女さんいっぱい居たよゝ」

千「・・・何だか春香の将来が本気で不安に成る様な発言だな」

東「いや、やり過ぎた感は在ったんだけど・・・」

千「やはり原因はお前か！（怒）」

東「い、痛い！痛いよ、ちーちゃん！東さんの頭が割れるううう  
う！って何かミシミシ言ってるよ！？ちよっ！？ちーちゃん！  
？・・・アッーーーーー！！！」

ク「このやり取りを見るのも久し振りだな」

ラ「姉さん、千冬さんが心労で倒れる前にこれからは労わってあげ  
て下さい」

ク「善処する」

セ「初詣に行く前に箒さんが残した言葉に一抹の不安が在りますが  
・・・まあ、一夏さんが御一緒なら大丈夫だと思うのですけれど」

鈴「いや、無いつて流石に箒でもアレは冗談だろ」

東「フッフッフツ！そんな事も在ろうかと！箒ちゃんにビタミン剤  
と称して媚薬を飲ませているんだよ！って、ちーちゃんこれ以上は  
死ぬって！？アッーーーーー！！！！！」

雪「・・・てえ、事は・・・アレ？もうあの二人は手遅れなんじ  
や・・・」

シャ「いや、でも箒って薬に強いし」

鈴「案外薬に強くて効果が出るのが遅くなっただんじゃ・・・」

千「……………い、一夏が危ない（主に貞操が）」

セ・ラ「ハッ!? 寧ろチャンス!? 薬の効果が切れる前に<sup>さん</sup>箒に近づけば既成事実が!」

シャ「と、とにかく急いで戻らないと!」

この日近所で着物姿の女の子がスプリンター顔負けのスピードで走っている所を目撃したという噂が流れた

#### 学生寮 談話室

一方初詣組から在らぬ疑いを掛けられているとは知らず二人はジェンガをしていた

ガラガラガラ!

箒「やつちやつたZE!」

一「やつちやつたぜ! じゃねえよ!」

箒「いや、こつムラムラつと来てつい」

一「ムラムラ!? いや、まあ分かんなくもないけど」

箒「性が無いだろ？ムラムラ来て、何かイラッ！つと来てやっっちゃったんだ」

一「いや、まあ別に良いけどさ」

一夏と箒がジェンガを片付けまたくりしていると突然談話室のドアが開いた

セ・ラ「箒<sup>さん</sup>！！！」

箒「おうっ！？何さ、いつたい！？」

セ「ま、まさか！？もう終わってしまったというんですの！」

ラ「箒！やり直し（エロティカル方面）を要求する！！さあ！今すぐベットへ行こう！！」

箒「ん？やり直し（ジェンガ）？何でベット何て不安定な場所ですのさ？」

セ「で、では一体何処でしたと言っんですの！？／／」

箒「一夏、どうやら私達は何やらやらかした事に成ってるようだね？」

一「ああ、何やら初詣組は壮大な妄想をしてるみたいだな」

二人が溜息をついていると遅れて残りの初詣組が帰って来た

束「篝ちゃん！どうだった？いつくんとの初体験エロは？」

篝「テクニシャン（ジエンガ）だった」

束「ほほお、それじゃあ、いつくんは？篝ちゃんはどつだった？」

一「意味分かんなかった（二個抜きなど）」

束「うんうん！それじゃあ此処に居るバージンガール達に経験者から一言！！」

篝「えっっ！？（な、何だ、それはいつ私は非女に成つたそれ以前童だよ！エロい事を何かしら言えと？意味が分からん！と、取り敢えず！）」

篝は真剣な顔つきで深く深呼吸をし、言った

篝「取り敢えず、ゴムは付けるよ！」  
キリッ！

一同「・・・・・・・・・・・・・・・・」

場が静まりかえつた

篝「（外した！？いや、外すか？これは常識か！？）」

束「篝ちゃん・・・・・・・・・・・・・・・・今日は赤飯だね」



篤「はい？」

千「篤・・・ウチの一夏を頼む」

篤「はい？」

セ「篤さん！次は私も一緒にしたいですわ！」

篤「えっ？うん、誘うわ」

ラ「その時は私も誘え！」

雪「一夏、責任とれよ？」

一「何のさ？」

シャ「一夏、浮気はダメだよ？」

一「えっ？うん、浮気はいけないよな」

初詣組が言っ居る事の意味が分からない篤は鈴に詳しい話を聞いていた

篤「なるほど、だからプレイ中（注意！ジエンガです）にムラムラしたのか」

鈴「んで、そっちは何故にコッチ側（初詣組）が二人でジエンガを

してたのを知ってるか不思議だったと」

篤「うん、何その千里眼みたいな感じだったよ」

春「お父さん！お母さん！」

篤「何？」

—「はいはい？」

春「私、妹が欲しい！」

篤・—「ええ〜！？何そのカミングアウト！？」

春「弟でも良いよ！でも、将来は絶対男の娘だね！」

その後、初詣組との合流により談話室がカオス空間へと変貌した

姉たちは酒の溺れ

セシリアとラウラは酔い潰れ

春香は遊びに行き

鈴と一夏と篤はこの惨状を完全無視しながらゲームをし

雪尚とシャルは皆の介抱に勤しんだ

数時間後

篤「あゝ、これどうしよう」

一「寝かしとけば？」

鈴「ついに疲れて雪尚とシャルも倒れたな」

三人がふと周囲が静かに成ったので辺りを見回してみると三人以外全滅という悲惨な状況に成っていた

篤「ハアゝ、布団取りに行くか・・・」

篤がそう言って立ち上がるうとした時、東のウサ耳から声が聞こえてきた

東「やつほゝ篤ちゃん！多分東さん言うの忘れてると思うからこのウサ耳にメッセージを入れといたんだ！取り敢えず内容を伝えるよゝ！何とこのメッセージが流れて20分後に天皇？の娘さんが来るから後よろしくねゝ・・・・・・・・・・・・・・・・」

篤「えっ？何？この状況をお偉いさんに晒せと？」

一「大丈夫！IS使えば直ぐ済む！」

鈴「ああ！今から掛ければ20分何て楽勝だ！」

ピンポン

？「すみません！誰かいますか？！今日此方に伺つ予定の者です  
が！」

篤・一・鈴「詰んだあああああああああ！！！！！？」

次回に続く！

ジェンガとは・・・おもちゃだ！（後書き）

私、天音は普通の中学生でした。でも実は父親がお偉いさんらしく、気が付いたらVIP待遇！？そんな私が只遊びに行くのにも黒服SPが最低10人着くという友達離れていく状況の中、IS操縦者で同世代、しかもIS無でも強いと噂の集団の存在を知った、私は昔のように遊ぶため！在る名案を思い付いた！そうだこの人達に護衛に成って貰おうと！

学生寮

天「うう〜ココがあ有名な織斑千冬さんと弟の織斑一夏君、天災の篠ノ之束さん、その妹の篠ノ之篤さんの居る学生寮か〜・・・よし！ちよつと怖いけど大丈夫！」

天音は深呼吸をした、そして

ピ〜ンポ〜ン

？「すいませ〜ん！誰かいますか〜！今日此方に伺う予定の者ですが〜！」

天「アレ？留守かな？」

篤「一・鈴「詰んだあああああああああ！！！！！！？」

天「ええ〜っ!？」

旅行は行くまでの過程が何だかんだで一番楽しい！ b y 夫音（前書き）

このお話の製作時間・・・気付いたら50分でした！

旅行は行くまでの過程が何だかんだで一番楽しい！ by天音

1月2日

新年を迎えたばかりの今日この頃、物静かに佇むIS学園付属第二  
中学校 学生寮にて電話が鳴り響いた

箒『もしもし』

三「もしもし、サッカー部、主！将！！の三多野さんたの 富奈凱とみかだけど、  
篠ノ之さんは・・・」

箒『はい、篠ノ之箒ですが』

三「ああ！篠ノ之おっ？今日、暇？暇だったらさあ、一緒に遊ば  
ない？」

箒『・・・・・・・・・・』

三「ん？どうかした？（悩んでる 悩んでる）」

箒『今日は忙しいので・・・』

三「ええ〜！！そんな事言わずにさあ〜・・・俺と遊んじゃお」

箒『今、用事がありました・・・』

三「いいじゃん！いいじゃん！そんな事は放って置いてあそぼ〜よ  
〜！〜！」



第『そんな貴方に言いたい事が在ります!』』

三「えっ? (ウソ!? マジ!? 俺、告られちゃうの!?)」

第『ピーー、っと鳴ったらメッセージをどうぞ』

三「.....orz」

学生寮にてこの様な事が何度か起こっているとは知らず、学生寮の一行は現在、クラリツサが運転をする車に乗りながら旅行へと来ていた。

車内

ラ「姉さん、後どれ位ですか？」

ク「ん？後……二時間位だ」

千「クラリツサ、五時間前にも同じ言葉を聞いたぞ」

束「まあまあ、ちーちゃん、こうやって車に揺られるのも旅行じゃないか？」

千「束、確かにお前の意見は正しいだろう、だが後ろの席を見てみる」

千冬がそうだったので束は後部座席を見てみた

束「うわ……」

そこはまさに地獄絵図だった、春香ははしゃぎ過ぎて車酔い、雪尚と天音は素で車酔い、シャルはそんな二人を甲斐甲斐しく看病し、セシリアとラウラは当初、篝の隣の席を奪い合っていたが現在は車酔い、篝は必死にトイレを我慢、一夏と鈴は必死に篝に声援を送っていた

束「……くーちゃん、取り敢えず急いでトイレを探そう！」

ク「フツ……こんな山の中にトイレ等無い！」

篝「っ！！？（泣）」

—「ほ、箒いい!?!?」

鈴「あ、諦めるな!絶対に無いとは限らない!?!」

箒「・・・もう、その辺で良いから・・・ヤバいつて・・・死ぬ(漏れる)って」

束「いやいや、箒ちゃん!女の子なんだからダメだよ!」

ク「クツ!・・・苦悶に悶える美少女が・・・皆の前で失・・・はたまた野外にて恥しそうに放、選べない・・・私は如何すれば良いのだ!神よ!?!」

— 鈴・千・束・箒

「トイレを探せや!?!」

この後、箒は無事に用事を済ませました・・・外で!?!

数分後

車内

箒「女としての私は死んだ!これからはちろると呼ぶが良い!?!」

—「箒!?戻つて来おい!?!」

一夏が元筭現ちるるを思い切り揺さぶった

筭「ハッ!? 私は一体!?!」

一「よ、良かった元に戻った」

鈴「で、後どれ位?」

ク「ん? ああ、安心しろ! 後ほんの少しだ!」

千「で? 実際はどうなんだ?」

ク「三時間……」

千「一時間増えているぞ? ……ハァ! ……私はもう寝る、おい、毛布か何か無いか?」

天「あつ! それなら私が!」

千「ん、すまんな……?」

天「……? 何か?」

千冬は天音を不思議そうに見つめたかと思うと一言

千「誰だ? お前は」

天「え? ……ええ!?!? 聞いて無いんですか!?!? って言うか昨日から私居ましたよね!?!?」

千「ふむ……ダメだ、昨日は飲み過ぎたせいで記憶が無い」

天「そ、そんな〜（泣）」

天音がまさか昨晩目の前で自己紹介すらしたのに忘れられているとは思わず、半泣きに成っていると、突然天音の肩に手を置くものが居た……シャルだった

天「えっ!?!」

シャ「大丈夫……頑張れば存在感は大きくなるから!」

天「えっ!?!」

シャ「何時かきつと朝の第一声を気付いて貰えるよ!」

天「ええ〜!?!」

シャルロット・デュノア、朝のあいさつを気付かれない描写すら無い少女に今日、仲間が増えた〜

天「嬉しくない!?!」

シャ「仲間 仲間」

箒「と言つ訳なんです」

千「なるほど、私達が酔い潰れている間にそんな事が在ったのか」

こうして今日の二人の見せ場が終わった

シャ・天「ええっ!？」

一「ハア、それにしてもいい加減、乗り物疲れが出て来たな」

鈴「フツ・・・私の腰はもうガクガクさ」

箒「大体後部座席全部寝かせて簡易ベットみたいなの作って・・・寝転びたいけど空いてる場所がセシリアとラウラの間って・・・あゝ、逝こうかな?逝っちゃおうかな?・・・トウツ!」

箒は少々葛藤した後、寝転びたい!激しく横に成りたい!という欲求に駆られ二人の間に飛び込んだ

セ「ちよっ!?!誰ですの!一体!・・・アラ」

ラ「誰だ!・・・何だ、箒か・・・ジュル」

箒「あわわわ・・・」  
ガタガタ

一夏は思った、丸で箒がライオンの群れの中に投げ込まれた、ウサギの様だと

セ「どうしたんですの?箒さん」

セシリアは手をワキワキさせながら箒を見ていた

箒「疲れたから、横に成りたくて」

箒はセシリアの手の動きに少し引きながらもセシリアに答えた、すると反対側から

ラ「箒、夫婦の営みをしよう！」

ラウラが息を荒くしながら箒に抱き着いてきた

箒「いや、今日は姉さんに無理矢理スカートを穿かされてるから！箒さん、今日若干アウェイだから！」

箒が何とか逃れようとする

セ「逃がしませんわよ、箒さん？」

ラ「大丈夫だ、安心しろ！優しくしてやるから」

箒「いや、確かに自分はMっ気が在るけど、流石に嫌なモノは嫌なんだけど!？」

ラ・セ「覚悟は良いな(ですわね)？」

ラウラとセシリアは箒へ襲いかかった

箒「うわっ!?!やめろ!私はソツチの気は・・・在るけど!この状況は嫌だ!」

ラ「何を言う!体は正直だぞ!」

箒「そんな直ぐに　れるか！いい加減にしろ！！」

セ「アラアラ　そう言う割には抵抗しませんのね？」

箒「安心しろ、ラウラが片付いたら今度はセシリアだ！」

セ「・・・ゴクリ」

箒「期待をするな！！」

天「あつ！私も混ざりたいです！」

箒「来るなああああ！！！！」

乱闘？現場から少し離れた場所で一夏達は

一「うわゝ、後ろ凄いい気に成るゝ」

鈴「いやゝ、姦しいね、この光景」

シャ「うわっ！？凄いい・・・」

一「ふうゝ、精神集中！心頭滅却！明鏡止水の心にて・・・」

箒「だあああああ！！パンツ脱がそうとするなっ！！手を入れるなっ！！」



—「ぶううううう！！？無理！こんな状況で明鏡止水の心とか正気の沙汰とは思えない！今の俺には後ろを振り向かないので精一杯だっ！！！」

鈴「ガンバツ！．．それにしても千冬さん、起きないな、注意するのが面倒なのかな？いや、寝てんのか？」

千「zzzzz．．．．．」

束「ハア．．ハア．．ハア．．箒ちゃん．．．ゴクリ」

ク「クツ！ルームミラー越しにしか見れないのが残念だ！！」

束「えっ？ルームミラー？つて！？くーちゃん！ココ対向車線だよ！？」

ク「．．．．．ゴクリ」

束・鈴「キヤアアアアア！？前っ！前見てええええ！！」

数十分後

車内

ココでは事態を鎮圧した、箒が説教をしていた。

箒「アレだよ、アレ！分かる？今君達アレだから！君らアレしたから箒さんちよつと目覚めかけたよ？新しい境地開きかけたよ？人に見られる快感にmゴホン！ゴホン！！いや、本当にアレだからね？

篤さんじゃ無かったらトラウマもんだったからね？分かる！アレだよ？アレでアレに成ってアレだよ？」

ラ「篤、すまなかった」

セ「ええ、私、調子に乗り過ぎましたわ」

篤「分かってるね？今度やったらアレするからね！アレはもうあの辺とかアレに成るから！以後気を付ける様に！」

セ「ええ、分かりましたわ！」

ラ「ああ、気を付けよう！」

二人は何所か期待しながら応えた

篤「・・・分かれば良いよ」

セ・ラ「今度は室内でしょう（ますわ）」

篤「・・・分かって無いよおおおおお！！！！？」

一「まあまあ篤、それ位にして置きなつて」

鈴「篤、この二人に何言っても無駄だつて」

セ「何言ってますの！テストの成績も成長も鈴さんより良いですわ！」

鈴「・・・表出ろや、この乳牛がああああああ！！！！！」

ラ「ああ！言い過ぎだぞ、セシリア！！貧乳はステータスだ！希少価値だ！」

鈴「ラウラ！」

ラ「鈴！」

鈴とラウラが手を組んだ

セ「なっ！？ズルいですわ！それならこちらはシャルさんと篝さんを貰いますわ！」

篝「ハ？」

シャ「えっ！？？」

ラ「なっ！？セ、セシリアお前！私に嫁と戦えと言っのか！！」

セ「当たり前ですわ！篝さんはそちらと違って発育は良い方ですし？完全にこちら側ですわ！」

ラ「クツ！言わせておけば！！」

鈴「しろ……」

セ「はい？聞こえませんか」

鈴「撤回しろ！」

セ「何をですか？」

鈴「別に胸とかそういう成長はハッキリどうでも良い……だけど！身長は確実に1mmづつ伸びてんだよ……！」

一「シャ「ええっ！？怒りの矛先そっち……！」

セ「1mm？そんなモノ只の誤差ですわ……！」

鈴「お前！言うてはならない事を……セシリア……ブチコロス」

セシリアと無乳組が言い合って居る所からまたもや少し離れた所で

シャ「あわわわわ……どうしよう！？もう手が付けられないよ」

一「ケンカって良くないよね……まあ、アレを止める手立て無いけど」

篤「大丈夫だって、一夏 これ以上喧嘩するならこの山に見知らぬお墓が3つ出来るだけだから……」

一「何それこわい……！」

シャ「あっ！でも喧嘩終ったよ」

セ「や、ややや、やはりケンカなんて宜しくありませんすわね」  
ガタガタガタ

ラ「あ、ああ！仲良しが一番だな！」  
ガタガタガタ

鈴「というか誰？ケンカなんてしてるのは？」  
ガタガタガタ

シャ「ケンカは終わったけど皆、拳動不審だよ」

一「箒、何気に怖い事言うなよ・・・」

箒「アレは軽い冗談の積りだったんだけど・・・」

一同「（日頃の行いを考えろよ）」

一「それにしてもまだ着かないのか？」

箒「クラリツサさん、まだですか？」

ク「ふむ、箒、どうやら今日はココで一泊しなければ成らない様だ」

箒「はい？・・・うわあ〜凄い霧」

ク「山道でこの様な濃霧が出て来たらこれ以上の運転は危険だ、仕方ないが此処で今日は一夜を明かすしかない」

箒「ハア〜、まあ、こんな事も在ると思って毛布とか非常食やら私のISの中に入れてるんで良かったです」

ク「準備が良いな・・・箒、ウチの隊に来ないか？」

箒「軍隊とか規則が厳しそうなのは嫌なので遠慮します（笑）」

ク「何もそこまで清々しく言わんでも・・・」

鈴「アレ？車、止まったけど着いたの？」

箒「ええ、皆さん！ココで箒さんから重大発表です！何と・・・」

一同「何と・・・？」

箒「霧が凄いので、今日は車の中で一泊です！」

一同「えっ？・・・ええ！？」

箒「はいでは、大人しやがれこのヤロー、私も不安なんです、トイレとか霧が怖く行けないとかもう正気の沙汰では御座いません」

一「箒、落ち着け！言葉遣いが敬語に成ってるぞ！」

セ「狭い室内で箒さんと・・・ウフフフフ・・・」

ラ「アーミーズキャンプを思い出す・・・今夜は箒と・・・ジユルリ」

雪「アカン、向こうに何や昔死んだ、じっちゃんが居るで・・・俺は元気やで」

シャ「雪尚！？帰って来てええ！？」

鈴「つて言うか、この状況で寝てられる千冬さん達が切実に凄いと  
思うわ」

ク「まあ、騒がれるよりまだ良いだろ？千冬なんかホラーが苦手だ  
からこの状況だと暴れるぞ、死人が出るくらい」

一同「起きるな！主に千冬さん！」

千「zzz・・・いちかあ〜」

春「zzz・・・フヒヒヒ・・・」

東「zzz・・・グヒヒヒ・・・」

天「zzz・・・おなかいっぱいだよ〜」

箒「このヤロっ！いっそ起こしてやろうか！」

一「やめんか！」

鈴「よし、寝るか・・・」

シャ「うん、僕も寝るよ・・・何だか今日は久しぶりに疲れたよ」

ラ「箒、怖いから一緒に寝てくれ」

箒「ハア〜、おいで」

セ「なっ！？ズルいですわ！私も箒さんと寝たいですよ！」

箒「ハア〜」

一「箒、溜息してばかりだと何時か、不幸だああああ！つて、叫ぶ日が来るぞ？」

箒「じゃあ、幸せを下さい！私にギブ、ミー、ラッキー！！」

一「……それは俺と将来を共に、つていう……」

箒「不幸だ……不幸だああああああああ！！！！！！」



旅行は行くまでの過程が何だかんだで一番楽しい！ b y 天音（後書き）

—「皆！無理して運転すんなよ！危ないからああ！！！」

箒「因みに私の前世での初路上研修は雨、霧、夜の三拍子でした」

鈴「・・・飲酒運転すんなよ！飲むなら一人バブいて運転役つくれよ！」

—「結果それはそいつはパシリですって事じゃん！？ヤダよ、そんな飲み会！」

DVDを見る時は部屋を明るくして画面から離れて見る事！（前書き）

車内

ク「では、そろそろ出発するぞ」

春「お母さん、暇だよ」

セ「確かに暇を持て余してしまいますわね」

ラ「そう言えば、箒、確かDVDを持って来て居なかったか？」

鈴「いつの間に!？」

箒「在るけど・・・見るの？」

一「へえ、何て奴？」

箒「ハムと武士道の神隠し」

一・鈴「ブウウウウウ!!!？」

シャ「何それ？」

雪「こんな歳にも成ってアニメ何て見いへんって」

一「何それ!?ちよー見たい!!」

鈴「見たい!見たい!!」

雪「ばっ!?!お前等もうアニメって歳でも無いやる!」

天「ええ、私、見たいよ」

雪「ハア、ダメや、何言つてもダメや・・・シャルさんも何とか言つてえや」

シャ「ぼ、僕も見たいな・・・そのDVD・・・ダメかな?」

雪「・・・、箒、見ようや・・・そのDVD・・・」

箒「えっ?アニメとか見ないんじゃないあ」

雪「何言つてん!俺、メツチャアニメ好きやねんで?」

箒「わかった、じゃあ見ようか」

ク「ああ、なら後部座席側の画面の側にDVDレコーダーが付いて居るからそれに入れると良い」

箒「はい・・・一夏、手伝って」

「」おっ!」

こうして準備が整い、DVDが再生された

**DVDを見る時は部屋を明るくして画面から離れて見る事！**

ある夏の田舎道を車が走っていた、その車には二人の男が乗っていた

車内

ビ「グラハム、いい加減そのおもちゃで遊ぶのを止めてくれ、僕まで変人扱いされるじゃないか」

公「カタギリ、おもちゃではない！これはガンダムだ！！」

ビ「ハハハ・・・バカも休み休み言いなよ、バカ！僕だってそれがガンプラだっていう事は知っているよ、そうじゃ無くって、車の窓から手を出してガンプラで遊ぶのを控えてくれないかと言っているんだよ、バカ」

公「カタギリ、ゆうに事欠いて三回もバカと言っな、アホ」

ビ「ハハハ・・・全く、君って奴は本当にバカ、もう・・・バカ！」

公「カタギリ、日本にはこの様な諺がある・・・『バカと言った奴がバカ』だと、分かったか？バカ」

ビ「結果として君も言っているじゃないか・・・」

公「くう・・・屈辱的だ！」

ビ「ハハハ・・・そんな事だからガンプラしか友達が出来ないんだよ、

「

公「友ならいた！只、強敵と書いてトモと読むが・・・」

ビ「悪かったよ、グラハム、次の基地では頑張ろう」

このどうしようもない会話を二人が後二時間程度続けているとグラハムが突然口を開いた

公「む！？アレは石の祠ではないか！？カタギリ！今すぐあの場所に行くぞ！もつと近くで見たい」

ビ「石の祠？何だいそれは？また日本のアニメの知識かい？言っとくけど借り暮らしの小人はこの世には存在しないよ」

公「いや、石の祠は日本の宗教関係の物だ、アレは古くから神々の家として日本で崇められている物だ、そして借り暮らしの小人は存在する」

ビ「神？非科学的だね」

公「いや、神は居るのかもしれないぞ、日本には妖怪等が存在すると言うからな」

ビ「ハア、グラハム・・・この世にはネコとバスが混ざった生き物や体長5m程の独楽に乗って空を飛ぶ獣、天空に在るはた迷惑なゴミ、馬鹿でかいダンゴ虫は存在しないよ」

公「フッフ・甘いな、カタギリ、世界は広いのだ！カタギリが今言った生き物や建造物が本当に存在しないと言う確証はない！仮にもし、カタギリが言った生き物や建造物が存在しなくとも、豆を発酵させたネバネバする食材や、やたら食べ難く鉄を二つ持ち横歩きをする生物だって存在するやもしれん！」

ビ「グラハム、それは納豆と蟹だよ・・・さて、君が言って居た石の祠と言うモノの側まで来たがどうする積りだい？まさか持って帰る何て言わないよね」

公「カタギリ！この祠は神聖なモノだ、いくら私でもその様なモノを持ち帰ったりはしない」

ビ「ん？偉く、常識的な事を言うじゃないか」

公「それよりカタギリ、この奥の方に私の中の乙女座のセンチメンタリズムを感じる、行くぞ」

ビ「ハア、そんな事だと思ったよ・・・どうせ言っても聞かないだろうし良いよ、行こうじゃないか」

そういつとカタギリは車のアクセルを踏んだ、荒れ果てた道を二人が進むと突如として真っ赤な色の建物が二人の前に現れた、二人は車を降りてその建物へと近付いた

ビ「随分と荒れているけど割りと最近の建物だね、多分バブルが弾けて潰れたテーマパークだろう」

公「カタギリ、中へ入るぞ」

ビ「別に良いけど、どうしたんだい？真剣な顔付に成って居るよ」

公「当たり前だ、此処はあの悪魔が住む館・・・紅魔館なのだぞ」

ビ「紅魔館？何だいそれは？・・・いや、言わなくて良い、どうせまたアニメとかなんだろう」

公「いや、ゲームだ」

ビ「・・・グラハム、君は一度日本を忘れて母国に帰ると良いよ、いや、寧ろそうするべきだ」

公「カタギリ、奥の方は駅の様だ」

ビ「えっ？無視かい？無視なのかい？うん、分かった、無視なんだね」

二人が紅魔館（仮）の奥へ進むと其処は駅だった、だが長い間使われていないのか所々ボロボロだった、だがカタギリは少々疑問に思っただ

ビ「・・・建物の荒れ具合からして結構な間使われていない筈なのに何故このベンチに埃が付いていないのだろうか？・・・まさか今だにこのテーマパークは運営をしている？グラハム、君はどう思う？」

公「会いたかったぞ、ガンダム！！・・・ああ俺もだ、ハム仮面！

！・・・いざ尋常に・・・勝負！！」

ビ「・・・・・・・・」

カタギリは啞然とした、自分が割と真剣に周囲の状況を考察していたのにグラハムはエクシアとスサノオを両手に持ち遊んでいたのだ

公「今日の私は阿修羅すら凌駕する！！」

ビ「なら今日の僕は怒りでハムの加工が出来そうだよ」

公「ほう、それは是非食べてみたいものだ・・・カタギリ、何故殴ってくる？痛いぞ、的確に人中を攻撃してくるとは流石はカタギリ」

ビ「ハア・・・全く君は無駄に鍛えているから殴った此方の腕が痛いよ」

最後にカタギリはグラハムが持っていたエクシアの頭部を外し、それをポケットにしまった。

二人がそのまま奥へと更に進むと今度は草原に出た

ビ「うん、良い所だ、ピクニックには最適な所だね・・・来ないけど」

公「カタギリ！あの雲の形・・・まさにガンダムではないか！！」

ビ「うつせ、バカ！・・・グラハム、見るに堪えないからこの頭を返してあげるよ」



公「すまない、カタギリ・・・少々幻覚を見ていたようだ」

カタギリはそんなグラハムを無視して遠くの方に見える町の様な所へと向かって行った

ビリー&ハム移動中

商店街

ビ「うむ、やはり今も運営して居る様だ」

公「カタギリ、此処は潰れて居たのではないのか？」

ビ「いや、まだやって居る様だ、ほら、向こうから良い匂いがするよ」

二人が良い匂いがする方へと進んで行くと其処には様々な料理が並べられていた

ビ「うん、美味しそうな料理だ、頂こう」

公「うむ、だがカタギリ今は午後15時、食事をするには少々早くは無いか？」

ビ「君が僕の分の弁当を食べさえしなければ僕だってこんな事は言わないよ」

公「それはカタギリが食事中に席を外すのが悪い、その性で私は君がもう満腹なのかと」

ビ「どこの世界に割り箸を割って満腹になる人間が居るといふんだい、このバカ」

公「よろしい、ならば私はこの辺りを見て回る、カタギリ、コレ（ガンダム）を此処に置いて行く、もし傷一つ付けてみる・・・私はお前を許さない」

ビ「ハハハ・・・傷付ける？そんな野暮な事はしないよ」

そう言いつつカタギリはガンダムの頭部に料理のタレをかけた

ビ「・・・・・・・・・・」

公「・・・・・・・・・・」

ビ「・・・・・・・・・・ニヤリ」

公「・・・・・・・・・・うわあああああああああ！！！！！！」

カタギリによる凶悪な仕打ちによってグラハムは半狂乱に成りつつ走り去って行った

ビ「さて、バカも行った事だし・・・頂きます」

意外と冷たいカタギリであった

一方その頃ハムはというと

### 湯屋の橋前

公「傷心な私の心を癒してくれるのはやはり古き良き銭湯だな」

ハムがトボトボと湯屋へ向かって行こうとすると

？「そちらへ行つてはならぬ！」

公「何？・・・お前は！？ガンダム！！」

白「いや、私の名はガンダムではなく“白”と言う、それよりも早く此処から立ち去れ！私が時間を稼ぐ！」

ハムは突然の事に戸惑いつつ取り敢えずカタギリの所へ戻り転属先の基地へそろそろ行こうと伝えようと思った

公「カタギリ、そろそろ基地へ行かなければ・・・如何したカタギリ、まるで変態な熊の様だぞ」

ピ「ち、違うよ！僕は変態じゃないよ！仮に変態だとしても変態という名の紳士だよ！」

公「ふむ、理解した、カタギリ、君は紳士に成ったという事か」

ピ「そうだよ！僕は確かに女の子の縦笛をペロペロしたりするけど

それでも僕はジェントルメンだよ」

公「ふむ、ではカタギリ、私のガンダムは何所だ？そろそろガンダム分を補給したいのだが」

ビ「ああ、それならその居るよ」

公「何？・・・な、なんだこれは!？」

ハムは己の目を疑った、何と其処には愛しのガンダムではなく、体育座りのアツガイが居た

公「何と!？この様な仕打ち!堪忍袋の緒が切れた!！下手人はどいつだ!！即両断してくれる!！」

ビ「お、おお落ち着きなよ!とにかく基地へ戻ろう!」

こうして公修羅と熊が元来た道に戻ろうとすると

公「何だ、川の様になって居るではないか」

ビ「こ、これは一体!？迂回ルートを探さないと・・・」

カタギリ(変態)がどうにか向こう岸へと渡る術を模索しているとハムが何を慌てているのか理解できないとも言わんばかりの顔で言ってきた

公「迂回ルート?カタギリ、何を言って居る?泳いで渡れば良いで

はないか？」

ビ「僕を君と一緒にしないでくれ、僕は君と違って一般人なんだ」

公「カタギリ、お前は今熊ではないか」

ビ「うっさい、バカ！そういう事では無いんだよ」

二人が話し合いをしていると向こう岸から船が来た、だが二人は嫌な予感がした為、少し離れた茂みの中に身を潜めた、二人が此方側の岸に乗り付けた船の様子を伺っていると船の客室と思われる扉が開き、そこから仮面が出て来た、その仮面から次第に体が出始めた公「やはり、日本には魑魅魍魎が夜道を闊歩すると言つのは本当の事であつたか」

ビ「僕は君のその適応力が羨ましいよ」

公「何、人間は本来その場の環境に適応したからこそ此処まで繁栄できたのだ、カタギリも何時かは慣れるさ、例えば君が今熊だったとしても」

ビ「グラハム、君とは何時か出る所に出て話し合わなければいけない様だ」

こうして一人と一匹が今後について話し合っていると其処へ近付く者が居た

公「何奴！」

白「僕だよ」

公「君は！？」

白「ん？知り合いかい？」

公「ああ、ガンだ」

白「違います、私の名は白と言います」

白「これはご丁寧にも、僕の名前は“ビリー・カタギリ”そのバカと何故か良くセットにされる上層部のスケープゴートだよ」

白「ハ、ハア・・・？」

公「そんな事より、どうした？少年、この事態はどういう事だ」

白「ココは湯婆婆という魔女が支配する八百万の神々が疲れを癒す場所です」

公「何？魔女だと！？日本にも魔女が存在するのか」

白「なるほど・・・所でグラハム、君は何時から透明人間に成り始めたんかい？」

公「何？・・・何だ、これは！？」

ハムは驚愕した、己が体が透け始めているのだ

白「人間はココの食べ物を食べないと存在できない、これをお食べ、これは食べても豚には成らないから・・・」

公「おお！見る！カタギリ、少し気合いを入れると色が戻ったぞ！」

ビ「ハハハ・・・バカ！少しは空気を読め、あの少年が何か下剤的な色合いの丸薬で君を元に戻そうとしてくれているんだ、そこは素直に消え掛かっときなさい」

公「なるほど、それは悪い事をした・・・ふう・・・よし、良い具合に消えて居るぞ！少年、薬を頼む」

白「・・・あぁあ、薬ね！うん、分かってるよ」

白は何だ、こいつ等とは言わんばかりの目で二人を見ながらグラハムに薬を手渡した

ビ「それにしてもココの料理は面白いね、本来料理を食した者は豚に成ると言ったが僕は熊に成ったし、グラハムのガンブラは種類が変わったし・・・興味深いね」

白「えっ！？元々熊ではなかったんですか！？」

ビ「ハハハ・・・君は面白い事を言うのだね？喋る熊がこの世の何処にいると？」

グラハムは無言でカタギリを指差した

ビ「人に指を指すんじゃないよ、バカ」

公「カタギリ、事在る毎に私にバカと言うんじゃない」

白「あの〜、話を戻して良いでしょうか？」

ビ「ああ、すまないね、続きを聞こう」

白「はい、で、此処の掟で働かなければ此処では豚か煤にされるんです、そう成らない為にも貴方達には今から行く所で釜爺と言う人に仕事を貰って下さい、何と言われても絶対に引かないで下さい」

ビ「なるほど僕達が生き残るには此処で職に着かなければ成らないと」

公「では、行こう！次の目標は決まった！日本の諺にもこう在る！

“善は急げ”と」

ビ「ああ、君の良い所は行動力が在る所だと思つよ」

白「では、急ぎましょう！」

ビ「分かった、案内を頼むよ」

公「いざ、行かん！！」



就職活動に!!!」

ビッググラハム、君の悪い所は偶に空気を台無しにする所だよ」

次回へ続く

DVDを見る時は部屋を明るくして画面から離れて見る事！（後書き）

一「予想と近い人物が出て来たな・・・」

鈴「ハムの今後の活躍に期待」

春「お母さん、あの熊・・・私、嫌いかも」

第「・・・同族嫌悪って奴じゃない？」

ラ「なるほど、妖怪は居るのだな・・・どうしよう・・・一人で寝れない」

セ「フフフ・・・ラウラさんは怖がりですね」  
ガタガタ

シャ「そういうセシリアも震えてるじゃないか・・・」

雪「セシリア、ラウラ、お前等の後ろに妖怪居るで？」

セ・ラ「っ!!!?キヤアアアアアアアアアア!!!!」

千「騒がしい!!静かにせんか!!!!（怒）」

一同「サー！イエッサー！！！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7973u/>

---

友人と一緒に憑依？ 転生する

2011年12月27日00時51分発行